

満洲における北村謙次郎の文学活動

韓玲玲

博士（学術）

総合研究大学院
文化科学研究科
国際日本研究専攻

平成 26 年度

(2014)

目次

序章	1
第1章 北村謙次郎の生涯	4
第1節 生い立ち	4
1. 北村家の家系 2. 北村謙次郎の家庭 3. 幼少年時代	
第2節 関東州大連での少年時代	10
1. 日本橋小学校 2. 大連中学校（大連一中）時代	
第3節 東京で進学	13
1. 大学予科時代 2. 文筆活動の開始 3. 大連での記者体験	
4. 『日本浪漫派』時代	
第4節 満洲国に渡る	20
1. 満映に就職 2. 職業作家の道に入る	
第5節 敗戦後の生活	30
1. 引揚げ前後 2. 文筆活動の復活	
第2章 北村謙次郎文学におけるモダニズムの変容	37
第1節 北村文学の出発——『すなつぼ』	37
1. 『すなつぼ』への参加 2. 北村の小説 3. 北村の詩そのほか	
第2節 日本文壇へのデビュー——『文芸プランニング』	42
1. 『文芸プランニング』の創刊 2. 雑誌の編集 3. 北村の創作	
第3節 北村謙次郎文学におけるモダニズムの蹉跌とその変容	51
1. 不安な日々 2. モダニズム文学からリアリズム文学への転向	
第4節 大連の北村謙次郎：1934-36年の日記を中心に	54
1. 大連に渡る前 2. 大連滞在期 3. 大連からの帰京	
第5節 『日本浪漫派』：満洲国に渡るまでの文学活動	59
1. 『日本浪漫派』への参加 2. 『日本浪漫派』における創作 3. 満洲国へ行く	
第3章 北村謙次郎と『満洲浪漫』	68
第1節 先行研究と問題提起	68
第2節 『満洲浪漫』前史	69
第3節 『満洲浪漫』の編集	73
1. 『満洲浪漫』の創刊 2. 『満洲浪漫』の内容 3. 雑誌の執筆者	
第4節 『満洲浪漫』における北村謙次郎の言説	87
1. 北村謙次郎の文学認識 2. 「大陸ロマン」の提唱	

第 4 章 北村謙次郎の「或る環境」——異民族との共生	94
第 1 節 シリーズの誕生と構成	94
第 2 節 物語の導入——「序章」	96
第 3 節 忠一の少年時代	98
第 4 節 物語の終焉——「つひの栖」	112
第 5 章 北村謙次郎の「春聯」——「大陸日本人」への道	115
第 1 節 「春聯」の誕生	115
1. 内容紹介 2. 出版の経緯	
第 2 節 満洲への愛着——寛城子	122
第 3 節 満洲国の日本人に対する批判——小野の回想談	126
1. 満洲の白系ロシア人の生活実態 2. 「蘇炳文事件」 3. ナターシャの登場	
第 4 節 作中における「ジレンマ」——銀作兄弟	132
第 5 節 「春聯」に対する評価	134
第 6 章 他者への関心	141
第 1 節 北村謙次郎文学における日本人女性	141
1. 満洲国に渡る前の女性イメージ 2. 満洲国に渡った後の女性イメージ	
第 2 節 北村謙次郎文学における白系ロシア人イメージ	149
1. 北村文学における白系ロシア人 2. 「苦杯」 3. 「苦杯」の社会的影響	
第 3 節 開拓民に関する創作	158
1. 開拓地に取材したもの 2. 北村謙次郎の創作	
終章	166
付録 :	174
1. 北村家略系図	175
2. 北村謙次郎年譜	176
3. 北村謙次郎著作目録	185
4. 資料紹介	197
(1) 『文芸プランニング』総目次	197
(2) 『満洲浪漫』総目次	200
(3) 『文話』総目次	206
5. 参考文献	212

序章

1. 問題提起

いわゆる「満洲文学」（「満洲国」における日本語文学）に関しては、1980年代以降、徐々に研究が進められてきたというものの、まだ十分な成果を得ているとはいえないのではあるまいか。個々の文学者を対象とする作家論、作品論の類に関しては、相当の研究的蓄積を見るところとはいえ、多くは断片的な論にとどまっている。例えば、一人の作家の文学活動の全過程を、「満洲」との関わりという視点から、入念かつ具体的に実証していくような研究は、いまだ現われていない。ましてや、満洲文学の歴史の全体像を捉えようとする試みとなると、さらに将来の研究成果を待つほかないようである。

本研究では、北村謙次郎という一人の作家を採りあげることにする。彼は「満洲文壇」を代表する存在であったし、その生涯（正確にいうと、日本敗戦までの前半生）も満洲と深い関わりを持ち続けた。彼は満洲における「唯一の職業作家」だと言われていたし、自身、そのように自覚もしていたことだろう。しかし、従来からの先行研究においては、この作家を真正面から論じたものは皆無である。

ここでは、彼の文学的・生活史的な足跡を、可能な限り精密に追っていくことにする。そのことによって、おそらく多くのことが見えてくるに違いない。彼を通して、満洲国の首都・新京を中心とする日本人一般の文学・文化活動の諸相を相当程度に明らかにすることができるはずであろうし、さらには現代につながる多様な問題を引き出していくことも可能だと考える。

異国（中国東北）において、支配の民族として、自国（日本）の言語で文学表現に関わるという行為とは、一体どういうことだったのだろうか。それも、当の作家の単独的な営為にとどまらず、一つの「運動」として表現者たち個々を組織し、その内に異民族（主として中国文学者）までを引きずり込もうとする活動に到っては、これをどう見ていけばよいのだろうか。それでも、こうした作品の中に、今日の読者を引きつける要素があるとなれば、それは何であり、どこに由来するのであろうか。

2. 本研究の意義

満洲国で活動した日本人文学者は、かなりの多数に及び、彼らによって生産された作品量も、実に多量で多彩だった。これらの文学者は、大きく二つのカテゴリーに分けることができる。

その第一は、満洲国が成立（1932年）する以前に、この土地に生まれるか、日本から移住してきて、この土地で文学活動を開始するようになった人たちである。その第二は、満洲国が建国され、いくらかは軍事的・政治的・社会的な安定が見られるようになったころ、

日本から渡ってきた人たちである。これらの人たちの多くは、日本で一定程度の文学活動を経験し、多少とも日本文壇とのつながりも有していた。しかし、北村謙次郎は、この二つのどちらにも属しない作家だった。

第一群の人たちは、自分たちの「文学的アイデンティティ」を日本文学や日本文壇に求めるのではなく、満洲という土地に根差した新しい文学を作りあげたいと考えていた。当時、「満洲独自の文学の創造」といった理念を提唱し、実践しようとした詩人・作家たちである。日本文壇から切れることを積極的に意識していた。第二群の人たちは、そのアイデンティティが日本に帰属することを自明としていた。満洲文学を日本文学の延長、あるいは飛躍であるというふうと考えていた。従って彼らの多くは、日本の文芸雑誌に作品を発表したり、芥川賞を受賞したりすることを期待する傾向にあった。

北村謙次郎の場合、その民族的・言語的アイデンティティこそ日本に帰属してはいたが、文学的アイデンティティと言えば、それは分裂の相を見せていた。彼は幼少時を満洲（大連）に育ち、中学卒業後日本に帰り、やがて文学活動をスタートさせる。一時期、満洲に戻ったこともあるが、またもや東京に住み、雑誌『日本浪漫派』の同人として文壇に注目されることもあった。だが、1937年、彼は新京に行き、そこで大陸土着の文学を志すことになるのである。彼は満洲文壇の創成・発展に力を尽くす一方、日本文壇との深いつながりも断ち切れなかった。満洲と日本との間に裂かれた存在。このようなアイデンティティの分裂を明白に見せているのは、在満日本文学者の間では彼一人であった。その意味で彼は特異な文学者であり、孤高の作家だった。

本研究では、そのような北村の文学的アイデンティティの分裂の相に着目し、満洲と日本との間に裂かれた彼の思想の矛盾、揺れの機微に分け入っていく。そのことによって一人の作家像と満洲文学の実態とを、より生き生き浮き彫りにできるだろうし、延いては、近代における中国と日本の裂け目にも視界を拓けていく。

3. 研究の方法

本研究では、実証的な歴史研究方法を基本としている。その基礎作業として、北村謙次郎の作品の収集と発掘、その書誌的調査を最初の出発点とした。よく知られているように、満洲で発行された雑誌、書籍などで現存しているものは、日中両国、どちらにおいても極めて数が限られている。これまで北村文学に関する書誌的研究はまったくなされていないので、当初は暗中模索、ようやく最近、自信を持てるほどに収集することができるようになった。この論文を執筆中にも資料追跡の手はゆるめず、新しい文献を入手するつど、原稿を書き改めている。作品資料とともに、その関連資料の探索にも努めた。主として北村文学の背景となる史料であり、とりわけ満洲国関連のもの、彼と同時代の文学・文壇関連のものなどである。

これらの資料収集に当たっては、各種の図書館や文学館を利用する一方、このジャンル

の研究者に助力を求め、北村謙次郎の遺族からも強力な援助を頂戴することができた。近年、満洲で出ていた雑誌などの復刻版の刊行がかなりの充実を見せていて、その点も、大いに助けられた。

また、北村謙次郎の生きた時代を実感できればと、彼に関わる土地（特に中国東北）を訪ねたり、関係者に面談しヒアリングを試みたりすることも再三だった。特筆しておきたいのは、遺族からの資料提供である。北村の戸籍謄本、小学校の成績表、写真の他、若き日の日記、同人雑誌の類、膨大な量に及ぶ戦後の未発表草稿などであった。

論文の執筆に際しては、これらの資料を分析しつつ、北村の生活経歴と創作過程を縦軸に、主要著作の解説を横軸として、この作家の文学的全体像を把握していく。彼の満洲における文学活動を明確にし、その思想体験の意味を考察していく。

4. 論文の構成

全 6 章から成る。北村謙次郎の創作活動を時間軸に沿って論述し、そこで彼が文学的に追及しようとしたものを明らかにしつつ、作品に秘められた、彼の時代に対する抗いの実態を析出していく。

第 1 章では、北村謙次郎の生涯を概観する。その生い立ちから、大連での植民地体験、満洲国での文学活動、引揚げ体験、その逝去までを述べる。

第 2 章では、北村の初期文学を見ていく。学生時代の同人雑誌『すなつぼ』における習作時代、文壇への足がかりとなった個人誌『文芸プランニング』における実験的作品、同人雑誌『日本浪漫派』における初期の秀作などを通して、彼のモダニズム体験の変遷を検証する。

第 3 章では、彼が主宰した文芸雑誌『満洲浪漫』について論じる。満洲文学における同誌の歴史的意義を問うと同時に、彼が大陸で追求した文学理念（ロマンチズム）の実質を探ってみる。

第 4 章では、種々の雑誌に断続的に発表された連作小説「或る環境」を採りあげ、再評価を試みる。世に知られざる彼の代表作だと見てよい。主として、自身の少年時代に材を求めたものだが、ここには作者の満洲体験の原点が明白である。

第 5 章では北村の在満時代の唯一の長篇小説であり、一般には彼の主著と目されている「春聯」について論じる。彼が満洲国をどう見ていたかという問題設定を通して、この時期の彼の文学思想の実質に迫っていく。

第 6 章では、北村文学における「他者」という視点から、その文学の多様性を考えてみる。ここでは、作品に描かれた「女性イメージ」、「白系ロシア人問題」、「開拓移民像」などといった切り口を用意している。前章までに書ききれなかった内容を、ここで補完することになる。

第1章 北村謙次郎の生涯

第1章では、北村謙次郎の生涯を見ていく。満洲国唯一の職業作家として、北村は多くの文学活動に関わってきたが、その生涯に関する先行研究はほとんど存在しない。従って、北村の文学活動を検討する前に、彼の生涯を明らかにしておく必要がある。ここでは、「小伝」スタイルのもと、北村の一生を記録していく。彼の事績を実証的に追いながら、その生きた時代を背景に、彼の人物像をデッサンする。これは北村文学についての作家論・作品論の基礎作業となるものである。

内容においては、北村の生の軌跡を明らかにすることによって、社会との関係、または、一人の人間がいかに関わりあって生きてきたか、ということ念頭に記述した。とりわけ、彼が大陸（関東州と満洲国）とどのように関わり、さらには、どのようにして文学に目覚め、それを自身の仕事とするようになったか、換言すれば、北村における満洲と文学の関わりを深さを探ることが、本章の隠された主題ともなっている。

構成においては、本論では、時間軸にそって北村の生涯を5つの転換点により区分した。まず、第1節の「生い立ち」では、北村が生まれてから、8歳にして初めて満洲（大連）に渡るまでの東京での生活を中心に、北村家の家系と家庭環境を見ていく。幼少期の体験と記憶はのちに、彼の郷愁の一部となっており、その文学の原点に関わってくる。次いで第2節の「関東州の大連時代」では、北村が1912年に大連に渡ってから1923年に大連を去るまでの間を中心に、関東州の教育事情と生活環境を踏まえて、彼の少年時代の足跡をたどる。この部分は、北村の満洲認識の最初の形成に関わっており、本論第4章の「或る環境」論にも通じている。第3節の「東京での進学」は、1923年から1937年までの北村の生活軌跡と、日本文壇に登場する経緯とを記録した。この部分は、本論第2章の「北村謙次郎文学におけるモダニズムの変容」に呼応している。さらに、第4節の「満洲国に渡る」は、北村が渡満した1937年から、満洲国壊滅を経て、日本に引揚げる1947年までの10年間を中心に、彼の満洲国に渡った経緯と、職業作家になってからの活動ぶりに焦点を当て、満洲国で新たに文学活動を展開していくプロセスを眺めていく。最後に、第5節の「敗戦後の生活」では、大陸引揚げ後の北村の様子を描く。この部分では、北村の戦後、中国での留用状況、彼の引揚げ事情、及び、引揚げ後の文筆活動の再開を紹介した。そして、彼の死である。

なお、1930年に文壇デビューする以前の北村謙次郎については、本名の「北村謙二郎」で表記する。デビュー後は筆名の「北村謙次郎」で統一する。

第1節 生い立ち

北村謙次郎は、1904年7月5日、東京市麹町区土手3番町36番地に生まれた。本籍は山

形県米沢市西大通1丁目5192番地。本名謙二郎¹。父・亨吉は東京の通信省の判任官²で、母・ミヨは旧甲州街道の駒木野宿（現・八王子市内）の旅籠「ふじや新兵衛」の次女³である。

1. 北村家の家系

北村家の家系図は、『上杉家御年譜』⁴に掲載されている。

初代・北村茂助（？-1637）は越後国古志郡（現新潟県）に居住し、上杉景勝に仕えた。1598年、茂助は景勝に従って会津に入ったが、3年後に上杉家は関ヶ原の敗北によって領地替えとなり、米沢に移された。以後の子孫は第5代までは経歴上、激しい変動がなかった。

5代目の清右衛門道寛（？-1787）は、父の存命中、無給で小姓として勤務した。家督を継いだ後、藩主上杉鷹山に従って道路工事など藩政改革に尽力したと伝えられる。現在、北村家には、鷹山から賜わったという袴が残されている⁵。

6代目になると、北村家の役職は馬廻組から御堂将に変わり、その後、鉄砲足軽組頭になった。7代目忠貞（1840-94）は北村謙二郎の祖父に当たる。彼は5人の弟をすべて一人娘の士族の家に婿入りさせた。現在の米沢市の、興譲館前の文房具店の岩瀬、館山口の仁科などの諸家は、その子孫である⁶。また、忠貞自身は元籠町の士族、梅沢家のサンと結婚した。藩の工事普請に携わるほか、忠貞は藩医も勤めていた。気性が激しい人だったらしく、彼は治療中の患者が自殺したことに憤慨して医者を辞めたという。1863年、米沢藩の代表の一人として上洛し、警衛に当たった。明治維新に際して、忠貞は名前を貞徳に変え、上京して数々の戦に出陣し、その功により勳六等を授けられた⁷。54歳で亡くなったが、上京した米沢人の世話役として、彼らの間に影響力が大きかった。謙二郎一家が満洲に渡った時、やむを得ず東京に残した長男・徳太郎の面倒を見てくれたのが、これら在京米沢人たちであった。この祖父忠貞は息子二人を残した。長男元太郎が士族を継ぎ、次男亨吉が平民となった⁸。謙二郎は、亨吉の次男である。

2. 北村謙次郎の家庭

¹ 北村謙次郎の次男・光雄氏から借覧した北村家の戸籍謄本による。

² 『北村徳太郎先生御紹介のしおり』、社団法人 日本公園緑地協会 北村徳太郎誕生百年記念 米沢記念式典実行委員会、1995年、16頁。

³ 2012年7月、北村光雄氏へのインタビューによる。

⁴ 『上杉家御年譜 第二十四巻』、米沢温故会、1988年12月1日、313頁。

⁵ 注3。

⁶ 注2、14頁。

⁷ 注2、15頁。

⁸ 注2、14頁。

北村亨吉は1867年に生まれた⁹。独逸協会中学校を経て¹⁰、宮島大八の経営した善隣書院で中国語を学び、中国人留学生に日本語を教えたりしていた¹¹。日露戦争の頃、彼は東京の通信局の判任官であったが、どの部門に所属していたか明らかでない¹²。1894年、亨吉は米沢藩士の娘・秋山スエコと結ばれた。翌年、徳太郎が生まれた。その後のスエコの消息は不明で、徳太郎は亨吉の母・サンによって東京で育てられた¹³。

1903年、亨吉は鈴木ミヨと結婚した¹⁴。翌年、謙二郎が生まれた。謙二郎の「半生之記」によると、亨吉は謙二郎の幼い頃、大連の通信管理局に単身赴任し、3、4年の後、家族も満洲に渡ったという¹⁵。

一方、謙二郎の番町小学校の修業証明書によると、亨吉の家族が満洲に渡ったのは、1912年の夏である¹⁶ことは間違いない。その3、4年前だったら1908、1909年のことであろう。また、徳太郎は「父は大連に転任となった。確か二年後位に家族を呼び寄せる事になった」¹⁷と書いてある。それを逆算してみれば、亨吉の家族が満洲に渡ったのは、1912年より2年前のころだと分かる。従って、亨吉は東京の通信局から関東州の大連に転勤になったのは、1909年前後のことだと推測できる。

1909年前後といえば、日露戦争の数年後、日本の通信局が関東州において通信、移民など、多方面の事業を展開するようになった頃である¹⁸。亨吉はその時代の波に乗って、満洲に渡ったのだろう。しかし、彼はその後もまもなく大連通信管理局を辞職し、石本鑽太郎のもとで働くことになった。

本論第4章でも触れるように、石本鑽太郎は「満洲の阿片王」と呼ばれた人物である。彼は日露戦争後、阿片製造専売特許を取得し、莫大な利益を手にして、満洲の実業家となった。その影響力は、関東州の実業界のみならず、金子雪斎など早期に関東州に渡った文化人、「満蒙独立運動」などの政治運動にも及んでいる。しかし、石本は1923年頃の世界経済パニックによって衝撃を受け破産した¹⁹。その後、満洲事変の時に消息不明となった弟・権四郎の遺体を捜すため精力を尽し²⁰、1934年に亡くなった²¹。

⁹ 北村光雄氏が作成した「北村家の生没年データ」による。

¹⁰ 1936年2月6日の北村謙次郎の日記による。

¹¹ 北村謙次郎「半生之記」(共鳴訳)、『芸文志』第3輯、1940年6月15日。

¹² 1894年の逓信省職員名簿(『逓信省職員録』、杉原活版所、1894年7月)に彼の名が出ていないところを見ると、この時点で彼はまだ任官していなかったものと推測される。

¹³ 米沢の風習で、最初の子供が故郷で帰ると言われているため、徳太郎は米沢で生まれた。
注2、15頁。

¹⁴ 注1。

¹⁵ 注11。

¹⁶ 北村謙次郎の小学校の成績表と卒業証によって、大連に渡った時期が明らかである。

¹⁷ 注2、18-19頁。

¹⁸ 『郵政百年史』、逓信協会、1971年3月1日、392頁。

¹⁹ 柳沢遊『日本人の植民地経験』、青木書店、1995年5月25日、157頁。

²⁰ その過程を記録したのは、石本鑽太郎が作った『石本権四郎』(1937年11月11日)である。

石本は大連市の松山台に広大な敷地を占め、市民からは「松山御殿」と呼ばれていた屋敷を建てた。敷地内には石本の経営する果樹園やラジウム温泉松山館もあり、亨吉もその一郭に家を新築することがあった²²。亨吉が石本のもとで、最初に阿片専売の和盛会社の支配人²³として働いたが、石本が倒産後、亨吉は辛うじて石本が残したラジウム温泉を営んで、日々の生活を送っていた²⁴。

1923年8月、亨吉の4歳年上の兄北村元太郎が東京で亡くなった²⁵。9月、上京していた次男謙二郎と長男徳太郎は関東大震災に遭遇し、2カ月ほど音信不明であった²⁶。そして、1924年、数十年間、共に暮していた亨吉の母・サンが大連で亡くなった²⁷。翌年、亨吉の末の子、満洲生まれのミチ子が病死した²⁸。亨吉はその一連の衝撃に耐えられなくなってか、1925年、10数年間にわたって生活した大連を離れ、妻ミヨと娘ナミを伴って日本に帰った²⁹。

亨吉一家は、徳太郎を頼って東京の世田谷で暮すことになった。その時、徳太郎は都市計画中央委員会の高等官技師を勤めていたが、月給は130円から140円であった。10キロの白米が3円4銭の時代、この給料で5人の家族を支えるのは容易ではなかったであろう。たまたま在京米沢人をサポートする「有為会」が書記を探していたので、亨吉は幼馴染みの総務部長登坂小三郎の紹介により75円の月給（公務員初任給が70円）で同会の仕事に就くことができた³⁰。

謙二郎の母・鈴木ミヨの実家は「ふじや新兵衛」という江戸後期から続く旅籠であった³¹。現在もその建物の一部が小仏川沿いに残っていて、その壁面には蛇滝信仰のお札が隙間なく貼られている。そこから道に沿って10分間ぐらい歩けば、左側に、茂った森に覆われた山に入る道が現れる。蛇滝信仰の修行地はその山奥にある。高さ15メートルの滝は、いまでも信者を迎えている。

ミヨについての記録は多くないが、善良でやさしい母親だったらしい。謙二郎の後、彼女は長女・ナミを産んだ。1912年、大連に転勤した亨吉の後を追って、ミヨは母・サンと謙二郎（8歳）、ナミ（6歳）と共に大連に渡った。その地で、彼女は男児二人、女兒一人を

²¹ 石本鎖太郎の経歴については、伊藤武一郎『満洲十年史』（満洲十年史刊行会、1916年2月5日）、『満蒙日本人紳士録』（満洲日報社、1929年）、『東亜先覚志士紀伝』下巻（黒龍会出版部、1936年）などを参照。

²² 注2、26頁。

²³ 北村謙次郎「続 この一年 絶筆」、『文芸復興』第72集、1982年10月15日、5頁。

²⁴ 北村謙次郎の1934年4月の日記による。

²⁵ 「北村家の葉」、北村徳太郎33回忌法要に作成、1996年4月20日、5頁。

²⁶ 北村謙次郎の「地震と文人——九月一日の関東大震災——」（『東京タイムズ』第5面、1967年9月1日）による。

²⁷ 同上。

²⁸ 注9。

²⁹ 注2、27頁。

³⁰ 同上。

³¹ 注3。

産んだ。しかし、満洲の厳しい自然環境の中で、2人の息子は次々と夭折した³²。次女のミチ子も9歳の時に、音楽会の帰りに風邪を引いて亡くなった³³。その悲しみを背負って、ミヨは謙二郎とナミのことを何より大事にしていたらしい。しかし、ミヨが1946年に亡くなった時、謙二郎は中国東北部に残留していたため、彼女の死を見送ることができなかった。

すでに述べたが、兄徳太郎は謙二郎の9歳年上の異母兄である。彼は祖母サンによって育てられた。幼い頃、いつも祖母と亨吉に連れられ、在京米沢人を訪ねていたので、「北村の孫、徳ちゃん、徳ちゃん」と皆に可愛がられていたという³⁴。そのため、徳太郎は米沢に対して相当な親近感を抱くようになった。

小学校2年生の時、徳太郎は初めて祖母サンに連れられて米沢に帰った。約1カ月の滞在で彼は故郷の楽しさを十分に味わった。その時、徳太郎は祖母の実家梅沢家に泊まった。隣家は大熊信行の家で、彼はいつも大熊が学校から帰るのを待って遊んでいた³⁵。大熊信行は経済学者で、かつてプロレタリア作家小林多喜二に大きな影響を与えた人物である³⁶。謙二郎の初期の文学作品に徳太郎の友人が登場しているが³⁷、それが大熊であるかどうかは判然としない。

1912年、北村一家が満洲に渡ると決めた時、兄徳太郎は独逸協会中学校に通っているところであった³⁸。当時、満洲にはドイツ語を教える中学校がなかったので、どうしようかと徳太郎が困っていると、亨吉の「お前は小森沢先生の家で預って貰うことにしたからな」³⁹の一言でけりがついた。「小森沢先生」とは、有為会の会長、小森沢長政のことである。当時、在京米沢人の最長老の一人であった。彼は海軍省内の一派を牛耳る存在だったが、総理大臣になった山本権兵衛派に勝てず政界から身を引いた。徳太郎は、小森沢家で5年間の書生生活を送った⁴⁰。その後、米沢藩の藩校興譲館に学び東京帝国大学医学部に入ったが、健康の問題で1年間休学し、のち農学部に移った。大学卒業後の徳太郎は、内務省に入省し、大臣官房都市計画課において都市計画、地方計画、国土計画などに参加して、日本全国の都市計画及び公園緑地計画などの指導に当たり、黎明期の都市計画行政の基盤作りに貢献した⁴¹。

³² 注28。

³³ 注3。

³⁴ 注2、15頁。

³⁵ 注2、17頁。

³⁶ 松澤信祐「生誕100年 小林多喜二の未発表書簡2通（写真・翻刻・解説）—大熊信行宛て」、『国文学：解釈と教材の研究』48巻14号、2003年12月。

³⁷ 北村謙次郎「人事往来」、『草上』第6巻第12号、1933年12月1日。

³⁸ 注2、18-19頁。

³⁹ 注2、19頁。

⁴⁰ 徳太郎の記述によると、彼の書生生活は5年間続き、室代も食費も払わなかった。その間、文句を一度も聞いたことがないし、風邪一回も引いたことがなかった。出典は『北村徳太郎先生御紹介のしおり』、社会法人日本公園緑地協会・北村徳太郎生誕百年記念米沢記念式典実行委員会、1995年。

⁴¹ 注2、11頁。

徳太郎の着実な生活ぶりは、北村一家の唯一の頼りとなった。彼は、中学生の時に家族を満洲に見送ったが、10数年後に満洲から引き上げてきた家族を引き取り、年を取った父親の就職口を探するなど、家族の面倒を見続けた。特に謙二郎に対しては、徳太郎は兄として精一杯の世話をした。

徳太郎は、中学を終えて上京した謙二郎の生活を見たが、のちに弟が大連に渡ってから、経済上の支援を続けた⁴²。1935年7月、徳太郎が欧米視察で満洲を経由した時、謙二郎は兄に会うため、わざわざ大連から奉天駅まで出迎えている。彼の列車は午前6時40分に奉天着、兄は7時5分に奉天を発つ予定だった⁴³。わずか25分間の2人の再会のエピソード、そこからこの兄弟の深い絆を窺い知ることができるだろう。

妹ナミは謙二郎より2歳年下である。彼女は同じく東京麹町に生まれ、謙二郎と共に大連に渡った。謙二郎が大連中学校に通った時に、ナミは大連神明高等女学校に通っていた⁴⁴。1925年、亨吉が関東州から引き上げた時に、彼女も一緒に東京に帰った。その後、中村三郎⁴⁵という人と結婚し、7人の子供を出産して、79歳でなくなった。この妹に対して謙二郎は、「僕は、昔からこの妹に冷感である。殆ど兄弟らしい感情がないのだ。どこか自分には出来そこないみたいな所がある」と日記の中に書いてある⁴⁶。

ところで、関東州で北村一家に大きな衝撃を与えたのは、謙二郎が12歳の時に生まれた妹・ミチ子の急死である。彼女は末っ子で両親の愛情を多く受けて育ったが、9歳の時に音楽会から帰ったあと病気にかかって亡くなった⁴⁷。その時、謙二郎は東京にいたが、この事件から感じた恐怖は少なくなかったと思われる。戦後、謙二郎は自分の子供たちが音楽会に行くことを決して許さなかったという⁴⁸。

家族は北村文学の初期における主要なテーマである。例を挙げれば、「描きかけた絵」（『すなつぼ』第8号、1928年4月）、「貸借」（『文芸プランニング』第3号（11月号）、1930年11月）、「眠られぬ夜々」（『作品』2-8（16号）、1931年8月）、「或日の明暗」（『文学クオタリイ』第1輯、1932年2月）、「一家族」（『作品』3-8（28号）、1932年8月）、「青葉を揺る風」（『小説・エッセイ』・朝日書房、1932年12月）などがある。それらの小説には、いずれ親子、兄弟姉妹などが登場し、家族間の絆を語った物語である。

3. 幼少年時代

⁴² 例えば、1934年8月22日、「兄より電為替、いつも通り」と記し、1934年12月27日の日記に「月給少なく、仕方がないので、兄貴に無心状出す」と書いてある。そこから、北村謙次郎が、時折父親と兄に無心状を出していたことが明らかとなる。

⁴³ 注2、94頁。

⁴⁴ 2014年2月26日のナミの長男・中村尚氏の手紙による。

⁴⁵ 同上、中村三郎は京都帝国大学法学部卒業、戦前は警視庁嘱託に勤務、戦後は職を転々としながら、米沢の商業学校の英語の先生となったという。

⁴⁶ 1936年6月8日の北村謙次郎の日記による。

⁴⁷ 注3。

⁴⁸ 同上。

現在、140年の歴史がある東京都千代田区六番町に位置する番町小学校は、東京市番町尋常小学校と東京市番町尋常小学校附属幼稚園の後身である。謙二郎の教育はそこから始まった。番町幼稚園は1889年に開園された⁴⁹。時期はちょうど明治政府の制度が整って、教育、文化、産業などの発展の基盤が出来た時代であった。当時は幼稚園教育はまだ普及していず、ごく限られた児童しか入園することがなかった⁵⁰。謙二郎は1910年4月、そこに通い始めた⁵¹。1955年の番町幼稚園創立65周年記念誌『おひさまにここに』には、この幼稚園に通った、謙二郎と同世代の人の回想が掲載されている。それによると、番町幼稚園の敷地は200坪以上。園児たちは、大きな藤の木の下で遊んだり、藤の輪を転がしたり、オルガンの伴奏で歌ったり、運動会や遠足の行事、絵かき、積み木や折り紙などの遊戯を楽しみ、情操豊かな日々を送ったという⁵²。

1911年4月、謙二郎は番町尋常小学校に入った⁵³。番町幼稚園と一体化した教育方針だった⁵⁴ので、謙二郎は学校の教育に違和感を味わうことはなかったようだ。1年生の終了時、謙二郎は、「学業ノ優等 品行ノ端正ナルヲ賞ス」⁵⁵という修業証明書もらっている。小学校2年生の夏、謙二郎は大連に転校した。番町尋常小学校での1年半ほどの生活は、のちに謙二郎に郷愁を感じさせる記憶となった。

小学校2年生という時期が、その後の謙二郎兄弟の人生を決定しているように思われるのは興味深い。兄の徳太郎は、小学校2年生の時、両親の出身地に帰って、生まれた故郷である米沢へのイメージを幻想から現実に切り換えた。以降、彼は自分を米沢の人間と自認し、内務省官吏として働くかたわら、米沢市の発展に力を尽くした。一方、小学校2年生の謙二郎は、東京を離れて大連に向かい、生まれ故郷である東京へのイメージを大連という植民地都市によって稀薄化された。以後、彼は大陸の生活に切ない情感を持つようになり、ついに満洲の作家になった。

第2節 関東州大連での少年時代

1. 日本橋小学校

1912年7月、謙二郎は祖母、母や妹と共に天草丸の3等船室の客になって玄海灘を渡っ

⁴⁹ 「幼稚園六十五年の思い出」、『おひさまにここに』（千代田区立番町幼稚園創立六十五周年記念誌）、1955年3月15日。

⁵⁰ 同上。

⁵¹ 北村光雄氏提供の、幼稚園の卒業証明書による。中には、「右本園ニ於テ十一カ月間保育ヲ受ケタルヲ證ス」と書いてある。

⁵² 注49、20-26頁。

⁵³ 北村光雄氏提供の、北村謙次郎の第一学年修業證書による。

⁵⁴ 注49。

⁵⁵ 北村光雄氏提供の資料による。

た。初めての船旅は、幼い謙二郎に一生忘れがたい印象を残した。舳が天草丸の舷側に着いた時の音は、「僕は父の所へ行くのを断念して、東京へ逃げて帰りたくなつた」⁵⁶というほどの恐怖感を与えた。しかし、3日間の航海でたどり着いた大連は、まもなく謙二郎の誇りとなった。「大連の港は、どのようにしても東洋第一の港であるに違いなかつた。浜町発電所の煙突も、東洋第一で無ければならなかつた。そして山縣通りのアスファルト道も、放射線型とかの市外の構造も。そしてそれ以上に、僕などの乗つてきた「天草丸」が、世界の何処にもない、唯一無二の、美しくて速い船ということに決定した」⁵⁷と、自慢していた。

1912年9月、謙二郎は大連第二尋常高等小学校（のちの日本橋小学校）の2年生に転入した。大連第二尋常高等小学校は1909年4月に創立され、関東州では伏見台尋常小学校に次ぐ、2番目に古い小学校であった。学校は満鉄社宅区域にあったので、生徒は満鉄関係の子女が多かった。この学校の教育方針は「自学補導」、「自律的自治」、「自覚的鍛練」を旨としていた⁵⁸。「自学補導」とは、学級文庫を設けたり、各級別に児童参考書を備え付けたり、郊外農園や温室などによって実物教育を行ったりすることである⁵⁹。それによって、生徒たちは自然の事物と接触することができるし、本を自由に読むことができるだろう。「自律的自治」とは朝会、国旗掲揚式、自治会、または看護婦当番、美化当番などを設けて生徒たちを訓練することであった。他には、柔道や剣道などの課外活動もあった⁶⁰。

謙二郎は入学して間もなく副級長に任命された⁶¹。1913年4月の成績通知書によると、2年生の時、彼の成績はほとんど甲である。また、6月と7月、病気のため一週間ばかり休んだことを例外として、欠席は1日だけ、遅刻も年に2回しかなかった⁶²ということは、彼が極めてまじめな生徒だったことがわかる。また、謙二郎は2年間にわたって副級長に選ばれ、操行と学業が優秀のため、2年生から4年生まで毎年、「褒状」を貰った⁶³。課外の活動でも活躍している。小学校を卒業するまで、謙二郎は満鉄剣道部から「幼年組五級二進ム」⁶⁴の賞状と、「第四級水泳証書」を貰った⁶⁵。1917年3月、謙二郎は大連第二尋常小学校（1915年に改称）を卒業した⁶⁶。

しかし、小学校を卒業した謙二郎はすぐに中学校に進学しなかった。その理由は、建設中の大連中学校にある。同校は1918年に開設された。それまで、大連には日本人向けの中

⁵⁶ 北村謙次郎「航海日記」、『満蒙』12月号、満蒙社 1941年12月1日。

⁵⁷ 同上。

⁵⁸ 嶋田道弥『満洲教育史』、青史社、1982年8月25日、86-88頁。

⁵⁹ 同上。

⁶⁰ 同上。

⁶¹ 北村光雄氏が提供した証明書による。

⁶² 北村光雄氏が提供した、1913年度の大連第二尋常高等小学校の通知書による。

⁶³ 注61。

⁶⁴ 注61。

⁶⁵ 注61。

⁶⁶ 北村光雄氏提供の卒業証書による。大連第二尋常小学校校長倉島丑太郎が発行した。

学校はなかった。関東州の尋常小学校を卒業した進学志望の児童は、日本内地で進学するか、旅順中学校（1910年設立）に進むか、または高等小学校に入るか三つの選択肢しかなかった。謙二郎が小学校を出た1917年には、大連中学校の建設工事が行われているところであったため、大連高等小学校に1年間在学させてもらうことになった⁶⁷。そして、1918年、謙二郎は大連高等小学校第1学年を終え、大連中学校に進学した⁶⁸。

2. 大連中学校（大連一中）時代

大連中学校は1918年4月に開設された。初代校長は西内精四郎（旧姓・服部）であった。開校当時は旅順中学校から60余名を第1回生として受け入れ、謙二郎など、大連高等小学校から移ってきた生徒たちを含む90名は第2回（第1学年）生として入学することになった⁶⁹。この学校は「満洲故郷愛を高調し民族協和の精神を養ひ日滿合作亜細亜興隆の使命を完了し得る有為なる人材の育成」⁷⁰を目的としていた。大連中学校が植民地向け日本人の養成を眼目としていたことがわかる。とりわけ、この中学校では、世界大勢、満蒙事情などを紹介する教育、講演会も多かった。課外の活動も大いに奨励されていたらしい⁷¹。同校は、謙二郎が卒業した1923年の12月、「大連第一中学校」と改称された。以下、本論では、同校については「大連一中」と呼ぶことにする。

謙二郎の大連一中における学校生活は極めて多彩であった。2年生の時、毎週金曜日の7時間目に催される、希望者だけの音楽教室に通っていた。10数人の参加者の中には、謙二郎のほか、同級生の大庭武年、金丸精哉、大町一枝などがいた⁷²。神明高女の近森出来治が三大節の「君が代」の時にしか使わないグランドピアノで教えていたという⁷³。大連一中の校歌は、その時に作曲された。俳人で国文学者の沼波瓊音が大連に来た時に校長の西内精四郎から作詞を依頼されたことは、後年、金丸が偶然、西内から聞いたのだった⁷⁴。この西内は大連の東公園町の社宅に住んでいた時、謙二郎と金丸を招いたことがある。その折、西内から「「こら、忠義を尽くさんか」と酒盃をさし出され、日ごろ酒仙の北村君が神妙に

⁶⁷ 北村光雄氏提供の修業証書による。大連高等小学校が発行した。

⁶⁸ 『伏丘』（大連一中校友会、1954年）第3号26頁により、北村謙次郎の名前が第2回生の名簿にある。『満洲教育史』（嶋田道弥、青史社、1982年）189頁に、第2回生の入学時期が1918年4月14日と記されている。両者を合わせて、北村の大連一中の入学時期を明白にすることができた。

⁶⁹ 嶋田道弥『満洲教育史』、青史社、1982年8月25日、189頁。

⁷⁰ 注69、189-190頁。

⁷¹ 注69、190頁。

⁷² 金丸精哉「校歌の作詞と作曲」、『われらが心のふるさと 大連一中——大連一中創立五十周年記念誌——』大連一中校友会、1970年10月18日、122頁。

⁷³ 同上。

⁷⁴ 同上。

両手でお酌していた」⁷⁵と、金丸に深い印象を残したのだった。長じてからの謙二郎の酒好きはよく知られているが、一体、その歴史はどこまで遡るのだろうか。

謙二郎が図画に夢中になったのも、やはり大連一中の時であった。九州出身の教員紙谷豊太郎の指導によって、謙二郎は、同級生春口勝弥や三浦万次郎らと共に図画に熱心になった⁷⁶。3年生の時、図画科特別作品の成績が優秀だったので、賞状を貰ったことさえある⁷⁷。中学時代の謙二郎は勉強が好きで、成績優秀の賞状も多く貰っている。1922年10月の国漢科団別競技の賞状⁷⁸もその一つである。

学年が進むにつれ、謙二郎の心の中には文学意識も芽生えてくる。4年生の頃か、謙二郎は、同級生の大庭武年、金丸精哉、大町一枝などと共に、文芸同人誌『アンジェラス』を出し始めたのだった⁷⁹。スクールカラーの濃緑色の表紙で飾られたガリ版刷りの雑誌で、印刷から製本まで玄人の手になった豪華版だったという。その出来ばえに金丸は「仰天した」という⁸⁰。おそらく、この雑誌のリーダー的存在は大庭武年であったかと思われる。中学生らしからぬ立派な造本であったのも、旅順の資産家の子であった彼が、経費を負担したからではあるまいか。後年のことになるが、金丸、大庭、大町と謙二郎4人のお互いの評価が面白い。金丸は大庭と親しく、当時の大庭の才能を特に高く評価していた。一方、大町は「金丸は酒のみの気持ちを知らんよ」といって、謙二郎の方を高く買っていた。また、謙二郎は、「小生らは同人誌によるコツコツ型を主張、その辺（注・大庭武年は）純文学派とはタモトを分かった所が当時からあったようで、文学として『推理小説』なるものは小生らにサッパリ興味のないものでした」⁸¹と言っていた。北村文学の孤高性は、その時からすでに現れていたのだろうか。やがて、彼ら同人は満洲のジャーナリズムにおいて、それぞれ活躍することになる。大庭は探偵小説家の新鋭として、日本文壇で注目を浴び、金丸は満鉄の写真家の淵上白楊と共に、満鉄の宣伝雑誌『満洲グラフ』の編集に専念する。大町（大町桂月の甥に当たる）は薊一郎の筆名で知られる文筆者となる。1923年3月、北村謙二郎は、大連一中を卒業した⁸²。

第3節 東京で進学

1. 大学予科時代

⁷⁵ 同上。

⁷⁶ 金丸精哉「緑の会旗が消えていった」、『われらが心のふるさと 大連一中——大連一中創立五十周年記念誌——』大連一中校友会、1970年10月18日、121頁。

⁷⁷ 北村光雄氏提供の資料による。中には「図画科特別作品成績優秀ナリ依テ之ヲ賞ス」と書いてある。

⁷⁸ 北村光雄氏提供の資料による。

⁷⁹ 金丸精哉「大庭武年の人と作品」、『作文』87号、作文社 1972年5月1日

⁸⁰ 同上。

⁸¹ 同上。

⁸² 『伏丘』（大連一中校友会、1954年）第3号26頁に記された在学年月による。

1923年、北村謙二郎は進学を目的に上京した。しかし、その後の謙二郎の学歴については、曖昧な部分が多い。本人もはっきりした記録を残していないのだ。1944年に刊行された『満洲国各民族創作選集』第2巻において、彼は自分の学歴を「国学院大学を中退」⁸³と記している。また、戦後の回想録『北辺慕情記』には、「青山学院・国学院大学等遊学」⁸⁴と記されている。謙二郎の次男・北村光雄氏への論者のインタビュー（2012年7月）によると、謙二郎は青山学院では英語を学び、國學院大學で漢文を学んだとのことである。これらの学校の当時の学制などを調べた上で考証すると、謙二郎は青山学院高等科を経て、國學院大學文学部予科に学んだのではないかという推測に及ぶ⁸⁵。

一方、謙二郎は1927年8月から1928年4月にかけて國學院大學の文芸同人雑誌『すなつば』に参加していた⁸⁶ので、その間は彼が國學院大學予科に在籍した時期だと判断できる。そうであれば、北村が青山学院に通ったのは1923年4月入学、1926年3月卒業の3年間ということになる。戦後の彼の小説「浪漫の頃」によると、彼は「軍事訓練の出席率がゼロ」⁸⁷であったため、留年を余儀なくされたそうである。

また、1940年の随筆「半生之記」には、彼は青山学院で英語を学びながら、日本文学に興味を覚えたため、國學院大學に転学したが、結局そこは単なる中学校の先生を作る学校だったことで失望し、退学した⁸⁸と記されている。

つまり、謙二郎は1923年上京後、青山学院で3年間英語を勉強して、國學院大學に転学し、2年間通学した後、退学した。その最終学歴は國學院大學と見ていい。

青山学院に通うようになった謙二郎だったが、上京後まもなく大変な社会的事件に遭遇する。1923年9月1日の「関東大震災」である。地震発生の時、彼は東京の蒲田の徳太郎の借家で留守番をしていた⁸⁹。その時の体験について、「最初は屋根瓦や壁が落ちた程度で倒壊のうき目にあわずに済んだが、10時58分、突如として大震動に見舞われた時は、土煙のこもる二階に揺られながら死を覚悟した」⁹⁰と後年の随筆に記録している。

関東大震災は、東京を廃墟と化した。多くの文学者が東京から脱出した。谷崎潤一郎、直木三十五は関西へ、室生犀星は金沢へ逃げた。そして、その年の1月に『文藝春秋』を

⁸³ 北村謙次郎『満洲国各民族創作選集 第二巻』、創元社、1944年3月30日、65頁。

⁸⁴ 北村謙次郎『北辺慕情記』、大学書房、1960年9月1日、奥付頁の「著者略歴」。

⁸⁵ 筆者の現地調査によって、両校とも、当時の学生在籍名簿が戦火で紛失してしまったことが明らかになる。

⁸⁶ 北村光雄氏が保存した『すなつば』による。

⁸⁷ 北村謙次郎「浪漫の頃」、『索通信』15-16号、2013年5月10日、10月31日。

⁸⁸ 北村謙次郎「半生之記」、『芸文志』第3輯（共鳴訳）1940年6月15日、182-183頁。日本語原文未見。

⁸⁹ 北村謙次郎「文人と地震」、『東京タイムズ』、1968年9月1日。関東大震災の体験について、さらに詳しいデータは北村の「続 この一年 絶筆」（『文芸復興』第72集、1982年10月15日）に参考することができる。

⁹⁰ 同上。

創刊した菊池寛は、「究極の人生に芸術が無用の長物であるといふことは、我々にとつてはかなり不愉快である。我々の仕事に対して、信念を失つたことは、第一の被害である」⁹¹、「地震の恐怖が去るとともに、東京に止つてずるべつたり、昔通りの苟安な文筆生活に入りかけてゐる自分を恥ぢてゐる」⁹²と、大震災が文化人に与えた衝撃を語った。

震災後、『白樺』をはじめ、『新興文学』、『文学世界』、『種蒔く人』など多くの雑誌が廃刊となった。それらに代わり、若い世代による同人雑誌が続々と創刊され、いわゆる「空前の同人雑誌時代」を迎えた。例えば、永井龍男、小林秀雄らの『青銅時代』、川端康成、横光利一らの『文芸時代』、梶井基次郎、中谷孝雄、外村繁らの『青空』、舟橋聖一、阿部知二らの『朱門』、中野重治、堀辰雄らの『驢馬』など。中では、特に『文芸時代』が注目される。創刊号に掲載された横光利一の短篇「頭ならびに腹」は、新感覚派文学の濫觴となり、その新しい創作技法は若い世代に一定の方向性を示すことになった。

謙二郎も、そのような新しい文学潮流に身をひたらせながら、さまざまな文芸雑誌を読み耽った。雑誌から自分の好きな作品を切り取って製本し、暇な時に開いてみるのが彼の楽しみとなった。その時に吸収したものは、のちに彼が日本文壇にデビューする際の基礎をなすものだった。また、製本したものを、彼は後年まで大切に保存していたらしく、戦後、それについての随筆を残している⁹³。

2. 文筆活動の開始

大学を中退した北村謙二郎のその後について今は詳らかにできない。しかし、間もなく彼は日本文壇の片隅に姿を現してくる。1930年半ばのことである。これまで本章では、彼を本名の「北村謙二郎」で呼んできたが、以降、筆名の「北村謙次郎」を用いることにしたい。

1955年4月の『新潮』に1枚の写真が載っている。それは、1930年5月、北村謙次郎が赤松月船に連れられ、林芙美子の『放浪記』の出版祝賀会に出席した時のものである。祝賀会のあと、新宿駅構内の食堂で行われた2次会の際に記念撮影されたものである⁹⁴。林芙美子を中心に井伏鱒二、赤松月船、神戸雄一たちに混じって、若き北村も写っている。おそらく、この写真は、日本文壇の歴史に見る彼の最初の足跡となる1枚であろう。

赤松月船は岡山県出身の詩人である。北村より11歳年長の彼は、小説家を目指して、生田長江に師事した。佐藤春夫や室生犀星と親しくし、『紀元』、『文藝時代』などの文芸

⁹¹ 菊池寛「災後雑感」、『中央公論』、1923年12月10日。

⁹² 菊池寛「震災文章 落ちざるを恥づ」、『文芸春秋』、1923年11月。

⁹³ 例えば、戦後、北村が書いた随筆「川端さんと伊豆」（『温泉』37-9、1969年9月1日）には、昔の「製本」から川端康成の「初秋旅信」（『文芸時代』1925年10月号）を取り出したと記している。

⁹⁴ 写真の説明文により、この写真は井伏鱒二の所蔵であり、北村謙次郎の名前が表記されている。

雑誌に関係したりしたが、結局、小説家にはならず、詩人として著名となった⁹⁵。そのような彼は、さぞ作家志望の北村に対して強い思いを抱いたことだろう。ただ、北村と月船の交流の始まりについては、今は明らかにしない。

1930年、北村は赤松の協力で、文芸雑誌『文芸プランニング』を創刊した。翌年の7月までの刊行であったが、詩人の黄瀛や宮沢賢治、翻訳者安藤一郎、『歷程』の同人であった岡崎清一郎、文壇新人の木山捷平らと交流ができた。例えば、北村は直接、宮沢賢治と文通したこともある。賢治の原稿を全部載せることが出来ず、割愛した2篇を「返送したい」と書き送ったが、賢治に「返送に及ばぬ、そのままは破棄してほしい」と返事を貰ったという⁹⁶。

同じく、この1930年、北村の大連一中の同級生金丸精哉は、満鉄の大連本社に勤める身となり、同社の招待で満洲旅行中の斎藤茂吉をハルビンに案内したりしていた⁹⁷。大庭武年はすでに『大連新聞』に小説「青春」を連載、大連の青年作家としてよく知られようになっていた。さらに短篇「13号室の殺人」が『新青年』の懸賞小説に当選、彼は一躍探偵小説作家として日本文壇にデビューすることになった⁹⁸。

この二人に比べると、北村の世に出る一步は少し遅れ気味であったが、『文芸プランニング』の発刊によって、日本文壇への足がかりを築くことができたと言えよう。文壇における人脈形成が徐々に展開されてきたのである。1930年9月、同誌の創刊号が出てから間もなく、北村のもとに、「一読三嘆居士」と署名のあるハガキが届いた。『文芸プランニング』に掲載の彼の作品に対する懇切な批評が書かれていた。「あれはキミ、井伏君だよ」と赤松月船が言った。赤松は井伏鱒二を北村に紹介した。その後、北村は月2回の頻度で井伏宅に出入りするようになる⁹⁹。当時の井伏はすでに「朽助のゐる谷間」、「屋根の上のサワン」などの小説を発表し、文壇における確かな位置を得ていた。そのため、井伏宅に通う文学志望の若者も多くなっていた。太宰治もその中の一人であった¹⁰⁰。こうして、北村は太宰をはじめ、井伏宅に通う若い文学者たちと付きあうようになっていった¹⁰¹。

井伏鱒二文学の特徴として、生きるものの現実を冷静に見つめる観察者の目という点が注目される。北村が、どれほどその影響を受けたかははっきりしないが、1937年に満洲に渡った彼は、のちに「観察者の目」で満洲国を描いた作品「春聯」を発表した。後年の北村の追憶によると、彼は、井伏から「じっと我慢して遠出しないこと。動きまわらないこ

⁹⁵ 定金常次『赤松月船の世界』、日本文教出版、2004年2月23日、66頁。

⁹⁶ 北村謙次郎「二人の詩人 宮沢賢治と黄瀛」、『文芸たかだ』52号、1967年11月15日。

⁹⁷ 北村謙次郎「満洲旅行中の斎藤茂吉」、『ポリタイア』第1巻第2号、1968年4月10日。

⁹⁸ 北村謙次郎「続 この一年 絶筆」、『文芸復興』第72集、1982年10月15日、4頁。

⁹⁹ 北村謙次郎「豊富な樹木の知識—かよう“酒場”も仕事部屋に 井伏鱒二②」、戦後の随筆で、「文人今昔」というシリーズ名で発表され、初出誌不明である。

¹⁰⁰ 太宰治『太宰治全集』第12巻、筑摩書房、1972年2月10日、430頁。同書に掲載された「年譜」によると、太宰は井伏鱒二のところに通い始めたのは1930年5月のことである。

¹⁰¹ 北村謙次郎「太宰治の喧嘩」、『あまカラ』117号、1961年5月5日。

と」という助言を受けたという¹⁰²。

1931年9月18日、満洲事変が勃発した。その頃、北村の家族はすでに大連から日本に帰っていた。しかし、かつて自分の生活した土地で生じた戦争に対して、北村が受けた衝撃はことさら大きかったに違いない。時代は激しく動いていく。多くの文学者たちがそうであったように、北村の思想的動揺も大きかったはずだ。『文芸プランニング』が同年7月に通巻第7号を出したきり、その後が続かなかつたのは、そうした動揺の結果とも見られる。

『文芸プランニング』において、北村は「ノスタルジア鈔」、「胭脂（ニコティン）」、「すなむすめ」などといった幻想的な短篇を発表し、それらは一口に言えば、モダニズム文学ふうな、実験的作品であった。だが、満洲事変以降、彼の作風は一転する。これまでは、平凡な日常生活を「退屈」だと述べて、実験的な手法による創作に意欲的だったのだが、そのような傾向は次第に影をひそめていく。それに代わって、大連時代の体験や日々の生活に題材を求めようとするリアリズム的な作品が多くなってきた。発表の舞台も、井伏鱒二など文学の先輩の紹介で、『作品』、『文学クオタリイ』などの雑誌に変わった。

1933年という年は、北村謙次郎にとって、二つのことで記念すべきだろう。一つは、俳誌『草上』への寄稿である。同誌は俳人・伊東月草が主宰したもので、1937年に北村が新京に移るまで、彼の随筆を掲載し続けた¹⁰³。もう一つは、「二十日会」のことである。同会は、井伏鱒二宅に通っていた文学青年たちの集まりで、北村のほか、太宰治、今官一、中村地平、伊馬鶴平、久保隆一郎がいた。月1回の集会で、自作を読みあつたり、文芸を論じあつたりしたと言われるが、その会合は、のちに同人雑誌『青い花』発行の母胎となった¹⁰⁴。

3. 大連での記者体験¹⁰⁵

1934年の初め、北村謙次郎には縁談の話が一度あったが、うまくいかなかった。縁談の決裂と就職活動の難航のため、北村はかつて生活した大連に渡ることを考えるようになった。大連は中国語を学ぶには最適だし、そこで就職するのも悪くはないと、彼は考えた¹⁰⁶。

3月31日、北村は大連港に到着、聖徳大街の叔母の家に滞在することになった。しばらく彼は満鉄の中国語の学校¹⁰⁷に通ったり、創作の材料を得るために西崗子（中国人街）あたりをうろうろしたり、金丸精哉などの旧友を訪ねたりして日々を送った。だが、長年にわ

¹⁰² 北村謙次郎「井草の草分け一書斎の壁に挿絵一枚 井伏鱒二①」、戦後の随筆で、「文人今昔」というシリーズ名で発表され、初出誌不明である。

¹⁰³ 1933年3月1日から1936年12月1日まで、北村謙次郎は『草上』で随筆を25篇発表した。

¹⁰⁴ 久保喬『太宰治の青春像』朝日書林、1993年6月19日、81頁。

¹⁰⁵ この部分は、北村謙次郎の1934年2月から1935年7月までの日記による。詳細は本稿第2章第4節を参照されたい。

¹⁰⁶ 1934年3月の日記による。

¹⁰⁷ 北村謙次郎「支那語序説」、『協和』121号、1934年5月1日。

たる飲酒のせい、彼の健康状態は次第に変調をきたし、胃腸の病でほぼ毎日、医院に通うはめになった¹⁰⁸。

「大連に来るべきではなかった」と後悔し始めた北村だったが、就職のために佐藤應次郎（満鉄社員）を訪れたり、新聞への求人広告に気を配ったりしていた。7月初め、北村は満洲日報社の社員募集の記事を見た。慌しく準備していたようだが、1日目は筆記試験、4日後の口頭試問、結局、応募者100人のうち10数人を採用するという就職試験に北村は失敗した¹⁰⁹。彼はますます大連の生活に嫌気をさし、9月に帰京すべく計画を立てるようになった¹¹⁰。しかし、8月下旬頃、満洲日報社の米野豊美から、『満日年鑑』の編集を手伝わないかと声がかかった。彼にとって初めての就職であった。

『満日年鑑』の編集において、北村は「水産業」と「林業」の部分執筆を担当した¹¹¹。就職した当初は多少の興奮も覚えたが、すぐ、縛られたことに嫌悪を抱き始める。それにしても、編集作業が終わるまで勤めは続いた。

この時期の北村は、よく大連図書館から本を借りていた。館員の大谷健夫（ペンネーム大谷武男）とも親しくなっていた¹¹²。大谷は文芸雑誌『作文』の同人で、大連で出版されていた諸雑誌に文芸評論をよく書いていた。北村は文学活動にあまり積極的ではなかったが、文学的雰囲気求めてか、大連図書館で行われる文学同好者の集まりに顔を出すこともあった。青木実を中心に、安達義信、落合郁郎、町原幸二、小杉茂樹、城小碓、高尾憲太郎、大内隆雄、吉野治夫などが集まっていたという¹¹³。秋原勝二の証言¹¹⁴によると、北村は『作文』同人の竹内正一の案内で同誌の会合に参加したこともあったが、同人になる気はなかったようだ。大連に滞在した1年3カ月の間、北村は相変わらず原稿を東京の『草上』に送っていたが、満洲の雑誌にも小説と随筆をいくつか発表した。

その頃、日本の友人から新雑誌創刊の話が北村のもとに届いた。それは太宰治を中心とする『青い花』であった。同誌は1934年12月に創刊された。北村も同人に加わり、「われを失ふ」という随筆を寄稿した。1934年3月に大連に渡る前後のことを題材にしたもので、慌しい日常生活の中で、失った自分を取り戻そうとする彼の姿を窺うことができる。この雑誌は1号きりしか出されず、会費も原稿も集まらなかったため、次号から『日本浪漫派』に合流することになった。そして、木山捷平からのハガキでこのことを了解した北村も、他の同人と共に『日本浪漫派』に加盟することになった¹¹⁵。

¹⁰⁸ 1934年4月から1935年7月までの日記による。

¹⁰⁹ 1934年7月17日の日記による。

¹¹⁰ 1934年8月5日の日記による。

¹¹¹ 1934年9月4日の北村謙次郎の日記による。

¹¹² 1934年5月から8月までの大連滞在中の日記には、大谷健夫の名前が頻繁に出てくる。例えば、5月18日、5月28日、6月6日、6月26日、6月28日、7月13日、7月24日など。

¹¹³ 竹内正一「『線』と当時の人々（下）」、『作文』第87集、作文社、1972年5月1日。

¹¹⁴ 2012年、逗子市公民館における秋原勝二氏へのインタビューによる。

¹¹⁵ 北村謙次郎の1935年3月17日の日記による。

1934年12月、北村が手伝った『満日年鑑』が完成した。ほぼ同じ頃、彼は叔母の家を出て、自分一人の間借り生活を始めた¹¹⁶。満洲日報社の仕事も、『満日年鑑』の編集からラジオコラムの編集に変わったが、のちに学芸記者として家庭欄の取材を担当する¹¹⁷ことになった。当時の同僚には、吉野治夫と横澤宏がいた。吉野は1909年に大連に生まれた。大連一中を卒業後、鹿児島第七高等学校を経て、早稲田大学仏文科に進学した。卒業後、彼は満洲日報社に入社し、まもなく長篇小説「海と空と」を『満洲日報』に連載し、大連文壇の注目を集めた。横澤は満洲で文名を揚げた詩人で、詩誌『亜』と『満洲詩人』に関わりながら、東京の詩誌『未踏路』にも寄稿したことがある。また1942年、仕事の関係で張家口に赴任し、『蒙疆文学』の同人に加入した¹¹⁸。

一方、多忙な取材生活の中、彼はある女性のことが気になるようになった。伏見台図書館に勤める女性だったが、その縁談は、彼女の親から「新聞記者なんてとんでもない」という理由で断られた。縁談に失敗したこともあって、彼は大連を離れることを考えるようになった。1935年7月、満洲日報社は大連新聞と合併するため改組され¹¹⁹、北村は、その社内の部署変動に不満を感じ、ついに同社を辞することとなった¹²⁰。

4. 『日本浪漫派』時代

1935年7月、北村謙次郎は日本に帰った。帰京早々、彼は『俳諧新辞典』（太陽堂、1939）の項目執筆に取り組み始める。その仕事は、俳人の伊東月草から紹介されたものであった。それ以降、翌年10月に初校が出るまで、北村は版元の太陽堂からの原稿催促に追われながら、連日、書齋に閉じこもりきりだった¹²¹。

その頃、北村の文壇活動は、伊東月草宅に通うほか、たまに『日本浪漫派』の同人会に参加するだけであった。1935年の同人会で、北村は初めて檀一雄に出会った。3、40人の集まりの中で、各自それぞれの居場所を見つけたようであったが、北村だけは、いつもの太宰治のグループに素直に入れなくなっていた。山岸外史、檀一雄、太宰治の3人組を見ながら、彼は孤独感に襲われた。そのゆえ、彼はついに『日本浪漫派』に対する帰属意識を持つことができなかった。『日本浪漫派』時代、「同人費というのも、あまり払っていなかったの、亀井君からよく催促状が来ましたが、同人費を払うというのは素人じ

¹¹⁶ 1934年12月の日記による。

¹¹⁷ 北村謙次郎「横澤宏氏のこと」、『満洲芸文通信』2巻6号、1943年8月15日。

¹¹⁸ 同上。

¹¹⁹ 田中総一郎『満洲の新聞と通信』満洲弘報協会、1940年10月1日、70頁。

¹²⁰ 北村謙次郎「青い花の頃 中村地平のことなど」、『文芸たかだ』74号、1971年7月25日。また、『木山捷平の生涯』（栗谷川虹、筑摩書房、1995年3月17日、190頁）によると、北村はすでに1935年7月7日という時点で満洲日報社を辞めたことを木山に伝えた。

¹²¹ 当時の気持ちが日記の所々に記されている。特に詳しいのは1936年5月28日の日記である。

ゃないか、などと偉そうなことをいってみたりしました」¹²²というようなこともあった。

1936年11月7日、太宰治の処女出版『晩年』（砂子屋書房）の出版記念会が上野精養軒で開かれた。『晩年』は太宰が遺書のつもりで書き、檀一雄のところに原稿を預けたものであった。檀はそれを砂子屋書房から出版できるよう努めた¹²³。北村は、外村繁、古谷綱武、緑川貢、佐藤春夫、太宰治、木山捷平、今官一、山岸外史、丹羽文雄、浅見淵、保田與重郎、亀井勝一郎、檀一雄らと共に、この記念会に出席している¹²⁴。その日の日記からは、北村が文壇出世に焦っている気持ちを読み取ることができる。

一方、辞典の執筆は北村が思っていた以上に難行したようだが、いくらかは彼の経済生活を支えてくれたし、なんとか落ち着いた創作環境を与えてもくれた。北村の創作活動はここで初めてのピークを迎える。この2年間、『草上』に発表した随筆といい、『日本浪漫派』に発表した創作といい、いずれも完成度が高く、ストーリーも創作技法も言葉遣いも相当工夫されたものであった。例えば、旅順をモデルにした植民地都市に生活する青年ジョージの日々を描いた「旅情の歌」、大連で発生した「医博児玉誠邸殺人事件」を素材に創作した心理小説「贅沢な囚人」、太宰治に褒められた、療養生活をテーマとする小説「終日」、植民地大連における「私」の交友を記録した「蝶蝶」など、いずれも北村の創作歴において見逃せないものである。

しかし、辞典の仕事が終るとともに、北村は再び就職問題に迫られた。さらには、日本文壇での評価にもの足りない寂しさもあって、彼の視線は再び満洲に向けられたのだった。

第4節 満洲国に渡る

1. 満映に就職

1937年7月、33歳の北村謙次郎は、大連一中の同級生¹²⁵、山内友一に出会った。山内は、満洲国協和会を代表して、満洲に映画会社を設立するための満洲映画国策研究会¹²⁶に参画した人である。山内は北村に満洲映画協会が社員を募集していることを教えた。それを聞いた北村は、日本での就職の難しさと文壇における孤立感に促され、ついに満洲国での再出発を考えるようになった。特に日本においては、満洲事変以降、政府の言論統制も次第に厳しくなり、自由に創作できる環境も狭められてきていた。こうして、北村は満洲国に新

¹²² 北村謙次郎ほか3名「座談会 伊藤佐喜雄を偲ぶ」、『日本浪漫派とはなにか』（雄松堂書店、1971年10月19日）。

¹²³ 野原一夫『新潮日本文学アルバム 36 檀一雄』、1986年4月25日、25頁。

¹²⁴ 同上、24頁。

¹²⁵ 注84。

¹²⁶ 満洲映画国策研究会、1933年9月成立され、「映画の普及利用により満洲国文化の向上発展を期するため、映画国策としての統制、検閲、製作、利用ならびに映画に関する一切の事項について研究を行う」ことを目的としていた。（満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年1月30日、1149頁。）

たな可能性を求めることになった。

1937年の夏ごろ、北村は満洲国の首都・新京の人となった。当初、彼が直面した生活上の問題は新京の住宅難であった。差し当たっては、ダイヤ街に住む親戚の佐藤逸兵の家に身を寄せる。佐藤は北村の従姉・元の夫で、満洲で簡易ラジエーター（温水暖房）の施行を請負う会社を経営していた¹²⁷。1932年頃、北村は水道パイプの営業に奔走する男を主人公にした小説「青葉を揺る風」¹²⁸を書いたが、これは佐藤から取材したものと思われる。佐藤家には工事関係者が多く住みこみ、夜遅くまで酒を飲んだりして、騒がしかった。それを考慮して、元は北村に転居を勧めた¹²⁹。ほぼ同じ頃、北村は満映（満洲映画協会）の面接試験を受けて合格、同社の配給部に入った。このあたりの経緯については、戦後の彼の中篇小説「浪漫の頃」¹³⁰に描かれている。

その後間もなく、北村は新発路附近の宿に転居し、満映に通う日々が始まった。満映の本社は中央大街のニッケビル2階にあったが、毎朝、その1階にある喫茶店「ニッケ・ギャラリー」でコーヒーを飲んで職場に向かう彼は、東京と変わらぬ落ち着いた暮らしぶりを楽しむことができた¹³¹。しかし、気にいった住まいを見つけるのは容易ではない。南京虫が多かったため、彼はその宿には2カ月しか滞在していない。「花葩」¹³²は、その時に同じ宿に泊まった日本人少女をモデルとした創作である。秋ごろ、北村は崇智路の奥にある小さな下宿に引っ越した。そのあたりは、閑静な日本人住宅街がつづき、樹木の多い庭などもあって、日本人には魅力的だった。北村の後、同じく満映社員の佐々木勝造も引っ越してきた¹³³。

『大新京日報』の今井一郎と親しくなったのもその時期である。今井は画家であるが、『大新京日報』の文化部長でもあった。彼は同紙の文化欄に小説の枠を設け、北村謙次郎、冬木羊二、長谷川濤などの作家に執筆を勧めた¹³⁴。「きみ、とにかく書くことだよ。書いている奴がけつきよく勝つよ」¹³⁵という一言は、北村にとって大きな励ましとなった。今井部長の勧めで、北村は小説「鶴」を書き始めた。大連の日本人少女の成長物語であるが、全体はリアリズムを基調としながらも、ラストシーンでは、少女が鶴に化身して飛び去っていくという幻想性を帯び、彼のロマンチズム的傾向が発揮された一篇であった。この作品は1938年4月30日から全21回にわたって『大新京日報』に連載されたもので、挿絵は今井一郎が担当し、北村の初めての新聞小説となる。弘報処の岡田益吉からも好評を得たと

¹²⁷ 注84、6頁。

¹²⁸ 「青葉を揺る風」、『小説・エッセイ』、朝日書房、1932年12月25日、191-202頁。

¹²⁹ 同上。

¹³⁰ 「浪漫の頃」は『索通信』に2013年から2014年まで3回にわたって連載された。同誌の主宰者は満洲の詩人坂井艶司と作家横田文子の次男・坂井信夫である。

¹³¹ 注84、16-17頁。

¹³² 北村謙次郎「花葩」、『新天地』9月号、1937年9月1日。

¹³³ 注84、7-8頁。

¹³⁴ 注84、7-8頁。

¹³⁵ 注84、8頁。

いう¹³⁶。岡田益吉はフランス文学者の岡田真吉の兄で、同じく弘報処勤務の長谷川濬、木崎龍、磯部秀見らと関係が深い人物である。

また、誤って黄瀛の訃報を聞き、その追悼文を『大新京日報』に発表した¹³⁷のもこの時期のことである。黄瀛は北村が『文芸プランニング』を刊行していた頃の友人で、北村が満洲国に渡った時、彼は南京で軍人として戦争に参加したという。その後、訃報が誤っていたことが判明したが、北村の黄瀛に対する思いをそこから窺い知ることができよう。

1938年5月、北村は新発路の宝山百貨店の裏手に新築された栄ビルというアパートへ転居した。このアパートには、特殊会社の日本人社員が多く住んでいたが、満映管理部の斡旋で、満映の社員も住むようになった。松本光庸、佐々木勝造、荒牧芳郎らが北村の隣人となっている。建具や畳は全部新しく、ラジエーターも完備していたので、北村はようやく落ち着いた日々を送ることができるようになった¹³⁸。

それまでの1年近くの新京生活において、北村はほぼ毎月、満洲文話会の例会に参加していた。文話会は1937年6月、大連で創立された文化団体である。満洲各地の日本文化人を結集し、新京や奉天にも支部を設けられた。北村が出席したのは、新京支部（のち本部に昇格）の例会であった。事務局は大同大街に面した大興ビルの地階にあり、上階には満日文化協会が陣取っていた。ビルの真正面は憲兵司令部で、通り一つ隔てて関東軍司令部があった¹³⁹。満洲国の文化活動も、北村たちの文学運動も、このように関東軍司令部や憲兵司令部のお膝元で、その威令のもとに展開することになったのである。

満洲の日本文化人は、その多くが満洲国の文化事業に関わっていた。満洲文話会会員の多くもまた、それらの文化機関に勤める人たちであった。例えば、1937年秋ごろの新京支部の例会では、3分の1ぐらいが満映関係者であった。そのため、満映のことがしばしば文話会の話題になった。例えば、満映ではどのような映画を制作すべきかといったような内容であったが、北村が新聞でそのことを書くと、直ちに上司の亀谷利一課長に注意された¹⁴⁰。

北村が徐々に新京の暮らしに馴れてきた頃、横田文子が渡満してきた¹⁴¹。北村の誘いもあってということだが、彼女のデカダンス文学が東京で行き詰まりを見たことも渡満の一因だったようだ。新京駅で彼女を迎えた『日本浪漫派』の同人緑川貢は、横田文子を旅館まで案内し、北村の住所を教えてから仕事に向かった。その後、横田は一人で栄ビルの北村のアパートを訪ねた。二人の初対面であった。北村は、横田から就職相談を受けた後、隣室の佐々木勝造を呼んで、3人は深夜まで酒を酌み交わした¹⁴²。2週間も経たないうちに、

¹³⁶ 注 84、11 頁。

¹³⁷ 注 130、9 頁

¹³⁸ 注 84、15-16 頁。

¹³⁹ 注 84、1 頁。

¹⁴⁰ 注 84、4 頁。

¹⁴¹ 横田文子の渡満は 1938 年 6 月のことである。東栄蔵編著『横田文子 人と作品』、信濃毎日新聞社、1993 年 8 月 1 日、387 頁。

¹⁴² 注 84、23-24 頁。

横田文子は、望月百合子の仲介もあって大新京日報社に就職することができた¹⁴³。以来、彼女は大連から新京に移ってきた坂井艶司と結婚するまで、北村と親交があった。

1938年8月、北村謙次郎は東京に出張した。帰ってみると、彼の満映での所属先が配給部から宣伝部が変わっていて、それもまもなく制作部に移されることになった。制作部における仕事はシナリオを書くことで、これは彼にはうってつけであった。ほぼ同じ頃、新京郊外の寛城子に、俳優宿舍とスタジオが出来上がった。北村の勤めた制作部の脚本室もその近くにあった。一帯はエキゾチシズムの漂うロシア人町で、日本人にとっては異常な魅力が感じられた。満映の坪井與、矢原礼三郎らがいち早くそこに住むようになった¹⁴⁴。北村も心を惹かれるところがあり、矢原に連れられて寛城子を見学した。その時彼は、彼の文学人生で重要なモメントとなる二つのことを決定した。一つは、寛城子に転居すること。もう一つは、文芸雑誌『満洲浪漫』を創刊すること。寛城子は、白系ロシア人、漢民族、日本人が雑居する街であった。結局、北村はそこに10年近く住むことになり、その場所から満洲の風土・生活をじっくりと観察し続けたのだ。いわば寛城子は、満洲における北村文学の拠点だと言っても過言ではない。また、『満洲浪漫』は新京の文化状況に応じて生まれたもので、満洲の日本人文芸の実態をよく反映するものとなった。それゆえ、同誌は北村の文学的記念碑としてだけでなく、満洲における日本語文学の歴史においても、『作文』と並び最も重要な位置を占めることとなる。

新京の住宅難は、満洲国建国後、急激に厳しくなってきた。ここに移住してきた日本人の中には、寛城子を一時の仮住まいの場とし、新京市内の住宅の空きを待つものが少なくなかった。市内から寛城子に移ろうとした北村は、会社の同僚たちに頼んで、ようやくロシア人の長屋の一間を探し出すことができた。新居は満映スタジオにも遠からず、彼は家から歩いて、ロシア人家屋を改造した事務所（脚本室）に通い、シナリオ執筆に専念することになった。

一方、『満洲浪漫』の発行準備は北村謙次郎の予想より順調に進んだ。矢原をはじめ、多くの在満日本人の賛同を得たほか、満日文化協会からの協力も得ることができた。北村は弘報社の木崎龍と共に満日文化協会の杉村勇造に支援を願った。杉村は出版経費のみならず、印刷所の手配まで力を貸してくれたので、北村は編集事務だけに取り組めばよかった¹⁴⁵。しかし、原稿料を払うことは出来ないのも、ただちに優れた作品を集めるのは極めて困難であった。そこで、北村は窮余の策として、創刊号の小説欄は再録作品で埋めることに決めた。当時の満洲国には、日本語の文芸雑誌が存在しなかったため、『満洲浪漫』の創刊は、この地の読書人の渇きを癒すことになった。

横田文子の小説「白日の書」はちょうどその時、北村の興味を惹いた。「白日の書」は横

¹⁴³ 同上。

¹⁴⁴ 注84、21-22頁。

¹⁴⁵ 注84、64-67頁。

田が1936年に日本の雑誌に発表したもので、芥川文学賞第3回の候補にも挙がっていた¹⁴⁶。北村はその評判を聞き、彼女と相談の上、それを『満洲浪漫』創刊号に再録したのだった。しかし、第2輯で、北村はその「白日の書」を批判している。彼は、横田文子の文才を認めた上で、自分のことをそのまま書く彼女の姿勢を「安易なもの」として退ける。芸術はもっと生活の中に深く入っていくべきだと、彼は言う。その主張は戦後まで変わることがなく、横田文子はその作品を再刊することに反対したのだった。第2輯以降、『満洲浪漫』に掲載する作品はほとんど満洲で創作されたものに限られるようになった。

『満洲浪漫』創刊号の発行は1938年10月27日だった。この日、満洲旅行中の林房雄と小林秀雄が新京を訪れ、満鉄クラブで講演会が催された。演題は、前者が「無題」、後者が「歴史について」であった。夜、南広場に近い厚徳福飯店で二人の歓迎会を兼ね、『満洲浪漫』の創刊記念会が開かれた。出席者は、4、50人ぐらい。全員に『満洲浪漫』が1冊ずつ寄贈された。杉村勇造は次のように挨拶した。「こうして出来上がりの本を眺めますと、表紙といい内容といい、どこからどこまであまり出来がよくないので、すっかり失望しました。ざっと覗きましたところがこの調子ですから、よく読んだら、さぞかし失望落胆することだろうと、情ない気がいたします。と云うのは実はウソで、こうして眺め返してみると外観内容ともに、たいへん立派に出来たようで」¹⁴⁷といった調子だった。大勢の人たちが、助言や忠告、悪口を披露し、会場はにぎわった。酔っ払った長谷川濬が小林を捕まえ「跋文がいいでしょう」と手前味噌を並べると、小林は言下に跋文の中の一節「茫然としてとらえがたい」と、手ひどく応酬してみせた。

横田文子のスピーチが始まったとたん、林房雄が、「低くて見えないぞ、椅子に上がれ」と言って、小柄な横田の両脚を抱えて持ち上げた。林は顔を真っ赤にして、「諸君、彼女は満洲のジョルジュ・サンドですぞ、敬意を表したまえ」¹⁴⁸……。

創刊記念会が終わったあと、北村が扇芳亭グリルで飲み直していたところ、矢原礼三郎が、体格のがっちりした協和服の壮漢を連れてきた。

「知っているでしょう、逸見猶吉です」¹⁴⁹。

「え？だれ？」と聞き返すと、矢原はますます咳き込んで、「知らないの？ ほら、有名な逸見猶吉ですよ」¹⁵⁰。

その頃、逸見は東京に本社を置く日蘇通信社の社員で、雑誌『月刊ロシヤ』に記事を送っていた。それ以後、逸見は北村のよき酒友となった。

1938年の大きな出来事といえば、北村にとっての結婚問題であった。見合いの相手に選ばれたのは西村千枝、彼より4歳年下の文学少女タイプの女性であった。師範学校を出て小学校の教員になっていて、優しくて穏やかな性格の人であった。西村家の長女に生まれ、

¹⁴⁶ 注 141、382 頁。

¹⁴⁷ 注 84、72 - 73 頁。

¹⁴⁸ 同上。

¹⁴⁹ 同上。

¹⁵⁰ 同 84、73-75 頁。

父親が早く病死したため、母親の努力で弟妹と共に学校に通うことができた。女学校では裁縫や算盤が得意だったという。夏の頃、北村は満映から休みを取って東京に帰った。慌しいスケジュールの中で、彼は伊東月草も招いて結婚式を行った。式が終わった後、北村は千枝を連れて新京に戻った¹⁵¹。

『満洲浪漫』第2輯の編集は、同人の長谷川濬に任せられたが、それ以降の号はすべて北村が担当した。原稿依頼から印刷所との交渉、校正など、煩わしい事務一切、彼一人の手でやっていた。誤植がほとんど見られないことから、北村のまじめな態度が窺えるだろう。そのようにして、『満洲浪漫』第3輯、第4輯も多少発行日の遅れは生じたものの、ほぼ予定通り刊行された。

1939年は北村にとって極めて充実した1年間だった。彼の発表した作品は30篇を超えていた（後掲「著作目録」を参照）。『満洲浪漫』、『満洲行政』、『満洲新聞』、『警友』、『満洲グラフ』、『協和』、『満蒙』など、その発表舞台も様々な雑誌に広がっていった。内容は、小説、随筆、文芸評論などであったが、なかでも文芸評論の執筆が一番多かった。そのほか、彼の満洲時代の代表作となった短篇連作「或る環境」も、この年に、その第1作目が発表された。また、彼の政治的な傾向を見せた「愛は輝く」¹⁵²という短篇がある。発表誌『警友』は満洲国の警察官家族を読者対象とした雑誌である。奉天の慰霊祭に参列に行く途中の中年婦人が列車の中で、満洲国建国の際に戦死した一青年の話のある少佐に語った。その少佐は感動し、自分も慰霊祭に参列することにしたという筋書である。一種の建国美談である。一問一答式の会話体と分かりやすい言葉の組み合わせは、この小説に説教くさいイメージを強く与えている。

2. 職業作家の道に入る

1940年に入ると、満洲国政府は文化関連の機関や団体に対する干渉と統制に取りかかり始めた。そのことは、満洲文話会の動向にも顕著に現われている。もともと文話会は在満文化人の親睦団体として自発的に作られたものであった。研究発表会・座談会・講演会の開催、作品出版の援助などの活動が会規に掲げられていた。しかし、会の運営は会費と有志の醸金だけに頼っていたので、日常の活動を支える費用の捻出にはいつも苦慮していた。だが、1939年以降、文話会は満洲国民生部から援助を得るようになった。最初は1000円の出版助成金であったが、1940年になると、補助金が8000円にもものぼった。本格的な文化統制はまだ始まっていなかったが、政府からの干渉は徐々に強められている。

1940年6月30日、民生部の主催で開かれた文話会の「康德七年度定期総会」では、会の創立目的であった「本会ハ満洲ニ文化文芸ニ関心アル会員相互ノ連絡親睦ヲ図リ満洲ニオ

¹⁵¹ 北村謙次郎「この一年 その二」、『文芸復興』第71号、1982年5月20日、3頁。

¹⁵² 北村謙次郎「愛は輝く」、『警友』第3巻第1号（通号21号）、1939年6月1日。

ケル文化活動ノ助成促進ヲ目的トス」¹⁵³から「本会ハ滿洲ニ於ケル文化ノ普及発達ヲ図リテ以テ目的トス」¹⁵⁴といった風に改められ、文話会と政府の接近が図られた。

このように、政府からの干渉が徐々に強まっていくなか、北村の姿勢に二つの変化が見られるようになる。一つは、滿洲映画協会を辞職して職業作家となること。もう一つは、『滿洲浪漫』の停刊を考えるに到ったこと。そのどちらも、政府への抵抗でなかったにせよ、その圧力から身をかかわそうとするものだったとは言えよう。

職業作家になることは北村が滿洲国に渡ってきて以来ずっと望んでいたことであった。しかし、1937年頃の滿洲国では、そのような文化環境はまだ熟していなかった。文芸関連の出版社は存在していなかったし、文筆で生計を立てるなど、まったく不可能な事であった。幸い滿洲映画協会の仕事では、ある程度、自分の時間を持つことができたし、シナリオを書くことも自身の創作活動と乖離してはいなかった。

しかし、その後数年も経たないうちに、滿洲国の文化状況は大きく変わった。出版界も成長しつつあった¹⁵⁵。そういった情勢を感じて、北村は、筆一本で生活を支える自信もわいてきて、滿映を辞職しようと思いを固めたのだった。

ところで、北村の収入はどのくらいだったのだろう。1938年当時、滿映での彼の月給は130円～140円ぐらいだったという。月に130円あれば、新京ではどうにか生活が成り立った¹⁵⁶。『大新京日報』の原稿料は、400字詰め原稿用紙1枚が5、60銭だった¹⁵⁷。北村の「鶴」の場合、同紙に全21回の連載だった。連載1回分が原稿用紙3枚である。原稿用紙1枚50銭で計算すると、1回分の原稿料は1円50銭、21回分では31円50銭にすぎない。これでは、生活を支えていくことはできない。時代が少し経て1941年のこと、『滿洲日日新聞』の企画によって、来滿中の川端康成を囲む座談会が催された時、滿洲出版界における原稿料の問題が話題となった¹⁵⁸。『満日』の記者だった筒井俊一の発言によると、滿洲でもっとも原稿料が高いのは滿鉄で出していた『滿洲グラフ』で1枚が3円だった。『満日』では1枚が2円。ほかの雑誌でも平均2円くらいは出しているという。その頃、北村はすでに家族持ちだったわけだから、月に200円程度の生活費が必要だったのではあるまいか。そのためには、月に100枚くらいは執筆しなければならない。月に100枚を書くのは、彼にとってそれほどの苦行ではなかったかもしれないし、そうであれば、どうにか暮らしを維持できたことになる。ただし、原稿の依頼が途切れなく続いた場合のことである。

『滿洲浪漫』の停刊以降、北村謙次郎の文学活動は二つの側面を見せることになった。一つは、「建国小説」といった類の国策に順応するような作品である。それを代表するのが、

¹⁵³ 「滿洲文話会々規」、『滿洲文芸年鑑』、滿蒙評論社、1938年12月15日、457頁。

¹⁵⁴ 『滿洲文話会通信』第35号、滿洲文話会、1940年7月。

¹⁵⁵ 注84、45頁。

¹⁵⁶ 注84、13頁

¹⁵⁷ 同上。

¹⁵⁸ 「川端康成氏を囲んで」（『滿洲日日新聞』1941年4月13日）。この座談会には川端、筒井の他、北村謙次郎、檀一雄、爵青、緑川貢などが出席した。

満洲建国十周年を記念するために書かれた長篇小説「春聯」である。『満洲日日新聞』に全95回にわたって掲載されたもので、北村の生活には相当な助けになっただろう。もう一つは、彼の精神内面の自由を大切にした創作である。それを代表するのが「或る環境」シリーズである。この小説は1939年から書き始められ、1941年まで断続的に雑誌に発表された。

1940年12月、北村は『満洲日日新聞』の記者筒井俊一と共にハルビンの馬家溝に住むバイコフを訪問した。そのときのバイコフと北村の対談記事は、1941年1月1日の『満洲日日新聞』に、第6面の半頁ぐらいの紙面を占めて掲載された。そして間もなく、同月21日から、同紙朝刊第1面に、北村の「春聯」の連載が開始されたのだ。

前年に『三田文学』の編集長和木清三郎が満洲を訪れたことをきっかけに、1941年1月、同誌では「満洲新人作家特輯」が組まれた¹⁵⁹。その中に、満洲文話会の会員を中心に、青木実、北尾洋三、晶埜ふみなど満洲日本人作家の小説のみならず、大内隆雄訳で満系作家の也麗と小松の作品も収録された。北村謙次郎は「満洲文芸界小記」を発表した。この文章で彼は、日本人作家を中心に満洲文壇の現状を紹介し、内地作家の関心と協力を呼びかける一方、満洲日本人作家が建国の大義に対する自覚を持ち、建国の理想に進むものであることを肯定した。また、同誌の2月号は、前月号の続きとして満洲文学の小特集を組み、北村の「砧」を載せた。このように、北村は満洲にいる間も、日本文壇との関係を親しく保っていた。

1941年の3月、総務庁弘報処から「芸文指導要綱」が発表された。それにより、満洲の芸術文化は全て「芸文」という言葉に統合され、「(満洲)国の産業経済の発展に比べ芸文活動の立遅れ」が指摘され、「政府が積極的に乗り出してこれを指導育成せんとするもの」といった主旨のもと、満洲国の文化団体の統制が宣言された¹⁶⁰。

一方、満洲国の唯一の職業作家になったことは、北村に孤立感をもたらすこともあった。自分の選んだ道が間違っていないかと心細くなった彼は、先輩らの助言を求めた。そこで彼が訪ねたのは、たまたま満洲旅行に来ていた菊池寛である。新京ヤマトホテルの廊下の片隅に腰をかけて、菊池は気安く「ぼくらの友人を見ている、食つて行く途のついている人たちは、だんだん創作しないようになって行つたね」¹⁶¹と答えた。後年の北村は、片足を折り曲げて椅子の端に載せかけている菊池の姿を忘れていない。

菊池の軽率な態度と対照的だったのは、川端康成であった。1941年4月、満洲日日新聞社と満洲棋院の共催で「全満素人囲碁選手権大会」が実現した。呉清源をはじめ、川端康成、村松梢風などが、満洲日日新聞社によってこの催しに招待された。その後、川端は、20日間をかけて満洲の日本文化人と座談会を行ったり、囲碁を観戦したりして、満洲各地を旅した¹⁶²。その時、川端は旧知の北村謙次郎を寛城子を訪ね、彼の生活ぶりに興味を覚え、

¹⁵⁹ 無署名「編輯後記」、『三田文学』16巻1号、1941年1月1日。

¹⁶⁰ 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年1月30日、1140頁。

¹⁶¹ 菊池寛の言葉、北村謙次郎『北辺慕情記』(大学書房、1960年)46-47頁による。

¹⁶² 川端康成「自作年譜」、『川端康成全集 第三十三巻』、新潮社、1982年5月20日、679

また、『満洲日日新聞』に連載中の「春聯」に注目した。それをきっかけに、「春聯」はその後、新潮社から出版され、劇場でも公演されることになった。

1941年5月、妻の出産のため、北村は彼女を東京まで送った後、一人で新京に戻った。ちょうどその頃、彼は一匡街の長屋から三輔街の中村アパートに引っ越し¹⁶³、満洲旅行中の中谷孝雄、浅見淵に会ったり、一緒に酒を飲んだりした。

1941年7月、北村は、満洲日日新聞社の記者筒井俊一から、『春聯』の東京での出版が決まったという知らせを受けた。それから間もなく、満洲文芸家協会設立の報がもたらされた。委員長は山田清三郎である。北村をはじめ、満洲の多くの文学者が会員に名を列ねることとなった。¹⁶⁴この頃になると、弘報処による文化統制が、さらに一段と強化されていくことになったわけである。

10月、北村は長女・康枝を得た。12月、彼は庭の手入れ中、右脚を骨折した。年が明けると早々、彼は療養のため東京に戻った。高齢にもかかわらず母ミヨはわざわざ神戸まで彼を出迎えに行った。東京大学附属病院への入院と、温泉場での治療によって傷が完治するまでには3、4カ月かかった。この間、対英米戦争が勃発している。

1942年3月、戦前の彼の唯一の長篇小説である『春聯』は、「建国十年間の満洲文学のおそらく最高の収穫だ」¹⁶⁵という言葉添えて、新潮社から出版された。また、5月には、この小説は「ハイラルの曙」というタイトルで東京宝塚劇場（東宝）で劇化・公演された。北村はこの劇化のためわざわざ劇場まで足を運んだようであったが、原作の、新京における副主人公の物語部分は取り除かれ、ハイラルを舞台にした「蘇炳文事件」だけがドラマ化された点には不満を覚えたに違いない。

1942年5月、日本文学報国会が日本で発足し、6月に発会式が行われた。報国会には3000人以上の文学者が入会し、小説、詩歌、評論、国文学、外国文学などの専門部門に分かれて活動することになった。初めは入会をためらった者も、のちには作品発表の場を失うことを恐れて加わったので、会員であることが文学者の資格であるような観を呈した。北村も入会した。6月、北村が満洲に帰る前、井伏鱒二、亀井勝一郎、太宰治、木山捷平、小田嶽夫など10人ぐらいが集まって、彼のために送別会を開いてくれた。

1942年7月頃、北村謙次郎は大学書房の社長・石見栄吉に進められ、錦県の綏中佐渡開拓団を訪ねた。石見は佐渡の出身で、郷土の開拓団の入植に私財を投じたという¹⁶⁶。北村とは『満洲浪漫』を刊行した頃からの知人で、戦後の北村の随筆集『北辺慕情記』の出版も引き受けている。北村の綏中佐渡開拓団への訪問記は、8月頃に『満洲新聞』に発表された。

1942年9月、北村は再び旅に出た。新京からハルビン、そしてジャラントン、チチハル、サルト（薩爾圖）、安達といったコースで、冬地で開拓団の生活ぶりを観察した。ハルビ

頁。

¹⁶³ 注 84、205 頁。

¹⁶⁴ 注 84、197-202 頁。

¹⁶⁵ 川端康成「序」、『春聯』、1942年3月12日、2頁。

¹⁶⁶ 注 84、219-220 頁。

ンに寄った時、北村は詩人・岩本修蔵の案内で上脇進の勤務先を訪ねている。上脇は満洲電電の社員で、ロシア語が達者なため、ロシアからの電報などの翻訳業務に従っていたらしく、北村には、上脇が一種「秘密」な仕事についているように見えた¹⁶⁷。

しかし、創作においては、1942年にはこれといった作品が少なくなり、旧作をタイトルのみ変えて再発表したこともある。例えば短篇「菊の宿」¹⁶⁸はかつて『草上』に「菊の宿の客たち」¹⁶⁹というタイトルで発表されたものであった。数年前と違って、創作上のモチーフが弱まり、主題の積極性というものが稀薄になってきたように思われる。しかし、他の多くの文学者とは異なり、血眼になって戦争に翼賛する姿勢からも遠かった。

1943年、北村の身边には多くの変動があった。1月16日、北村の親友木崎龍が大連病院で亡くなった。その悲しみを背負って、北村の執筆はあまり捗らなかったようだ。年初には、「北辺羈旅小品」と「木崎龍の評論断片」を書いたが、4、5月頃、かつて執筆した作品を整理して、随筆・評論集『月牙』、短篇小説集『帰心』を出版することができた。両著とも満洲国内の出版社から上梓された。そのほか、「牧場にて」、「天長節」などといった随筆もあったが、戦時体制の時勢に流されたものだった。「北辺羈旅小品」は興安牧場や斉齊哈爾（チチハル）天主堂、薩爾圖（サルト）特設農場などを訪ねた時の話で、繊細な描写と彼なりの感性的な情緒が巧みに織りなされていて、紀行文としては秀逸といえるものであった。ただ、作者の感情の中に、勤労奉仕精神などを賛美する調子が流れ込んでいて、彼の思想が満洲国の国策にかなり傾斜していたことも読み取れる。

1943年8月、小林秀雄の来満をきっかけに、座談会が開かれた。それは「小林秀雄を囲む」というタイトルで、『芸文』8月号に掲載された。北村の発言は特に難解で、満洲に生活している日本人作家の、満洲と日本に対するジレンマを話しながら、小林に答えを求めようとしていた。そこから、北村の在満作家としての悩みをある程度窺うことができる。10月に出版された浅見淵の『満洲文化記』には、「大陸と悠久感」をタイトルのもと、北村との往復書簡が収録されている。そこでは、北村の寂しい心境と、「在満日本人作家」の文学の根なし草的な頼りなさが語られている。

11月10日、北村謙次郎の父・享吉が東京で亡くなった¹⁷⁰。76歳だった。北村は新京から東京に戻って、葬式に参加した¹⁷¹。

12月4、5日、新京において決戦芸文家大会、全国芸文家会議が開かれた。同会は協和会全国連合協議会、大東亜文学者大会の出席参加を決議するほか、戦時増産態勢に応じ、文芸家も鉱工増産現場、開拓団、勤奉隊、軍警部隊などへの現地訪問を行い、報告文学活動をいっそう積極的ならしめる方針を決定した¹⁷²。この年の暮れ、北村は三江省鶴立県を旅し、

¹⁶⁷ 北村謙次郎「きれぎれの思い出」、『人吉文化』36、37合併号、1963年8月30日。

¹⁶⁸ 北村謙次郎「菊の宿」、『女性満洲』第1巻第1号、1942年1月1日。

¹⁶⁹ 北村謙次郎「菊の宿の客たち」、『草上』第6巻第9号、1933年9月1日。

¹⁷⁰ 注9。

¹⁷¹ 栗谷川虹『木山捷平の生涯』、筑摩書房、1995年3月17日、190頁。

¹⁷² 注160。

鶴立県内の開拓団の歴史を書くことになった。

1944年の北村謙次郎は、基本的には、三江省鶴立県で開拓団の歴史を書き続けている身だった。この年の北村の作品は、『満洲公論』2月号に掲載された小説「苦杯」の外は、ほとんど開拓団関連のものである。「苦杯」は発表と同時に、中国人作家の爵青によって中国語に翻訳され、『芸文志』に掲載された。葡萄酒製造人ミハイル老人は1935年の北鉄譲渡によって、経営が悪化したり、友人と離別しなければならなかったりと、その悲しい心境を描いたものだった。老人の、輝ける過去の日々への記憶と現実の激しさを対照しながら語られる1篇の構成は、極めて優れた物語として出色の出来だった。その落ち着いた語調には、ロシア文学に見るような大陸の色あいを帯びている。なお、北村の短篇小説「砧」を収めた『満洲国各民族創作選集 第二巻』と、彼の詩を掲載した絵本『五彩満洲』も、この年に出版されている。

『五彩満洲』は、日本語原文と中国語訳の文章を同頁に並べた、カラーフルな印刷の児童向けの詩集である。出版用紙の使用も制限された時代に、珍しいものと見られるだろう。とりわけ、北村謙次郎、古川賢一郎、逸見猶吉、坂井艶司の執筆陣と、赤羽末吉、関合正明、白崎海紀、甲斐巳八郎、斉藤英一など画家との組み合わせは、満洲文芸界の最高レベルの絵本を作れる勢いを備えていたと言っても過言でもない。同書の「編纂の趣旨」にも、「現在満洲国のもつ、詩と絵の第一人者たちを動員してつくつたのが本書です」¹⁷³と述べられている。同書の中国語訳は山丁と納夫が担当した。当時、山丁はすでに北京に脱出していた¹⁷⁴ことから、同書はだいぶ以前から原稿が用意されていたものの、時局がら、出版が予定より大幅に遅れたのではないかと思われる。

1945年は、北村が鶴立県で「鶴立県開拓十年史」を起草した年である。3月、北村はこの2、3年間の随筆類を『旅信』にまとめ、新京の近沢書房から出版した。その出版記念会が鶴立県で行われ、敗戦直前をめぐる彼の思い出をほのかに明るくさせる一事となった。8月、ソ連軍の満洲侵攻による混乱は鶴立県でも同様だった。彼は家族を心配して直ちに寛城子に帰った。そして、8月15日、白系ロシア人と共に日本敗戦のラジオ放送を聞いた¹⁷⁵。

第5節 敗戦後の生活

1. 引揚げ前後

終戦直後の長春は、「暴徒の蜂起、物価の高騰、生活手段の完全なる喪失、政治情勢の混乱等は凡その邦人を不安と恐怖のどん底に陥し入れた。預貯金の引き出しは殆んど間に合わなかったので、手持ち物資の売喰が始まり、九月中旬頃から簡易な屋台店が目星しい

¹⁷³ 『五彩満洲』、満洲富山書房、1944年12月10日、裏表紙。

¹⁷⁴ 『梁山丁研究資料』、遼寧人民出版社、1998年、11頁。

¹⁷⁵ 注130、「序に代えて」、13頁。

街頭に軒を並べた。汁粉屋、おはぎ屋、一杯屋が圧倒的に多かった¹⁷⁶と記されている。

北村謙次郎一家は当初、寛城子に閉じこもっていたが、のちに長春市内の親戚を頼って、ある通りの腰掛茶屋「稻荷屋」の手伝いをするようになった。文学仲間たちにも、いろいろな動きが見られた。中国共産党の陣営に赴く北尾陽三、国民党に寄る爵青、八路軍の東北進出をまつ古丁、戦後の慌しさは北村の回想録に活写されている。その後、北村は腰掛茶屋から「人文書苑」という本屋に転業し、さらに、『東北導報』という新聞を発行する国府軍系の日刊新聞社で、図書を蒐集する仕事に雇われる。その仕事が終わった時、長春大学講師兼長春学園園長中村彦四郎の口添えで「日連」（「日僑善後連絡所」）の総務課嘱託として長春に留用されることになった。

暇の多い仕事で、北村は、「たいてい朝役所に顔を出すと、まるで郵便局か村役場然とした室内の雰囲気」であったので、彼には耐えられなかった。その時、彼はよく青天画館に通った。そこでは、いつも忙しそうに蒋介石その他の似顔絵を描く濱野正義、高羽敏、赤羽末吉たちと情報を交換したり、昼食を一緒に摂ったりした¹⁷⁷。

満洲在留の日本文化人は中国側の文化機関と結びつきたいと思ったが、中国の複雑な政治・社会情勢の下では一切無理だと諦めたようだ。一方、彼らは「文話会」の復活に力を入れた。1946年8月1日、北村謙次郎をはじめ、望月百合子、大倉しげる、八木橋雄次郎、山口慎一（大内隆雄）、阿南隆、石河潔、松本新一らが集まり、東北導報閲覧室において文話会の最初の会合を開いた。この時、童話の本の出版、会報、名簿作成、事務員選定などについて打ち合わせた¹⁷⁸。8月25日、北村は望月、石河、八木橋、赤羽らと共に、「児童文庫」の発行に着手した。その本は北村たちが引揚げる前に出版された。本の現物は未発見であるが、敗戦日本人が外地にあって出版したものとして貴重なものと言えるだろう。

中国留用の生活は、北村には辛かった。経済の面は言うまでもなく、精神的にも大変だった。留用された日本人は、組織に順応するタイプが多かったようだ。北村という、かつて定職にもつかず、書齋にこもる時間が長かった人間は、同じ日本人同士でも多少疎遠にされがちだったらしい。そのため、北村はかつて日連の怖いおじさんから「いつでもフンじばる用意がある」¹⁷⁹と威嚇されたりしたという。また、戦後の雑誌『満蒙引揚文化人』に掲載された北村謙次郎の「長春消息」には、「あつちこつちで面白くない噂ばかりの中では通りすがりの酒館で傾ける熱い白酒の味ばかりが肺腑を温めてくれる感じだつた」¹⁸⁰と書かれている。

『満蒙引揚文化人』とは、奥一らが引揚げ後の1946年8月に創立した「満蒙引揚文化人連盟」の機関誌である。同誌は1947年8月に創刊号が出され、その中で奥一が「春聯」

¹⁷⁶ 『海外引揚関係史料集成（国外篇）』第28巻、満洲篇4「満洲省別概況」、2002年6月30日、382頁。

¹⁷⁷ 北村謙次郎「長春消息」、『満蒙引揚文化人』第5号、1948年1月10日。

¹⁷⁸ 無署名「復活した文話会」、『東北導報』第45号、第2版、1946年8月6日。

¹⁷⁹ 同上。

¹⁸⁰ 注177。

の北村謙次郎、島田清も共に不明、ご存知の方は知らせてほしい」¹⁸¹と書いている。時期はちょうど北村が満洲から引揚げようとした頃であった。

1947年8月21日、引揚げの日がようやく訪れた。壺蘆島（葫芦島）で船に乗って帰国する予定であったが、そこまで行くのが大変であった。北村の次男・光雄氏の話¹⁸²によると、子供3人と大人2人が座れるスペースを探すため、父がトラックを1台ずつ登って確認した。そして、最後のトラックでやっと乗れるようになった。「それに乗れなければ、帰れなかっただろう」と、北村光雄氏は今でも思う時があるという。そのトラックは、開原までしか行かず、そこから瀋陽までは貨車であった。瀋陽には40日間滞在して、共同生活を送った。9月27日、無蓋車に乗せられ、一夜暴風雨を浴びつつ、翌日壺蘆島に到着した。そこで英彦丸に乗船、29日に出発、10月7日に博多港に上陸した。麻疹発生のため隔離され、10月29日に隔離解除、熊本県人吉に10日滞在したのち、11月11日東京にたどり着いた¹⁸³。

その日のことだろう。品川駅から東京駅に向かった電車の中で、北村謙次郎は、迎えに来てくれた親戚に母の所在を尋ねたが、「去年亡くなられてまして」と答えられた。それを聞いて、北村は「戦中戦後の音信不通は、痛烈にして不屈きなこのようなパンチを、それからも何べん、ぼくらの頭上にくださったことだろう。そのなかには、かならずしも音信不通からとのみ限らない、痛い苦しいパンチも混じったが」と後悔した¹⁸⁴。

北村一家は、世田谷区の徳太郎の家に1カ月ほど滞在していたが、のちに多摩河沿いにある稲城の引揚寮に引き移った¹⁸⁵。その後まもなく、北村は一人で札幌に渡り、北海道庁の開拓課の役人として、約1年間の単身生活を送った。その時の生活について、「私を知る人たちはウソと思うかもしれませんが」と語っている¹⁸⁶。自分が役人にふさわしくないと強調しているのだが、しかし、1年間も頑張れたのは、作家精神より生活との苦闘が優先されたからほかならない。

役人としての単身生活は、北村の腸の病気でもあった。癌だと心配し慌てて東京大学の病院に入院したが、1カ月後、その疑いを晴れて退院し、稲城の引揚寮に戻った。その後住宅割当の籤に当たり、草加の手前の竹の塚というところに引っ越したが、3年後、保谷に移った¹⁸⁷。以後、北村一家の敗戦後の生活はやっと落ち着くようになった。

2. 文筆活動の復活

戦後、満洲の日本語文学は、満洲国の崩壊にと共に、日本文壇や出版会からは忘れられ

¹⁸¹ 奥一「引揚文化人 かく闘つてゐる」、『満蒙引揚文化人』、1947年8月10日。

¹⁸² 2010年7月、東京くにたち中央図書館で行ったインタビューによる。

¹⁸³ 赤羽末吉「長春から帰つて」、『満蒙引揚文化人』、1948年1月10日。

¹⁸⁴ 北村謙次郎「伊東月草をおもう」、戦後の随筆、初出不明。

¹⁸⁵ 北村謙次郎「保谷だより」、戦後の随筆、初出不明。

¹⁸⁶ 同上。

¹⁸⁷ 同上。

た存在となった。かつて満洲を舞台に活動した日本人作家たちは沈黙を余儀なくされた。ある時、北村謙次郎は竹内正一と連れだって、文藝春秋社を訪ねたことがあった。同社は1943年に満洲に進出して満洲文藝春秋社を設立、北村や竹内たち満洲作家を大いにもてはやした出版社である。しかし、戦後の二人は、文藝春秋社にまったく相手にされなかったのだった¹⁸⁸。

1950年2月、北村謙次郎は少女小説『ソルベージの歌』を偕成社から出版した。同書は日本人と白系露人との混血の少女が、敗戦の満洲から東京に引揚げて成長していく物語で、子供の目に映じた敗戦直後の新京と、戦後の東京の様子が描かれていた。この小説では、北村の満洲国に対する思いとそこで出会った白系ロシア人達に寄せる関心の深さが示されている。それをきっかけに、北村は偕成社から外国文学や日本古典の児童向けの翻案を依頼されるようになった。1950年以降、児童向けの図書を全20冊刊行した。中には重版されたものも多く、北村にいくばくかの経済的余裕をもたらした。

1956年9月、北村は満洲からの引揚げ文化人に呼びかけ「文話会」を結成し、機関誌『文話』を創刊した。それは1937年に大連で結成された「満洲文話会」に倣うものであった。会員数は、当初の95名から1年後の160名まで増えたが、会としては、会費の徴収と会誌の配布以外、これといった文学・文化活動を起こさないままに終わった。そのことは、北村の組織力の弱さと、会員たちの、戦後日本で「満洲」体験を生かすことの難しさを証している。『文話』は、結局、北村の「個人誌」に終始した。

文話会の第1回会合には、森繁久彌が四斗樽の酒を持ってきた¹⁸⁹。また、満洲時代にロシア語翻訳者として名を残した上脇進は、「どうもきみの作品、弱いんだ。強くないと、この時勢をのりきれんぞ」と北村に忠告した。この言葉は痛いほど彼の耳に入った。「彼の諷言通り、当時も今も「時勢」を乗っ切れずにいる自分を顧みるからであります」¹⁹⁰と反省した。その時の北村は、体調を悪くしていた上脇の「一合か二合で体よく切り抜けながら温い励ましの言葉を送ってくれた彼の姿を忘れることが出来ないのです」¹⁹¹と書いていて、真正面から彼の批判を受けとめる温容な姿勢を示した。

文話会は1960年5月、機関紙『文話』¹⁹²第25号の発刊をもって幕を閉じた。その号において、北村は吉野治夫の、満洲での死を確認することになる。この『文話』終刊号は「吉野治夫君を悼む」という特集を組んだ。北村は、「私が東京引揚げ後も、空しく壊れ去つた彼の業績を忍びたい徴衷からと、もし彼が幸いにも帰還のあかつきには、こうして残党ども

¹⁸⁸ 大谷武男「満洲の回想あれこれ——『満洲文芸年鑑』の復刻に際して」、『満洲文芸年鑑別冊』、葦書房、1993年9月10日、12頁。

¹⁸⁹ 北村謙次郎「きれぎれの思い出」、『人吉文化』36、37合併号、1963年8月30日。

¹⁹⁰ 同上。

¹⁹¹ 同上。

¹⁹² 『文話』は1956年9月から1960年5月までにわたって発行された。その前身は1956年1月に創刊された『文話会通信』（未見）であるが、第7号から『文話』と改題されることになった。詳しくは、本論附録の『文話』総目次を参照されたい。

が和気アイアイと大陸気分を嘯んでいたよと、鼻を高くしながら、一切を譲つて彼の手腕に俟ちたい意向だつたが、今やすべて空し¹⁹³といった旨を述べ、雑誌の終刊を告知した。北村謙次郎と吉野治夫との間に結ばれた深い友情、また、満洲文話会に対する彼の尽きせぬ想いをそこに推察できるだろう。

同誌の内容面では、会員の「満洲」回想記や近況報告がほとんどである。これと併せて、「会員通信」や「会員名簿」、コラム「文話会雑信」などが、彼らの戦後の動向を窺わせて興味深い。中には、「満洲」文壇で活躍した山口慎一（大内隆雄）、北尾陽三、長谷川濬、竹内正一などのエッセイも見られ、いずれも貴重である。特に注目したいのは、逸見猶吉と吉野治夫に関する文章である。関係者たちの証言によって、二人の生活像が生き生きと描かれている。牛島春子、坂井艶司、緑川貢、森繁久彌などの小文も捨てがたい。

1960年9月1日、北村謙次郎は回想録『北辺慕情記』を大学書房から出版した。同書は、「文話会」の機関紙に連載された「満洲芸文春秋」（のち「大陸文話」と改題）を中心にまとめたものである。満洲国の文芸・文化状況を記録した著作としては、大内隆雄の『満洲文学二十年』と北村の『北辺慕情記』が最も貴重であるが、『作文』の主宰者青木実は、後者を高く評価したそうだ。

又、同書はかつての満洲文化人からも共感をかちえた。例えば、北村謙次郎から著書を進呈された奥一は、以下の内容の礼状を彼に送った。

喜多謙さん（注：北村謙次郎の筆名の一つ）おめでとう。今日「北辺慕情記」一部御恵贈頂き早速一パイやりながら通読しました。知っている顔ぶればかり現われ、一緒にダイヤ街で飲んでる思い。まことに懐かしく、二十年の空間が逆に戻って、あの野郎も、あ奴も、そして彼女も、顔を赤くして共に文学論と国づくりの理想をゴッチャに語りあった、よき時代が目の前に展開されます。（中略）私は今夜君のために一パイ余計に飲んで、この本を抱いて寝るつもりです¹⁹⁴。

奥一の言葉は、かつて満洲で文学活動を行った人々の心情をよく語っている。『北辺慕情記』で満洲の思い出をまとめた北村は、戦後の慌しい日常生活の中で、自分の青春時代を送った土地について、一種の解放感を味わうことができたのではなかったか。

そして、北村謙次郎にはまた新しいスタートが始まる。それはアララギ派の歌人斎藤茂吉への関心であった。斎藤は1882年に山形県南村山郡金瓶村に生まれた歌人である。北村の先祖の出身地である米沢から3、4駅の距離なので、北村には、「茂吉を描きたいという心の奥には、郷里を同じくする文人への一種郷愁に似た感情があった」¹⁹⁵という。

日本文学者の多くは、現役から遠のくにつれ、自分の故郷の文学と歴史、又は自分の

¹⁹³ 北村謙次郎「会報」、『文話』25号、3頁。

¹⁹⁴ 北村謙次郎「きれぎれの思い出」、『人吉文化』第36、37合併号、1963年8月30日。

¹⁹⁵ 北村謙次郎「あとがき」、『あららぎ物語』冬樹社、1966年11月15日。

住んでいる地域の文学と歴史を研究するのが好むようだ。その意味では、『北辺慕情記』は北村の生涯の最後に書かれた作品と見なしていいのだろうか。であれば、『あららぎ物語』はその現役引退後の仕事になるのかもしれない。同書は1966年11月15日に冬樹社から出版され、相当好評だったという。当時の記憶をもつ人は、北村といえば、『あららぎ物語』の作家として思い起こすようだ。『あららぎ物語』の後、1972年には『長崎の茂吉』が刊行されている。

北村がアララギ歌人の足跡を辿るに熱心だったのは、1960年『北辺慕情記』が上梓されてから1972年『長崎の茂吉』が出版されるまでの間だったろう。その頃の北村は、赤松月船と同じく生田長江の門下生である伊福部隆彦と付きあうようになっていた。伊福部が主宰する雑誌『無為』や『人生道場』にもよく寄稿していた。

1960年代後半から、北村は再び満洲を題材とする小説を書き始める。1938年頃の日々を回想して書かれた「浪漫の頃」は約150枚、満洲建国運動に参加した岡田猛馬をモデルにした長篇小説「異骨相な男」は1000枚近くの大作である。いずれも遺族が保存している、未発表のままに終わった。

一方、日本文壇においても、北村は、それなりに積極的な姿勢で関与していた。1952年8月10日、河盛好蔵、浅見淵、井伏鱒二が発起人となって有志に働きかけ、「木山捷平を激励する会」を「樽平」で開いた。北村は亀井勝一郎、外村繁、小田嶽夫、小沼丹、巖谷大四、村上菊一郎、吉岡達夫などがと共に出席した¹⁹⁶。

1957年7月に創刊された第2次『青い花』に、北村は山岸外史、今官一らと共に参加した。残念ながら同誌はこの号だけで終刊した。第3次『青い花』は1976年に創刊され、第2次のメンバーを中心としたのだが、新人が多くて、『青』と改題した¹⁹⁷。また、『日本浪漫派』を継ぐ雑誌『浪漫』にも、彼は作品をいくつか寄稿したことがある。

1980年7月24日、北村謙次郎の妻・千枝が胃癌で亡くなった。71歳であった。北村は妻を亡くした悲しみを背負い、1981年の暮れに『文芸復興』に「この一年」という随筆を書き始めた。連続3回の文章であるが、妻千枝の素顔が初めて自作に取り込まれるようになった。亡妻に対する思いを募らせつつ、1982年、北村の健康状態もかなり悪化してきた。この年の正月、横田文子に送ったハガキには、「酒のんでも、すぐ吐いてしまう」¹⁹⁸と寂しいことを書いた。

6月30日0時56分¹⁹⁹、北村は食道癌で田無病院で亡くなった。戒名は白相院喜多謙道居士である。死亡届けは当日、北村の長男・和郎によって保谷市に提出され、同年7月5日（北村の誕生日）に東京都保谷市長名で除籍された。

¹⁹⁶ 木山捷平『木山捷平全集 第八巻』、講談社、364頁。

¹⁹⁷ 丸地守「『青い花』覚書」、『第四次 青い花』No. 63、青い花社、4-6頁。

¹⁹⁸ 北村光雄氏提供の資料による。

¹⁹⁹ 久保喬『太宰治の青春像』（朝日書林、1993年6月19日）には、「1982年6月28日」と書かれているが、保谷市発行の戸籍謄本には「1982年6月30日」と記されているので、後者に準拠する。

北村の追悼会は8月5日に行われた。伊馬春部から大久保喬に連絡し、後者が案内役を担当した。北村の次男・光雄が日野市で経営していた料理店「ひぐま」が会場であった。当日の出席者は伊馬春部、尾崎秀樹、北村光雄、久保喬、杉田康枝、関合正明、中谷孝雄であった。手紙またはハガキなどで追悼の辞を送ったのは、今官一、檀一雄夫人、藤原定、真鍋呉夫、緑川貢などであった²⁰⁰。

北村謙次郎の死に対して、最初に追悼の意を表したのは、植民地文学の研究者である尾崎秀樹である。尾崎は『週刊読書人』の「本のこよみ」というコラムに、北村について2篇の短篇を寄せた。その一つは、同紙1982年8月2日号の「故・北村謙次郎氏に関する思いで」で、北村との交友を追憶した。もう1篇は、8月16日号の「北辺慕情記」に触発されたこと²⁰¹で、北村の文学的事績を評価しながら、自著の「『満洲国』における文学の種々相——ある伝説の時代」について感想を述べている。

また、1982年10月、落合茂主宰の『文芸復興』には、北村謙次郎の絶筆「続 この一年」が掲載された。亡くなる1カ月前に執筆されたものであるが、重病中の彼の執筆活動に対する思いをよく写している。

同号の『文芸復興』には、北村の絶筆の続きとして、3頁ほどの北村追悼文も載せている。なかには緑川貢の「在満時代の北村謙次郎」が先頭に置かれ、北村が満洲の唯一の職業作家になったことを「ともかくも貫き通した意地と頑張りには、知友誰もが一目置き、畏敬の念を抱いたのである」²⁰¹と述べた。

落合茂の「文芸復興と北村さん」は、北村の創作上の気力に対する感服の思いと、同誌に掲載された北村の「この一年」に対する読者からの反響を伝えた。「人間のいのちと生死の諦観、淡々とした中に年輪の重みを感じられて感動しました。枯れた文章というのはこういうものだと教えられました」²⁰²とは、八幡正男の手紙に書かれたものである。78歳の北村の心境をよく感じていたのだろう。

最後に掲載されているのは南弥太郎の「北村謙次郎を憶う」という小文である。「お作、愛読しておりますよ」²⁰³という北村からの言葉が身に沁みたとする南は、北村の温厚な性格に触れつつ、友を失った悲しみを語った。

北村謙次郎は逝った。78歳の生涯であった。終生、時代の波に翻弄されながらも、ついに文筆業を諦めず、よく人生を尽くした人であったと思う。

²⁰⁰ 久保喬『太宰治の青春像』、朝日書林、1993年6月19日、205 - 207頁。

²⁰¹ 緑川貢「在満時代の北村謙次郎」、『文芸復興』第72集、1982年10月15日、5頁。

²⁰² 同上、6頁。

²⁰³ 同上、7頁。

第2章 北村謙次郎文学におけるモダニズムの変容

本章から北村謙次郎の文学世界に入る。ここでは、まず北村の習作時代の作品を取り上げ、次いで、彼が1937年に満洲国に渡るまでの間の表現活動を検証し、北村文学におけるモダニズムの何たるかを考察していく。

本章は5節からなる。第1節では、北村が國學院大學に在籍していたころに『すなつぼ』という同人雑誌に発表した文学作品を紹介する。同誌において、北村は小説だけではなく、詩や短歌なども試みていたことが、本論によって初めて明らかにされる。それらを通して、北村の最初期の文学表現を窺うことができるであろう。第2節は、北村が1930年に創刊した個人雑誌『文芸プランニング』に焦点を当てる。このリトル・マガジンにおいて、北村は「ノスタルヂア鈔」などの小説を発表し、日本文壇にデビューすることになる。同誌には北村の作品のみならず、宮沢賢治、黄瀛など、のちに文学史に名を残す詩人たちの作品も数多く掲載されている。同誌は7号まで刊行されたが、その後満洲事変が勃発し、停刊となった。以降、北村の世界観も変貌をきたす。第3節では、満洲事変以後の北村の創作を読んでいく。『文芸プランニング』に見えるモダニズム文学の志向はここでなくなり、代わりにリアリズム文学の傾向を示す習作が増えてくる。そこから北村文学におけるモダニズムの蹉跌を窺い知ることができる。つまり、それまでは、生に対するある種の倦怠感に犯されていたのだが、事変後、自分の生が時代に左右されるという不安を抱くようになったのである。その不安を解消するため、北村は再び大連に渡ることになる。大連での生活、及び当時の心理的な動揺は第4節の「1934-1936年の日記」で見ていくことにする。ここで取り扱った北村の日記は、当時の満洲で書かれた記録として、日本人社会の生活実態や文化状況を読み取るための、極めて貴重な史料ともなっている。日記の記述を解読しながら、北村が東京での生活的不安から大連に逃げ、また大連から東京に戻ってくるまでの彼の思想的内実にも迫っていく。その一連の行動と思想は、第5節の北村と『日本浪漫派』との関わりにも反映されている。大連行きの結果、北村は創作活動における一つのピークを迎えることになるが、それと同時に、彼の日本文壇とのつながりを希薄にさせることにもなる。北村は『日本浪漫派』において旺盛な執筆活動を見せたが、その一方、日本文壇に対する帰属感を見失い、満洲国に移住することを決意するに至るのである。

第1節 北村文学の出発——『すなつぼ』

1. 『すなつぼ』への参加

雑誌『すなつぼ』は、北村謙次郎が文壇にデビューする以前の習作の場であった。同誌は國學院大學の学生たちを同人として、1927年7月に創刊された。北村は同年の8月、第

2号から参加している。同人には、石川年、三村達磨、市川和夫、千坂正三などがいた。会費は毎月75銭である。参加早々、北村は編集活動に取り組み、創作発表会にも積極的に協力するようになった。例えば、1928年8月19日、『すなつぼ』第1回創作発表会¹が北村宅で行われた。参加者は石川、馬場、北村と三村の4人である。そこで、馬場は劇「金、言葉、心」と詩「欠呻」、「八月の詩」、石川は小説「ワイルド ダック」、小説「秋風」、北村は小説「遊女と少年」と詩「早朝」、三村は小説「師走」、「人形」を発表した。

北村の同誌への寄稿は、第8号（1928年4月）まで続いた。その間、彼は瀬田谷哲三、北村舞人、夢人という筆名を使い分けて詩、小説、短歌を発表した。いずれも完成度はあまり高くないが、日本文壇にデビューする前の習作として、そこに、少なからぬ可能性を読み取ることができる。

2. 北村の小説

小説は、「北村舞人」というペンネームで発表されていて、「秋風」（1927.8）、「自殺」（1927.10）、「朝の客」（1928.1）、「描きかけた絵」（1928.4）など4篇である。「秋風」は、『すなつぼ』第2号に掲載され、現時点で見ることのできる北村謙次郎の作品のうち、最も初期のものである。この小説は、昼寝から起こされた洋三を中心に、彼の聞こえたもの、見えたもの、考えたものを通して、その生活の単調さとそれに対する倦怠感を描いた物語である。筋立てがシンプルで、作者にとっては、内容より表現のほうが重視されているように思われる。とりわけ、感覚を中心とする表現が鮮やかである。

提琴の音は死と生を繋ぐ細い琴線そのものゝ感じであつた。睡魔の去らぬ朦朧とした頭脳は半意識のうちに、弱々しく薄れていくピアノシモに引きづられる生命の溶暗を感じるものゝ如くであつた²。

提琴（バイオリン）の音は、死と生を繋ぐ音として主人公に意識されている。それは彼に「生命の溶暗」を感じさせ、生活に対する無力感を覚えさせる。1920年代末ころ、横光利一の場合をはじめ、映画的表现は小説の中にしばしば取り入れられており、「溶暗」（フェイドアウト）もその一例と言えるだろう。北村の場合、この言葉を借りて、主人公の頼りなげな日々を表わしている。

また、この作品では、映画用語を取り入れるのみならず、全体の構造においても、映画的な手法が採用されている。例えば、小説全体は六つのシーンからなる。各シーンの間を一行開けでカットし、そのちょっとした技法によって、映像的イメージが読者に喚起されてくる。それらのシーンは、洋三の目の前の「現状」、妹のこと、母のこと、自分の日常生活

¹ 『すなつぼ』第2号、1927年9月20日、49頁。

² 北村謙次郎「秋風」、『すなつぼ』第2号、1927年8月1日、3-4頁。

活、隣家の様子などをそれぞれ描き、最後のシーンで、それまでのイメージが一つながりのものとして統合されてくる。

そのゆっくりしたリズムの中で、作者は日常生活の微妙な変化を語ることによって、自分を気づかしていない妹に対する思いと、日々感じる退屈さを伝えてくる。「秋風」のスタイルは、このように新感覚派に近いものであった。感覚的描写を中心に、映画的な技法を取り入れた表現法で、そこに、北村文学のモダニズム的なスタートが示されている。

物語性の薄い「秋風」の後に現れたのが、500字たらずの「自殺」という作品である。この短篇は、自殺を計画している娼婦の花子が、電車の中で偶然に赤ん坊を見かけた時の心理の変化を描いている。

電車は座つたきり動かなくなつた。乗客は動かぬ電車と、窓硝子を叩く雨の音とに焦ら焦らし始めた³。

これは「自殺」の冒頭であるが、横光利一の小説「頭ならびに腹」の書き出し⁴に似た印象を受ける。このあたりからも北村が新感覚派の影響を強く受けていたことが推測される。雨の中で停まった満員電車と乗客の焦る気持ちの中に、自殺を計画した花子が違和感なく登場する。彼女は、傍にいる赤ん坊を見た時にほほえみたいような気持ちがあったが、その口の周辺についた餡だらけの顔から自分の股の皮膚に現れた斑点を想起し、嫌悪を感じた。そこから、花子の自殺の原因が窺えるようになる。この、気持ちの転換によって物語を成立させるというプロットの設定は、北村の小説の中でも見事な着想だといえよう。

プロットの緊密度の高い「自殺」の後、北村は再び「秋風」のような、ゆっくりした随筆ふうな小説スタイルに戻った。それが「朝の客」である。就職口を依頼するため、辰夫が喫茶店で叔父を待っている間の心理的な動きがこの小説の骨格となっている。彼は隣席の客の就職をめぐる話を耳にし、自分の就職相談の緊張振りを想像したり、高価な化粧品を買いにきた女中を観察して、ブルジョアの「奥さん」のことを想像したりする。また、辰夫は高価な化粧品で自己の存在を証明する女に同情しながら、自分の生活に対しても反省し、自分はただレコードを求める小市民に過ぎなく、「食つていけるならこのまゝで好いではないか」⁵と認識するに至る。

緩いリズムで叙述が進行していく中、主人公の考えが徐々に変わっていく。就職を頼もうとする当初の緊張感から、就職しなくても「食つていける」ならいいじゃないかというところまで気持ちに変化する。また、彼は高価な化粧品を自己の存在証明とするブルジョア婦人に同情したが、彼自身の自己の存在を証明する方法については説明していない。た

³ 北村謙次郎「自殺」、『すなつぽ』第4号、1927年10月20日、13頁。

⁴ 「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された」。『定本 横光利一全集』第1巻、1981年6月30日、396頁。

⁵ 北村謙次郎「朝の客」、『すなつぽ』第6号、1928年1月20日、9頁。

だ、自分を小市民的な人間だと捉えつつ、日常生活における退屈と無気力とを感じたことが文脈上から窺えるだけである。小説では、辰夫がどのような道で「食つていける」のか言明されていないが、「このまゝで好いではないか」という言い回しで、現状維持の姿勢を伝えている。ここで、作者北村と主人公辰夫とを重ねてみると、北村が安定的な仕事に就くのではなく、作家になる道を選んだことにもつながってくる。そして、北村が自己の存在を証明するために小説を書いていることも、ここから窺い知ることができるであろう。

北村が『すなつぽ』に発表した最後の小説は、「描きかけた絵」である。小説は四つの部分からなり、これまでの作品のなかでは最も長いものである。妻子と一緒に暮らす主人公・文吉の平穏な日々、飲酒癖の母親の存在が影を落とす。そのことに悩む文吉は、ある日、友人宅からの帰途、酔っ払いにからまれ、警察署に一晩泊まることとなる。そこで、彼は自分の日常生活にないものを見出し、今ある自身の生活に不安を感じ始める。その不安を抑えるため、彼は妻と相談して、妻子を国に帰すことにした。この一篇は、北村の従来の小説の中で登場人物が一番多いものであるが、しかし、妻子を田舎に帰すという「終り方」では、物語が十分に展開しきれていない印象を読者に与える。作者は何を言おうとしているのであろうか。文吉にとって、母と妻の関係、警察署に連行されたことなど、そのすべてが自身で制御できる範疇を超えるものばかりであった。現実に対する無力感を訴えていることは明らかであるが、作者は、終始、母と妻の関係を表面に留めていて、警察署に連行されたことも社会問題に発展させるのではなく、自分の中で整理していく方法を選択している。結局、妻子を国に帰すことで問題を表面的に解決しようという形で、現実から逃げている。小説の末尾において、北村は「描きかけた絵」は明らかに「描きかけた小説」あるいは「描き損じた小説」である。今、ページ数他の関係に依り、作者は委曲を盡すべき文吉一家の波瀾に就てその一部をしか公開してゐない——と、一言、敢えて作者が懶惰にまかせて其の責を逃れたに非る事を弁明する次第だ⁶と付け加えているが、その続きはついに書かれることがなかった。この小説は、それまでの創作の中で、最も物語性が豊かなものといえるが、具体的に筋の展開ができず、そこに設定された矛盾も解決できていない。北村の創作における限界を示したものであると考えられる。以後、1930年9月に個人誌『文芸プランニング』を創刊するまでの間、北村の文学活動の足跡は見当たらない。

3. 北村の詩そのほか

詩は「瀬田谷哲三」というペンネームで発表されており、「夜」(1927. 8)、「旅先で」(1927. 9)、「夜ふかく」(1927. 9)、「坂」(1927. 10)、「枯葉色の煙草」(1927. 10)、「初冬風色」(1927. 11)、「寒夜」(1928. 1)、「散歩道」(1928. 2)の8篇である。これらは北村の文学歴において、ただ一度⁷の詩作体験であった。このころはちょうど、北村が詩人の赤松月船に出会った時

⁶ 北村謙次郎「描きかけた絵」、『すなつぽ』第8号、1928年4月20日、15頁。

⁷ この点（『満洲日報』による新発掘の事実など）については、「あとがき」にて補足説明す

期でもあった。彼の詩作は赤松という存在抜きにはありえなかったと考えられる。ここでその詩をいくつか取り上げて紹介してみる。

北村の詩作は、現代詩、または自由詩に属する。『すなつぼ』第3号に掲載された「夜ふかく」を例にとる。

雨の音が強くなると/虫の声がきこえなくなる。
爺、婆の声もきこえないが/彼らは すでに寝たのであらう。

雨の音が強くなると/私は目をあげて暗い戸外を眺める。
闇にふかい神秘があり/硝子戸に倚る白蛾に永遠の象がある。

私は想ふ私の未来を/三十年の未来にも/白蛾は雨の夜は私の硝子戸に倚るであらう。と

雨の音が強くなると/虫の声がきこえなくなる。
ただ/壁の中にでもひそんでゐるらしい/こほろぎの音が澄みわたる……⁸

「雨の音が強くなると」という一行が繰り返されていて、音韻感のある夜の雰囲気醸しだしている。その繰り返しによって、この雨がただ一夜の雨のことではなく、いくつかの雨の夜だというイメージを与える。特に雨の音と対照的に取り上げられた虫の音は、夜の静かさを浮き彫りにし、一篇の雰囲気をさらに高めている。

聴覚を通して「音」を語る方法以外にも、視覚、味覚を通して描いた詩もある。第4号の「坂」には、「煤けた塀の上に 赤まゝの花がのぞいてゐた」⁹という黒と赤の対照で、冬の坂道の重暗さを描いている。

そのほか、連想的な詩句の重なりによって詩的イメージを展開する「枯葉色の煙草」もある。

枯葉色の煙草を詰めて/火を点ける――
おそ秋の野の枯草に火を点けた思出が/いきいきと蘇る。
あの時は乙女よ。/朽葉の枕に永く憩うて/秋の香もひとしほ豊かであつた。
枯葉色の煙草に火を点ける――/淡い/その煙に/ひところの思出がある¹⁰。

この詩では、タバコを吸いながら少女を思う淡い気持が追懐されている。作者は煙草の「枯葉色」から「おそ秋の野の枯草」を連想し、さらには「あの時の乙女」に思いが移る。

⁸ 北村謙次郎「夜ふかく」、『すなつぼ』第3号、1927年9月20日、8頁。

⁹ 北村謙次郎「坂」、『すなつぼ』第4号、1927年10月20日、4頁。

¹⁰ 北村謙次郎「枯葉色の煙草」、『すなつぼ』第4号、1927年10月20日、5頁。

視覚的イメージにとどまらず、続けて「秋の香」をも取り出し、「乙女」に対する情感をみずみずしく表現した。そして、思いは再び煙草に戻って、一篇は閉じられる。

『すなつぼ』には、北村文学の出発点として、現在目に触れることができる彼の作品の最初の足跡が残されている。この雑誌において北村は、小説と詩、短歌を発表して、多方面の才覚を現した。特に小説には、感受性を中心とする書き方と映画的な手法を取り入れられている。そのことによって、北村の初期文学を目して、新感覚派の特徴を有するモダニズム文学の一成果と見なすこともできよう。しかし、これらの小説は、物語としては筋書きが簡単すぎるといふ欠陥があるため、作品的な成熟度はいまだしの感を否めない。また、第三者の視点で日常生活の一場面を語りながら、全体的には私小説ふうなイメージを保っている。その中には、北村の日常生活に対する無力感と倦怠感がとが潜んでいると捉えることができるのではないであろうか。

第2節 日本文壇へのデビュー——『文芸プランニング』

『文芸プランニング』は北村謙次郎が創刊した個人雑誌である。この雑誌で北村はいくつかの小説と評論を発表し、それらによって日本文壇に足がかりを得ることになった。それらは、『すなつぼ』に発表されたものとは異なり、感覚的表現に対する執着が薄くなり、実験的な手法による創作が多く試みられるようになった。目立つのは、ファンタジーふうな作品を書く一方、リアリズム的な小説にも筆を染めている点である。第2節では、この雑誌における北村の文学的特徴を検討し、この時期の北村文学の位置づけを試みたい。

1. 『文芸プランニング』の創刊

北村謙次郎が文芸雑誌『文芸プランニング』の発行を企画したのは、1930年の夏のころだと思われる。当初は同人雑誌のつもりであったらしいが、同人が集まらなくて困っていた。結局、1930年9月、「個人誌」という形で創刊された。その時、北村を支えたのが赤松月船であった。

赤松は北村に1通の紹介状を書いた¹¹。それを持って、北村は黄瀛のもとを訪ねた。黄瀛は謙次郎より2歳年下である。中国四川省の重慶師範学院の校長黄沢民と、千葉の女子師範学校を卒業した太田喜智の間に生まれている。彼は幼い時に父を失い、母と妹と共に中国を転々とした後、日本に渡った。8歳の時であった。北村が初めて満洲に渡ったのとほぼ同じ年頃のことである。1925年、中国の青島で勉強していた黄瀛は短詩「朝の展望」を詩誌『日本詩人』5巻2号（新詩人号）に発表して第1席に選ばれ、18歳の若い詩人として日本詩壇に注目されるようになった。のちに日本に留学した黄瀛は、その才能を多くの人たちに認められ、與謝野晶子、草野心平、井伏鱒二、赤松月船、宮沢賢治、木山捷平、高

¹¹ 北村謙次郎「二人の詩人 宮沢賢治と黄瀛」、『文芸たかだ』、1967年11月15日。

村光太郎などとも交流を深めた¹²。

北村が訪問の意思を伝えると、黄瀛は即座に快諾してくれた。「ぼくは信頼されると、とことんまで働く男なんですがね」¹³。その一言は、後々まで北村の心に刻まれた。このようにして、『文芸プランニング』の詩欄は黄瀛に任せることとなった。黄瀛は自作のみならず、まだ無名の詩人宮沢賢治、翻訳者安藤一郎、『歷程』の同人であった岡崎清一郎、文壇新人木山捷平らに原稿を依頼し、同誌に多彩な詩作品を招き入れた。

2. 雑誌の編集

この節では、『文芸プランニング』の編集について紹介するに留め、同誌に掲載された北村の創作に関しては、後ほど論じることとする。

『文芸プランニング』は1930年9月に創刊され、1931年7月に終刊するまで、全7冊が発行された。第1号から第3号までは月刊で、第4号から第7号までは隔月刊行である。主宰者の北村は創刊号において、「私は文学の本質から言つて、主として詩を重く見たい立場にゐるので、此の雑誌にも自らそうした気分が反映することを願つてゐる」¹⁴と述べ、この雑誌の特性を規定した。同誌には、北村などの小説や評論のほか、黄瀛、安藤一郎、木山捷平、宮沢賢治、岡崎清一郎など、のちに詩壇の中心で活躍した詩人の作品が多数掲載されている。その意味で、同誌の内容は北村の強調した「文学の本質」をよく反映していたといえる。

創刊号は1930年9月1日に発行された。定価は20銭で、発行者兼編集者は北村謙次郎、印刷者は須藤紋一、印刷所は京華社、発行所は泰文社であった。泰文社は東京市の青山にあり、謄写版機材を販売する一方、印刷業や出版業も兼ねていた。北村は『文芸プランニング』の発行所名義を同社に借りたか、雑誌の販売を同社に委託したものと思われる。この創刊号には、表紙2に目次が載せられていて、全体的にシンプルな誌面づくりとなっている。それについて北村は、「デッサンやカッツなどを入れて、もつと賑やかなものにした意向だつたが、何分一人でやる仕事なのでついそこまでは手がまはりかねた」¹⁵と説明している。

同号には、北村の小説「ノスタルジア鈔」と評論「龍胆寺雄」、小木公六良の小説「杜少陵艶書」、黄瀛の詩「心象スケッチ」、赤松月船の随筆「旅の断片」が掲載されている。

北村の「ノスタルジア鈔」は、個室に閉じこもって、不可能な発明に取り組みながら、小説を書く青年の、海の向うに暮すXという女性への愛の幻想物語である。ロマンチックな要素に満ちたファンタジー小説は、北村の日本文壇デビュー作にふさわしい意欲作とな

¹² 王敏編『詩人黄瀛』、重慶出版社、2010年6月、263-266頁。

¹³ 同上。

¹⁴ 北村謙次郎「後記」、『文芸プランニング』第1号、1930年9月1日、42頁。

¹⁵ 同上。

っている。小木公六良の小説「杜少陵艶書」は、杜甫の「佳人」を序に置き、「艶書其一」と「艶書其三」の二つのパートに分けて、鏡下という女性に対する少陵の恋心が語られる。中国古典から翻案されたイメージが強く、北村は「小木公君の作は未完成の感が深い、伸びる才は十分に認められると思ふ」¹⁶と評価した。黄瀛の詩「心象スケッチ」は、「カナナの花」、「小唄」、「も一つの唄」、「声」、「八月の夜」の5篇からなる。感性的な調べで、時間、生命、愛情、自然などを歌っていて、北村に「異色あるもの」と評価された。赤松月船「旅の断片」は、関西、中国、四国の旅行についての話である。北村の「龍胆寺雄」は、この号で唯一の評論である。この文章において、北村は、龍胆寺雄の作品を全般的に取り上げ、龍胆寺の文学表現の姿勢を検討した。

第2号は10月1日に発行された。発行所は同じく泰文社である。小説は坪井峻一の「妻」、赤松月船の「秋」、北村の「癒えゆく人」の3篇、詩は石川善助「北太平洋 紙片」と黄瀛の「心象スケッチ」、評論は北村の「思想の芸術性」である。現物を未見のため、ここでは、その内容に触れることができない。

第3号は11月1日に発行された。定価20銭である。編集者は北村謙次郎、発行者は井上雄介、印刷所が大黒活版所、発行所は泰文社である。扉ページは栗木幸次郎の絵で飾られていて、書斎のソファでタバコを吸いながら創作を構想している男がスケッチされ、「私生活より」というタイトルが付されている。

同誌には、詩3篇が掲載されている。安藤一郎が翻訳したT. S. エリオットの「序曲」がその一つである。エリオットは象徴主義文学の代表者で、1949年にはノーベル文学賞を受賞している。訳者の安藤一郎は詩人・翻訳者として、のちに有名になった人物で、ここに発表したエリオットの訳詩は安藤の初期の仕事の一つであろう。木山捷平の詩「ほのかな詩一古い反古の中から一」は「新吉ところの牡牛」、「裏長屋の秋晴」、「かすかな波の音」の3篇からなる。特に「新吉ところの牡牛」は、農家の牡牛が「屠殺場」に引かれて行く姿を、哀しみとユーモアをまじえて描き、そこに風刺の意味も一層強く引き出されている。これらの詩は『木山捷平全詩集』¹⁷に収録されている。最後に置かれた詩は宮沢賢治の「空明と傷痕」、「遠足許可」、「住居」、「森」の4篇である。これらの詩篇も既に『校本 宮沢賢治全集』¹⁸に収録されている。

上述した詩のほか、小説では坪井峻一の「蜀黍団子の秋」と北村の「貸借」がある。坪井は北村との関係が良好だったと思われる。彼は、創刊号以外は、『文芸プランニング』の各号に小説を寄稿している。「蜀黍団子の秋」は、貧農の家に生まれた少女おゆきが生活苦の中でたくましく生きていく姿を描いたもの。読みやすい文章で書かれているが、いくらか大衆文学的な趣きを感じられる。他方、北村の「貸借」は父、母、兄と弟の4人家族

¹⁶ 同上。

¹⁷ 『木山捷平全詩集』、講談社、1996年3月4日。上述の詩は「かすかな波の音」を除き、すべて『木山捷平全詩集』（講談社、1978-79）に収録されている。ちなみに「かすかな波の音」は、『木山捷平全詩集』に収録されたが、「未発表詩篇」とされている。

¹⁸ 『校本 宮沢賢治全集 第6巻』、筑摩書房、1988年2月1日。

の物語である。日常会話を中心とした文章による、リアリズム感の強い小説である。

第4号は1931年1月1日に発行された。12月号が休刊した関係からか、この号の内容は前号より充実したものとなっている。編集者と発行者を北村謙次郎が兼ねている。印刷所は神田の鈴木信英堂に変わった。とりわけ発行所の表示が目される。発行所は前号までと同じく泰文社ではあるが、右隣りに小さな活字で「文芸プランニング社」と付け加えられている。

小説は以前と同様、北村と坪井峻一が執筆しており、詩は岡崎清一郎、長田恒雄、黄瀛が稿を寄せている。他には、野溝七生の随筆「猫きち」と北村の評論「抵抗する作家」が掲載されている。この号で初めて評論が巻頭を飾ることになった。

「抵抗する作家」は北村の反自然主義的姿勢を示している評論である。岡崎清一郎はすでに詩人として著名で、1929年に詩集『四月遊行』を刊行している。今回発表の詩「装身具」、「冬」、「小昼」は、漢字と片仮名を混じる表記が採られている。長田恒雄は詩人、作詞家である。「昆虫譜」は、「虱」と「蚤」の2篇からなる。特に「虱」は、シラミの生き生きとした生態を描いていて、木山と異なった風趣に満ちている。この号に黄瀛は「秋夕小景」、「椿」、「女髪結び」、「退屈なる秋夜」4篇を発表した。野溝七生の随筆「猫きち」は、2匹の猫の成長を描いたもので、猫へ注ぐ愛情から自然に流露してきたような小品である。

北村の小説「五月の日記 其の他」は2篇の短篇からなる。「五月の日記」は甥の面倒を見る中年男性の心情を描いたものであり、「白いペエジ」は、電車の中の少女を観察する男性を描いた物語である。坪井一の「河」は、階級の異なる男女の不幸な結婚生活を描いた小説である。貧しい女工の千代は、大学教育を受けた役人・柚木に捨てられ、柚木の同僚・島の同情を買った。島は家族と千代の反対を無視して、千代との結婚を遂げた。しかし、理想の結婚を望んだ島は、まもなく貧しい素性の千代に失望し、彼女も島の軽蔑に耐えられず、二人はとうとう別れるといった物語である。

この号の最後には、「編集後記」の代わりに、「ブライト・マアク」と題する短い記事が掲載され、北村の雑誌編集に関する心労が語られている。

第5号は1931年3月に発行された。この号から泰文社は姿を消す。編集兼発行者は北村謙次郎、印刷所は高生堂、発行所は世田ヶ谷の文芸プランニング社に変わる。また定価は前号までの20銭から10銭に変更された。

内容においては、坪井峻一の「挿話風に……」と北村の「すなむすめ」が巻頭に並び、続いて黄瀛の詩「生活余暇」と随筆「パイプの休憩」、最後に赤松月船の随筆「井伏鱒二と猿蓑」と、北村の評論「恢復期の文学」が置かれている。

坪井の小説は、二つの挿話からなる。一つは「柚子湯」で、一人で子供を育てている母親が必死に内職をして、息子の望む「柚子湯」を体験させてやるという話である。この小説は、銭湯の閉店時間間際に、掃除に来た三助が子供のため新しい柚子を切って湯船に入れたところでピークを迎え、物語に暖かい雰囲気醸し出している。挿話の2である「矮

鶏の愛情」は、つがいの矮鶏のしぐさから、自分たちの愛情を悟ることになった夫婦の物語である。北村の「すなむすめ」は、ある都会青年が漁村の旅館で体験した、怪談じみた物語である。

黄瀛の随筆には、「南京生活断片」という副題が付されている。黄瀛は日本人の母に育てられ、若い詩人として日本文壇にデビューしたが、のちに中国の南京に帰って、軍隊に入った。この号に見る黄瀛の詩篇と随筆は、彼が南京に帰ったばかりのころの写生だろうか。赤松月船の文章は目次では評論に分類されているが、金雀見の花と関わりながら、井伏鱒二との付き合いを語った内容で、評論より随筆とするほうが適切といえよう。北村の「恢復期の文学」は、文学の多様性を追求する作家たちの現状を肯定しつつ、文学者はおのれの個性を発揚すべきだと主張している。

第6号は1931年5月1日に発行されている。定価は10銭。発行者兼編集者は北村謙次郎、印刷人は高橋利惣次、印刷所は高正堂、発行所は文芸プランニング社である。

小説は坪井峻一と北村が書いている。坪井の「淀先生の送別」は、田舎の中学校の秀才・良吉の、都会から来た先生に対する心情を描いたものである。先生への愛着を抱きながら、懸命に先生の注目を引こうとした良吉は、結局、先生に軽蔑されてしまう。北村の「あとかたのない想像」は、第3号の「貸借」の続篇となる。就職問題で焦っている弟と、療養生活に入ろうとする兄をめぐる、家族の間の愛情物語である。

この号の詩は倉橋弥一の「孤影」と「避病院にて」がある。倉橋は1906年生まれの詩人で、『訪問：詩集』（獅子発行所、1930年）と『孤島の日本大工：杉浦佐助南洋綺譚』（文松堂書店、1943年）を残したのち他界した。「孤影」には、写真館の窓ガラスに映った自分の孤独の心情、「避病院にて」には、病院にいる弟と妻を訪問した時のやさしい気持ちがかかれていいる。2篇とも、作者の感情が溢れるような作品である。長田恒雄の小品「街の日記」は、雨の中の町で出会った新居格との交友をスケッチしたものである。赤松月船の批評「中央公論四月号」は、横光利一の『時間』、北川冬彦の『北方』、宇野千代の『大人の絵本』について論じている。赤松は横光の創作特徴を「周到に精嚴に描き果さうといふ粘着力がおのずから然らしめたもの」¹⁹だと理解し、『時間』は「作家横光利一であるよりも人間横光利一の勝利である」²⁰と断言した。また、北川冬彦については、その作家としての素質と才能を見出し、特に北川の真面目な態度を評価した。その一方、宇野千代の『大人の絵本』については、面白くないと酷評している。本号の巻末には、笹澤美明の小論「ヘルマン・ケステンのこと」が置かれている。笹澤は新即物主義文学作家ケステンの『ヨーゼフは自由を求める』を論じつつ、小説における「問題」の提示について検討を試みている。

第7号は1931年7月1日に発行され、『文芸プランニング』の終刊号となる。この号の小説は白川正美の「調戯はれた心臓」、坪井峻一の「ざんげ」、北村の「胭脂（ニコティン）」

¹⁹ 赤松月船「中央公論4月号」、『文芸プランニング』第6号、1931年5月1日、27-28頁。

²⁰ 同上。

3 篇である。

白川の「調戯はれた心臓」は、失った恋を回想する短篇である。恋する時の緊張と幸せとが、都会と大自然を背景に次々と描かれており、主人公の心理的な変化と恋に対する不安を情景描写の中に溶けこませて、読者に緊迫感をもたらす。「ざんげ」は坪井がそれまでに書いてきた貧乏話とは異なる。手紙形式のスタイルが採られ、読者を「牧師」に喩え、自分の盗人としての犯罪過程と心理的な動きを告白するといった内容である。本篇は「調戯はれた心臓」に比べ、読者に一息つかせる空間を与えたといえよう。それに続くのが、北村の「胭脂（ニコチン）」である。主人公の芸術青年の、ニコチンと女への執着を生き生きと描かれていて、これもまた、一種のファンタジー（幻想文学）と見なさるべき作品であった。

この号の詩は増田晃の「かげろふ」、「いづみ」、「那須」と、竹中郁の「夢の仕事或ひは眠り」である。増田のシンプルな抒情詩と比べ、竹中の作品は 11 節のフラグメント（断章）から成る思索的エッセイだが、その鋭敏な言葉の扱いから見て、これを 1 篇の詩として読んでも差し支えあるまい。その他、小品として坪井の「季節の鬱憤」と北村の「独身宿舎」が掲載されている。両篇を併せて「夏」という総タイトルが付けられた。どちらも、発行日の季節に合わせて執筆されたものと思われる。しかし、坪井の作品は夏らしくない。人生の退屈さから自殺した友人の話まで、ずいぶんわがままに書いてある。一方、北村の「独身宿舎」は 1931 年の夏とはかけ離れていて、1917 年夏のハルビン旅行を題材に、当時泊まった宿舎のことを描いている。同じ素材で、北村は 1940 年代、「十六号の娘」²¹ という小説を発表したことがある。つまり、1930 年代ころ、北村はすでに満洲という素材を徐々に自作に取り入れようとする姿勢を示し始めていた。

『文芸プランニング』の創刊当初、その発行所は泰文社で、「編集者」は北村謙次郎であったが、やがて北村が「発行兼編集者」となり、発行所もついに泰文社から離れ、自ら文芸プランニング社を経営することになる。また、同誌の頒価も 20 銭²²から 10 銭へと変る。

発行形態に関わる、以上のような一連の変遷にも関わらず、結局、雑誌は長く持続できなかった。1931 年 7 月、ほぼ 1 年近く刊行された『文芸プランニング』は前ぶれなしに終刊する。廃刊した理由は様々であろうが、金銭的な問題が一番大きかったと思われる。また、泰文社時代には月 1 回の発行だったが、文芸プランニング社になってから隔月刊行になったのは、原稿の集まりが順調にいかなくなったからかもしれない。そして、1931 年 9 月に勃発した満洲事変が北村に大きな衝撃を与える。激しい時代の変動を前にして、彼の文学思想も激しく動揺したのではなかったのか。同誌停刊の理由の一つを、そこに求めることもできよう。

『文芸プランニング』は文芸誌として、小説より詩のほうが内容的優れていると思われる。特に、モダニズム詩や象徴主義の訳詩は、今日の眼からしても注目に値しよう。

²¹ 北村謙次郎「十六号の娘」、『新天地』7月号、1940年7月1日。

²² 1930年の20銭は岩波文庫1冊の値段である。

3. 北村の創作

ここからは、『文芸プランニング』に掲載されている北村の創作を中心に、初期の北村文学の特徴を検討してみる。それらの作品は概ね三つの種類に分類される。一つはモダニズム小説、もう一つはリアリズム小説、最後は評論である。

『すなつぼ』に発表された、感受性中心の表現を重視する作品とは異なり、『文芸プランニング』には、モダニズム文学を志向する実験的な小説がいくつか執筆されている。「ノスタルチア鈔」、「すなむすめ」と「胭脂（ニコテイン）」などである。

「ノスタルチア鈔」は『文芸プランニング』創刊号（1930年9月）に発表されたファンタジーである。大連を思わせる、ある海港都市が物語の舞台となっている。エキゾチックな港町の雰囲気、詩的な抒情性をたたえて描かれている。主人公のモダンボーイは、「永遠に停まらない時計」を発明しようと、日夜、努力しているのだが、そういった人物設定においてまず、物語一篇に、どこか狂気じみた幻想的な雰囲気がかもし出されてくる。外国の船員たちが集まってくる、港の通りの、あるカフェで、彼は昔の女友だちのXと再会し、二人の不思議な恋物語が始まる。ある日、その女性が外国から出した手紙が、彼のもとに届く。ここにいる彼女と、海の向こうにいる彼女と、どちらが実在の彼女なのか。時間と空間とが奇妙に交錯し、その謎を残したまま、物語は閉じられる。

この一篇は、「窓框の中に四角く割られた夜の海」、「游戈する警備艦の檣灯」、「珈琲店の中の濃いオゾンの香り」、「大理石の卓に響く潮騒……」などといったふうに、いかにもモダンな表現を駆使して、この都市の風景がモンタージュされている。その実験的文体といい、物語としての性格といい、当時、作者がどのような文学を目指していたかがよく分かる。1920年代末期のモダニズム文学の特質が歴然としている。

「すなむすめ」は同誌第5号（1931年3月）に発表された。ある辺鄙な漁村に遊びに来た都会の青年が、土地の娘の幽霊に出会うという話である。ある朝、彼が浜辺を散歩していると、すぐ傍で砂を踏む人の足音を聞く。宿に戻ったら、自室の前の庭先に赤い草履が脱ぎすててある。部屋の床には、女性の寝た跡が残っていた。夜中、見知らぬ美少女に出会って怖くなった青年は、数日後、あわてて宿から逃げ出す。土地の人たちは、「あの青年は砂娘に見込まれたんだ」と語りあう。

じめじめした感じの、日本的な怪談とは異質のものである。少女のゴーストが出没するのは、朝の砂浜や、旅館の明るい庭先など、主として陽光のもとなのである。彼女は、読者に陰湿な恐怖を与えるというより、どこか、異次元世界からの訪問者といったふうなミステリアスな存在として描かれている。「モダン幽霊」とまでは言えないが、これも一種のファンタジーとして読むことができそうである。作者の近代的な感覚が文体に生きていて、そこから来る明るさが、幽霊さえも明るくしている。

注目しておきたいのは、北村は、この作品で、まったく改行のない文体を試みていると

いう点である。ジェイムス・ジョイスふうの「意識の流れ」を模倣したのだろうか。その試みが、本篇において成功しているとは言い難いが、北村は彼なりの実験精神をもって創作に取り組んでいたと思われる。

「胭脂（ニコチン）」は、『文芸プランニング』の第7号（1931年7月）に発表された。この短篇に登場する男女は、典型的なモボ、モガである。夜の東京をさまようモダンボーイの主人公「私」が、友人から謎めいた美少女を紹介され、自分のアトリエに連れて帰り、そこから二人の男女の奇妙な同棲生活が始まるという筋書きである。クリヤという名の少女は「白痴に近い」性格なのだが、「私」は彼女から離れられない。ある日、「私」はクリヤの体から発散する濃厚な煙草（ニコチン）の香りに気づく。なぜなのか、作者はその謎を明かさない。クリヤは実在の人間なのか、あるいは「私」の幻想から生まれた存在なのか、やがて彼女は「私」の前から突然に姿を消してしまう。

煙草の香りを体現するクリヤを通して、作者は、ニコチンに象徴される何かを示そうとしているのだろうか。1930年代初頭の都会青年に見られがちな生活的空虚感を描き、その病的な現象を訴えようとしたのだろうか。この作品でも注目されるのは、北村の文体実験である。句読点を一切使わないで、一篇が綴られている。ニコチンを「白痴に近い」という架空の美人に比喻して、ロマンチズム的な幻想世界が構築されている。モダニズム的なロマンチズムと言えばよいのだろうか、そういった雰囲気は漂っている。

以上の3篇において北村は、『すなつぼ』の時期とは全く異なったモダンな作風を展開してみせた。その幻想的な内容から文体実験の試みまで、北村の文学的成長が明白に見える。しかし、彼は同誌にリアリズム文学に類される小説も書いている。

例えば、第3号に掲載された「貸借」（1930.11）と第6号の「あとかたのない想像」（1931.5）は、両親と兄弟二人の4人家族の生活をテーマとした連作がそうである。就職活動で焦っている弟、妻を亡くしたため再婚を勧められる兄、息子たちのことを心配する両親たち、それぞれの個性が、家庭の日常生活を通して描き出される。この小説は、前記3篇のスタイルとは異なり、日常会話を中心とした写実的な文体で書かれている。全体的に波瀾がなく、物語としては単調である。その原因を追究してみると、作者自身のモチーフの欠落が一番の問題点となる。リアリズム文学における彼の創作は、『すなつぼ』時代に書かれた「描きかけた絵」と同じく、いまだ未熟なイメージが強い。

「貸借」のほか、『文芸プランニング』第4号には「五月の日記 其の他」（1931.1）がある。同篇は二つの小説からなる。一つは「五月の日記」で、もう一つは「白いペエジ」である。同じくリアリズムの手法で書かれているが、前者の方が明らかに完成度が高い。この小説は、東京で暮らしている中年男性「私」が満洲の従妹から手紙を貰ったところから始まる。従妹の子である甥が上京してきて、「私」は彼の面倒を見ることになる。プロットがシンプルであるが、従妹とのかつての恋物語、甥の上京した時の姿など、全てが「私」の思い出を引き出してくる。とりわけ、満洲から上京してきた青年の姿が印象深い。また、「白いペエジ」は小説というより、習作段階の小品と言った方が適切であろう。電車の中

で読書に夢中になっている少女と、彼女の視線の行く先を追っている一人の男を描いたもの。少女に対する細かい観察と、男性の心理的な変化とがこの短篇のポイントとなっている。

このように、『文芸プランニング』に掲載された北村のリアリズム小説は、『すなつぼ』時代と比べ、人物の個性がより鮮明に描けてはいるが、モダニズム的作品に見られる創作的野心は希薄である。

最後に北村の発表した3篇の評論を見てみよう。「龍胆寺雄」においては、北村は龍胆寺の「放浪時代」、「アパートの女たちと僕」、「島の六日間」、「街のナンセンス」などを全般的に取り上げ、龍胆寺の文学創作の姿勢を検討した。その結論として、龍胆寺の文学は、「厳正な客観主義から反転して印象主義の朦朧に近づいてゐる」²³と結んだ。そのうえ、北村は、龍胆寺の「芸術に於けるリアリテイ」（『詩と詩論』第8冊、1930年6月）を参照して、龍胆寺の作品の評価が高い理由は、一般市民階級の読者の安逸性に由来するのではないかと解釈した。この評論では、北村の平俗主義に対する反抗、文学認識における高踏性が示されている。

「抵抗する作家」は2頁足らずの評論で、北村の反自然主義的姿勢を示している。文章の冒頭で、「吾々の文学は、自然への対抗から出発する」²⁴と宣言し、自然を「生の無限の充満であり、形象の無限の氾濫である」²⁵と述べつつ、それに抵抗しない自然主義を、権威と価値のない事物の水平化主義と規定した。その上に、自然から芸術的価値を意識的に把握し、文学を混乱から統一に進め、その中に、新しい価値と権威を発見すべきであると提唱した。この論調は、彼がその後『満洲浪漫』に発表した「探求と観照」²⁶に繋がっていると思われる。

「恢復期の文学」は、文学の多様性を追求する作家たちの現状を肯定しつつ、文学者はおのれの個性を発揚すべきだと主張している。彼は、文学者の個性が軽く抹殺される時代を危険なものとし、文学者は「自己を殺すことによつて自己を生かすことができたのではないか」²⁷という結論で締めくくっている。この自分を殺すことによって新たな生を得るという北村の提唱は、彼が満洲国に渡った後、もう一度出現する。しかし、その時には、日本の文化に拠って創作する従来の自分を殺し、自身の肌で感じ取った満洲の風土を描くことによって新生を得るという方向に転換を見せている。

この3篇の評論は、北村の文学認識を鮮明に示している。例えば「龍胆寺雄」における平俗主義に対する抵抗、「抵抗する作家」における芸術に対する追究、及び「恢復期の文学」における「死」による再生は、殆ど満洲国に渡った後の北村の文学主張と変わっていません。北村文学の根本的な認識となっている。

²³ 北村謙次郎、「龍胆寺雄」、『文芸プランニング』第1号、1930年9月1日、38頁。

²⁴ 北村謙次郎「抵抗する作家」、『文芸プランニング』第4号、1931年1月1日、2頁。

²⁵ 同上。

²⁶ 北村謙次郎「探求と観照」、『満洲浪漫』第5輯、東都書籍新京出張所、1940年5月2日。

²⁷ 北村謙次郎「恢復期の文学」、『文芸プランニング』第5号、1931年3月1日、23頁。

このように、『文芸プランニング』における北村の創作は、形式においても内容においても、様々な課題に挑戦している姿勢が顕著に見られる。『すなつぼ』時代と比べ、この時期の小説は物語の完成度が高く、文章も格段に成熟してきている。とりわけモダニズム文学における創作は、リアリズム文学の創作より明らかに優れている。また、北村は『文芸プランニング』で初めて評論にも挑戦する。まだ熟しているとはいえないが、のちに彼が満洲国で提唱した文学理論の芽生えを見ることができる。

第3節 北村謙次郎文学におけるモダニズムの蹉跌とその変容

本節は北村謙次郎が満洲事変の勃発から1934年に大連に渡るまでの創作を取り上げ、彼が満洲事変から受けた影響を検討する。限られた作品の中に、北村の不安な日々と文学創作の転回点を窺い知ることができる。

1. 不安な日々

1931年9月の満洲事変は、北村にとって大きなショックだったに違いない。発刊予定の『文芸プランニング』第8号は停刊し、北村自身もほぼ半年、作品を発表することがなかった。そのような状況を打破したのが、1932年2月1日に発表された「回想梵太郎山一景」²⁸である。

この小説は、大連・松山台の「阿片王」石本鑽太郎をモデルにしたと思われる梵太郎山の所有者・伊織が、彼の雇う御者の李の美しい娘・麗春を狙ったため、李が気を狂わせていくというストーリーである。梵太郎山と、その麓の果樹園、及び日本人少年の目に映る中国人親子の日常生活など、満洲の風土を捉えるリアリズムの描写と、緊密な物語の構成とによって、本篇はなかなかの力作となっている、5カ所にわたって約40行分の削除が見られ、作品の完成度に大きな疵を負わせている。

この小説は、真正面から中国人に焦点を当てたものとして、北村の全作品の中で珍しい存在である。小説での老李は、山東省から満洲に流れ込んだ移民の一人である。早くに妻を失った彼は、一人娘のことを大切にしている。そのような彼は、主人伊織の傍で仕事をする時、いつも「黙々として御者台の上に身を反らすだけ」²⁹の態度を示す。主人の威勢を借りず、ただ自分の身分に従って行動する中国人庶民の一面を持っている姿として描かれている。しかし、娘を伊織に奪われた時、彼は娘の反対を無視して伊織にユスリをかけようとした。その弱々しくてずるいところも、また、中国人の庶民の性格を巧みに捉えている。

「回想梵太郎山一景」は満洲事変後の北村の最初の創作である。関東州の大連で送った

²⁸ 北村謙次郎「回想梵太郎山一景」、『作品』第22号、1932年2月1日。

²⁹ 同上、33頁。

北村の少年時代を素材に執筆されたこの小説は、明らかに彼の満洲に対する思いを語っている。一方、検閲による削除に遭遇したのも、彼の創作歴において初めてのことであった。北村がどのように対応したか察することができないが、以降、北村文学には伏せ字になった作品はない。

「或日の明暗」は1932年2月、『文学クオタリイ』第1輯に発表されたものである。家族の日常の一日を、陸男という若い男性の目を通して描いている。持病で頭がぼけた父、その世話をする母、従妹の連れてきた3人の子供たちの組み合わせといった、にぎやかな家族風景である。しかし、外地で暮らしていた従兄の離婚した妻が発狂したため、その子・忠彦の面倒を見る人がいなくなった。それがこの家族の問題となった。一家に黒雲が覆われているような感じがするが、忠彦の泣き声で慰められたことにより、この憂鬱な生活にも小さい暖流が流れていることが自覚されてくる。

この小説では、作中登場していない従兄の婚姻生活が問題の要因となっているのだが、その離婚した妻の発狂は、一家にとって予想外のことであった。そのため、従兄の子・忠彦の面倒を見るのはこの家族の責任となる。一見、やや複雑な家庭事情であるが、その経緯には満洲事変の勃発を連想させるところがある。つまり、この家族問題を引き起こした従兄が外地で暮らしていることは、まず、「問題」と「外地」という二つを、一つのつながりとして連想させる。そして、離婚した妻の発狂という「予想外」の出来事は、満洲事変のもたらした意外性と脈通じてくる。そこで読み取れるのは、北村の満洲事変に対する認識のキーワードは、「外地」と「予想外」ということになる。小説の最後、泣いている忠彦に慰められたことは、すでに作者の心境が、事件勃発当時の動揺から、いくらか平穏な状態に変わってきていることを示している。

「青葉を揺る風」は1932年7月、朝日書房から出た神戸雄一の編著『小説・エッセイ』に発表された。二人の子を持つ夫妻の日常生活が、30代の夫・信造の目で展開される。退屈な市役所勤めを止め、会社員となった信造は、いきなりの人事異動で不安に落ち、やっとそこから脱出はしたものの、子供の一人が、外地からの土産品の爆弾で事故に遭う。一見平凡な家庭が、子供の爆弾事故によって、再び「浮世は思うに任せぬ」という境遇に陥としまれる。

この物語には、「満洲」という言葉が2回ほど出てくる。一つは、「満洲」で商売することができたらいいと、信造が期待する場面である。もう一つは、子供の爆弾事故が、「満洲」からの土産品によってが惹き起された個所である。ここで作者は、「満洲」に対して、「利益を生むところ」であり、かつ「危険をもたらすところ」だと認識している。

この3篇の小説では、作者の満洲に対する思い、生活に対する不安などが語られていると見てよいが、北村が『すなつぼ』時代に描いていた、日常生活に対する倦怠感はずで見えなくなり、代わって、「浮世は思ふに任せぬ」という認識が主張されるようになってきた。彼が日常的な生活から脱出し、社会動態を視野に取り入れた創作に向かおうとする姿勢が見えてくる。

2. モダニズム文学からリアリズム文学への転向

上述の、満洲事変から感じた不安などを描いた小説のほか、北村は自分の文学を新しくやり直す動きも始めた。それはリアリズム小説を書くための練習である。

「町役場の花吉爺さん」は1932年6月に『作品』に発表された短篇である。わびしい老人の一日をスケッチしたもの。北村の短篇小説集『帰心』(1943年)に「郊外にて」と改題して収録された。物静かな冬の日差しのもと、花吉爺さんが税金通知を配って歩く姿を描いている。作者は老人への思いをあえて殺し、客観的描写に徹しているようだが、作品構成のバランスがよく取れていない印象を覚える。

「紫陽花色の嬰兒」は1932年7月、『小説文学』に発表された短篇小説である。若い夫婦の生まれたばかりの赤ん坊を主人公とするものである。ひと財産を挙げての結婚式の後、会社の破産で失業した夫は、子供を産んだばかりの妻に相談もせず、自らの手で赤ん坊の息の根を止めるという残酷な物語である。この小説は、赤ん坊についての描写など、幻想的なシーンを多く取り入れているため、ファンタジーふうな印象を与える。

「一家族」は1932年8月、『作品』に発表された。一家の日常生活が26歳の長女の目を通して描かれる。重病の父、受験生の弟、頼りのない母と妹といった家族構成である。作品全体に病人の憂鬱が漂う一方、語り手が受験生の淳一から長女久枝へと転換してしまうのは、この作品の欠点となる。

「喪服の少女」は、1932年9月に『作品』に発表された小説である。作者は、夫を失った女性の葬儀場での行動に焦点を当てている。未亡人になった彼女は人生に茫然としながらも、昔の恋人との10年ぶりの再会によって、再び過去の日々を思い出すことになる。その過去と現在に挟まれた女性の姿をなまなましくイメージ化したところが、本篇の読みどころとなっている。この小説は、これまでの幻想的な女性のイメージとは異なり、登場人物の行動と心理的な動きを中心に展開されていくもので、リアリズム的な作風である。

上述の4篇は「コムポジション」として執筆され、北村の文学修業の試作と思われる。

「爽かな夫」は1934年1月に『草上』に発表された小品である。夏服を妻の兄に譲った夫は、夏でも冬の服を着ざるを得なかった。その異常さが巡査に疑われ、取り調べの対象となった。そのことを妻に打ちあげたが、服の話は口にするにはできなかった。妻の気持ちを配慮した若い夫の姿を描いた一篇であるが、『文芸プランニング』に発表された「あとかたのない想像」の主人公が警察署に泊ませられた一節と似通ったところがある。

「続小さな職業婦人」は1934年4月に『草上』に掲載されたものである。この短篇は女学生から職業婦人になったばかりの人物に焦点を当て、その会話と行動を通して、職業婦人という人物像をスケッチした随筆ふうな掌篇である。

このように、北村は老人、赤ん坊、家族、未亡人、夫、職業婦人などといった人物像をうまく描くために文学創作の技法を磨いていった。これらの小説はストーリーとしての一

貫性がほとんどなく、人物描写だけに力を傾けているように見える。例えば、「町役場の花吉爺さん」では「動作」、「紫陽花色の嬰兒」と「喪服の少女」では「心理的な動き」、「爽かな夫」と「続小さな職業婦人」では「会話」といった描写を通してそのキャラクターを造型すべくと努めている。このリアリズム文学への修業は、北村が『文芸プランニング』時代に試みたモダニズム小説からの脱却を意志していたと言えるだろう。

第4節 大連の北村謙次郎：1934-36年の日記を中心に

北村謙次郎は、生涯において何度も満洲に渡ったが、そのうち、3回の渡満が彼の文学生活に特に大きな影響を与えたと考えられる。その3回とは、幼いころの大連移住、1934年の再度の大連生活、そして、1937年の新京移住である。幼いころの大連行きは、北村の満洲認識に深い影響を及ぼし、「或る環境」（本論第4章参照）というシリーズに素材を提供することとなった。1934年の大連行きは、成年後の北村にとって、東京からの遁走という形をとったが、それは同時に日本文壇から離れるきっかけともなった。3回目の渡満は言うまでもなく、北村文学の最盛期をもたらし、彼を満洲唯一の職業作家に位置づけた。

ここでは、北村の2度目の大連行きを中心に、彼の文学活動の実際、及び彼の初期文学思想の形成について検討してみる。根拠とする史料は、北村の自筆の日記（未公開）である。この日記は概ね二つの部分からなる。1934年2月1日から1935年10月26日まで、その第1部分となるが、うち1934年9月9日から12月18日までの分が欠けている。この部分は、ちょうど北村が大連に渡る前から、東京に戻るまでの記録である。

第2部分は1936年2月4日から1936年12月1日までのものである。その時期、北村はすでに東京で日本浪漫派の集会に参加するようになっていた。しかし、大連行きによって生じた日本文壇との隔たりは、仲間たちから取り残された気持を彼にもたらした。このことから、北村は日本浪漫派に対して、多少の反撥を覚えるようになる。そしてその執筆活動も、経済的・精神的に彼を支えてくれた伊東月草に傾倒するようになっていく。

ここでは、上述の日記に沿って、北村の渡満体験をポイントに、大連に渡る前、大連滞在期、そして大連から帰京という三つの時期区分を通して論を展開していきたい。

1. 大連に渡る前

大連に渡る前の日記は1934年2月1日から始まり、3月31日までの2カ月間である。そのころ、北村謙次郎は満30歳であった。結婚、文学、就職などの問題、満洲に行くべきかどうかという悩みを抱いた日々であった。

日記では、北村の縁談をめぐる記述が、2月26日まで目立って多い。それによると、彼は「ヨシ子」という女性に憧れていて、家族揃って、その縁談を積極的に進めていたことが分かる。父から「秋山オバさん」に、母親から「竹中女史」に仲人を頼んだが、相手に

きっぱり断られたため、その話は破談となる。当時は戸籍を自由に調べられる時代だったので、北村は早くから、相手の戸籍謄本を入手したり、相手の家庭事情と自分たちの将来のことなどについて、深く考えたりしていた。そして、日記に「いまのところ私の「夢」を破ること非常に大なるものがある。此の問題当分熟考の余地ある」(1934年2月2日)と書き記した。「私の夢」については具体的に言及していないが、彼の作家志望のことだと推測される。30代の北村が、縁談よりも「夢」の方を大切にしていたことがここから窺える。また、縁談が引き起こした家族間の緊張ぶりについて、北村は、「現実とは何処まで意地悪く出来てるものなの分らん気がする。あくまで人の夢を破るべく出来上がってるんだ」(1934年2月7日)と憤慨している。

縁談に左右される心持ちは、3月に入ると殆ど日記から消えてしまう。代わって、作家生活に集中するようになる。それは、日記が始まってから絶えることなく続いている読書と創作活動からなる。読書において、北村は外国文学に強く偏った傾向を示した。例えば2月2日からストリンドベリの「大海のほとり」を読み始め、その後も、シェイクスピアの「ハムレット」、「ロミオとジュリエット」、「十二夜」、「ヴェニス商人」、モリエール「ドン・ジュアン」、「シチリア人」、ゾラの「居酒屋」、ボードレールの詩などと、幅広く読んでいた。また、日記のあちこちに、読んだ本の気になった個所や自分の感想・評価などをメモしている。ここから北村の文学修業の道程を幾分なりとも窺うことができるだろう。

当時の文学活動といえ、伊東月草主宰の俳誌『草上』に寄稿した随筆が何篇かあるが、それ以外、この時期に活字化された作品は見当たらない。旧稿を書き改め出版社に送ったものの、失敗に終わる。新しい構想のもと、小説を書こうとしたが、これも実現していない。北村は、また「作品パンフレット」の計画も立てている。自作を小冊子に印刷し、頒布し、世に問おうとする試みであったかと思われる。それを実行するには東京の方が有利であるが、満洲のほうが経済的にいけそうな感じだと日記に書いていたものの、結局、実行はできていない。

縁談話が破れた後、北村は酒癖がだんだんひどくなっていた。酔ったあげく母の前で乱暴したり、兄徳太郎の家で暴れたりしたこともあったが、精神状態も健康状態も衰弱気味であったように見える。兄からの就職相談がそのころにあった。知人の大学教授や文部省の某課長を訪ねたりする兄の積極的な行動に対して、北村は黙って後ろについて行くだけであった。しかも、その裏側では、兄の行動に抵抗する気持ちを抑えがたかった。その在りようは、北村の後年の長篇小説「春聯」に登場する鋳作兄弟と妙に通じるところがある。

北村の大連行きという考えは、日記の最初から出てきているが、3月17日ころまでによく決心がついたようで、24日に出発すると書かれている。しかし、その前日の23日、彼は兄と面談し、「渡満しない」とを告げた後、また「やはり行くことにした」と兄に電話するような不安定な心理状態だった。その慌しいスケジュールは、両親に対する親不孝を北村自身に痛感させながら進められた。そしていよいよ27日、北村は、特急「つばめ」で東京を発ち、神戸、門司を経由、大連航路ウラル丸の客となって大連に向かった。

2. 大連滞在期

大連に着いた北村謙次郎は、伯父・元太郎の家に滞在して、新しい生活をスタートさせた。彼は、大連一中時代の友人の金丸精哉や大庭武年を訪ねて交友範囲を広げると同時に、求職のための履歴書を書いたりして、新鮮な気分で大連の生活を楽しんでいた。しかし、その新鮮さも2週間と続かなかつた。4月15日から、彼は落ち着かなくなってくる。言いしれぬ寂寥感、幼稚なセンチメンタリズムを味わうようになった。特に東京の世田ヶ谷から届いた小包と手紙は、彼の郷愁をたびたび惹き起した。いくら酒を飲んでも癒されることのない寂寥感は、そのころの日記の随所に現れている。

就職するまでの4カ月、彼は猛烈に読書していた。自作に対して「満蒙色がない」と金丸に指摘されたせいも、その読書傾向は、西洋文学から中国関連のものに変わった。大連図書館に勤める大谷武男の推薦で、波多野乾の『支那劇五百番』、『三国志演義』、『支那民俗記』、『支那現代思想』、『支那趣味の話』、『支那文化の解剖』など、中国に関する初歩的、啓蒙的な書物を読むようになった。また、東京で出ている文芸雑誌に目を通すことも欠かさなかつた。『文藝』、『改造』、『文藝春秋』、『新潮』などといった類である。日本文学もよく読んでいる。夏目漱石の『明暗』、森鷗外作品集、石川三四郎の随筆、岩野泡鳴の『悲痛の哲理』、谷崎潤一郎の『春琴抄』、相馬泰三集、徳田秋声集、石川啄木集、近松秋江、藤森成吉、永井荷風など。外国文学ではダンテの『神曲』、『魯迅全集』などにも触れている。

そのころの北村の文学活動といえば、東京の『草上』に寄稿し続けたほか、大連の『新天地』、『協和』、『満蒙』、『大連新聞』にも寄稿するようになった。特に『満蒙』については、「待遇悪く、ミスプリント多し。憤慨する」（1934年6月27日）と記したこともある。また、文学者たちとの交流では、東京の瀧井孝作、室生犀星、井伏鱒二、太宰治、木山捷平などに手紙や葉書を出し、大連では金丸精哉、大庭武年、大谷武男と付きあうほか、大連図書館の文学集會に出席したり、大連新聞社の文芸部の会にも顔も出したりしていた。そのほか、安西冬衛といった文化人を訪ねたりすることもあった。その時、北村は安西を「不快な男」と日記に記している。

5月下旬、北村は早くも大連での生活に飽き、東京に帰りたくなっていた。「此の土地に飽いたきもちやしきりに帰京を促さうとする。無意味な生活清算して帰京の日を早め度い。就職なんか私の本当のきもちから遥に遠いものであつたことを今さらの如く考へる。一生ウダツの上らぬ世界に芸術良心をとぎすまさうとする純情にのみすがらう」（1934年5月26日）。6月に入ると、酒癖が次第に高じてき、同居の親戚に迷惑を掛けそうになった。帰京か、一年間頑張ってみるか、または転居かと考えるようにもなった。そして、9月に帰京しようと決め、伊東月草に就職依頼の手紙を出した。その7月、北村は、満洲日報社の社員募集に応募したが、試験に失敗し、挫折感を強く味わった。「東京を離れるぢやなか

つたと思ふが（中略）負け惜しみさへ、人生には重大な気概ではないか」（1934年7月17日）と繰り返し自分を責めたり慰めたりしていた。北京の話はそのころに出てくる。彼は金銭の工面がつけば、北京に行きたいと思ったようである。そのようななか、8月24、25日ころ帰京と決まり、彼はそのことで再び動揺する。ちょうどその時、満洲日報社から『満日年鑑』の編集という仕事の話が来た。臨時囑託で、3カ月間、月給70円という条件であった。「情けない」と思いながら、彼は抵抗なしにそれに応じた。

こうして、北村は人生で初めての職業に就いた。その喜びを最初に分かちあったのは金丸精哉であった。金丸はビール一本を「これつきりないが」（1934年8月24日）と言いながら、二人の杯に注いだ。その日の夜、兄に電報した。翌日、兄や父に手紙を出して出社した。「初めてのサラリーマン生活だが、ただ退屈と阿呆らしさと少しばかりの憤慨を感ずるのみで、面白くもをかしくもない（中略）ペンとる生活は当分望めないものとあきらめる」（1934年8月30日）、「なんといつてもきまつた仕事もないくせに、ちやんと机の前に坐つていなければならぬ」（1934年8月31日）と不満を漏らしたが、9月4日父よりの来信を読んで、「両親を喜ばす事など珍らしい。こんなことでそんなに喜ばす事ができるなら、これもまたよからんと思ふ」と書いている。その後、同僚との付き合いや、下宿が見つからないことなどで悩んだり、通勤電車に乗るのにも臆病になったりしたが、『満日年鑑』の仕事は12月ころまでやり続けた。その後、北村は引き続き満洲日報社に勤めることになり、新聞記者として働くことになった。

新聞記者は外回りが多く、材料探しに大連の多くの人を訪問する。それは、北村にとって、退屈な生活ではなかったようだ。彼は「社の仕事は満足で、且つ不満だ。いつでもやめられるといふ此の気持ちは一種の強味なんだろう」（1935年1月16日）と日記にメモしている。そのころの同僚に吉野治夫がいた。二人は一緒に酒を飲んだり、文学談を交したりすることで、深い友情を結ぶようになった。3月中旬、北村は木山捷平から『日本浪漫派』同人への加入を勧められ、「よからう」と承知の返事を送った。胃腸が弱かった彼は、そのころから体調を悪化させ、ほぼ毎日のように大連病院に通う始末だった。給料も足りなく、兄に無心状を出したり、父親に手紙を書いたりすることが時々あった。

7月、満洲日報社は「満洲日日新聞社」に改組され、北村も外勤の多い部門から内勤に移ることになった。それに対する不満から、彼は仕事をやめ、東京に帰ることにした。

3. 大連からの帰京

東京の世田ヶ谷に戻った北村謙次郎は、体調が徐々に回復していった。また、精神状態も、大連にいたころの焦慮感とは違って、かなり落ち着くようになってきた。日記では、周りの環境、または気候の変化などについて、細かく観察したものが増えるほか、芸術論も長文のものが多くなってきた。

そのころの北村は、伊東月草から紹介された『俳諧新辞典』（太陽堂、1939年）の編集作

業が経済的な一助となっていた。しかし、「辞引の仕事なんて、どうも思つたより厄介で、早く三分の二ぐらゐまで片付けないとどうにも肩の重荷のおりぬ感じだ。いらいらする」（1935年9月23日）といった、仕事上の重圧感が、時々日記に漏らされている。

一方、辞典編集から得る収入は、北村にいくらかの金銭的自由をもたらした。両親のもとに身を寄せていた彼は、その仕事から得た収入によって、日本浪漫派の会合にも参加することができたし、たまに小旅行を楽しむゆとりもできた。日本浪漫派の集会は月に1回だった。北村は気分によって欠席することも度々であった。出席する時には、主に檀一雄と木山捷平と一緒に酒を飲んでいて、そして、後日、日記にそのことを記した。例えば、「昨日、浪漫派同人会。どうも気もちが退嬰的とみえて、会が面白くなく、いつの会でも後悔して帰り、書齋にこもるよさのみ考へる。僕らは結局、古風な文人氣質で孤独の文をやるやふに生まれるとから決定してゐるのかもしれない」（1936年4月25日）、「昨夜浪漫派の会。会などある度に非社交性を発揮して失敗する。（中略）要するに、僕の力が正当に認められないことは、いろいろ障害を惹起してゐるやうだ。（中略）独自の行き方は、あくまで大切なものであらうと痛感する」（1936年9月29日）。また、「昨夜は月見の会だとて、誘つておいたK・S³⁰が突然来ないことに（来る筈のもの）先夜の浪漫派の会以来の妙にこぢれた気分（同人としての利害損得、功利的な男である印象）が、そのやうな結果となつたのであると考へ、（中略）結局、僕は僕の一人の道を進むべきであると考へ、その意味では何も同人である必要もないと考へ、林房雄の統制下にある浪漫派などクソくらへとも思つて、割にのんきになつたのであるが、これによつて、K・Sの卑劣な感情を知つたことは、僕の進歩でもあるが、一面人間の淋しさを感じさせる一因ともなつたのである」（1936年10月1日）と、日本浪漫派に対する反撥も現れている。

その時の北村は相変わらず『草上』と『日本浪漫派』に寄稿していたが、たまには、「浪漫派へと思つたものを撤回して、やはり例月どおり草上宛のものとしたのは、浪漫派に漂ふあの「どうでもよし」主義が結局、たまらなくなつたせむと思ふ」（1936年6月4日）といった行動をとることもあった。文壇でもっと活躍したいという気持ちも、そのころ湧いてきたようである。例えば、「朝日学芸欄に伊東月草の評論あり。（中略）他に小林秀雄、井伏鱒二などの諸公の文あり」、「僕の文章の載るのはいつのことか分らない」（1936年6月19日）。また、1936年7月11日、北村は、上野「精養軒」で催された太宰治『晩年』出版記念会に出席した。「会場で「この窓ぎはの席は、不遇作家の腰かける所」と今官一がいふ。佐藤春夫、太宰、山岸、僕、今、中村地平、その他が坐つてゐる。（中略）帰途、タクシーの中で井伏先生が「愚痴をこぼすまい」と云ひながら、先生自身なにやら愚痴をこぼしてゐた」（1936年7月13日）と日記に記している。

1936年11月、北村は、創作に自信を失い、満洲に渡りたいと考えるようになった。日記では「創作力はまるで失はれて了つた感じだ。書くことにさほどの魅力がない。困つたものである。ぼんやりと、再び満洲への旅に上らんか。その旅の想ひのみ心を誘ふ」（1936

³⁰ 「K・S」とは木山捷平を指すと思われる。

年11月13日)というふうには書いている。

創作意欲の減退もあって、なんとなく現状から脱出したいといった口ぶりだが、おそらく北村は焦慮していたのである。30歳をとっくに超えたのに、定職も持たず生活は不安定、結婚もできない、文学上の仕事においても、いつ自分が作家として立つことができるのか、先が見えてこない。そうした焦りが、結局、彼を満洲国に追いやることになる。

以下、次節では、北村謙次郎の『日本浪漫派』に関する文学活動に焦点を絞って見ていくことにする。

第5節 『日本浪漫派』：満洲国に渡るまでの文学活動

1. 『日本浪漫派』への参加

1934年12月、『青い花』の創刊号が、海をはるばる越えて、大連に滞在していた北村謙次郎の元に届いた。彼も同誌の同人であった。薄っぺらな小冊子で、随筆が多く、小説は太宰治の「ロマネスク」1篇しか掲載されていないといった状態は、北村を驚かせた。かつて自分の主宰した『文芸プランニング』と比べても、かなり見劣りがする。北村は、東京に帰って太宰を助けたいとする気持ちを抑えかねた。

しかし、『青い花』はその1号のみで幕を閉じた。会費も同人の原稿も集まらなかったからだ。終刊後の『青い花』は、中谷孝雄と山岸外史の斡旋で、『日本浪漫派』第3号と合流することになった。前に触れたように、大連の北村は、木山捷平のハガキでこの合流事件を知り、成り行きに任せて『日本浪漫派』の同人になることを了承した。

1935年7月ころ、北村は東京に戻った。しかし、文壇での活動に期待を込めていた彼が直面したのは、かつての仲間である太宰治に無視されていた現実である。のちに太宰は、「純文芸冊子「青い花」は、そのとしの十二月に出来た。たつた一冊出て仲間は四散した。目的の無い異様な熱狂に呆れたのである。あとには、私たち三人だけが残った。三馬鹿と言はれた。けれども此の三人は生涯の友人であつた。私には、二人に教へられたものも多く在る」³¹と書いている。そして、太宰の友人である山岸外史は、「この三馬鹿というのは、これはまちがいなく、太財(太宰治)と団一穂(檀一雄)と僕のことである」³²と自慢したという。それを知った北村は、「はるばる海の彼方から、おっとり刀で駆けつけた寿々雄(北村)の存在は、いったいどういう恰好のものだったろう(中略)彼こそ三馬鹿以上の馬鹿一だったのである」³³と、怒りを覚えた。つまり、北村は、大連に滞在している間に、太宰

³¹ 太宰治「東京八景」、『東京八景』、実業之日本社、1941年5月3日。

³² 北村謙次郎「浪漫の頃(3)海の彼方」、『索通信』17号、2014年5月10日。その二人が山岸外史と檀一雄であることについて、丸地守の「『青い花』覚書」(『青い花 第四次63号—太宰治誕生100年記念—詩・小説・エッセー』、丸地守、2009年7月20日、4頁)にも記されている。

³³ 北村謙次郎「浪漫の頃(3)海の彼方」、『索通信』17号、2014年5月10日。

治をはじめ、日本文壇での居場所を失っていたのである。

北村が大連から東京に帰った理由の一つとして、太宰治の『青い花』に対する同情、もしくは友情が彼の内に働いていたことがあった。だから、「三馬鹿」という、明らかに北村を排除した太宰たちの認識は、彼にとって裏切りとしか見えない。

その後、北村は、毎月1回の日本浪漫派の会合に出席するほかは、太宰たちと親しく交流する姿が見られなくなった。また、日本浪漫派の会合に対して、北村はほとんど親近感を持っていなかった様子も日記から読み取れる。

「古い馴染みは少なく、それはどうしてもすでに「青い花」であるより「日本浪漫派」本来の色調であった。太財（太宰）は注文原稿が忙しいのだろう。そろそろそういう会には、顔を見せなくなっていた。いや、彼こそいち早く「日本」浪漫派にそぐわぬ何かを肌近く感じ出していたのだったろうか（中略）寿々雄はどこか坐り心地悪い思いをすることが多かった」³⁴。

当時の日記ではあまり漏らしていなかった『日本浪漫派』に対する不満について、上の引用に見るように、北村は戦後になって初めて述べるようになった。『日本浪漫派』の思想的傾向、すなわち、その「日本（主義）」的な性格について、太宰が違和感を覚えたと同様に、北村もまた、その「日本」的要素に反撥するところがあったのである。

そういう寂しい心境にあった北村を支えたのは、伊東月草の温かい友情であった。月草は帰京したばかりの彼に『俳諧新辞典』の編集という仕事を紹介した。北村は、月草の好意を一生忘れていない。1939年、東京で結婚式を挙げた際、北村は月草一人だけ招待している。そのあたりからも、彼がいかに月草に恩義を感じていたかが想像されよう。

月草との親交が北村の創作に与えた影響といえば、『日本浪漫派』への寄稿よりも、『草上』の方を優先するに至ったことである。彼は、作品によってではなく、人情によって寄稿雑誌を選択するという姿勢をもっていたようだ。また、北村は『満洲浪漫』の編集にあたって、月草に原稿を依頼したこともあった。満洲の文化人を執筆者とするその雑誌に、月草の俳句を掲載したということは、彼が人情を重視する人間であったことを窺わせる。

このように、『日本浪漫派』は、北村にとって、日本文壇と接触する一つの手段に止まっていたと察することができるだろう。彼は、『日本浪漫派』の「浪漫」という言葉は好きだったらしく、満洲に渡っても『満洲浪漫』を創刊したり、自分の部屋を「浪漫亭」と名づけたり、戦後でも「浪漫」というペンネームを使ったことがあった。

2. 『日本浪漫派』における創作

『日本浪漫派』において、北村謙次郎は小説6篇、随筆など5篇を発表した。ここでは、発表順に沿ってそれらの作品を紹介する。そのうち、「旅情の歌」、「贅沢な囚人」、「終日」、

³⁴ 同上。

「蝶蝶」4篇については、次節でさらに詳しく論じる。

「旅情の歌」は『日本浪漫派』第1巻第4号(1935.6)に発表された小説である。ある植民地都市に暮らす青年ジョージの郷愁めいた日々を、八つの小品から織りあげている。物語はジョージの「彷徨」の日々から始まり、「死相」でクライマックスを迎え、「口笛」の縁談の話から「このまゝこの小さな町で、一生を送ることにきめた」³⁵と覚悟するところまで一篇は幕を閉じる。この小説は、よく吟味された言葉と、しゃれたストーリー展開によって、北村の創作の中では、異色の存在として注目される。

「贅沢な囚人」は、『日本浪漫派』第1巻第6号(1935.8)に発表された小説である。「殺人容疑者」に擬せられた「私」は、周りからの視線に気を遣ううち、いよいよ自分が「犯罪者」であると思うようになっていく。ちょうどその時、親友が自分こそ真犯人であると自白し、内地へ帰ることを告げた。タイトルの「囚人」には二重の意味がこめられている。一つは、妄想によって「殺人犯」だと自認する自分のことを指すが、もう一つには、「生活囚人」としての自分を指している。特に後者は、北村が『青い花』に書いた随筆「われ失ふ」における「生活の囚人」という意識にも繋がっていると思われる。

「盛夏フラグマン」は『日本浪漫派』第1巻第6号(1935.8)に掲載された。この随筆全体は、いつもの憂鬱感に覆われがちのものとは異なり、明朗、快活である。大連で新聞記者を務めていたころの様子を描いたものと見られる。平穏な暮らしの中、酒を飲む癖を治したくても治せない自分や、取材のために訪ねた図書館の女性に抱く、作者自身の人生の中でもあまり多くなかった恋心を巧みに表現している。最後に、大連の作家・三宅豊子(『作文』同人)の創作にも触れている。このように、大連についての文章を『日本浪漫派』に執筆するということは、東京・大連間を行き来していた時期の北村の精神のありようを検討するには適切な材料となるかもしれない。

「茱萸」は『日本浪漫派』第1巻第7号(1935.10)に発表された小説である。創作に苦しむ「私」は東京を離れ、ある村を訪ねる。そこで出会った娘、お園に片恋をする。ある日、二人は一緒に山に登り、お園は路傍の茱萸の実を「私」に採ってくれるが、そのまま姿を消してしまう。お園を探しあぐねて、その家を訪ねてみると、「私」を迎えた彼女は「今日は一步も外にでていない」と言うのではないか……。現実と幻想が重なり立ったような、ミステリアスな雰囲気なたたえた一篇である。現実と幻想が混在するロマンチズムは、北村文学を特徴づける一つの性格だと見てよい。

「終日」は『日本浪漫派』第1巻第8号(1935.11)に掲載された。この小説では、関西の海岸療養地で暮らしている若夫婦の日常生活が描かれている。従妹の相談に乗ってあげたり、友人と海辺で遊んだりしている主人公・慶一は、一見普通の生活を送っているように見えるが、実は、持病を抱えた療養生活者である。そういった日々を打破したい慶一は、自分の健康状態を楽観視し、療養生活をやめようと考えていたところ、突然、妻の淳子が「咯血」したことを知らされる。「青葉を揺る風」に一脈相通じるところがあり、実生活の

³⁵ 北村謙次郎「旅情の歌」、『日本浪漫派』第1巻第4号、1935年6月1日、84頁。

不安から脱出することができないという認識がテーマとなっている。

「蝶」は『日本浪漫派』第2巻第4号(1936.4)に掲載された随筆である。この短文は、いくつかの断片から成り立っている。芸術家の姿勢の問題、好きになりかけていた女性の死について、梅の門の俳句や緑川貢の「初恋」、伊藤佐喜雄の「花宴」の一節など、日ごろ作者の関心に触れたものを一つ一つ取り上げ、その最後に、いま自分が構想中の小説を紹介して、そのタイトルを「蝶」と名づけた。しかし、これまでの論者の調査では、北村がそのようなストーリーの小説を残した形跡は見当たらない。従って、この小説はおそらく構想だけにとどまったものと推測される。

「三重吉のこと」は『日本浪漫派』第2巻第7号(1936.9)に掲載されている。自分の作品が鈴木三重吉の作風と比較されたのをきっかけに、北村は初めて鈴木三重吉の作品を読んだ。そして、「こんなユニークな作家が日本にもゐたのか、驚き感つた(中略)三重吉の世界が、一種端睨すべからざる雰囲気やを伝へてゐる」³⁶と感嘆した。とりわけ、北村は三重吉の作品の中の女性像に注目し、「私の描きたいのも結局そんな風な——といつて解らなければ奥様に叱られる割烹着姿の女中や、亭主別れをする憂愁夫人や、なにやかやそういった可憐な女どもの世界である」³⁷と自ら作りたい女性像を語っている。

「桐の木横町」は、同じく『日本浪漫派』第2巻第7号(1936.9)に掲載されたもので、伊馬鶯平の戯曲集『桐の木横町』について述べている。伊馬の人柄と作品を照らし合わせ、作者の寂寥感と、作中で展開される東京の下町の風景を取り上げつつ、同書の読みどころを巧みに指摘した。

同じ見開きには、緑川貢の「桐の木横町」を薦むも掲載されている。緑川は、同書から劇曲一篇を取り上げ、作中人物の性格や会話の巧みさを高く評価した。それに比べると、北村の方が、伊馬とその作品世界に対する理解が一段と深いように見える。

小説「奴婢」は『日本浪漫派』第3巻第1号(1937.1)に掲載されている。30代の附添婦の娘時代の回想物語である。17歳で東京に出て、女中としての素養を身につけた田舎娘の精神の成長ぶりが語られている。この小説に描かれた世界は、ちょうど「三重吉のこと」で言及されたような「奥様に叱られる割烹着姿の女中や亭主別れをする憂愁夫人のやうな可哀さうな女どもの世界である」。この「奴婢」の最初のイメージは、「眠られぬ夜々」³⁸に登場する女中だったとも推測される。

「蝶蝶」は『日本浪漫派』第3巻第3号(1937.4)に掲載された小説。「蝶蝶」を子供たちは「てふてふ」(チョウチョウ)とか「てふちよ」(チョウチヨ)と呼ぶが、その「幼げで哀れつばい響き」³⁹は、自分の「郷愁」の思いと通いあうものがある、と作者は言う。その「郷愁」が本篇の基調となっているわけだが、内容的には、植民地大連における「僕」

³⁶ 北村謙次郎「三重吉のこと」、『日本浪漫派』第2巻第7号、1936年9月1日、78頁。

³⁷ 同上。

³⁸ 北村謙次郎「眠られぬ夜々」、『作品』第2巻第8号、1931年8月1号。

³⁹ 北村謙次郎「蝶蝶」、『日本浪漫派』第3巻第3号、1937年4月1日、4頁。

の交友記といったものである。会社員の「僕」、同僚の S、鉄道会社勤務の G、画家の K たちとの付き合いを通して、外地で生活する日本青年の行動と精神状態を描き出している。

『日本浪漫派』第 3 巻第 4 号に掲載された「愁情小記」(1937. 5) は、北村が同誌に発表した最後の随筆である。ここで北村は「不満」という言葉を取り上げ、作家の創作精神について語った。彼は不満の対象を言明してはいないが、その不満の気持ちこそ作家精神の母体となるものだと主張した。

以上、北村謙次郎が『日本浪漫派』に発表した作品のすべてである。このころの北村の作品は、小説にも随筆にも独自の風格が現れている。特に小説では、常に新しいスタイルを模索していく挑戦的な姿勢を示していると言えよう。

3. 満洲国へ行く

ここでは、先に触れた、北村が『日本浪漫派』に発表した 4 篇の小説を取り上げて、彼の満洲国に渡る以前の心情を探ってみる。

「旅情の歌」は複数の小品から成っている。これらの小品の中には掌篇小説と呼んでいいものもあり、幻想文学の範疇で読まれるべきものも含まれている。そして、その主人公は、「ジョージ」(George) という名で呼ばれる日本人青年なのである。

ジョージを主人公とする、この一連の小説を、論者は今、「ジョージもの」と呼んでおくことにする。そのうちの一篇「エトランゼエ」において、ジョージは、旅順の満鉄ヤマトホテルらしいところの庭園で、パリから満洲に旅してきた 3 人の少女たちと出会い、彼女たちと楽しくロンド(輪舞)を踊り続ける。いかにも、植民地都市に生きるモダンボーイといった風情のジョージなのである。そのイメージには、作者のデビュー作「ノスタルヂア鈔」の主人公と一脈相通ずるものがある。

中でも問題作と思われるのは「死相」である。ジョージが乗る自動車が夜の郊外を走っている。後から別の自動車が追ってきて、2 台の車が接触して横転する。ジョージは意識不明となるが、一方、新聞に出た、自分の即死を報せる記事を読んでいるのである。彼は幽霊となって、それまでの日常生活を続けていく。勤め先の新聞社に行き、ラジオ欄の編集をやる(このあたり、作者の北村の実体験と重なっている)。午後は探訪記事の取材で外を回る。退屈な日々である。

では、作者の北村は、この「ジョージもの」で何を言おうとしたのだろうか。北村は作中、モダニスト青年ジョージを死に至らしめる。つまり、北村はここで、みずからの内なるモダニズムを抹殺しようとして凶ったのである。それは、彼のモダニズム文学からの決別の宣言であったと理解することができる。北村文学におけるモダニズムの蹉跌であった。

「贅沢な囚人」は、大連で発生した「医博児玉誠邸殺人事件」からヒントを得たものと思われる。「医博児玉誠邸殺人事件」とは、1933 年 9 月 5 日の深夜 11 時ころ、医学博士児玉誠邸で起こった、児玉の妻・勝美をめぐる情痴事件である。当時、大連の新聞や日本

内地の新聞に大々的に報道されたが、いまだ不明な点の多い事件であった。この事件が地方法院で裁判された時の陪席判官・平井孝雄は、のちに大連の同人雑誌『作文』に参加して、加納三郎というペンネームで評論などを書いていた。加納は文学者の目から見たその事件を、原稿用紙 30 枚にまとめたが、日本に引揚げる際に紛失したという。それを讀んだ大谷武男は、「裁判官を真すぐにみる勝美の瞳が澄んでいた」⁴⁰と加納が書いていたと述べたことがあったそうだ。

北村は、1934 年 3 月末、大連に到着したのであるが、「医博児玉誠邸殺人事件」の経緯について、どこまで詳しいことを知っていたか判明できない。しかし、「贅沢な囚人」からは、シンプルなストーリーの中、「医博児玉誠邸殺人事件」の影を窺い察することができる。

この小説の主人公は、家族を離れて植民地で一人暮らしをしている、内気で小心な男性である。新聞社に勤めていることから、この人物には『満洲日報』記者時代の北村と重なる部分のあることが想像される。

また、内容から見て、この小説では真正面からその事件を扱ってはなく、「容疑者」の一人になった「私」の心理的な変化を中心にストーリーを展開していく。それを通して、植民地に生きる人間の寂しさと頼りなさを描き出し、作者自身が、そのような生活から脱出できない「囚人」に過ぎないという思想を表している。

その「囚人」に対する認識には、二重の意味が含まれている。一つは、「殺人事件の囚人」であり、もう一つは、「生活の囚人」である。

その一つ目に対して、容疑者である「私」は最初に否定していたが、その後、徐々に動揺していく。動揺させた理由の一つは、他者からの視線、及びそこから感じ取った社会全体からの視線である。「自分は差別された。自分は孤独である」というような認識が次第に彼の心を占めてきた。そのような自分を甘やかしたいため、彼は殺害された女性に対して親近感を持つようになっていく。だが、事態の展開に伴って、彼は「自分が真犯人だ」というふうに妄想するようになった。それは明らかに現実に対する妥協である。その背後には、「真犯人になったら、大連から脱出して、日本内地に帰ることができるのだ」という潜在意識が潜んでいる。

その二つ目には、主人公が職場の上司言葉に対して、「おれはたゞの月給生活者に過ぎない。たゞその給料に対して、一日何時間といふものを身売りにした奴隷に過ぎない」と反発するところに示されている。人間がいずれも現実生活に縛られていることを皮肉に述べ、それは、作者の資本主義に対する抵抗と解釈しても過言ではないだろう。このサラリーマン生活に対する認識は、北村の生涯に大きな影響を与えた。のちに彼が満洲国唯一の職業作家になったことも、その認識ものであった。

小説の最後で、友人が犯行を自白して、日本内地に帰ることになる。「私」一人が、この植民地に残されたのだった。本篇において北村は、植民地暮らしの孤独な心情と、そこから脱出したい気持を語った。このように、「私」の妄想も幕が閉じられ、植民地大連からの

⁴⁰ 松原一枝『大連ダンスホールの夜』、中公文庫、1998 年 5 月 18 日、152 頁、孫引き。

脱出も失敗したことが明らかとなる。

1935年7月、北村は大連の新聞記者の仕事をやめて東京に戻った。両親と一緒に暮らすことになった北村は、大連にいた時の酒癖から体調が悪化にしていたが、それも徐々に回復し、伊東月草の紹介で『俳諧新辞典』の編集を手伝っていた。だが、日本文壇に対する距離感は、彼に焦りを覚えさせた。そのような日々は、北村に言い知れぬ不安をもたらした。それを示したのが、「終日」一篇であった。

「終日」は、関西の海岸地方で療養生活を送る若夫婦の日常生活を描いた物語である。この小説で、北村は、重い潮の香りに満ちた、閉鎖的な空間を作ってみせた。そこには友情もあり、愛情もあり、家族愛も混じっているが、登場人物のそれぞれの生活がかもし出す何か息苦しいものが発散している。その点について、太宰治は「絶対の沈黙。うごかぬ庭石。あかあかと日はつれなくも秋の風。あは、ひとり行く。以上の私の言葉にからまる、或る一すぢの想念に心うごかされたる者、かならず、「終日」を読むべし⁴¹と評価した。

登場人物については、北村は、慶一と淳子の家庭を主人公格として描写しているが、個々の人間に関しては、特に誰が重要人物といったような書き分けがなく、そのような人物配置は、後年に書かれた長篇小説「春聯」と似ている。しかし、この小説は、「春聯」の登場人物のばらばらとした感じとは異なり、人々を家庭という一つの舞台に立たせ、その上で、作者は彼らの動きを観察する。その見えない線で織りなされた舞台と人物像との関係から、作者の巧みな創作技法が窺える。

例えば、妻の淳子は、まず、夫・慶一の不機嫌の要因として初登場する。その後、慶一と従妹・多嘉子との話の中で引き出された大阪の姉の視点に切り替えられ、その姉の目に映された淳子は、わがままな現代的な女性と見なされる。それらを前置きにし、淳子はようやく実家の母との会話の中に姿を現す。帰途のバスの中で、淳子の心理状態と現在の葛藤が詳しく描かれる。そして最後に、「家庭」という舞台に登場する。その描写の視線が遠距離から近距離へと接近していくことによって、登場人物の家庭関係の中での形象は少しずつ具体化されるようになった。それは北村の創作技術の上での大きな飛躍を意味するものであった。

また、友人の平田は、慶一たちの療養生活の観察者という役割を担わせられている。その人物設定は、「春聯」の鋳作という観察者に類似している。しかし、鋳作という存在は、読者に違和感を与えるところがあったが、この小説における平田の場合は、そのような違和感をもたらすことは全くない。その理由は、もう一人の来訪者である従妹多嘉子の登場と関わっている。つまり、一つの家庭に、若夫婦以外の余所者が二人以上登場すれば、その二人は互いに各自の存在感によって、その家庭に対する違和感を薄めさせる。加えるに、その二人は、家庭の中の主人公と複雑な関係を持っている。従って、彼らの登場は、その側面から、その家庭に纏わる社会関係の濃密さを読者に明らかにしてくれる。とりわけ、

⁴¹ 太宰治「碧眼托鉢（一）——馬をさへ眺むる雪の朝かな——」、『日本浪漫派』第2巻第1号、1936年1月1日、71頁。

平田という人物は、北村の創作歴における初めて登場する「余所者」としての存在であった。

そのように、作者は、家庭という目に見えない社会関係で結んでいた環境が人に対する束縛を訴え、その環境から脱出して、自由に生きることの出来ない挫折感を伝えた。

北村は、1937年8月中旬に満洲国の首都・新京に渡った。「蝶蝶」は、彼が新京に渡る前の最後の創作である。それまでに北村は、大連から脱出できない男を「贅沢な囚人」に書き、療養生活に縛られた慶一を「終日」に描いたが、いずれも、自分の思い通りに生きられない人物であった。しかし、本篇の「蝶蝶」で作者は初めて、友人と別れて、一人で新京に赴くという人物像を作り出した。言い換えれば、北村はこの小説をもって、ようやくこれからの道を見出すようになったといえる。

「蝶蝶」は、構成的には、6つの部分からなるが、作者の筆は、登場人物のそれぞれの面貌を描くことはなく、主に佐伯という人物に集中している。

佐伯は「私」から見て「不可解」な性格の持ち主である。仕事にまじめで、恐ろしく無愛想で、時折横柄になるイメージが強いが、人間関係においては、好きな人に対しても「淡泊以上の無関心さ」を示したり、親しくない同僚を慰めて話を聞いてあげたりもする。特に、「私」に対する友情を、憧れの女性に告げるといふ神経質な側面も有している。このような佐伯は、結局、大連を去って新京に行くことになる。

この小説は、「贅沢な囚人」や「終日」と比べると、かなり開放的な物語である。第一人称の「私」が登場しているが、あくまでも観察者の立場である。その観察された対象は、佐伯である。というのは、「私」に不可解の人物は、作者には分りやすい人である。北村が意識的に「私」の存在を薄めて、佐伯の不可解さを強調したのは、佐伯に自分の理想を預けたからである。従って、小説の最後に、佐伯が大連から脱出して新京に行った行動からは特別な意味が読みとれる。

面白いのは、この小説には、「ノスタルジア風な回想」という言葉が使われている点である。北村の初期作品の最後的一篇となるこの作品は、日本文壇にデビューした最初的一篇「ノスタルジア鈔」と呼応している。

このように、北村は「旅情の歌」をもって自らのモダニズムの「死」を宣言し、「贅沢な囚人」から「終日」を経て、「蝶蝶」にたどり着き、自分の思想の展開のプロセスを語った。それは、大連ではない、東京でもない、満洲国に行くという自分の居場所を探る道筋なのであった。

まとめ

前述したように、北村謙次郎は1920年代の東京において、本格的な創作活動を開始することになる。その初期の作品（『すなつぼ』での創作）はまだ習作の域を脱していなかったが、北村文学の特徴となる感覚主義的な表現は、すでに、そこによく示されていた。そ

の文学表現は、1920年代後半の日本文壇を主導するモダニズム思潮の影響を受け、やがて彼が創刊する個人誌『文芸プランニング』において一つの結実を見る。同誌に発表した作品によって、彼は日本文壇にデビューすることとなった。

しかし、北村文学のそのような好調は、満洲事変の勃発によって挫折された。それまでの日常生活に対する倦怠感は、「浮世は思うに任せぬ」という認識に変わり、自らの幻想世界から脱出し、社会動態を視野に取り入れる姿勢を現れた。やがて満洲事変から感じた不安が消え、北村の作風もモダニズム文学からリアリズム文学に変容してきた。1936年の夏に『日本浪漫派』に発表された「旅情の歌」は、北村が改めてモダニズムからの決別を宣言してみせたものとなった。以降、彼の文学は急速にリアリズム文学に傾斜していくことになる。

北村の作品発表の頻度に照応させて、『日本浪漫派』における彼の活動歴を区分してみると、それは前・中・後期の三つに分けることができる。その前期において、北村の作品にはまだモダニズム的性格がいくらか残されている。大連で生じた「児玉邸殺人事件」をモデルにとった小説「贅沢な囚人」（1935年8月）は、心理小説の形をとった幻想小説として読むことができる。「茱萸」（35年10月）はリアリズムの手法で描かれた、やはり一種の幻想小説なのである。「終日」（35年11月）になるとリアリズム的な色彩が濃厚になってくる。その中期には小説の発表がなく、後期の「奴婢」（37年1月）や「蝶蝶」（37年4月）まで行くと、このあたりではもうリアリズム描写に徹してくるのである。

満洲事変の後に引き続く政治的・社会的・文化的混迷と不安とが、北村のモダニズム志向を蹉跌させた大きな要因であったに違いない。プロレタリア文学運動が権力の弾圧のもと逼塞し、壊滅していくなか、それと覇を競ったモダニズム文学も、みずから進むべき方途を見出せないまま転落、衰退の道をたどっていった。北村が1934年に大連に渡った時、すでにこの国際的モダン都市も往年の面影を凋落させていた。帝国日本の大陸侵略の基地として機能する、ただ一個の軍事都市に過ぎなかった。

このように、北村の文学は、『文芸プランニング』に掲載された「ノスタルチア鈔」、「すなむすめ」、「胭脂（ニコテイン）」といったモダニズム的要素からなる文学作品を経て、『日本浪漫派』での「旅情の歌」を機に一転し、やがて「終日」、「奴婢」、「蝶蝶」など、リアリズム的な傾向の強い作風へと変貌していった。その有り様は、北村文学のモダニズムの蹉跌を語りながら、また同時に、彼が1937年に満洲国に移住するまでの思想展開のプロセスを示しているともいえる。そこから、文学を通して自分の居場所を探し続ける北村の姿が現れてくる。東京から大連へ、大連から東京へ、その果てしない文学の道は、やがて満洲国の首都へと彼を導いていく。

第3章 北村謙次郎と『満洲浪漫』

本章では、北村謙次郎が満洲国の首都・新京において創刊した文芸雑誌『満洲浪漫』について考察する。この雑誌は、満洲国では文芸雑誌が未成熟の時期に現れたので、在満日本人に作品発表の本格的な舞台を提供したことで注目された。同誌の活動期間は1938年から1941年までの間で、満洲国弘報処が「芸文指導要綱」を公布する前に刊行されたため、比較的自由な雰囲気の中、満洲国の文学・文化事情を多彩に反映することができた。また、この雑誌は、北村が満洲国で携わった文学活動の中で最も影響が大きなものであるため、現在、北村についての僅かな論評は、ほとんどこの雑誌と関わっている。

北村にとって『満洲浪漫』は、彼が満洲国で旺盛な文学活動を展開するきっかけとなった記念碑的な存在だと言える。この雑誌で彼は「大陸ロマン」という理念を謳いあげ、その後の文学活動の理論的支柱を用意することになる。

本章は4節から構成されている。第1節では、『満洲浪漫』に関する先行研究の整理と問題意識の提出である。第2節では、『満洲浪漫』の前史」というテーマのもと、日露戦争以降、満洲に移住してきた日本人の文学活動を概観しながら、日本語文学の満洲での形成過程を検討してみる。満洲における日本文学の蓄積を概観することによって、『満洲浪漫』の登場するに到る歴史的背景を理解しておきたい。第3節においては、『満洲浪漫』の創刊経緯、その編集内容及び執筆者について具体的に見ていく。今日、あまり知られることのない同誌の全貌が、ここで客観的データに基づき明らかになる。それによって、満洲国での日本語文学の多様さを窺い知ると同時に、同誌を舞台とする日本文学者の全体像も把握できる。さらには、北村の同誌に対する貢献度の深さを察することもできるだろう。つまり、北村が同誌の実質的な主宰者であったことがここで自明となる。こうした考証を踏まえ、第4節では、『満洲浪漫』における北村の言論を中心に、彼が同誌に提唱した「大陸ロマン」の内容を検討する。それによって、北村と、『満洲浪漫』の他の執筆者との間の文学認識の相違を検討すると同時に、これまで議論された『満洲浪漫』と『日本浪漫派』との関係も明らかになってくる。

第1節 先行研究と問題提起

『満洲浪漫』について、戦後初めて触れた研究書は尾崎秀樹の『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971年6月）であろう。同書は、北村謙次郎の『北辺慕情記』（大学書房、1960年）や浅見淵の『満洲文化記』（国民画報社、1943年）などを手掛かりに、満洲国における『満洲浪漫』の文学史的意義に注目した。しかし、当時は資料の限界があり、同誌の全貌を窺うことは不可能であった。以来、多くの満洲文学関係の論評が現れたが、『満洲浪漫』に関しては、尾崎の紹介より充実したものがなかった。

2002年春、『満洲浪漫』を復刻する動きが現れた。それに先んじ、植民地文化研究会が「『満

『満洲浪漫』をどう評価するか¹という座談会を催している。この座談会では、西原和海、岡田英樹、西田勝の3人が、満洲国の文化状況を背景として同誌に対する認識を語った。その中で、西原は、『満洲浪漫』における北村の言説を引きながら、『満洲浪漫』と『日本浪漫派』との間には、殆ど文学史的血縁性は認められないと主張した。本論もこの考えに同調している。

2002年7月、『満洲浪漫』の復刻版が刊行された。その半年後、監修者である呂元明、鈴木貞美、劉建輝らは復刻版に対する解説と分析を加えて『『満洲浪漫』別巻——『満洲浪漫』研究』という一巻を編んだ。中には、呂元明の「『満洲浪漫』の全体像」、鈴木貞美の「『満洲浪漫』の評論・随筆」、及び劉建輝の「『満洲浪漫』の周辺——日本浪漫派及び『芸文志』派との関係を中心に」の3篇が収録されている。呂元明の「『満洲浪漫』の全体像」は、2003年10月に『アジア遊学』に発表された「『満洲浪漫』の芸術論²」に加筆されたもので、『満洲浪漫』を『日本浪漫派』と関係づけようとしているほか、北村及び他の同人の研究の必要性について問題を提起した。鈴木貞美の論文では、『満洲浪漫』の評論と随筆を中心に、全体的な考証が試みられている。劉建輝の「『満洲浪漫』の周辺」は、『満洲浪漫』と『日本浪漫派』、『芸文志』の内面的のつながりについて論じている。同文はその後、加筆され、『アジア遊学』第167号³に掲載された。

以上、『満洲浪漫』に関するものを考察してきた。その結果、同誌は主にして三つの視覚から論じられていることが分かる。第一に『満洲浪漫』の芸術性、第二に『満洲浪漫』の位置づけ、第三に『満洲浪漫』と『日本浪漫派』との関係についてである。

これらの論述はほとんど雑誌そのものに焦点を絞っているため、同誌の主宰者である北村謙次郎については重視していない。そこで、本章では、北村謙次郎を中心に、まず『満洲浪漫』の実態から考察し、同誌の芸術性を明らかにするために、同誌の満洲文壇での位置づけを確認し、北村が同誌上で提唱した「大陸ロマン」の本質を追求しながら、『満洲浪漫』と『日本浪漫派』との関係を明らかにしていきたい。

第2節 『満洲浪漫』前史

いわゆる「満洲文学」とは、満洲で書かれた文学一般のことである。それは日本語文学だけでなく、中国語、朝鮮語、ロシア語で書かれた文学も含む総称であった。満洲では、各言語の文学はそれぞれの文化の脈絡を育んで発展していた。ここでは、『満洲浪漫』が創刊されるまでの日本語文学の蓄積を追跡していく。

満洲の日本語文学は、1905年の日露戦争終結直後から始まり、1945年に日本が敗戦する

¹ 『植民地文学研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年4月1日。

² 『アジア遊学』第44号、『特集 日中から見る「旧満洲」』、2002年10月5日。

³ 『アジア遊学』第167号、『特集 戦間期東アジアの日本語文学』、2013年8月31日。

までおよそ40年間続いた。その最初の頃は、俳句、短歌、川柳といったジャンルを主としていて、関東州で発刊された新聞の文芸欄に発表されてきた。1910年代、俳句雑誌『アカシア』と川柳雑誌『漣』、短歌雑誌『かはせみ』を皮切りに、いくつかの文芸雑誌が誕生した。しかし、それらのものは、まだ明治時代の影響が強く残っていたため、大連の急速な発展の中で、成熟しないうちに消えてしまった。

1920年代に入ると、南満洲鉄道株式会社は、事業の展開のため日本内地から多くの人材を満洲に導入した。それらの人員を主力として、満洲の日本語文学は大連を中心に著しく発展した。伝統的なジャンルにおいては、梅野米城⁴を先頭に、「新傾向俳句」運動が行われたほか、『アカシア』も更新され、1920年に創刊された『黒煉瓦』と合併した。また、川柳誌には『娘娘廟』、『通』、『白豚豕』、『川柳大学』などが相次ぎ現れた。そのようななか、満洲川柳社が1927年に成立し、5年後に『青泥』を発行した。短歌に関しては、明星系の『かはせみ』、『夕陽』などの発行を経て、1928年に西田猪之輔らによる満洲短歌会が成立、『合萌』が出された。そして、1929年には、八木沼丈夫⁵、城所英一、富田充などを主力メンバーとする満洲郷土芸術協会から『満洲短歌』が創刊された。

大連の詩運動は、1924年に安西冬衛や北川冬彦らを中心に創刊された『亜』をもって開始された。同誌は3年しか続かなかったが、日本内地のモダニズム詩運動にも大きな影響を与えた。一方、1920年代後半のプロレタリア文学の影響を受け、1930年、大連でも左翼系の詩誌が創刊される。そのなかで『燕人街』の活動がめざましく、同人には高橋順四郎、落合郁郎⁶、土龍之介、古川賢一郎⁷などがいた。

上述した短歌や詩などに比べ、小説ジャンルの発展は遅れ気味で、その芽ばえは、満洲における各新聞の小説募集が始まった1920年代頃からだといえよう。大連の『満洲日日新聞』、『新京日日新聞』の前身である『長春実業新聞』、営口に創刊された遼東新報などのほとんどの新聞が、小説を募集したことがある。吉野治夫や大庭武年など、満洲の小説界に足跡を残した人の多くは、新聞からデビューした経験を持っている。

小説の発展に伴い、1920年代、総合雑誌がようやく誕生するようになった。それは1921年に大連で創刊された月刊総合雑誌『新天地』である。上村哲弥⁸を初代編集長に、伊藤武

⁴ 梅野米城 (1872—1969)、本名・実。福岡県久留米出身、東京大学工学部卒業、満鉄理事。

⁵ 八木沼丈夫 (1895—1944)、満鉄社員、歌人。

⁶ 落合郁郎 (1911—82)、『作文』同人

⁷ 古川賢一郎 (1903—55)、香川県生まれ、1923年に満鉄に入社。詩人、『作文』同人、代表作『老子降臨』(詩之家出版、1929年)。

⁸ 上村哲弥 (1893—1978)、鹿児島生まれ、東京帝国大学法学部政治学科卒業、満鉄入社。著書『両親再教育と子供研究』がある。

雄⁹、宮崎正義¹⁰、石川鉄雄、千田萬三など満鉄関係者を主要寄稿者とするこの雑誌は、政治・経済・社会の論策が中心となるが、文芸欄も充実していて、20年代に宮原欣一郎（中村芳法）、30年代に谷川蘭子（谷川らん）が多く寄稿した。同誌は関東州の代表的な総合雑誌として長期にわたり活躍、1945年5月まで刊行された。

それに続き、『読書会雑誌』（後『協和』に改題）、『満蒙』、『大陸』、『大陸生活』、『満蒙評論』などの総合雑誌も生まれ、作家や詩人に作品発表の場を提供した。当初の書き手としては、瀬野浩太、浅利勝、谷川らん、清島蘇水、井上葉吉、横澤宏、志野羊吉などであった。

一方、長春では、1920年代以降、文芸同人雑誌がようやく出現するようになった。1922年に満鉄社員によって創刊された文芸雑誌『黎明』や、1925年に大内隆雄と柿沼實が創刊した『我らが文学』（後に『ドンキイ』と改題）などである。両誌とも評論、創作、詩、短歌などを掲載し、前者では夢島鋪雪、佐藤通男、豊高直（堀川艶之助）、浅利勝、市木實二郎、吉田繁など、後者には大内や柿沼のほか、大連の歌人・甲斐水棹も寄稿者だったが、いずれも大した仕事を残したわけではなかった。

1930年代に入ると、満洲の日本語文学は徐々に活況を呈してくる。詩の分野では、相変わらず大連が先進地域であった。1930年発行の合同詩集『塞外詩集』、1931年の城小碓¹¹詩集『黒麦酒の歌』、1934年の稲葉亨二¹²詩集『夜航船』などが次々と現れ、安西冬衛、加藤郁哉、小杉茂樹、島崎恭爾、瀧口武士、古川賢一郎、城小碓、落合郁郎といった顔ぶれが、満洲の詩壇を飾っていた。

小説においては、大連で、青木実、町原幸二などがすでに頭角を現しており、大連で創刊された雑誌『街』、『線』などに創作を発表するようになった。彼らはのちに文芸同人誌『作文』を創刊するに至る。

奉天でも、1931年、詩と短歌の雑誌『故同』が創刊され、柿沼實、土龍之介、落合郁郎などの寄稿を見た。また、満洲医科大学文芸部の同人雑誌『曙人』は、小説、評論、劇曲、翻訳及び文芸時評など掲載していた。同誌には冬木羊二という、のちに満洲文壇で活躍する作家の名も見られた。

1937年あたりになると、満洲国の日本語文学は一つのピークを迎える。満洲国内の抗日運動が、殆ど鎮圧され、満洲国の建設が著しく進んでいくなか、多くの日本人は満洲国が

⁹ 伊藤武雄（1895-1984）、1920年東京帝国大学法学部卒業、満鉄に勤務。中国研究者。著作に『現代支那社会研究』（同人社書店、1927年）などがある。

¹⁰ 宮崎正義（1893-1954）、満鉄社員。石原莞爾のブレーンとして満鉄経済調査会を創設。

¹¹ 城小碓（1905-2001）本名・本家勇。大連詩書倶楽部を主宰。満洲詩人会を結成。満洲文話会の発起人の一人でもあった。

¹² 稲葉亨二（1902-）東京生まれ、神戸高商卒。満洲詩人会同人。

押しかけるようになった。例えば、満洲映画協会の設立（1937年8月）によって、同社が高待遇の就職口を提供したため、日本内地からも多くの文化人が新京に集まってきた。

一方、大連では満洲文話会が結成された（1937年6月）。同会は、満洲における文筆人たちの、相互の親睦を目的とした文化機関である。会員には、文芸を中心に、美術、書道、音楽、舞踊、科学など各種の文化領域で執筆活動する人たちが名を連ねた。その中心となったのは、満洲の文芸運動を促進することに熱心だった文学関係者たちであった。毎月の例会、年1回の総会を開催するほか、会誌『満洲文話会通信』を発行している¹³。北村謙次郎は、1937年に満洲に渡った後に会員になり、新京支部の例会に出席するようになった。

同じく1937年、関東軍司令官の植田謙吉は、満洲国國務総理であった張景恵と「満洲国に於ける治外法権の撤廃及南満洲鉄道附属地行政権の移譲に関する日本国満洲国間条約」の調印を交した。その結果、満鉄附属地で生活していた日本人は、「附属地」という環境から離れ、満洲国の住民となった。それに伴い、附属地で発行されていた雑誌・新聞なども満洲国の文化政策に従わなければならなくなった。

この歴史的変動は、従来、関東州を中心に形成された文壇にも大きな衝撃を与えた。特に、大連を拠点に文化運動に関係していた満鉄社員にとって、そうであった。例えば、大連で編集・発行されていた同人誌『作文』の場合、同人の青木実や町原幸二、三宅豊子が奉天、秋原勝二が吉林、日向伸夫がハルピンなどに赴任したため、同誌の存続に大きな影響を与えた。このようなそれらの文化人の分散は、満洲の全域に日本文学の種を撒いたともいえる。

その後、満洲の日本語文学活動の中心はいよいよ大連から新京に移っていく。新京では、奥一によって創刊された文芸雑誌『高粱』には、大内隆雄、近東綺十郎、岡田広美、中村秀男、杉島豊比古などが寄稿したが、1935年に経営不振に陥って廃刊に追い込まれた後、日本人向けの文芸雑誌といったものはなくなっていた。

他方、新京には、中国語の文芸雑誌『明明』があった。同誌は、『月刊満洲』の発行人・城島舟礼の経済的支援によって、1937年、月刊満洲社から創刊された雑誌で、古丁や外文、疑遅など中国人作家たちが意欲的な作品活動を展開していた。それは、日本語文芸雑誌の不毛と、日本人作家たちの沈滞ぶりとは比べ、いかにも目ざましいものがあった。

このような状況のもの、新京の日本人たちは、一方に大連を中心とする関東州の文化的発展に向き合い、もう一方、満洲国における中国人たちの文学的気運を見るに及んで、自分たちも日本語文芸雑誌の一つくらい持たねばならないと思っていたところ、まさにこの

¹³『満洲文芸年鑑 昭和十三年版』、満蒙評論社、1938年12月15日、455-457頁。

ように期待に応える媒体として『満洲浪漫』が登場したのだった。

第3節『満洲浪漫』の編集

1. 『満洲浪漫』の創刊

1938年10月、『満洲浪漫』が創刊された。主宰者北村謙次郎は、その前、満映に入社するため、満洲国に渡ってきたばかりであった。それまで日本文壇で活躍していた北村は、新京の文化状況の貧しさに少なからぬ衝撃を受けた。彼は、「『満洲行政』は官吏向き「満蒙」はだいたい関東州一円に限定されるといつたように、ごく範囲に限られ、せつかく発表される佳作も、殆ど一般の眼に触れる機会がない」¹⁴と慨嘆し、自ら新雑誌を作ることを決意した。

最初に雑誌創刊の意欲を語った相手は、矢原礼三郎である。矢原は旅順出身の詩人で、先輩に北川冬彦があり、東京の『麴麴』の同人でありながら、大連の詩誌『鵲』にも関わっていた人物である。その時の矢原は、すでに満洲映画協会に入社し、北村と同じく製作部に配属されていた。二人は寛城子の矢原の借間で酒を飲みながら、話を交わした¹⁵。北村の「この秋のうちに、ぜひ雑誌を出したいんだよ。それも、どこへ出してもヒケをとらないようなのを出したいのだ」¹⁶という話に対して、矢原は、「それはいい。市内へ引越しても大いに協力するよ」¹⁷と声援を送った。

ほぼ同じ頃、満洲国総務庁の弘報処に勤務していた木崎龍は長谷川濬、別役憲夫らと同人雑誌『白想（バイシャン）』の創刊を計画していた。すでに表紙絵まで出来上がっていたが、なかなか実現に到らないため、ここで思い切って、新しい計画に乗り換えようと考えているところであった。それを耳にした北村は、早速、木崎に相談を持ちかけた。木崎は東京帝国大学国文学科の出身で、当時、弘報処で『宣撫月報』の編集を担当していた。彼は北村の計画を聞いて、直ちにそれを実行する方法を見つけた。それは、満日文化協会の杉村勇造を説得することであった。

杉村は北村より4歳上で、1920年代に金石学や書誌学を学ぶため北京大学に留学し、満洲各地の図書館の開設に関わった人物である。1933年、満日文化協会が創立された時に、杉村は満日文化協会の常務主事を務めるようになった。同会は主に史料復刻や遺跡・建築

¹⁴ 北村謙次郎『北辺慕情記』、大学書房、1960年9月1日、69頁。

¹⁵ これについて、北村謙次郎の作品の中で触れているものが二つある。一つは、『北辺慕情記』で、矢原との相談が、新京市内の居酒屋で行われたと書かれている。もう一つは、中篇小説「浪漫の頃」（1960-70年代に書かれ、2013年4月から2014年5月まで『索通信』に3回連載）で、矢原との相談は寛城子で行われたと記録されている。ここでは後者の記述に依拠した。

¹⁶ 注14、64頁。

¹⁷ 同上。

物の調査保存といった事業に携わっていた。

北村、木崎と杉村の交渉は、大興ビルにあった満日文化協会の応接室で行われた。静かに流れ込む光の中で、木崎は椅子に胡坐をかいて意気揚々とその構想を語り、杉村は「ふむ、ふむ」と相槌に徹していた。そして、木崎が語り終えるやいなや、「いいでしょう。やってみてはどうです」とあっさり同意した。親切な杉村は、「三枝君が文祥堂の佐藤好郎君と親しいから、印刷は文祥堂に頼めばいいでしょう」と雑誌の印刷所まで手配してくれた¹⁸。

文祥堂は東京都中央区銀座に本社を置き、活版印刷や洋式帳簿製造を主要業務としていた。1912年に佐藤保太郎が創業した「佐藤商店」から発展してきたもので、1935年、文祥堂は佐藤好郎を派遣して満洲への進出を図った。当時の満洲国内の出版物に当たってみれば判ることだが、文祥堂から発行された本は極めて少ない。同社は営業的に不振ではなかったかと推察される。そのため、『満洲浪漫』の刊行は必ずしも順調にいかなかった。先走って記しておく、『満洲浪漫』は全部で第6輯まで発行され、第4輯まで文祥堂から刊行された後、第5輯は東京書籍新京出張所、第6輯は興亜文化出版社といった具合に、版元が転々とするのである。

ともあれ、雑誌発行の営業的な方面に詳しくない北村は、それらのこと一切を木崎に任せて、自らは編集の事務に専念することになった。そのことから見ると、北村と木崎の出会いは、雑誌『満洲浪漫』の刊行において、決定的な意味を持ったと言っても過言ではあるまい。

2. 『満洲浪漫』の内容

『満洲浪漫』は、1938年に創刊されてから1940年に終刊するまで、全6輯が発行された。これら6冊の装丁は、画家の今井一郎のデザインによるもの、創刊号の表紙は「満洲浪漫」の四文字を明朝体で大きく印刷し、そのバックには緑と黄などの色が使われている。これは日本で出ている詩誌『詩と詩論』の装丁を模したものであったと、北村は戦後の著書『北辺慕情記』のなかに書いている¹⁹。『詩と詩論』は1928年に創刊された清新なモダニズム詩誌である。1920年代後半から日本文壇にデビューした北村にとって、この詩誌の存在は、よく記憶されていたに違いない。とりわけ同誌には、北村の個人誌『文芸プランニング』に寄稿した安藤一郎、岡崎清一郎なども執筆していた。

『満洲浪漫』の後、「満洲浪漫叢書」というシリーズが刊行された。このシリーズは、作品集『僻土残歌』（1941年）、北尾陽三著『明暗』（1942年）、大内隆雄著『或る時代』（同）、鈴木啓佐吉著『愛情の緩急』（未見）、鳥羽亮吉著『流沙香綺譚』（1942年）の5点からなる。このうち『僻土残歌』だけはその他の4冊の文庫本スタイルとは異なり、『満

¹⁸ 注14、66頁。

¹⁹ 注14、68頁。

『満洲浪漫』第6輯と同じ版型（B6判）を採っている。

第1輯は1938年10月27日に発行された。定価は1円20銭。著作人は北村謙次郎、発行人は佐藤好郎、印刷人は高橋貞二であり、印刷所と発行所は文祥堂であった。創刊号の同人は飯田秀世、今井一郎、木崎龍、北村謙次郎、坪井與、長谷川濬、松本光庸、矢原礼三郎、横田文子の9人である。同号は小説、詩、随筆、評論などを中心に、「満洲文化について」というアンケートを含め274頁にもなった。小説がその大半を占め、吉野治夫「姉妹のこと」、長谷川濬「伝説」、今村栄治「同行者」、田兵「アリヨーシヤ」（大内隆雄訳）、横田文子「白日の書」などが掲載されたが、書下ろしは少なく、その多くが再録作品であった。詩は坂井艶司「なめくちの歌」、長谷川四郎「長城論」、評論は木崎龍、牛島春子、藤川研一の作品が掲載された。誌面全体の内容は文学のみならず、音楽、映画、演劇といった多様なジャンルにも目配りを利かせ、文化・芸術一般にわたる総合雑誌として育つ可能性を窺わせるものとなった。

とりわけ注目されるのが、「満洲文化について」と題するアンケート特集である。そこでは満洲文化の様々な分野が俎上にあげられ、同誌に寄せる期待なども記録されている。それらのうち、文学について言及したのは、竹内正一、大内隆雄、近東綺十郎などである。彼らは、満洲文化に対する認識と、『満洲浪漫』に対する期待をそれぞれ述べた。特に1920年代に満洲で文学活動に従事した近東綺十郎は、満洲文学が、日本文学の派生のような、創作技法に洗練された巧みな小説に進歩できなくても、「拙くとも、もつと豊かな体格をした血色のよい作品」²⁰のほうがいいと提言した。さらに付け加えて、近東は『満洲日日新聞』の文芸欄に掲載された高橋樺の文芸時評（「私が作文諸氏に求めるところは、勉めて失敗作を書いてくれることである、小康でなくて冒険である（中略）」（1938年9月6日））を引用している。満洲文学における先輩から後輩への助言であるが、これは北村に大きな意味を与えたようである。巧みな小説を懸命に書きながらも、北村は「豊かな体格をした」小説（「春聯」）を執筆しようとしていた。それはまさに近東綺十郎の言った通り、文学における冒険であった。

なお、このアンケートに政治的な方面から回答を寄せたのは、三好弘光、古川哲次郎、古長敏明、磯部秀見などである。彼らは日本文化の指導精神、民族協和、統制問題などを取り上げて、日本人の指導者的立場について強調した。特に統制の問題に関しては、国家の方針に沿って行けば統制対象にはならないという意見が所々で現れていた。それは、『満洲浪漫』が満洲国のために貢献すべきという考えから出発したからである。それに対して、編集者としての北村は、「跋」の書き出しにおいて、「われわれの仕事が、現在すぐ何かの役に立つだらうといふやうなことは、余り考へたくない」²¹と反発した。

創刊号は、出版の前から関係者に相当期待されていたが、発刊後、ひどく批判も受けた

²⁰ 近東綺十郎「満洲ロマンへの待望」、『満洲浪漫』第1輯、文祥堂、1938年10月27日、230頁。

²¹ 北村謙次郎「跋」、『満洲浪漫』第1輯、文祥堂、1938年10月27日、274頁。

という。それは小説のほとんどが再録作品だったことと、満洲と関わりのない作品も掲載されていたからだ。例えば、横田文子の「白日の書」は『女人芸術』に発表され、日本内地を舞台とする女性の同性愛を語った小説である。吉野治夫の「姉妹のこと」は、『新天地』に掲載され、彼が鹿児島第七高等学校で学んでいた時のことを材料に創作したものである。いずれテーマ的に満洲とは関係ないものである。

そういう批判に対して、北村は戦後の回想録『北辺慕情記』に、「いざ上梓してみると毀誉は相半ばした。だいたい書下し専門というより、創刊号の創作は殆どすべて再録原稿だったところから失望する向きの多かつたのは争えぬ事実だが、それにはそれで、当事者に平素からの持論があり、簡単に承服は出来かねた。中央的な文芸誌が欲しいということは前から云われていたことだが、それには毎月発刊される雑誌が前にも書いた通り（中略）ごく範囲に限られ、せつかく発表される佳作も、殆ど一般の眼にふれる機会がない。もう一つ持論を云えば、文芸上の作品は、何も毎号の雑誌小説を追い廻す必要もない。単行本に纏ったものを、あとからゆつくり読む方法もあり反つてその方が作家に対して親切な場合もある」²²と弁解した。

北村は若い頃、好きな作品を雑誌から切り取り、製本して、時間がある時にゆっくり読む趣味があった。そこから、再録というやり方は、彼の考えのなかでは特に異とするほどのことではなかった。ただし、上記引用の文章では、原稿料の問題については触れていない。後で述べるが、『満洲浪漫』創刊の企画が生まれたのは1938年の秋のことである。企画してから刊行に至るまで、僅か2カ月しかなかった。北村は、そのような短い期間内に、原稿料なしの執筆を依頼する「勇氣は出なかった」²³という。そのことも、再録作品を多く採用した理由の一つであったようだ。

第2輯は1939年3月10日に発行された。定価は80銭である。長谷川濬が著作人となっている²⁴。発行所と印刷所は前号と同じである。全176頁で、小説が相変わらず全体の半分以上を占めた。第1輯の多様性を引き継ぐと同時に、末尾に「同人語」というコラムが載った。新たな同人として逸見猶吉、大内隆雄、岡田壽之、荒牧芳郎の四人が加わり、この四人も全員「同人語」に小文を寄せた。小説では、竹内正一の「白眠堂徑徂」と長谷川濬の「家鴨に乗った王」などの書き下ろし小説をはじめ、長谷川四郎の「狂人日記」、青木藜吉の「浮雲」、工清定の「満洲の胎動」の他、民生部募集の日本満洲国承認記念当選文芸作品として「満系」作家用章の「魚骨寺の夜」と袁犀の「隣三人」（両篇とも大内隆雄訳）も収録された。詩は逸見猶吉と坂井艶司が発表し、その他、吉野治夫の随筆、木崎龍の評論などが掲載された。この号の面白いところは、長谷川濬の「編輯後記」にある。「第一輯は旧作集なるが故に期待に反したとの世評を受けた。だが満洲浪漫の誕生だけでも満洲文

²² 北村謙次郎『北辺慕情記』、大学書房、1960年9月1日、69頁。

²³ 同上。

²⁴ このころ北村謙次郎は東京に出張した。そのため彼に代わって長谷川濬が「編集人」になったと思われる。

壇の異彩だつたと我々は自負してゐる、如何？」²⁵という話は、北村の抑制的な語調と異なり²⁶、長谷川なりの抱負と自慢をあらわにしている。しかし、その「自負」は、長谷川だけではなく、北村と他の『満洲浪漫』同人すべての共通認識でもあったことだろう。

第3輯は1939年7月23日に発行された。著作人は北村謙次郎、発行所と印刷所は前号と同じで、定価は1円である。同人には、緑川貢が新しく加入した。この第3輯は小説、詩、随筆、俳句、評論、「特輯 文化機関当事者に訊く」からなる。259頁の大冊で、創刊当初に意図した「総合文化雑誌」の特徴を最も鮮明に出している。

小説は8篇。この内、「建国記念文芸当選作」の2篇が掲載されている。1937年の『満洲日日新聞』懸賞小説に入選した北尾陽三もこの号から登場している。また、白系ロシア人作家 H. A. バイコフの「マーシユカ」（大谷定九郎訳）や古丁の「昼夜」（大内隆雄訳）も掲載された。一方、詩の欄ではこれまでの3篇から5篇に増え、逸見猶吉、坂井艶司、矢原礼三郎、長谷川四郎、藤原定などの作品が発表された。随筆の欄では、『作文』の町原幸二、『日本浪漫派』同人だった緑川貢、満映監督の坪井興、脚本家の中村能行、画家の池辺青李などが稿を寄せた。特に目を引くのは、「文化機関当事者に訊く」という特集が組まれたことである。「国務院弘報処」勤務の磯部秀見、「満洲事情案内所」所長の奥村義信、「満洲国立図書館」設置委員の山崎末次郎、「中央博物館」館長の藤山一雄、「新京放送局」副局長の金沢覚太郎など満洲国文化の指導者層からの寄稿が並ぶ。

巻末を飾るのは、評論である。3篇の文章はいずれも質量共に読み応えがある。西村真一郎の「竹内正一論」は竹内の創作集『氷花』を取り上げ、竹内の文学思想を検討した。西村は、竹内の文学には「政治性」が欠けているとしながらも、その作品は「満洲文学でなければ、満洲を知り尽くした者でなければ、表現しえない」²⁷ものとして高く評価し、そこに流れるヒューマニズムに注目した。松本光庸の「映画の作家精神」は満洲の映画現状を前にして、「新しきモラルの創造」にかける映画作家精神を説き、「映画の新精神」を唱える。木崎龍の「島村抱月論」は6年前の旧稿を書き改めた小論。東京帝国大学での研究生活を回想しながら、明治評論史を覚え書きふうにとどってみせたものである。『満洲浪漫』の片隅を借りて自身の研究成果を発表したい、と遠慮がちに語っている。「後書」は北村による。北村は、この号の出来について「盛観を呈した」と述べ、同人に限らず多方面から原稿を募集したいという意欲を伝えた。

第4輯は1939年12月15日に発行された。著作人・発行所・印刷所は前号と同じ。定価80銭。前3冊と違って、表紙に黒く「満洲作家選集 満洲浪漫特輯」という題字が書かれているほか、奥付の表記も「満洲浪漫」ではなく、「満洲作家選集」となっている。全212頁、10篇の小説と2篇の評論によって構成されている。前3号の目次と違って、ジャンル

²⁵ 長谷川濬「編輯後記」、『満洲浪漫』第2輯、1939年3月10日、満洲文祥堂、176頁。

²⁶ 北村は『満洲浪漫』第2輯の「同人語」において、「ロマン文学」を生み出すために「無理な背伸びをしたくない」と述べている。

²⁷ 西村真一郎「竹内正一論」、『満洲浪漫』第3輯、満洲文祥堂、1939年7月23日、226頁。

を分けずに作品名と作者を並べていて、編集方針の変更が明白である。この編集に対して、北村の「後書」は以下のように述べている。

満洲作家の最初の作品集たらしむべく、案をたててからできるだけ広範囲の人たちに作品を依頼したけれども、第一輯の時とはまた事情が違ひ、書下ろし作品をとの注文だったし、枚数もかなりな分量のものを求めたためか、思つた約半数の作品より集まらなかつた。しかしその代り本輯の執筆者諸氏は、満洲で粒よりの代表作家ばかりである。作品もそれに応じて、何れも各作家の個性を生かした佳作揃ひだと思ふ²⁸。

本輯には吉野治夫の「秋」を巻頭に、長谷川瀆の「烏爾順河」、疑遅の「梨花落つ」（大内隆雄訳）、北尾陽三の「虚脱」、大瀧重直の「土の種子」、石軍の「窓」（大内隆雄訳）、青木実の「北辺」など「粒よりの代表作家」の佳作が一堂に収録された。編輯者としての北村の達成感は大きかったに違いない。しかし、この雑誌が季刊誌として順調に刊行されたのは第4輯までで、その後、発行は遅滞を見せてくる。

第5輯は、「満洲文学研究」と題された特輯号である。1940年5月2日の発行。編集人は北村謙次郎で、定価は1円50銭。全175頁。前4冊の発行所は「文祥堂」であったが、この号では「東都書籍新京出張所」に変わった。ページ数を減らしたものの、その割には定価が高くなっているのは、雑誌刊行において財政問題が生じてきたからなのだろうか。巻頭の「凡例」によると、

本輯第一部には満洲文学の一般的考察、本質的研究を、第二部にはその側面的研究を、第三部には作家作品論、第四部には特殊研究、第五部には綜合文化を求むる意味より、他の姉妹芸術に関する二論を収めた²⁹。

章立てから見れば、編輯者が極めて苦心を重ねたことが推測される。評論特輯として、この号は強力な執筆陣を揃えた。王則、辛嘉、西村真一郎、三好弘光、吉野治夫、丘益太郎など、満洲の中国人の作家の文章がいくつか集まったのみならず、満洲の各分野の評論家に求めた文章は、満洲文壇の現状をよく反映しているといえよう。そのころ文壇では、「満洲文学とは何か」というテーマで、にぎやかな論争が続いていた。「満洲文学の独自性とは何か」、「建国ロマンとは何か」、「満人（中国人）をどう描くか」などといった問題をめぐって、さまざまな見解が提唱されていた³⁰。第5輯の特輯は、各分野の専門家の文章を並べ、満洲文学の特質を語ることによって、この論争に一つの方向性を与えようと

²⁸ 北村謙次郎「後書」、『満洲浪漫』第4輯、満洲文祥堂、1939年12月15日、212頁。

²⁹ 北村謙次郎「凡例」、『満洲浪漫』第5輯、東都書籍新京出張所、1940年5月2日。

³⁰ いわゆる「満洲文学論争」が活況を呈するのは、1938年に入ってからである。その中の代表的論文は『満洲文芸年鑑 昭和十三年版』（1938年12月15日、満蒙評論社）、『同 十四年版』（1939年11月10日、満洲文話会）の2冊に集成されている。

する試みであった。

例えば、巻頭に置かれた長谷川濬の「建国文学私論」では、満洲文学とは、建国後、文学一般が大陸の風土と接触したところから発生したものだとは主張し、西村眞一郎の「満洲文学の基本概念」では「満洲文学は日本文学の延長ではない」と明白に書かれている。また、大内隆雄の「満洲文学の特質」、吉野治夫の「満洲文学の方向」なども、別の側面から満洲文学の独特性を強調した。その他、同号には、文学作法、満洲の中国人作家、日満文学交流、さらに画家、音楽、ジャーナリズムなりズムなどについても検討され、今日、満洲国の文化事情を理解するには最も手応えのあるレベルに至った。

第1輯から第3輯は「総合文化雑誌」で、第4輯は「満洲作家作品集」、第5輯は満洲文学・文化に関わる全般的な評論集で、『満洲浪漫』の使命はここでひとまず、終着を見たようにも思われる。

第6輯は北村のいう「満洲浪漫新発足」³¹として、1940年11月15日に発刊された。この号をもって、この雑誌は実質的に停刊する。編集者は北村謙次郎で、発行所は興亜文化出版社に変わった。発行者は石見栄吉、印刷者は鈴江一臣。定価は1円60銭。全250頁。内容は以前と違って、文芸作品だけで編まれ、しかも分量が少ない。6篇の作品のうち、小説は3篇、詩2篇、劇曲1篇である。この号で注目したいのは檀一雄の登場である。彼は1940年、満洲に到着して間もなく『満洲浪漫』との交流を深めた。北村の「跋にかへて」では、第1輯の「跋」で唱えられた「大陸ロマン」の主張がさらに勢いを増している。

満洲浪漫創刊以来、僕らは満洲国建国の理想を趁ひ、その理念の定着について語ってきた。しかも文学の難しさは、どこまで僕らの説くところが作品の上にもまで具現化され得たか、顧みて一応の疑念を持つ。しかも満洲に文学するものゝ生きかたの一斑を示し得たことは、ひそかに僕らの信じ止まぬところである。浪漫精神を説いて天に飛翔する代りに、僕らは地に這つたのである。ただその間にも、浪漫精神の内包する烈々の気概は、時に平俗への挑戦となつてあらはれ、詩の擁護、似而非文化の排撃ともなつてあらはれた。事は知性の統率による秩序を招くと同時に、新しい怒りをも呼んでゐるのである。(中略) 出版のことに携はるのは、もとより僕の任ではない。ただ今日、新しい協力を俟つて、満洲浪漫の新体制版を贈るはこびとなつた所以は、真の文学道樹立への執着がさせた業にほかならぬ。由来、書物の題名とは、観念上の存在にほかならぬ。満洲浪漫の名は、そのやうなものとして人の脳裏に映ることを信じ、今後は新しい名による個人集、詩集、アンソロジーの類をも、広範囲に亘つて集積したい念願である。以上を、満洲浪漫新発足の辞とし、跋にかへる³²。

³¹ 北村謙次郎「満洲浪漫新発足」、『満洲浪漫』第6輯、1941年11月15日、興亜文化出版社、250頁。

³² 同上。

理想と実践の距離を認めながら、理想への努力を語り続けている。「跋」の後半では、「満洲浪漫」という誌名が「観念上の存在にほかならぬ」と述べ、さらに新たな「観念」のもと、広範囲な文芸運動を展開したいとする「満洲浪漫新発足」の抱負を披瀝した。この号をもって編集実務から身を引こうとする北村の姿勢が多少とも窺えるし、反面、「満洲浪漫新発足」への期待と共に、満洲文壇発展のためさらに寄与していきたいとする自身の覚悟も垣間見えるようだ。

「満洲浪漫新発足」の実践は、1941年5月5日に刊行された単行本『僻土残歌』から始まった。同書の編集者は北村謙次郎、発行所は第6輯と同じ興亜文化出版社である。判型はB6。全192頁。定価1円20銭。表紙は奥行雄が描いた、春節に飾られる年画（ニエンファ）を題材にした図案であるが、雑誌『満洲浪漫』の表紙とは、明らかに異質のイメージをもたらし、そこに編輯方針の転換をうかがうこともできる。タイトルは「春季作品集 僻土残歌」、下部に「満洲浪漫叢書」、その下に「興亜文化出版社版」と小さく記されている。内容的には、檀一雄の詩「僻土残歌」を巻頭に、鈴木啓佐吉「鉄路機廠」、長谷川濬「鷺」、檀一雄「樹々に匍ふ魚」、苦土「皮鞋」（大内隆雄訳）、北尾陽三「私の平凡な生活の記録」など5篇の小説と、附録の「日系露人作家紹介」（大谷勇夫）からなる。「跋」には同書の執筆者のほぼ全員が顔を揃えていて、そのあたりには、以前の『満洲浪漫』のスタイルをいくらか残している気配を覚える。

その後、この叢書は判型を文庫本サイズに変え、先に述べた4冊が刊行された。そのうち、北尾陽三著『明暗』は、1942年9月3日に興亜文化出版社から刊行された。この長篇は満洲国建国初期の満洲に生計の道を求めた日本青年の社会遍歴を語った物語である。主人公高塔逸喜は、志士を気取る野田に従って土木請負業に従事していたが、事業失敗後、未払い給料の処理責任者として現地に残された。しかし、野田は消息不明になった。途方にくれた高塔は、木場という青年と共に、江崎という発明好きで暴力好きな人のもとで、ただ働きの身分に落ち込む。そこを脱出しようとする二人はカフェの女給の応援で旅費を作り、奉天に逃げ出した。そこで、木場は間もなく仕事につき、高塔もやっと家庭教師になった。貧乏な知識青年の苦労話であるが、満洲で生活していた日本人のそれぞれの面目が見えるのが本篇の読みどころであろう。

大内隆雄著『或る時代』は、1942年9月25日、同じく興亜文化出版社から出版された。素朴な筆致で、作者自身の体験をもとに書かれた小説で、満洲に住む知識人の生き方を理解する一助として貴重である。大陸を愛する一青年が、思想問題から職場を追われ、日本に帰ってくるが、やがてまた満洲に戻ろうとする。中国人との交流も絡ませ、時代の波に翻弄される主人公の日々を描いたものであった。

鳥羽亮吉著『流沙香綺譚』は、1942年9月25日に興亜文化出版社によって出版された。短篇「成長」、「南北」、中篇「流沙香綺譚」の3篇を収める。「成長」は、新京で仕事をしている中年男性の帰省の様子が描かれている。妻を早く亡くした彼は、一人娘を育ててくれた老母に、娘と二人きりの鎌倉旅行を勧められた。そこで親子二人の絆を確かめる

ことができたという内容である。「南北」は、マニラで漁業に従事していた忠兵衛という中年男性の、新京での生活を描いている。新京で知り合いのいない忠兵衛は、天主教の神父の紹介で新しい仕事を見つけた。そこで、彼はある女性と出会ったが、自分の想いを告白しないうちに、彼女には婚約者ができた。彼は自分の好意を示すため金銭のことを申し出たが、かえって人品も疑われてしまう。「流沙香綺譚」は、中国歴史上の乾隆と香妃の物語である。香妃と乾隆との愛の物語については、歴史叙述の枠を越えていないが、イギリスの来航などによって、清の時代の乾隆と西洋との文化の衝突を描いた場面が興味深い。また、創作のきっかけとなった文献が天主教神父から来たものであるという点も、作者と天主教との関わりが窺わせて面白い。

以上が『満洲浪漫』と、それに続く「満洲浪漫叢書」の概要である。この雑誌は、編集の都合で不定期刊行になりながらも、2年間にわたって継続し、満洲に住む日本文学者たちに安定的な創作発表の舞台を提供したのだった。

3. 雑誌の執筆者

『満洲浪漫』の執筆者は、総計 78 人を数える。そのうち半数以上は満洲文話会の会員である。執筆者の寄稿形式から見ると、田兵、袁犀、用韋、古丁、李夢周、疑馳、石軍、辛嘉、小松、王則、陳其芬など中国人作家と、アイリス・バリイやバイコフなどを除き、日本人だけを見ると、その執筆者は 65 名である。そのなかで、2 回以上の執筆者は 20 人、3 回以上の執筆者は 10 人であり、また 5 回以上の寄稿者は、北村謙次郎、吉野治夫、長谷川濬、大内隆雄の 4 人しかいなかった。

ここでは、それらの執筆者を北村謙次郎の人脈によって分類してみる。

人脈	執筆者
『満洲浪漫派』関係	飯田秀世、木崎龍、坪井与、松本光庸、横田文子、今井一郎、長谷川濬、矢原礼三郎、逸見猶吉、大内隆雄、岡田寿之、荒牧吉郎、緑川貢
『日本浪漫派』関係	檀一雄、横田文子、緑川貢
弘報処関係	木崎龍（仲賢礼）、磯部秀見、丘益太郎（岡田益吉）、長谷川濬
満洲映画協会（満映）関係	大内隆雄、北尾陽三、坪井興、矢原礼三郎、松本光庸、荒牧芳郎、岡田壽之、飯田秀世、佐々木勝造、下島甚三、高森文夫、中村能行、根岸寛一、森信、赤川幸一
満洲文話会関係	新井練三、池辺青李、今井一郎、今村栄治、大谷勇夫、金沢覚太郎、近東綺十郎、筒井俊一、西村真一郎、藤原定、古川哲次郎、三好弘

光、山崎末次郎、金丸精哉

『作文』関係 竹内正一、吉野治夫、坂井艶司、町原幸二、青木実、秋原勝二、日向伸夫、宮井一郎、富田寿

『草上』関係 金尾梅の門、伊東月草

上記の図表に示したように、北村を中心とする『満洲浪漫』の執筆者は主に『日本浪漫派』、「弘報処」、「満映」、「満洲文話会」、「作文」、「草上」などの関係者からなる。『満洲浪漫』が発刊された当時、『日本浪漫派』はすでに終刊になっていた。また、これらの関係者のほとんどが満洲文話会の会員であった。この図表では、北村と彼らの関係を、「人脈」という視点から分類している。では、彼らは北村とどのような関係を持ち、『満洲浪漫』にどのような影響を与えたのだろうか。

『日本浪漫派』は1935年3月、神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田興重郎の6人によって創刊された同人雑誌である。同誌が1938年3月に終刊を迎えるまで、同人は最初の6人から、50人以上にも増えていた。同誌における主流的な文学理念は、近代批判と古代憧憬を支柱とする「日本の伝統への回帰」を礼賛したものであった。

『日本浪漫派』同人の中で、『満洲浪漫』に執筆したのは、北村をはじめ、緑川貢、横田文子、檀一雄の4人だけである。緑川は『満洲浪漫』第3輯から同人になった。彼は保田の紹介で『日本浪漫派』に参加し、同誌に対して仲間意識が強かった。『日本浪漫派』に緑川は小説や書評などを数多く発表している。とりわけ、1936年、緑川は「初恋」（『日本浪漫派』）と「花園」（『文学界』）によって、第3回芥川賞候補になった。その文学は、下層の労働者や娼婦などに視点を注いでおり、プロレタリア文学の素質を備えたものと言える。満洲国に渡った緑川は、『満洲日日新聞』の学芸記者を勤め、小説はほとんど執筆しなかった。『満洲浪漫』には、随筆を1篇しか寄せていない。

横田文子が『日本浪漫派』に加入した時、北村はすでに満洲に渡っていた。2人の初対面の場は新京である。彼女は到着した当日、北村を訪ねた。『満洲浪漫』への加入は、その後しばらくしてのことである。当時、北村は、『満洲浪漫』創刊の企画をスタートさせたばかりで、原稿集めに苦労しているところであった。芥川賞候補になったことがある横田の「白日の書」を『満洲浪漫』の創刊号に掲載するよう、彼女に話を持っていった。横田が『満洲浪漫』に発表した作品は、その1篇しかない。

特筆に値するのは、檀一雄である。彼は太宰治親しく、北村とも『日本浪漫派』時代以来の友人であった。1939年末、檀は満洲国に渡り、『満洲浪漫』同人には加入しなかったが、同誌に積極的な姿勢を示した。彼は第6輯に詩「月地抄」、満洲浪漫叢書『僻土残歌』に「僻土残歌」と2篇の詩を発表している。

このように、『日本浪漫派』の同人だった緑川、横田、檀の3人は、北村のほか、『満

洲浪漫』にそれほど深く関わっていないし、満洲の日本語文学に大きな影響を与えるということもなかった。

一方、弘報処の存在は『満洲浪漫』にとって極めて重要な意味がある。弘報処は、満洲国建国に伴って作られた、異民族を対象とする宣伝・宣撫の機関である。1933年4月から総務庁情報処として活動するようになり、1937年7月、満洲国政府の機構改革により弘報処と改称された。1941年3月に発表された「芸文指導要綱」は、弘報処長の武藤富男の発表に基づくものであった。弘報処は満洲国の言論統制の機関として機能するところが大きかった³³。

すでに述べたように、『満洲浪漫』の創刊は、弘報処勤務の官吏を中心に企画された雑誌『白想』に由来する面があった。従って、『満洲浪漫』に寄稿した弘報処関係者は、ほとんど『白想』の同人候補者たちであった。

ここで最も注目すべき人物は、『満洲浪漫』の創刊号前後から北村と付きあってきた木崎龍である。木崎龍は『満洲浪漫』にかなり熱い期待を寄せており、同誌発刊の企画段階で、杉村勇造を北村に紹介している。その後も北村の力になり、『満洲浪漫』全6冊を通して、評論4篇、小説1篇を執筆した。さらに彼の計らいで、磯部秀見、丘益太郎、長谷川濬などが『満洲浪漫』に多数寄稿している。

また同じく弘報処に所属した長谷川濬は、のちに満映に移り、『満洲浪漫』の終刊後、『作文』の同人になった人物である。彼は1906年に函館に生まれ、『函館新聞』の社長・長谷川淑夫の三男である。兄海太郎（牧逸馬）が作家、次兄潁次郎が画家、弟の四郎は作家である。その文芸に長じる家族に注目し、川崎賢子が『彼等の昭和：長谷川海太郎・潁二郎・濬・四郎』（白水社、1994年12月）を著した。長谷川濬は四兄弟のうち、社会的知名度が最も低いかもしれない。彼は中学校を卒業した後、船乗りになったが、そのうちロシア語に興味を覚え、1929年に大阪外国語学校に入学、ロシア語を学んだ。1932年、満洲国に渡り、大同学院第1期卒業生として、満洲国の官吏になった。作家、またはロシア文学の翻訳者として、彼はかなり活発な文学活動に従事していた。『満洲浪漫』に9篇の作品を寄稿するだけでなく、詩人の逸見猶吉を同人に誘ったり、弟の長谷川四郎の作品を頻繁に同誌に推薦したりして、北村を助けて大きな力を尽くした。

長谷川濬は、その独自の作品世界の創造によって、『満洲浪漫』の代表作家と呼ばれるようになった。例えば、同誌第2輯の「家鴨に乗った王」は、中国人乞食の一生を描いた短篇である。主人公の王は苦力として働いていたが、それがうまくいかず、結局自分は「生来の乞食」だと認識するに至る。乞食になった彼は、建国祭の前夜、一匹の丸焼の鴨に乗って家に帰る夢を見ながら凍死する。作者は、乞食の惨めな生活には筆をついやさず、その放浪生活の楽しさのみを幻想的なタッチで描いている。まるで乞食の風物詩である。また、物語の最後の場面では、首都のメインストリートの賑やかさと、その裏通りの死体収

³³ 満洲国史編纂委員会編『満洲国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年1月30日、59-68頁

容所とを、強烈な諷刺を込めて対照的に描いた。第4輯に掲載された「烏爾順河」は、満洲国に渡った一日本人青年が体験した建国運動と恋愛の物語である。主人公の「私」は渡満早々、先輩の家で竹村という青年官吏と親しく、先輩の義妹・信子に好意を持ち始めた。しかし、信子を愛する竹村は「私」の機先を制して、暴力的に彼女を自分のものにした。その後、竹村は満洲国の治安工作のため辺境に赴任するが、その地で戦死し、信子もその後を追って自殺する。建国運動をめぐる生き死にする日本青年たちの悲しい物語である。この一篇は特に世評が高く、建国ロマンの佳篇として、作者の代表作ともなった。

長谷川濬の小説は、妄想と幻想に満ち、ロマンチックな要素が揃っているが、物語の構成や言葉遣いの洗練などについては、それほど工夫された跡が見当たらない。彼の作品では、多くの登場人物が自分だけの世界に没頭し、現実社会に向きあわないという姿勢が顕著で、結局、彼ら最終的に必ず現実社会に潰されてしまうといった様子が描かれている。従って、長谷川の小説世界は、一見、建国運動を肯定的に捉え、思想的には楽観主義のイメージで彩られているが、実はその裏側には、現実にあらがい、もがいている人間の暗い情念が流れていて、その点によって「文学」として成り立っているのではあるまいか。

さて、満洲映画協会（満映）は、1937年に成立した、満洲国の国策映画会社である。北村は同年、満映に入社し、配給、宣伝、製作部門などに関わって、2年間ぐらい働いていた。そのうち、満映における人的ネットワークを築いた。同社社員の大内隆雄、北尾陽三、坪井興、矢原礼三郎など、『満洲浪漫』の刊行に相応の力を発揮してくれた。

北尾陽三は、プロレタリア運動に挫折したのち満洲に渡り、『満洲日日新聞』の懸賞小説で作家デビューした。その後、満映に入社。日本に引き揚げてからは、労働組合運動に参加したという。『満洲浪漫』には「お談義部落」と「虚脱」の2篇を発表している。「お談義部落」は40頁を超える中篇である。満洲国の寛城子に集まった4人の文化人を中心に繰り上げられる、彼らの友情と恋の物語である。彼らは酒を飲んで文学談義にふけったりをしたり、女をめぐる争ったりなど、現実に翻弄されながらも懸命に日々の生活を送っている。「虚脱」は、満洲事変の前に大連に渡った日本人青年・新二を中心に展開する物語である。明白な目的がない渡満と、内地での「過剰意識の抹殺」（左翼運動の挫折と推測される）によって生きがいを失った新二は、友人の紹介で小さい印刷所で働くことになる。そこで彼は満洲事変を経験して、満洲建国などに煽られた周辺の日本人と中国人を観察しながら、自分なりの生き方を探ってくる。作中には、満洲事変や満洲建国に情熱を燃やす人物がほとんど登場してこず、かえって、そうした事件に冷淡な世情と知識人の姿を描いている。北尾の小説は、技法上の巧みさに欠けるが、登場人物の臨場感のある行動だけで読者の関心を惹きつけるという特質を持っている。そのリアリズム的な手法は、吉野、長谷川、北村らとかなり異なり、『満洲浪漫』、または満洲の日本語文学の別の一面を示している。

大内隆雄は福岡県柳川の生まれで、1921年に満洲に渡った。彼は満鉄に推薦されて、上海の東亜同文書院で中国語を学んだが、満鉄に就職後、プロレタリア政治運動に関わって、

同社から追われることになった。その後、新京日日新聞社、満洲映画協会などに勤めながら文学活動に従事した。大内は中国人作家の作品を多く翻訳して発表した。その中でよく知られるのは、『原野』（三和書房、1939）、『蒲公英』（三和書房、1940）など、日本で刊行された短篇集である。「大内の翻訳作業は荒い」、「原作者から翻訳の許可を得ていない」などといった理由で、彼に対しては、中国人作家からの不満も多かったが、翻訳家としての業績は極めて大きかった。『満洲浪漫』に大内は、創刊号から終刊号まで13篇の作品を寄せた。その内の8篇が満系作家の翻訳ものである。これは編集者としての北村にとって、満系文壇の動きを把握する上で、大きな意味を持っていたことだろう。

また、上掲の図表のうち、「満洲文話会」会員や『作文』同人などは、北村謙次郎の文学活動を背後から支えた作家たちだと見ていい。ここで注目しておきたいのは、『作文』同人の竹内正一、吉野治夫、坂井艶司、町原幸二などである。

竹内正一は、1902年に大連市に生まれた。小学校を卒業した後、東京に渡り、中学校、早稲田大学予科を経て、同大文学部仏文科に入学した。1926年、竹内は早稲田大学を卒業して、満鉄に入社した。その後、満鉄大連図書館、満鉄ハルビン図書館、満洲出版文化研究所などの職を経て、1945年8月、日本に引揚げた。

小説家としての竹内は、『作文』創刊（1932年10月）同人の一人である。彼はハルビンを舞台に多くの小説を書いたが、その中では作品集『氷花』（作文発行所、1938年）、長篇小説『哈爾賓入城』（赤塚書房、1942年）などが代表作として挙げられる。『満洲浪漫』に掲載されたのは、短篇小説「白眠堂徑徂」である。この小説は、ハルビンで日本人向けのアパートを経営する中国人が、値上げした燃料代の徴収をめぐる、間借りの日本人と争う様子を描いている。作中で、作者は問題の解決を「日満一体」に結びつけ、満洲国のイデオロギーを伝えているが、皮肉なことに、その「日満一体」は、中国語の上手な日本人と中国娘との付き合いを前提に実現されたものであった。

竹内は満洲で生まれ育った日本人であり、「満洲国」という土地は、日本人が中国人から奪ったものであることがよく分かっていた。そのような彼は、満洲国を根本的に讚美することができないし、また、満洲国がなければ自分は満洲で生活することができなくなるため、満洲国の批判もすることができない。そのゆえか、竹内の創作は筆遣いが繊細で、社会現象に対しては軽く触れるに留まっており、決して深く追究することがなかった。そこには、北村の、政治に距離を置くという書き方に通じる部分がある。この点については、かつて尾崎秀樹も注目したことであった。尾崎は「『作文』派の作家・竹内正一が好んで描く人物——北満において次第と賤民化して行きつつあった白系露人の哀愁帯びた生活にも、大人の童話とでもいうにふさわしい浪漫的な肌理のこまかい作風をもつ『満洲浪漫』派の北村謙次郎の観照のなかにも、民族問題は出てこない」³⁴と書いている。

一方、北村の満洲日報社時代以来の友人、吉野治夫は、『満洲浪漫』には第5輯まで寄稿し続けた。彼の小説「秋」は、大連に生まれ育った日本人青年の人間関係における心理的

³⁴ 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』、勁草書房、1971年6月30日、128頁。

な葛藤を描いたものである。薄寒い秋、満洲を去って行く友人を見送った彼は、他の友人と一緒に喫茶店に入った。そこで彼は周辺からの異常な視線に耐えながら、その友人が満洲問題を熱論している様子を黙って見ていた。やがて友人と別れた彼は、帰りの電車の中で、「明日は神社の宵祭りですぞ」³⁵と乗客が話しているのを耳にして、大連神社の祭りについての記憶をよみがえらせた。幼い頃の祭りに行く時の喜び、青年になった頃の就職難、健康の問題、片思いの人が嫁に行ったこと、そして、今日はその人（すでに他人の嫁になった、彼の片思いの相手）との約束の日だということから逃げようとする自分が送った憂鬱の一日……植民地生まれの日本人青年の成長と、その過程での喪失感を語った一篇である。

第1輯に発表された小説「姉妹のこと」と違って、「秋」においては、私小説の手法がモダニズム的な構成のもとに取り入れられ、それが、効果的な結果をもたらすように仕掛けられている。また、映画的な手法がこの小説を支配し、朦朧的な写生は読者の好奇心を惹き起こし、逆回転フィルムのような構成で一篇の結末が明らかにされるといったところに、吉野の卓越した創作技法が読み取れる。また、隅々まで漂っている植民地大連の雰囲気描写は、満洲における日本語文学の一つの到達点を示すものといえよう。この、物語性より創作方法論を重視するような作品は、吉野治夫の『満洲浪漫』での位置の特異性を主張している。

『満洲浪漫』と『作文』という二つの文学団体の関係は、ここで、相互に協力し合う形として現れている。竹内正一と吉野治夫のほか、坂井艶司も『満洲浪漫』に第1輯から第3輯まで詩を寄稿した。このように彼ら『作文』同人は『満洲浪漫』のなかで大きな役割を果たしたと考えられる。

最後に少し触れておくと、『草上』の同人、金尾梅の門と伊東月草の寄稿も意味深い。『草上』は伊東月草を中心に創刊された俳句雑誌である。北村は、1933年から1937年に満洲国に渡るまで、同誌に随筆など多くの作品を発表していた。『満洲浪漫』に『草上』同人の俳句を取り入れようとしたのは、かつて面倒を見てくれた伊東月草に対しての恩返しともいえるだろう。二人の具体的な親交については、北村の中篇小説「浪漫の頃」³⁶に詳しく語っている。

このように、『満洲浪漫』は多くの執筆者たちの協力によって刊行されてきた。それは、北村の「できるだけ広範囲で原稿を集めたい」³⁷という考えと一致している。「建国ロマン」を訴えながら、その合理性をどこか否定している長谷川濬、満洲国の正統性に沈黙を抱き、もっぱら白系ロシア人の零落した様子を描いた竹内正一、満洲国という時代に失望し、悲哀を抱く知識人を描いた北尾陽三、時代に対する心理的な葛藤を創作技法に託して追究した吉野治夫……それらの人々によって出来あがった『満洲浪漫』は、どの号、ど

³⁵ 吉野治夫「秋」、『満洲浪漫』第4輯、満洲文祥堂、1939年12月15日、8頁。

³⁶ 北村謙次郎「浪漫の頃」、『索通信』、2013-14年。

³⁷ 北村謙次郎「後書」、『満洲浪漫』第4輯、満洲文祥堂、1939年12月15日、212頁。

のページにおいても『日本浪漫派』について言及することはなかった。では、なぜ北村一人だけが、その誌上で『日本浪漫派』についての言説を口にしたのか。彼の提唱しようとした「大陸ロマン」の本質はいったい何であったのだろうか。次節は、『満洲浪漫』における北村謙次郎の、こうした言説を中心に検討していく。

第4節 『満洲浪漫』における北村謙次郎の言説

全6輯からなる『満洲浪漫』の編集に力を尽くしながら、北村は小説、評論及び編集後記など、いくつもの文章を同誌に発表した。それらを通して、北村はおおむね二つの観点を提唱している。一つは、平易、平俗文学に対する反発、言い換えれば、文学の高踏精神である。もう一つは、「大陸ロマン」という文学理念である。

1. 北村謙次郎の文学認識

北村謙次郎の文学認識は、上述の、彼の『満洲浪漫』の編集行為、そのありか、多少窺うことができると思われるが、ここでもう一度整理しておきたい。『満洲浪漫』を創刊するきっかけについて、北村は、いい作品をより多くの人に読むことができるように、と述べていた。しかし、それは外部向けの言葉であって、北村の内部においては、『満洲浪漫』はどのようなものであったのだろうか。その点を、彼が創刊号の「跋」に書いた内容から検証してみよう。

われわれの実体は、もつと茫漠として捕捉しがたい。絢爛たる思想、火のごとき情熱、幽かにしてやさしき情緒は、惟ふにわれら個々人の内部において更に豊かであろう。われらはいま、いかに生きることにより、内部の豊かさのいや増すかを考へ、そして豊かさの自らなる氾濫の日の来るべきを信ずることに、最も大いなる喜びを知りたいと念願する³⁸。

ここでの「われわれ」とは、雑誌『満洲浪漫』のことを指している。北村は、『満洲浪漫』の「実体」は「絢爛たる思想、火のごとき情熱、幽かにしてやさしい情緒」といったものであるとし、同時に、「茫漠として捕捉しがたい」存在だと解釈した。つまり、北村は『満洲浪漫』を創刊するに当たって、新人育成や日本文化の向上などといったことを目的としたのではなかった。この雑誌をもって、自己表現を試み、それを自分の人生の記録にしようとしていたのだ。

満洲国ができて6年目に、その首都新京で創刊された文芸雑誌において、政治的な目的

³⁸ 北村謙次郎「跋」、『満洲浪漫』第1輯、1938年10月27日、満洲文祥堂、274頁。

ではなく、ひたすら個人の内部の豊さを求めたということは、北村の時流に流されない気概であったといえるし、文学に対する純粋な追求精神であったともいえよう。その後、北村の『満洲浪漫』における創作テーマは、満洲国政府の指導方針（文化統制）に応じて変わらざるをえなかったが、文学そのものに対する追求精神は変わることがなかった。

自己表現の記録として、北村はまず文学の功利性を否定していた。そのことは、同じく上掲の「跋」に鮮明に現れている。

われわれの仕事が、現在すぐ何かの役に立つだらうといふやうなことは、あまり考へたくない。文学の仕事といふものは、純粋であればあるだけ、ものゝ役に立つこと尠ないものである³⁹。

文中の「われわれ」とは、ここでも『満洲浪漫』の同人達のことを指している。「現在すぐ何かの役に立つだらうといふやうなことは、あまり考へたくない」とは、1938年という、満洲国政府と協力していかなければならない時代において、自分たち同人を明らかに「御用文人」とは別のものとし、彼らの創作自由を求める姿勢を示したものと解される。「文学の仕事といふものは、純粋であればあるだけ、ものゝ役に立つこと尠ないものである」という部分では、北村は文学の純粋さを強調することによって、文学のための文学という芸術至上主義を訴え、文学の功利性を根本的に否定している。これは北村の生涯を貫いた認識であり、彼の文学行動の基準でもあった。北村には政府の方針に従って書いた作品がないわけではない⁴⁰が、満洲で文筆活動に従事した同時代の日本人作家と比べ、それは極めて少なかった。彼の文学に対する執着は、終始、日常的に執筆活動に専念していたことから窺えるだろう。時代に抗して筆を折った作家たちのような厳しい視点からすれば、北村の創作は、一見すると中国東北地方への侵略に加担し、戦争に協力したようにも見えるだろうが、本人にとっては、どのような時代にあっても、ただ書き続けるというだけのことであったに違いない。

引き続き、北村は平易平俗の文学に対しても、反発の態度を示した。

満洲浪漫は、決して厳正な写実文学を却けるものでないことははつきり認めて貰へると思ふが、鎖末な日茶飯事文学や低俗平板な自然主義的行きかたの薄汚なさを却けることだけは、依然として変わらないはずであることも、はつきり認めておいて貰はねばならぬ。安易な行きかたを、絶対に却けたいのである⁴¹。

³⁹ 同上。

⁴⁰ 例えば、北村の代表作「春聯」についても、そのことが言えよう。この長篇には、「満洲建国十周年」を慶祝するというモチーフも込められていた。詳しくは拙論「満洲国における北村謙次郎の創作」（『日本研究』第48集、2013年9月、国際日本文化研究センター）を参照されたい。

⁴¹ 北村謙次郎「時評的「詩と真実」」、『満洲浪漫』第2輯、文祥堂、169頁。

ここでは、北村は、「鎖末な日（常）茶飯事文学や低俗平板な自然主義的行きかた」を「安易な行きかた」だと解釈し、「絶対却けたい」と主張した。その例証として、横田文子の「白日の書」を取り上げた。「白日の書」は横田が満洲に渡る前に発表した小説である。レスビアニズムをテーマとしたこの作品は、1936年に芥川賞候補に選ばれ、日本内地では評価が高かった。先にも述べたように、横田が渡満した早々、北村はこの小説の『満洲浪漫』創刊号への転載を依頼した⁴²。しかし、第1輯で「白日の書」を読んだ北村は、第2輯では、「彼女は豊かな構成力を恵まれてゐるにも拘らず、この一篇ではひたすら自己を追ふことにのみ急で、豊かな構成といふものには逃げを打ち、大きなロマン文学を生み出すことに失敗した」⁴³と厳しく批判した。この小説は、工夫による創作というより、むしろ無意識な自己表現に留まったと見るべきかも知れない。北村からすれば「安易な行き方」に見えたのだろう。戦後、横田文子は「白日の書」を再刊できないかと北村に相談したことがあるが、彼は婉曲に断っている⁴⁴。北村にとっては、文学作品は作者の苦心の結晶であるし、たやすく作れるものではない。「安易な行き方」は、文学に対する冒瀆である。満洲国では、いまだ文化的環境が熟していなく、職業作家さえ一人も存在しなかった。このような時代において、北村があえて満映の仕事を辞め、職業作家になろうとしたのも、この認識に基づくものであったのだろう。

この平俗的文学に対する抵抗、文学精神の純一化といったことは、『日本浪漫派』同人の思想と一脈通じるところがある。1934年の同誌の広告には、「平俗低俗の文学が流行つてゐる。日常微温の饒舌は不易の信条を昏迷せんとした。僕ら茲に日本浪漫派を創めるもの、一つに流行への挑戦である。僕らは専ら作家の清虚俊邁の心情を尊び、芸術人の不羈高踏の精神を愛する。此の日その日の美を展き、その果を始めることに、僕ら次代の文学人の賦命を感じて禁まぬ」⁴⁵と、高らかに宣言されている。ここに言う「作家の清虚俊邁の心情を尊び、芸術人の不羈高踏の精神を愛する」といったものは、さぞ北村の文学精神の琴線に触れたことであろう。

しかし、同じく平俗的文学に抵抗するにしても、北村は『日本浪漫派』の代表者である保田與重郎とは一線を画していた。保田は日本古典の美的世界を憧憬・追究し、結局、日本民族主義の袋小路に入ってしまった。北村は同じく日本の古典に対する共感を示しているが、そのような日本的感性をいったん抹殺し、みずからの「死」を賭して大陸の「三月の風塵」を吸収するという形で、大陸の日本人になりきろうと主張した。

『日本浪漫派』に対して、北村は決して同調の姿勢を取っていない。彼は、「満洲ロマン

⁴² 北村謙次郎「浪漫の頃」、『索通信』第15号、2013年5月10日、18頁。

⁴³ 北村謙次郎「時評的「詩と真実」」、『満洲浪漫』第2輯、文祥堂、1939年3月10日、169頁。

⁴⁴ 『索通信』第15号(2013年5月10日)掲載の坂井信夫「あとがき」参照。同誌発行人の坂井氏は横田文子の令息。

⁴⁵ 保田與重郎「日本浪漫派」広告、『コギト』第30号、1934年11月1日、172頁。

の内包する精神は、派として日本浪漫派を受け継ぐものでなく、いはばその氾濫であり実践でもあるわけだ⁴⁶と、『満洲浪漫』を『日本浪漫派』より高いところに置き、『満洲浪漫』の「その氾濫であり実践でもある」という理念を強調した。

このように、北村は文学が自らの生を記すものとして、その功利性と平俗平易の傾向を否定し、芸術の尊厳を求めるといった高踏精神の傾向を示した。では、北村が『満洲浪漫』に仮託した「理念」とは一体、何だったのだろうか。

2. 「大陸ロマン」の提唱

『満洲浪漫』において、北村は、自らの文学理念を「大陸ロマン」と定義したほか、「大ロマン」、「壮大なロマン」、「理念としての満洲ロマン」、「大きなロマン」などといった言葉も使用している。ここでは、これらを総じて「大陸ロマン」と呼ぶことにする。

「大陸ロマン」を説明するに当たって、北村はまず、「文学」と「政治」の関係を整理した。通常は並立して論じられるこの二つの概念は、北村の中では統一されている。彼は「中心に在るものは僕らの芸術家としての魂であり、美意識の純化といふ渴仰のみである。誰が国策の尊貴を知り、建国イデオの深さを知るものぞと問へば芸術家以外にその人なしと答へたいのが僕の心情である」⁴⁷と書き、文学が政治から離反することはないと述べ、満洲建国のイデオロギーに同意のうえで文学に取り組む姿勢を明らかにした。

これは一見、北村が創刊号において示した、政治から距離を置きたいという姿勢と矛盾するようだが、それはおそらく、満洲国の文化状況に対応しての北村の変化だと言えるだろう。すなわち、1938年当時、日本語の文芸雑誌は満洲国政府にとっても必要であったし、北村にしても当面の必要から政府筋の支援に頼らざるをえなかった。その点で、注目しておきたいのは、『満洲浪漫』の創刊号から第3号まで、少なからぬ政府系文化人が原稿を寄せていたことである。北村は政治に巻き込まれたいくないと宣言していたが、結局、時代の要請から脱出することはできなかった。

第5輯が刊行された1940年5月から翌年にかけてあたりになると、日本語の文芸出版物はすでに珍しいものではなくなっていた。『モダン満洲』、『観光東亜』、『月刊満洲』などといった商業雑誌が充実してきたし、『文学地帯』（新京）、『断層』（撫順）、『二〇三高地』（大連）など、有力な文芸同人雑誌も満洲の各地に育ってきていた。と同時に、満洲国政府の文芸活動に対する姿勢も、より厳しくなってくる。文学者を会員の主体とする「満洲文話会」（在満文化人の親睦団体）に、まず協和会が干渉してきた。次いで、政府の弘報処が文話会を再編成し、新たな文化統制機構を作ろうともくろんだ（その結果として1941年3月、弘報処は「芸文指導要綱」を発表）。そうした状況の中、北村が文学活

⁴⁶ 北村謙次郎「探求と観照」、『満洲浪漫』第5輯、東都書籍新京出張所、1940年5月2日、72-73頁。

⁴⁷ 同上、65頁。

動を持続していこうとしたら、満洲国政府への協力の姿勢をさらに明白にしていかなければならなかった。そのような変化の中に、北村固有の文学に対する情熱と、満洲国に対する屈折した思いとを窺うことができるわけである。

「大陸ロマン」という理念はまさにその認識の上に、提出された。北村は「大陸ロマン」を「文学的な意味あひではなく大陸日本人の生き方の規範としてのロマンを説かうとするのである」⁴⁸と解釈し、満洲の日本人は大陸に定住すべきだと提唱した。そして、1943年の『月牙』に収録された随筆の中で、北村はようやく「大陸ロマン」を定義してみせた。すなわち、「理念としての満洲ロマン」とは何かといふと、簡単にいへば、建国理念のロマン的発見といふことである⁴⁹という短文である。ここで、北村は初めて、「大陸ロマン」とは即ち「建国ロマン」であると言明した。

では、北村の「大陸ロマン」という理念は、どのようにして形成されたのだろうか。それは、北村の少年時代の、関東州で10年間の生活体験と、満洲国に渡ってからの文学的使命感によるものであったし、そこには、満洲国の国策に対する共鳴も含まれていたことだろう。とりわけ、満洲国において北村は、熱心に日本人の文芸・文化運動を推し進めながら、満洲文話会を通して中国文学者との新たな交流を求め、さらには満洲に住む白系ロシア人への関心も深めていった⁵⁰。

「大陸ロマン」理念を実践するために、北村は、自らの「死」によって大陸日本人として生まれ変わろうとし、文学営為を通して他民族との交流を深め、彼なりの「民族協和」を目指したのだった。それが、彼の満洲国に対する認識であり、彼が満洲で追い求めた文学の役割であった。だが、傀儡の「国家」の上に建てられた理想は、本当に実現できるのか。

北村にとっての「大陸ロマン」は、「古代日本人の明朗と潤達は、大陸の風貌の前に一旦は死ななければならないのである（中略）知識としての大陸を語るのではない。膚肉としての大陸を語りたのである」⁵¹と、日本人固有の感性を媒介に、偏見なしに「大陸風貌」を認識すべきだと主張している。北村は自ら大陸の風土と一体化して、大陸での生き方を探り、正統な文学によって、日本人の満洲での定住を正当化するというに他ならなかった。

そのためにこそ、「じつとしてゐるよりほかない」⁵²態度と冷静な観察とが必要なのであった。このような考えは、北村の満洲国在住期に育まれた重要な認識であるし、もともと彼の文学作品のほとんどに通底するものであった。1941年に『満洲日日新聞』に連載され

⁴⁸ 同上、72頁。

⁴⁹ 北村謙次郎「『満洲浪漫』について」、『月牙』、吐風書房、1943年4月30日、150頁。

⁵⁰ 北村の居住する寛城子（新京の北部）には白系ロシア人が多く住んでいた。彼らとの日常的な接触を通して、北村は満洲国における民族問題を自身の文学に取り込んでいた。

⁵¹ 北村謙次郎「探求と観照」、『満洲浪漫』第5輯、東都書籍新京出張所、1940年5月2日、73頁。

⁵² 同上。

た長篇小説「春聯」の主人公・振作はその典型的な一例であろう。身边に建国運動に挺身する人たちがどんどん現れているのに、振作は一人、日々相変わらず寛城子の住まいに「じつとして」いながら、周りの異民族を観察しているだけなのだ。

このような認識は、北村の満洲の中国人文学者に対する態度からも、より鮮明に見えてくる。北村は、この土地で生活する中国人文学者の大陸性に共感を求めようとしている。彼は、中国人作家の作品に共通する「暗さ」に対して、「さきごろ僕は満人作家の小説集を読み、一概に暗いといつて批評した。明るい民族の声として当然である。しかし僕は、僕らが一旦死ななければならぬことを云つた。かうして満人作家の作品の暗さは、そのまま僕らにまでのしかかつて来るのである。われわれはその暗さを容認しなければならない。ではその暗さとは、永久の暗さであるかといへば、そこに僕ら作家として、大陸性への接近、溶解の度が現はれるだらうと考へるのだ」⁵³と書いている。中国人作家の「暗さ」に対する一般的な批判に比べ、北村はより寛容な態度を取っている。彼は、中国人作品の「暗さ」を認めつつ、自ら「一旦死ななければならぬ」ことで理解できると主張した。しかし、北村が説く日本人としての「死」には、どれほどの意味があったのであろうか。中国人作家たちのその亡国の苦しみや、侵略者と付きあわなければならない複雑な思いを、はたして北村は、日本人としての「死」と満洲人としての再生とを通して、どれほど理解できたのであろうか。文学を通して異民族との連帯を求めるということは、北村が自己の文学理念を、満洲国の「民族協和」という建国理念と一致させようとしたことを意味した。

つまり、北村にとっての文学とは、国境がなく、支配民族も被支配民族も、ひとしく共有できるものであり、それを通して両者を融和したいと彼は信じようとしたのだ。この認識は、北村の文学への情熱に由来するものであったのだろう。彼の文学者としての志は、「大陸ロマン」を定義し、実践することである。そして彼の言う「在満日本人の大陸での生き方」とは、文学によって一切を解決したいという執念である。

しかし、北村の「大陸ロマン」という考えは、雑誌『満洲浪漫』を代表することはできなかった。その言説は、満洲の文化人・文学者一般の共鳴を得ることがなく、彼一人の考えに留まってしまったのである。そして、『満洲浪漫』における北村の言説は、『日本浪漫派』に対する反発を示すものとして、彼が1930年代の日本文壇から影響を受けた必然の結果である。北村の場合も、『満洲浪漫』が有した多様性の中の一つにすぎなかった。

まとめ

このように、『満洲浪漫』は満洲の日本語文学の蓄積の上で、満洲国政府、及び満洲の日本文学者の期待に応じて現れたものである。この雑誌には、北村が「できれば多くの人
が寄稿したい」という編集方針のもと、長谷川濬、吉野治夫、木崎龍、大内隆雄、竹内正

⁵³ 同上。

一など満洲で長く暮らしていた人達を集め、『満洲浪漫』を満洲色、または大陸色に染め、同誌の「大陸ロマン」という理念を具現化している。

それらの多くの執筆者は、それぞれ満洲の文化、文学に対する認識が異なり、決して同じ立場に立っているわけではなかった。とりわけ北村の『日本浪漫派』に関する言説には、本論第2章に触れたように、同誌に対する一種の反発精神も込められていたのだが、『満洲浪漫』のみならず、当時の満洲の他の媒体においても、これに呼応、賛同する人もいなかった。その意味では、『満洲浪漫』は『日本浪漫派』とは関係がなかったといえるだろう。

ここで最も注目したいのは、北村の提出した「大陸ロマン」という文学理念である。『満洲浪漫』第5輯においては、かなり曖昧な言い回しで表現していたが、その後、自らそれが「建国ロマン」であると明言したのは、彼の思想的動揺と見ていいのだろうか。そして、『満洲浪漫』における北村の「大陸ロマン」の提言は、日本人の「満洲風土」の吸収を通して、他民族と一体化することを強く望んでいたものであることが明白となった。それは言い換えるならば、満洲国との一体化でもあったし、彼の文学の可能性という夢でもあった。その夢のため、北村は満洲の日本人と異民族との融合を求めようとする形で、文学者の役割を果たそうとしていた。後章で論じる「春聯」と「或る環境」とは、その理念の実践であった。

弘報処による文化統制が強化される以前、満洲文芸界は、まだいくらか「自由」な雰囲気の名残をとどめていた。それは僅かな期間ではあったが、北村謙次郎をはじめとする満洲の日本人と少数の中国人作家は互いに力を合わせ、満洲文芸界にひとときわ輝く文芸雑誌を送り出した。しかし、その後の「文化統制」のもと、北村が情熱をもって育てた『満洲浪漫』もついに息の根を止められる。それはつまり、この雑誌を通して語られた彼の夢の挫折でもあった。

第4章 北村謙次郎の「或る環境」

——異民族との共生

本章では、北村謙次郎の代表作「或る環境」を取り上げて評価する。この連作短篇小説は1939年2月、その第1作が発表され、1941年1月に完結を見た。その発表時期は、ほぼ『満洲浪漫』の発行期間と重なっている。およそ2年間かけて断続的に発表されてきた、これらの短篇小説12篇は、北村の満洲での文学活動において、雑誌『満洲浪漫』と同じ程度の比重をもって扱われるべきであろう。北村文学を理解する上で、最も重要な作品だと言ってよい。

内容から見ると、この連作では、北村の少年時代の満洲と、これを執筆している現在の満洲の様子が描き出されている。満洲の過去と現在とが、彼の体験を通して対照されている。従って、本章においては、北村の満洲認識の形成と、その変容のプロセスを明白にしていくことになる。

本章は4節からなる。第1節では、この短篇小説シリーズの誕生の経緯と、全体の構成を検証し、北村がこの小説を創作するに到ったモチーフを探り出す。シリーズの構成法そのものに、北村の思想の有りようが顕著であるし、それはまた、北村文学を解読する上での貴重なカギも提供してくれている。第2節では、この短篇シリーズのプロローグとなる「序章」を取り上げて論じる。北村のリアリズム的な手法で描き出された日本人作家と中国人作家との交流から、当時の満洲国の文化状況を読み取ると共に、その状況に苦しむ主人公・忠一の複雑な心情を分析していく。第3節では、忠一の少年時代をテーマにした10篇の作品を解読する。作品の執筆時期の順序ではなく、物語の中の時間軸にそって10篇を読み進めていく。その方法によって、これらの作品は時系列化され、大連で育ってきた日本人少年の日々の生活が一つの流れとして展開されていく。そこを通して、作者・北村の中国人、あるいは満洲に対する考えの変容も窺い知ることができる。第4節では、「或る環境」シリーズのエピローグとなった小説「つひの栖」を扱う。この短篇は第2節の「序章」と呼応して、再び成人後の忠一の現在の世界に戻ることになる。ここにおいて、「或る環境」シリーズが書かれる機会となった主人公の「苦しみ」はすでに消え、父親になったことによって、満洲国に生活の根を下ろそうという姿を示す。

第1節 シリーズの誕生と構成

小説「或る環境」は後述の12篇の短篇からなる連作である。全体は、北村謙次郎の他の中・長篇小説にも見られる回想ふうの形式が採用されている。同じ体裁で執筆されたものとしては、長篇小説『春聯』（新潮社、1942年3月）や中篇小説「浪漫の頃」（『索通信』、2013-14年）などがある。

しかし、「或る環境」は回想ふうの形式を採用しているものの、最初からそのように構想

されたわけではなかった。この長期間にわたる連作のうち、最初に発表された作品は、『満洲行政』1939年2月号に掲載された「天守」である。その後、「餓鬼」が同誌の5月号に掲載された。この2篇は、『新天地』(1939.6)に発表された「鼎座」(『満洲浪漫』に再掲の際「序章」と改題)と合わせて、初めて「或る環境」というタイトルのもとに、同年7月に刊行された『満洲浪漫』第3輯に発表された。

その後、「早春」及び「青果」は「或る環境」の続篇として『満洲浪漫』第4輯(1939年12月)に掲載された。そのうち、「早春」はすでに『満洲行政』1939年10月号に発表されていた。「青果」は「色鳥」と一緒に『満蒙』(1940年1月)にも再録された。この「続篇」は、『満洲浪漫』に掲載された最後の作品となるが、その文末に「終わり」を匂わせる文言は見当たらない。

『満洲浪漫』の終刊後、北村は「或る環境」シリーズの発表の舞台を『満蒙』と『満洲行政』に移した。とりわけ『満蒙』1940年1月号に掲載した「青果と色鳥」は、物語の構成上、『満洲浪漫』第3輯の「序章」に呼応している。これまで続いてきた連作が、ここで一応終了を迎えた様子が読み取れる。だが、作者はまだこのテーマに未練があったのか、その後も、同シリーズの続きとして、「博物教室」(『満洲行政』、1940.4)、「塔影」(同、1940年6月)、「十六号の娘」(『新天地』1940年7月)、「つひの栖」(『文芸』1940年8月)など次々と発表し、連作を充実させていった。とりわけ、「つひの栖」は、「序章」に対応して、実質上「或る環境」シリーズのエピローグとなった。

しかし、「つひの栖」の後も、北村は同じシリーズに属する「垣の外」(『満洲行政』、1940年9月)及び「舞台」(同、1941年1月)を書き継いだ。とりわけ、最後に発表された「舞台」には、以下のような説明が添えられている。

中篇「或る環境」を本篇で終る。執筆中いろいろ激励の辞や注意を受けた。感謝に耐へない。なおエピローグのつもりで書いた「つひの栖」は昨年中に発表してしまつたので、それは本篇に次ぐものと思つていただければ好都合である¹。

ここでようやくこのシリーズは完結を見ることになった。如上の記述を整理してみると、この連作「或る環境」に収められた12篇の作品は、以下のような配列をもって構成されていることになる。

「序章」(「鼎座」と改題)	1939.6(初出年月。以下、同)
「天守」	1939.2
「餓鬼」	1939.5
「早春」	1939.10
「青果」	1939.12

¹ 北村謙次郎「舞台」、『満洲行政』第8巻1号、1941年1月1日。

「色鳥」	1940. 1
「博物教室」	1940. 4
「塔影」	1940. 6
「十六号の娘」	1940. 7
「垣の外」	1940. 9
「舞台」	1941. 1
「つひの栖」	1940. 8

連作の「序章」とエピローグの「つひの栖」の2篇の物語の時点は主人公「忠一」の「現在」に置かれている。この二つの作品に挟まれる形で、「天守」から「舞台」までの10篇では、主人公の少年時代が扱われている。これらの10篇も、それぞれ独立した作品として読めるのであるが、その前後に、前者2篇による枠が設けられることによって、それらは主人公の「回想」という性格を帯びてくる。

では、作者の北村は、なぜ、このような回想的な構造をもつシリーズを企画するようになったのだろうか。以下、個々の作品を具体的に吟味しながら、作者の意図を探っていくことにする。

第2節 物語の導入——「序章」

「序章」は、満洲に住む日本人作家と中国人作家を集めて催される座談会に対する、作家・忠一の期待感から筆が起こされる。体調を崩していた忠一は、物事に対する態度が消極的になっているが、中国人作家との交流には異常なほどの関心を寄せていた。しかし、ようやく開かれた座談会では、日本人作家たちの積極的な発言ぶりに対して、中国人作家たちは、建前でしか応じてこなかった。そのような状況に対して、忠一の心情は期待から失望に至り、再び退嬰的な状態に戻った。そして忠一はまた、日ごろ身邊に溢れる「民族」、「国家」といった言葉を思い出して苦しみを感じた。そこで彼は「自分たちと違つた環境に育つ人たちへの、大小と定まらぬ、さまざまな感慨が湧いた」²という。こうして、この座談会を契機として北村は満洲で過ごした少年時代の「環境」に思いを馳せる。

作中の「座談会」とは、1939年6月ころ、満日文化協会の主催で、『満洲浪漫』の同人と『芸文志』の同人を中心に開かれたものを指していると思われる。それは日満文学者の初めての座談会であり、満日文化協会の主催によって新京で行われた。北村謙次郎の『北辺慕情記』(大学書房、1960年9月)によると、この会は満日文化協会が資金援助した『芸文志』の創刊披露会を兼ねて行われたという。満日文化協会³とは、1933年12月に設立され

² 北村謙次郎「或る環境」、『満洲浪漫』第3輯、1939年7月23日、110頁。

³ 満洲国史編纂刊行会『満洲国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年1月30日、1135 - 1136頁。

た満洲国の文化機関である。会長は鄭孝胥、副会長は岡部長景である。同協会は満洲の文化遺物を保存・復興することを目的とし、博物館・図書館の創立援助、日満文化の紹介、各種の文化活動に携わっていた。会員には日満両国の学者と有識者がいた。経費は両国が分担していた。なお、その名称は、日本側からは「日満文化協会」と呼ばれ、満洲国側からは「満日文化協会」と呼ばれていた。岡村敬二は同会について、「満洲国の文化政策を指導するというような強いものではないのだが、なにかの節目や機関の創設のときその傍らに満日文化協会は在るのである」⁴と述べている。満洲国における種々の文化運動に関わって、同協会が果たした役割は小さくなかった。この小説では、満日文化協会は「或る文化機関」として登場している。

満人の作家たちと、一度懇親会のやうなものを開きたいといふ希望は、忠一たちが前から考へてゐたところであつた。然し大勢のことになれば、さう自分一人の気持ちばかりでもいけず、何より満人側の機が熟さないといふことが手伝つた。つい延び延びになり、やつと先ごろ或る文化機関の仲介を得て、第一回の座談会を開くことができた。どういふ結果になるか、些少の懸念はあつたけれども、とにかく理屈を離れて顔を見知り合ひ、腹藏ない話が出来さへすればと考へ、仲間の者に日取り其の他を通知する傍ら、懇意な速記者に速記を依頼することも忘れなかつた⁵。

上の引用は「序章」の冒頭部分である。まだ座談会の場面に入つてはいないが、忠一の心理的な葛藤はすでに文面に浮かびあがっている。この座談会に登場するグループは、中国人作家たちと交流を求める日本人作家、日本人作家との交流をいったん断つてきた中国人作家、及び両者間の調整役を務める「或る文化機関」である。忠一は日本人作家の一人として、中国人作家との交流に熱い期待を抱いているのだが、「大勢のことになれば、さう自分一人の気持ちばかりでもいけず」⁶と、周辺の条件に押されて、事態が自分の期待通りに運ばないことを憂えている。一方、「或る文化機関」を通して、やつと開催できるようになつた座談会に対して、忠一はその文化機関への感謝の思いは少なく、かえつて「些少の懸念」、「とにかく」といった消極的な言葉を使って、不安な気持ちを露にしている。要するに彼は、中国人作家たちがその文化機関に対して警戒心を持ち、仕方なく座談会に出席することになつた気持ちを察していたのである。

ここには、満洲国の文化構図が顕著に現れていると思われる。満洲に在住する日本文化人たちは、満洲国においては支配民族として存在し、なかには個人の理想と自由を求めて文学活動に従事する者があつたにせよ、実際は文学というソフトな面から満洲国の存立を

⁴ 岡村敬二『日満文化協会の歴史——草創期を中心に』、京都ノートルダム女子大学、2006年10月24日、8頁。

⁵ 注2、97頁。

⁶ 同上。

支えようとしているに過ぎなかった。他方、満洲国で生活している中国文化人がいる。彼らは亡国の悲しみを背負っており、生きるために黙々と仕事に取り組んでいたが、中国民族としての思いを表に出すことができないため、彼らの多くは文筆活動を中断するか、保身的なものを書いたりするほかなかった。それにも関わらず、彼らは支配当局から目を付けられがちだったので、当局からの疑惑を逸らすためにも、その座談会に出席せざるを得なかった。その意味では、この作品に描かれているのは、政治面における「侵略者」と「被侵略者」との対立の図式であった。

「侵略者」の側に立つ忠一は、中国人作家と「腹藏ない話ができる」ことを期待した。「腹藏ない話」は、信頼しあう人同士のみがなし得るものであり、対立関係にあるもの同士では困難である。中国人作家と壁一枚の隔たりがあると知ってはいるものの、こういった期待を抱いた忠一は自分の立場を意識していないというより、彼を代表とする日本文化人が相手の「被侵略者」の立場を軽視しようとしていた姿が映し出されている。その直接的な結果として、一方的に座談会を強制している日本人作家と、それに建前でしか応えられない中国人作家との食い違いの相が浮き彫りにされている。

勿論、日本文化人と中国文化人との交流には、それなりの意味がある。しかし、その交流を促成しようとする満洲国は、その存在自体が、そもそも中国人作家たちを沈黙させている張本人なのである。その事実に対して、作中の忠一は言葉では言い表せない憂鬱を深く感じた。彼は「文学への情熱、人間への愛と信頼」⁷を通して日中作家間の連帯が可能だと信じているが、その日の座談会ではそこまでの交流に至らなかった。そして、自由に生きようとする忠一は、無意識のうちに周辺の「民族」や「国家」などの言葉に縛られていき、苦しくなっていく。この苦しみが、北村謙次郎に少年時代のことを思い出させるきっかけとなった。

日本軍の侵略行為によって「満洲で暮す」ことができた北村にとって、「満洲に渡る」ことそのものが、侵略行為を認めることを意味していた。満洲国の傀儡体制の下で、中国人作家たちと本音を交わす交流を期待したことが、そもそも甘かった。その結果、北村は、そのような雰囲気の中では、小説の世界に没頭することにしか逃げ道を見つけることができなかった。北村は、自分が「満洲にある」ことの意味を、過去に、自らの少年時代にまでさかのぼって問うてみたいと考えた。連作「或る環境」は、彼のそのような思いから発して構想・執筆されたのである。

第3節 忠一の少年時代

前述したように、「或る環境」における忠一の少年時代は北村謙次郎の大連時代と重なる。北村の大連時代とは、1912年7月に大連に渡ってから、1923年3月に大連を去るまでの時期を指す。その約10年間の滞在は、北村の小学校時代と中学校時代とに分けられる。「或

⁷ 注2、104頁。

る環境」シリーズの内容に当てはめれば、短篇「天守」から「色鳥」までは忠一の小学校時代、「博物教室」から「舞台」までは、忠一の中学校時代に当たる。

「天守」

「天守」は、大連に渡ってきたばかりの日本人少年の自我の成長と心理的葛藤を描いた作品である。阿片製造場と事務室が一体化した事務所で、忠一は中国人使用人が阿片を吸引したり、阿片の取引をしたりする様子を観察し、彼らに遊んでもらったりして、中国人に親しみを覚えるようになった。一方、学校で民族差別的教育を受けている彼は、路上で中国人と鉢合わせになった時、絶対に道を譲らない行動を取っている。

そんな日々のなか、天守閣を設けた新しい阿片事務所ができた。「お城のそれと同じ作りのその櫓は、白壁、黒瓦屋根、そして棟の両端には金色に光る鯨がとりつけられ」⁸といったふうな建物である。それは忠一に「清新な未知の世界の象徴」⁹のようなイメージを与えた。そして、年末に忠一は父の代わりに中国人の宴会に出席することになった。初めて大人の世界に飛び込んで行くという不安は、その天守閣を見た時に消えた。その宴会で忠一は、不思議な微笑を湛えた謎のような日本人少女に出会い、彼女から天守閣には「面白いものがある」¹⁰と聞かされる。その後、天守閣に登った忠一は、しかし、「面白いもの」を何一つ見つけることが出来なかった。忠一は結局、少女の言った「面白いもの」の正体が分らないままに終わる。

本篇における、「天守閣」の登場には二つの意味がある。一つは在満日本人の「郷愁」のよりどころとしての存在であり、もう一つは、植民地の支配者としての日本人の「権威」を示すものである。日本人少女に教えられた「面白いもの」とは、天守閣にある日本的な何かであろうと思われるが、それが「郷愁」の意味を表している。また、忠一は宴会に行く途中に天守を眺め、それまでの不安が消えたのだったが、それは彼が、日本人としての「権威」を自覚したからなのではあるまいか。

「天守」での忠一には、その自我の成長はまだ始まっていない。「彼ら（中国人）に対する親愛と軽蔑との、拭ふべからざる、不思議に混交した経験が積み重ねられていつた」¹¹という記述は、忠一の内部における、日々遊んでくれる中国人使用人たちに対する自発的な親愛感と、自分の外部（学校教育）における、中国人を差別することとが混交している状態を表している。つまり、その時の忠一は、自分の内部と外部との区別をまだ付けることができず、ありのままの自分をさらけ出している。

ちなみに、小説に登場した阿片事務所に関して、史料には以下のように記されている。

⁸ 注 2、112 頁。

⁹ 注 2、112 頁。

¹⁰ 注 2、116 頁。

¹¹ 注 2、113 頁。

明治三十九年十月州内居住の一支那人に阿片の輸入製造販売を特許したが、翌四十年日本人一名との共同事業として改めて特許を与へた。此の販売人は当初台湾総督府専売局と特約して同局製造の煙膏を輸入販売する計画を試みたが、同煙膏は関東州内癮者の嗜好に適せざることを発見したので、爾来芝罘其の他より輸入した煙土を以て大連に於て煙膏を製造し、煙館業者の手を経て癮者に零買した¹²。

松原一枝の書¹³によると、「一支那人」とは潘忠国という関東州在住の中国人業者、「日本人一名」とは、「或る環境」の中で、「阿片総局泰永会社の橋口」のモデルとして登場する石本鑽太郎のことである。

石本鑽太郎（1864－1933）は、高知県の生まれ。幼いころから軍隊に憧れた彼は、視力の問題で軍人になることができなかったが、その後、陸軍通訳として日清戦争、日露戦争に従軍することができた。特に日本が台湾を占領した時、彼は台湾の阿片専売局に通訳として勤め、阿片製造が多大の利潤を生むことを知った。1906年、石本は阿片総局の設立について関東都督の大島義昌に提言した。その後、彼は阿片製造専売特許を取得し、莫大な利益を手に入れた。それを資本として商社、銀行、学校、新聞社などの事業を展開し、関東州屈指の実業家となった¹⁴。

石本が阿片経営で得た収益金は、中央公園、図書館、市営住宅などの公共施設に使われたと言われるが、その中では、とりわけ旅大道路が注目される。旅大道路とは、旅順と大連を結ぶ自動車道路のことであり、当時、旅大南道路と呼ばれた。延長 17,853m。1921年から建設され、完成まで3年半、工費 135万円がかかった¹⁵。また、2回ほど行われた「満蒙独立運動」も、石本の資金援助によるところが大きかった。彼の弟・石本権四郎は第二次満蒙独立運動で命を落としている。

北村の父・享吉は、1909年前後、東京から大連の通信管理局へと転勤して、その後石本の元に勤めるようになった（その正確な時期については不詳）。その最初の勤め先がこの石本の阿片事務所であった。「天守」は、そのころの北村の体験に基づいている。

「餓鬼」

¹² 『関東局施政三十年史』、関東局、1936年10月1日、943頁。

¹³ 松原一枝『大連ダンスホールの夜』、中央公論社、1998年5月18日、40頁。

¹⁴ 石本鑽太郎の経歴については、伊藤武一郎『満洲十年史』（満洲十年史刊行会、1916年2月5日）、『満蒙日本人紳士録』（満洲日報社、1929年）、『東亜先覚志士紀伝』下巻（黒龍会出版部、1936年）などを参照。

¹⁵ 注 12、272頁。

「餓鬼」では、忠一の「仕様のない悪たれ小僧であり餓鬼らしい餓鬼の生活」¹⁶ぶりが描かれる。学校と社会全体に普遍する、中国人に対する蔑視感がすでに忠一の心にも染み込んでいる。忠一は阿片事務所に通わなくなり、かつて親しかった中国人使用人に悪戯をしたり、大人の民族差別を真似したりして、あたかも「植民地坊ちゃん」のように威張るようになった。一方、忠一は学校で、ある少女から彼の袴のほころびを縫ってもらった。これをきっかけとして、少年の忠一に初めて女性への憧れが芽生えた。しかし、女の子の話をした忠一は、級友に「スケベ」と揶揄される。寂しく感じた忠一は、自分と同じく図書館によく通う唐木浩に惹かれていく。唐木は満鉄の高級社員の子で、本代など小遣い銭に恵まれている。それに対して、忠一は昼食のパン代を節約しないと、図書館の入館料を払うことができないほどである。唐木との友情を保つため、忠一は懸命に貯金をしたが、それを父に発見され、ひどく叱られた。このような出来事がきっかけで図書館に通わなくなった忠一は、やがて身分違いの唐木からも遠ざかるようになる。

このころの忠一は、中国人に対して、「天守」の時期に見るような自発的な親密感を失い、植民地日本人の考え方に完全に馴染んでいた。忠一は、「支那人入るべからず」の公園に中国人が入るべきではないのを当然のこととして、中国人を「無智」で「厚かましい」としか思わなくなり、その一方、母の話を通して、中国人の並々ならぬ生活力、その「辛抱強さ」を知ったりして、自分の中には、「半分ほど或る影響を与へながら、他の半分の中では、少しづつそれへの反撥心といふやうなものを培つて行きつゝあつた」¹⁷と述べている。その影響を受けた半分とは、植民地日本人一般に特有の、中国人に対する差別意識であるが、彼の反撥心を培った半分とは、彼の内部から自然と生まれたものなのであろう。それに対して、忠一は、「彼の内部に、暴君と「おとな」とが半分づつ同居してゐた」¹⁸というふうの説明した。暴君としての忠一は、親しかった中国人に悪戯をしたり、転校生をいじめたり、中国人の店に迷惑をかけたしたりした。一方、「おとな」の忠一は女性への憧れが芽生えたり、友情を求めたりしていた。つまり、忠一の内部におけるアイデンティティは、まだそれが形成される以前の混沌期にあったと言えよう。その外部と内部を統合するには、忠一は悪戯というかたちでしか自己を表現できないのである。

この時期の忠一は「中国人の根強い生活力には勝てない」という母の考えに対して、多少違和感を覚えるようになり、そして後年、北村が大陸の日本人の生き方について中国人と比べて考えようとした時、再びよみがえってくる。

ちなみに、作中に出てくる「公園」とは電気遊園のことである。電気遊園とは、1909年、満鉄によって創設された、大連市伏見台の高地にある公園である。「当初は数箇の塔楼が聳え、施す電燈を以てし、夜に入れば全園のイルミネーション燦として昼を欺く壮観があつたので此の名あるが、現在では電気館や運動屋舎等が取除かれて最早電気遊園たる面影を

¹⁶ 注2、120頁。

¹⁷ 同上、118-119頁。

¹⁸ 同上、119頁。

失つたが、園内の設備は次第に完備され、温室、花園、音楽堂、動物園、図書館、メリーゴーラウンド、各種の運動設備があり、瀟洒たる芝生、池水には遊魚あり、殊に園内の桜樹は市内開花の魁として満開の頃には全山花を以て埋められる美観がある。園内整理のため現在大人は二銭の入場料を徴して居るが子供は無料で真に児童の楽天地である¹⁹と記されている。小説では、忠一は入場料一銭だと言っている。

また、作中に出てくる公園内に建てられた図書館とは、電気遊園内にあった伏見台図書館である。同館は満鉄の経営²⁰で、少年忠一がよく通ったところである。北村の読書生活は、そもそもそこから始まったと推測できる。

「早春」

「早春」では、M丘に引っ越したばかりの忠一の生活が描かれる。妹が猩紅熱にかかったので暫く学校を休んだ忠一は、登校早々、健康診断を受けている女子生徒に混じって検査を受けた。そして、自身も猩紅熱を患っていたことが発覚し、病院に送られることになった。ここで、忠一は中国人少女・劉玲慶に出会い、自分が病人ではないと主張したものの、療養生活を始めることになる。病院の簡素な食事から、忠一は「食物のことで贅沢を云ふことが、どんなに親不孝であるかを考へ、反動的に、親孝行になるために自分は言葉づかひからして改めてかからなければならない²¹と強く反省するようになった。

本篇での忠一は、内面における感情がさらに鋭く豊かになっている。しかも「餓鬼」の時より、他者への悪戯というものが外部から自分の内部に染み込んできている。例えば、面映ゆい心地で登校した忠一は、身体検査中の女子の中で検査を受けた後、「何かとんでもない大しくじりをしてのけたやうな慙愧の思ひに²²閉ざされた。そして、猩紅熱と診断された後、彼は「両親を恨めしく、妹のタミも恨めしかつた²³という。想像されるあらゆる人、物、状態などに反撥するようになった。病院に送られる途中でも、彼は同行の巡査に嘘をついたりする。また、入院したばかりの忠一は、自分が病人ではないと強く自己主張した。それらの一連の激しい感情の氾濫は、「餓鬼」となった忠一の心理的な行動にふさわしい。と同時に、忠一の後の療養生活での反省の下敷きとなった。従って、本篇は、次の短篇「青果」に入るための転換としての存在である。

中国人少女・劉玲慶についての描写は、本篇の見どころの一つである。入院当初の彼女、療養中の彼の夢の中での彼女、及び、退院する彼女は、忠一の絶えることのない関心を通して、生き生きと描かれている。特に桃の木の下で靴を脱いで足を洗う少女の姿は、少年期の北村の女性に寄せる意識を窺わせてくれる。

¹⁹ 『大連市』、大陸出版協会、1930年12月1日、324-325頁。

²⁰ 注12、212頁。

²¹ 北村謙次郎「或る環境」、『満洲浪漫』第4輯、1939年12月15日、97頁。

²² 同上、89頁。

²³ 同上。

また、本篇では、忠一の転校したところの心理状態や、小学校の様子なども書き込まれている。それは、後述の「生地」の内容と呼応しているように見える。作中、病院での療養生活について、中国人と日本人との間の差別に関してほとんど言及されていない点も注目されるべきだろう。

実は、作品中の病院は、1910年7月に老虎灘会西王家屯に建築された大連療病院²⁴のことである。当時の院長・森脇襄治²⁵による、1921年から1927年までの統計²⁶に従うと、猩紅熱で大連療病院に入院した日本人は100名を超えていた。それに対して、中国人は1912年に3名、1913年に1名、1924年に2名といった程度に過ぎなかった。つまり、大連療病院に送られる中国人が極めて少なかったことが、この短篇の裏付けとなっている。

このように、満洲の生活環境の厳しさが常に土地の子供を脅していたことは、この小説においても浮かんでくる。肺炎、猩紅熱、ジフテリアなどの恐ろしい病気が毎年、多くの子供の命を奪っていた。たとえば、日本人の猩紅熱の平均死亡率は、1912年に18.8%、1913年に1.9%、1914年に24.8%、平均死亡率は9.2%であったと記録されている²⁷。

ところで、本篇から作品の舞台は「M丘」と変わる。M丘とは、松山台のことである。石本鎖太郎の貸し地として、大連市内の「造林地たり果樹園たり一帯は風景も好く高燥なる適良の住宅地なれども新市街計画にも入らざる全く特別の土地」²⁸であった。そこに建てられた石本の豪邸は人々に「松山御殿」と呼ばれていた。北村の父・享吉は当初、石本の阿片事務所で働き、その後、一家と共に松山台に移り住み、石本がそこで経営していた果樹園や温泉の仕事に協力することになった。少年時代の北村は、そのように石本と深く関わる環境のもとで日々を送っていた。

「青果」

「青果」は、果樹園で日々を送った忠一の自我の形成を描いた作品である。「餓鬼」から脱皮した忠一は、両親を心配させないようにおとなしく振舞うようになったが、まもなく活動的な少年期に入る。忠一の遊び場となるのはM丘（松山台）の果樹園である。そのころ、父の雇主・橋口（石本鎖太郎）の事業が発展するに伴い、忠一の父はM丘に自分の家を建てるのが可能となった。父が家の設計を考案している時、忠一は、橋口の馬に乗ったり、祖母や妹と共に温泉に行ったりするなどして、夏を楽しんでいた。秋に入ると、忠一は自由に果樹園の果物を採って食べ、また農園事務所の日本人たちと一緒に、果物を盗

²⁴ 注19、357頁。

²⁵ 森脇襄治（1898—？）は満洲の歌人、大連療病院院長。著書に『羈旅諷詠』（私家版、1937年11月1日）、『満洲保健雑記』（大阪屋号出版部、1945年3月1日）など。

²⁶ 黒井忠一・森脇襄治、『流行病学ヨリ観タル猩紅熱』、金沢医科大学十全会雑誌32（12）、1927年12月1日。

²⁷ 同上。

²⁸ 「住宅地開放 地目変換と新利用地」、『満洲日日新聞』、1919年8月3日。

む中国人にリンチを加えることもあった。やがて忠一の家も新築される。引越しの日の夜、父は M 丘の一番の「別嬪さん」は老李（橋口に雇われている馭者）の細君だと口にした。しかし、それを聞いた忠一は納得できず、温泉の女中の方がきれいだと思い、温泉に出かけることにした。

この作品では、忠一が満洲に渡ってきて以来の「寂しさ」が見られなくなる。その代わり、少年忠一の楽しさが表面に浮かんでくる。特に M 丘での生活は、彼に再び中国人と付きあう環境を提供した点で注目に値する。老李の細君からもらった肉饅頭を食べたり、馬に乗る許しを老李にねだったりするなど、日本人少年と中国人使用人の親しい関係が示される。また、農園事務所の山番の日本人が果樹園の中国人泥棒に与えるリンチのやり方から、中国人使用人に対して思いやりを見せたりもする。つまり、その時の忠一は、自我の内部の混沌をすでに統一し、自分の本性を出して、周りの環境に馴染んでいるように振る舞うことができた。言い換えれば、中国人を差別する教育を受けた忠一は、このころになると、ようやく「人種差別」によってできた心の壁を乗り越えて、中国人と自然に向きあうようになった。

ところで、少年期に入った忠一の活動は、橋口の事業の好況があって可能になったものである。そのころ、「橋口さんたちは、いふところの満蒙独立運動のパトロンとして、当時、日本や満洲のさまざまな志士たちが山にある橋本さんの邸へ出入りしていた。蒙古伯爵何某の扁額、掛軸などの類が、橋口さんの家ばかりでなく、忠一の家で座敷にさへ掲げられるやうになつた」²⁹という記述は作中に出てきた。そのような一般には知られていない歴史上の一コマが、この作品の中でところどころに顔を出している。

「満蒙独立運動」とは、1910年代の中国の混乱期に、中国東北部と内モンゴル地方を中国主権から独立させ、日本の支配に置こうとした日本人有志の謀略活動を指している。この運動は2回ほど行われたが、いずれも失敗に終わった³⁰。この2回とも、日本陸軍の軍人や大陸浪人の川島浪速らが、清の肅親王やモンゴルの王族と連携して実行したものであるが、石本鎖太郎は資金面でこれに協力している。北村はその少年時代、このような日中関係史の暗部を、ごく身近に見聞していたのである。そういう「環境」のもと、北村の自我は形成されていった。

「色鳥」

「色鳥」は深秋の山の谷間の自然風景から始まる。朝早く谷間の小径に向かう折り、忠一は、樹林のカスミ網に捕えられている鳥をしばしば救い出すことがあった。紅葉谷を通りぬけ、松山寺という中国寺に辿り着く。そこで彼は中国寺やその附近の中国人学堂の様子を観察する。まれに中国人の葬列に行きあう時もあり、その時、彼はその様子をめずら

²⁹ 注 21、101 頁。

³⁰ 栗原健『対満蒙政策史の一面』（原書房、1966年）を参照。

しげに眺めた。松山寺を出ると、忠一は温泉に到着する。温泉には日本人が多く、大人たちに囲まれた忠一は温かく扱われ、時には軽く冷やかされたりもした。その秋、忠一はみんなと一緒に紅葉を見に行った。同じ年頃の話し相手がいなくて寂しかったが、大人たちの宴は豪華だった。そこで、忠一は初めて酒を飲んで酔った。

この年の忠一は中学校の入学試験に直面していた。しかし、彼は「すべて無頓着、無邪気に遊び呆けるほど」³¹進学には悲観的になっていたため、小説を読んだり、大自然に浸ったり、中国寺に行ったりして、勉強から逃避していた。とりわけ中国の寺院から受ける印象は強烈であった。彼は「どこかに、彼ら支那人たちを親しむべきものとして見る感じかたは、以前にくらべてよほど強くなつてゐたやうであつた。それは古い寺のもつ不思議な、神秘的な魅力や、影の多いその裏道などを好んだ彼の性格から来たものかもしれない。とにかく、彼は寺の僧侶にも、ロバに臼を挽かせて穀類を磨る百姓にも、辻待ちの車夫にも、或ひはもつと後に記録するはずである温泉の罐焚き男にも、彼らを常人以外のものとしなない気持ちで、徐々として強まりつゝあつたのだ」³²と語っている。つまり、忠一は進学からのストレスから中国文化及び中国人に目を向けるようになり、中国文化や中国人のことを心の底から興味を湧くようになった。このように、中国人に対する認識が深まる一方、忠一は温泉で働く日本人たちの姿に「郷愁」を感じた。本篇から「或る環境」シリーズに、初めてノスタルジアが漂うようになる。ここで、忠一のアイデンティティにおいては、中国に対する認識が徐々に固まった一方、東京へのノスタルジアが温泉の日本人たちによって刺激されたことも明らかになる。

本篇に出てきた中国寺とは、松山寺のことである。松山寺は清朝の初期に創立され、乾隆帝と宣統帝の時に修復された仏寺である。『大連市』によると、この寺院の僧侶は50年前の4人から現在（1930年）の1人にまで減っていた。寺院の行事としては、毎月1日と15日に読経のほか、4月18日は天仙母聖誕日、7月13日は羅祖聖誕日などがある³³。中国では、葬式は寺院で行った風習がある。それを観察する機会をちょうど忠一に与えた。この寺は、今でも現地では人気がある。

また、温泉とは、石本が経営する「松山館」のことである。この温泉は、大連市民の憩いの場ともなり、文化人の集まりなどにもよく利用されたようだ。1930年2月発刊の『満洲短歌』には、次のような記事が見られる。「一月十九日午前十時から、松山台ラジユーム温泉の一室に、みんな集まつて貰ふことにした。当日いろいろ準備もあらうと、定刻より早目に出かけて、松山館の玄関に靴をぬぐと女中さんが「おひとりお待ち御座います」と云ふ。さても殊勝なお方だと感心して、長い廊下を渡つてゆく。冬枯れの庭土に雪の名残りはあはれであるが、地に敷く光りは、なんといつても小春日和である」³⁴といった内容

³¹ 北村謙次郎「青果と色鳥」、『満蒙』237号、1940年1月1日、138頁。

³² 同上。

³³ 注19、410-411頁。

³⁴ 富田充「歌会記」、『満洲短歌』第10号、1930年2月1日、26-28頁。

である。この時の歌人たちの集まりには、引用記事の執筆者・富田充のほか、八木沼丈夫、城所英一、加藤多満喜、河瀬松三、山口慎一（大内隆雄）、上村哲弥、三溝沙美などが出席した。なお同文は、大内隆雄の『満洲文学二十年』にも引用されている³⁵。

「博物教室」

「博物教室」は中学校に入学したころの忠一を描いた作品である。支障なく中学に進学できたことは、忠一にある種の虚しさをもたらした。その空虚感を埋めるために、忠一は植物という学科に興味を持つようになった。このころ、父が温泉場の事務職を引き受けるようになったため、忠一は温泉に滞在する時間が多くなった。温泉には多くの女中がいるが、その中で、忠一は「おときさん」という人に親愛感を抱いた。しかし、おときさんは内地に帰ることになった。忠一は彼女の面影を意識しながら温泉に通うが、風呂から出た後、いつも気罐室に行く。そこで彼は罐焚きの中国人・李琥声と親しくなる。ところが、李の姿もいつしか温泉から消えてしまった。ある日、忠一は街で冷麺を売っている李と出会った。李は忠一に自家製の冷麺をご馳走しようとするが、忠一は受け取らずに逃げてしまった。しかし、この「冷麺事件」で生まれた中国人に対する親近感が忠一の心に育ってきていたので、忠一は中国人の同級生とも親しくなった。

この作品では、「忠一」の感想が多く入ってくる。それは、まるで第三者の視点から「少年・忠一」を観察するような口調で語られており、歳月が刻々と流れていく様子が見事に引き出されている。そのころの忠一少年は、下層階級の中国人の「辛抱強さ」に関心を持つのみならず、素朴な生活に満足する彼らの性質の美しさをも発見していた。その感情について、作中では「臃ろげにさういふ観念が、忠一の中に芽生へて行くやうであつた」³⁶と述べている。この部分で注目すべきなのは、李が差し出した冷麺に対する忠一の行動のシーンである。

彼（李琥声）は大急ぎで荷の中から一つの大鉢を取出すと、断はる暇もなくうどんめいたものを山盛りにし、手早く汁をかけて眼の前へ持つてきた。（中略）

久しぶりに出会つたもとの馴染みに、冷たいものを一杯といふ李琥声の心づくしであつたらうに、忠一にはどうしてもその大鉢に手を出す勇気がでなかつた。李は手にした鉢を、忠一の方へ差し出してゐる。まはりの支那人たちが大ぜいで、面白さうにこちらを見てゐるのを意識しながら、受取る気にはなれず、さうかと云つて断はるわけにもいかず、どうにも恰好がつかずに黙つて立つてゐるが、やつと勇気を出して、忠一は頭と手を同時に振つてみせながら云つた。

「ありがたう。だが僕は、飯を済ませたばかりなんだ。おなか一杯なんだよ」

³⁵ 大内隆雄『満洲文学二十年』、国民画報社 1944年10月5日、94-95頁。

³⁶ 北村謙次郎「博物教室」、『満洲行政』第7巻第4号、1940年4月1日、127頁。

そして彼は逃げ出した。何度もさよならの身振りをしながら。それはたしかに逃げ出すといふより、いひやうのない恰好であつた。彼のその時の両の眼は、さうした善良さそのものに輝いてゐた。彼は相手に冷たいものを御馳走したかつたばかりでなく、嘘いつはりのない料理人としての腕も認めて欲しいところだつたかもしれない。しかし彼の善良な単純な願望は反古になつた。忠一は、しやうがないといふやうにあきらめて引返していつた李璠声の、そのときの姿が永く忘れられないのである……³⁷（下線は筆者）

ここでは、李璠声の善意に対して、忠一は周りの中国人を意識しながら、李の面子をつぶさないように配慮しつつ断っている。その時の動作は、頭と手を同時に振るということである。通常、断るには手を振るか首を振るか、どちらかの一つだけであるが、両方とも同時に振るといふ忠一の行為は、あまりにも動揺しているふうに取り取れよう。その要因としては、植民地教育を受けた忠一が中国人を軽蔑することは教えられていたものの、中国人からの善意への対応の術に関しては教えられていなかったことが挙げられる。李璠声の善意は、その場の忠一に受け入れられなかったが、のちに学校で中国人と友達になったことはその感情転移と言えるだろう。また、この事件はその後、大人になった忠一にも大きな影響を与えた。

上記の引用文で下線を付した部分は、明らかに「作家・忠一」の回想に基づいた認識である。その「彼の善良な単純な願望は反古になつた」という文は、後年の忠一が振り返って残念に思う気持ちが淡々と述べられている。つまり、大人になった忠一は、今は李の善意を受け取ろうと考えているのである。このことは、「序章」における「作家・忠一」が中国人に求める善意の交流の出発点になつたのではないかと思われる。忠一少年はかつて中国人と胸襟を開いて交流する機会があつたが、彼は、それをいかに受け止めればよいのか分からず、逃げ出してしまった。そして、大人になった忠一は、やっと対応する方法が分かるようになったものの、今度は善意を持って中国人と交流することができない。それは「或る環境」シリーズの肝心なところであり、忠一の苦しみの所在であろう。

では、なぜ善意を持って中国人と交流することができないかという点、「序章」の最後に書かれているような、「民族」、「国家」などといった言葉が溢れた政治的・社会的環境が背景にあつたからにはほかならない。或る「環境」によってできた日本人と中国人との、つまり民族を超えた親近感、その「環境」の変化によって疎遠になつていったのだ。

この小説では、北村は終始、「環境」が人に与える影響を中心に語っているのだが、その「環境」の形成（政治的要因）については一言も触れることがなかつた。その婉曲的な作風は、無論、北村その人の性格にも関わっているのだろうが、作品全般はどこか物足りない印象を読者にもたらす。北村の小説は、その種の政治的問題を意図的に避けているようにも見える。

³⁷ 同上。

ちなみに、「博物教室」までの忠一物語は、大連を舞台に展開されてきたが、その後の数篇は、大連を出て、満洲という地域に広がっていく。そして、忠一少年の視線も、「満洲の中国人」から、「満洲という土地」へと広がりを持ってくる。

「塔影」

「塔影」は中学4年生になった忠一が、中国人の友人・于慶仁と共にハルビンに行く旅を描いている。夏休みにハルビンに行こうという友人の提案に、忠一は父と相談することなく賛同してしまう。その後、忠一は頑固に反対の態度をとる父を、ハルビンの従兄や満鉄社員の叔父に働きかけて説得した。休みに入ると、忠一は父から旅費を貰い、于慶仁と共に夕方の列車に乗った。沿線の駅は、彼らの修学旅行の時の訪問地だったので、二人の思い出を誘って尽きない。そして奉天では、于慶仁の案内で劉玲慶（「早春」での中国人少女）の家、長春では、列車の中で知り合った人に紹介された長春憲兵隊の宿舎に泊まり、そのさき、ロシア人と中国人の多い車中で1泊した後、二人はハルビンに辿り着いた。忠一の従兄の宿舎で朝食を摂った後、彼らはロシア人の多い町を歩き、「塔のある町」に来た喜びを深く噛みしめる。

タイトルの「塔影」とは、「玉葱形の塔の立つハルビンの街の風景」³⁸を暗示している。「玉葱形の塔」とは、ハルビンにあるロシア正教会の聖ソフィア大聖堂のことである。この教会は1907年、ロシアによって創建されたもので、現在でもハルビンを代表する建物である。

本篇では異民族に興味を持つ忠一少年の姿が登場する。彼は于慶仁との友情を慎重な姿勢で保ちつつ、大連とは異なった植民地風景を味わっている。従って、小説での「風景」は、本篇の見どころとなる。そして、その最たる表現は忠一たちが示す旅先での「環境」への対応である。

たとえば奉天では、忠一は于慶仁との友情の証しだと思いながら、初めて中国人の家に泊まることにした。しかし、中国人同士の挨拶をそばで見た時、「ひそかにねたましく思ひながら彼らを憎んだ」³⁹と、中国人同士の親しさに対して嫉妬の気持ちを抑えかねた。また、長春憲兵隊で1泊した時、耳に入った尺八の音に対して、于慶仁が述べた「日本の音楽つて、みんな悲しいやうな調子のものなんだね」⁴⁰という言葉に対して、忠一は違和感を覚えることはなかった。つまり、忠一は異郷にありながら、日本的な事物（ここでは「尺八」）を当たり前なものとして感受している。さらに、夜行列車でのロシア人青年との付き合いの場面からは、積極的に異民族と接触しようとする純粋な少年の思いが浮かんでくる。ハルビンに到着した忠一は、塔のある街に来たことを実感しながら、従兄への母からの土産（手作りの甘納豆とグレープジャム）を差し出した。その時、従兄の顔には忠一の理解で

³⁸ 北村謙次郎「塔影」、『満洲行政』第7巻第6号、1940年6月1日、126頁。

³⁹ 同上、134頁。

⁴⁰ 同上、138頁。

きぬ郷愁めいた表情が仄かに漂っていた。というのは、忠一はまだ「郷愁」の意味を知らず、単に異民族の「ある環境」に好奇心を惹かれる少年に過ぎなかったからである。

このころの忠一は、すでに父を説得するための作戦を練ることができるほどに大人になっていた。ハルビンへの旅行はそれを踏まえて行われたものである。父との衝突は、その作戦によって表面化してくる。そのほか、長春駅では東清鉄道に乗り換えるチケットを購入する際、日本円ではなく大洋銭に両替することも、当時の旅行状況を知る上での貴重な歴史的証言となっている。

「十六号の娘」

「十六号の娘」は「塔影」の続篇である。忠一がハルビンに滞在した時の見聞を記録している。電電会社の独身寮に泊まった忠一たちは、従兄の案内でハルビン観光を行う。「ロシア人の裸踊り」の噂から、サーカスの観賞、ソフィスキー寺院、ヨットでスングリ（松花江）を回ることに、東清クラブの食事など、すべて忠一にとって初めて体験するものであった。彼は、それを通して、ハルビンで働いている日本人の生活状態と、そこで生活しているロシア人を観察することができた。ハルビン勤務の日本人は忠一の従兄を始めとして、ほとんどの人々が家族を内地や南満に置いて、単身赴任の生活を送っている。彼らは平日はクラブで食事をしたり、オートバイを練習したり、楽器を学んだり、ロシア少女と付きあったりする日々を送っている。一方、ハルビンのロシア人たちは「16号」の名札を付けた少女のように、クラブでサービス業に従事したり、裸踊りで収入を得たりするなど、零落した生活を送っている。

異国情緒に満ちたハルビンは、忠一の好奇心を刺激してやまなかった。ロシア人の群れから発散される匂いと笑い声などから「何かしら秩序をもつた一つの渦」⁴¹を忠一は感じた。それはハルビンが有する都市感覚というものであった。渾沌としながらも秩序があるその地に、彼は強い魅力を感じた。そして、そこに生活するロシア人たちに、彼は絶えず興味の視線を送っていた。たとえば、従兄の同僚の野沢が付きあっているロシア人少女（16号の名札を付けた少女）を、忠一はサーカスの観覧席で発見した。その後、忠一たちはクラブで正式に16号名札の少女に会い、彼女が貧しいところに住んでいて、他のロシア人青年たちとも付きあっていることを知った。

一方、ハルビンで働く日本人の生活状態に対して、忠一は違和感を覚えた。従兄の同僚の野沢は、16号の娘と交際しているにも関わらず、彼女に対してあまり関心を払っていないような様子だった。その上、ハルビンでの多彩な生活を「つまらない」と言って、日本に戻ることにばかり考えていた。それを聞いた忠一は、異国に単身赴任している日本人の寂しさを理解できないまま、「どうしてですか？ 日本だつて同じことでせう」⁴²と質問する

⁴¹ 北村謙次郎「十六号の娘」、『新天地』7月号、1940年7月1日。

⁴² 同上。

のである。ここにも、「郷愁知らず」の少年像が再び登場してくるが、忠一にまつわるアイデンティティの分裂も明らかとなる。つまり、忠一は日本人として育てられたので、日本文化に対して違和感を持ってない。一方、満洲という植民地環境に対しても違和感を持っていない。その「日本だつて同じことでせう」⁴³という一言は、日本及び中国が、忠一の中に均等に置かれているからなのだろう。

本篇は、このシリーズの中で、郷愁感が最も色濃く漂っている作品である。この都市に関わる日本人やロシア人たちは、一見、派手な生活を送っているように見えるが、実は、それは、すべて空虚感を埋めるための慰めに過ぎなかった。結局、誰もが「故郷に帰りたい」という思いと、それがかなわぬ敗北感に打ちひしがれているのだった。

「垣の外」

「垣の外」は、忠一が進学受験を準備する時期のことを描いたものである。ハルビンから帰った忠一は、異民族の衣装を着て通学していたため、「ハルビンかぶれした」⁴⁴と噂される。しかし、それは彼が級友たちのように勉強に没頭することができない精神状態の反映なのである。受験勉強に専念できない忠一は、自分だけが「完全に垣の外に閉め出された」⁴⁵と感じ、悲しみに暮れる。その悲しみから忠一は、果樹園の苦力の小屋で通学時間を潰したり、学校をさぼって図書館に通ったりするようになるが、それを父に発見され、二人は激しく衝突することとなる。その後、気晴らしに忠一は、公園で友人と「キネマ」(次篇「舞台」に登場する映画館)に行くと約束し、「キネマ」から帰るやいなや、原稿用紙に書いた「死」の字を父に気付かれ、ひどく心配される。

この小説では、忠一は初めて自我の成長をあらわに示した。それまで忠一の中に蓄積していた植民地制度に対する不満や、下層下級の中国人に対する同情が爆発する。とりわけ、彼の激情が描かれている二つの場面に注目すべきであろう。

一つは忠一が苦力の小屋で感じたことである。「彼(忠一)にはどうしても、この植民地の町の人びとに好意を抱くことが出来ない。彼の狭い視野の中には、商人風な狡智の民としての風俗しか映つて来ないのだ。彼らと妥協するくらゐなら、馬賊と妥協した方がどんなにましだか分からない。藍色の上着を着て、辻々に待つ洋車夫だつて、ずっと正直で親しみある人種のやうに見えるではないか」⁴⁶という記述である。それは忠一自身の感情から出発したものである。彼には植民地の人々が「商人風な狡智の民」に見え、洋車夫などの下層中国人が「正直で親しみある人種」のように見えたのだった。つまり、忠一は人を階級、または国籍によって区別するのではなく、人間性によって判断している。

⁴³ 同上。

⁴⁴ 北村謙次郎「垣の外」、『満洲行政』第7巻第9号、1940年9月1日、113頁。

⁴⁵ 同上。

⁴⁶ 同上、116頁。

もう一つは、苦力をめぐる忠一と父の争いの場面である。「苦力なんてのは、そもそも人間ぢやないんだぞ」⁴⁷という父の話に、忠一は「苦力だつて、人間です。立派な、人間です。お父さんの方が、間違つてるんだ」⁴⁸と叫ぶ。父の経験論に対して、忠一は「経験が何だろう。大切なのは理想ではないか」⁴⁹と強く反撥した。親子のこの対立は、植民地における日本人の二つの間に見られる溝を表している。

本篇では、忠一は周りの環境になじめない孤独感から、遠く離れた東京への思慕を募らせる。言い換えれば、忠一の日本に対する「郷愁」が目覚めることになる。

「舞台」

「舞台」は、映画館「D キネマ」に関わった忠一の姿を描く。彼は週1回の頻度で「D キネマ」の映画を楽しんでいた。洋画は忠一に無限の郷愁を喚び起した。毎回の上映予告を見るたびに、彼はその映画についての批評を新聞や雑誌の中から探し、仲間と一緒にそれを材料に映画館の宣伝ビラを作った。館主の「和田さん」と仲が良くて、忠一らはよく「D キネマ」の楽屋で休んだり、舞台上って遊んだりした。この映画館で忠一は、エミグラント（白系ロシア人）の音楽会を聞いたこともある。そうした刺激を受けるたびに、忠一は創作欲をかきたてられ、雑誌の寄稿者になることを夢みた。橋口の破産はそのころのことである。その影響を受け、忠一の一家は住み慣れた住宅を明け渡し、ある古家に引っ越した。そして、翌年の春、忠一は家族と別れて東京に向かった。

本篇は、「或る環境」シリーズにおける、忠一の少年時代の終章となる作品である。洋画への興味は忠一の「モダニズム」文化を求める象徴として描かれており、それは、北村謙次郎の文学世界の形成に大きな影響があったと考えられる。舞台での遊びがもたらした幻想や音楽会に感じた魅力は、忠一に「作家」への夢を目覚めさせた。

一方、父親の雇主である橋口が事業に失敗し、破産宣告を受けたことによって、忠一の一家の生活状況も急変した。そのことに悲しみと憤懣を覚えた忠一は、人生初の社会体験を味わうこととなる。「予測しがたい人生の不幸について、多分の感傷を混へた感慨に耽つた。人生には、このやうに突発的な不運の襲ひかゝるといふことが、今なほ信じきれぬ気持であった」⁵⁰と、少年忠一の精神的成長はなし遂げられた。翌年の春、忠一はただ一人で大連を後にする。

本篇の舞台となった「D キネマ」とは、「電気館」のことである。当時の大連には映画館が4軒あった。「電気館」は電気遊園の中にあるため、このように命名され、早川という人物によって1920年から1921年まで経営されている。大連唯一の洋画専門館として、満鉄

⁴⁷ 同上、117頁。

⁴⁸ 同上、117頁。

⁴⁹ 同上、118頁。

⁵⁰ 北村謙次郎「舞台」、『満洲行政』第8巻第1号、1941年1月1日、153頁。

も経済的援助をしていた。『大連市』には、「この館は開館以来洋映画専門館として断然映画街初期をリードしてゐた、解説者にも長田猛虎などが居て当時の大連に於けるインテリ層に喰入つてゐたのである（長田猛虎は現在東京にあつて相当名を売つてゐる）。とにかく時代は連続大活劇尚ほ華やかなる時代であつたし洋劇専門館として独占的地位を占めてゐただけに一部に大きな勢力を持つてゐた」⁵¹と書かれている。

第4節 物語の終焉——「つひの栖」

「つひの栖」は、北村謙次郎が「或る環境」のエピローグとして書いたもので、この連作の序章に対応する存在である。満洲文話会の推薦によって、1940年8月、改造社の『文芸』に発表された。

物語は、忠一が中国人と同乗した馬車で新京市内から郊外の寛城子に帰るところから始まる。「三不管」という地域の中国人街の様子が生き生きと描写されている。時はすでに、「序章」の座談会より一年が経過している。その間、妻の意外な妊娠をきっかけに、忠一は転居問題をはじめ、実生活の改善を求めようになった。しかし、新京の住宅難と満洲の生活習慣の違いによって容易に解決できない。忠一は妻を内地に送ろうとも考えたが、結局、正真正銘の「満洲の子」を産もうという念願が強くなり、多くの不便に耐えながら、満洲での日々を送っていた。

同時に忠一は、妻の出産をめぐって、「満洲」に対する考えも変ってきた。彼は「満洲育ち」の自分と、「満洲生まれ」の日本人とでは感情の異なることを知って、満洲の日本人の生き方について考える。日本人が満洲の指導的民族であると教えられてきた彼は、異民族との付き合いについて、「同等につきあはぬ限り、彼らはすぐ背を向けるのだ」⁵²と認識する。しかし、実際には、彼は中国人を「知識階級」と「下層階級」に分けている。「知識階級」に対しては尊敬の気持で付き合いあっているが、「下層階級」に対しては、「一方で親しみ一方で憎む」という複雑な感情を抱いている。それは、少年時代に下層階級の中国人から感じ取った親しみを忘れられない忠一が、彼らの素養の低さを見る時の無力感を含んだものだと考えられる。しかし、そうした一切の思考は、子どもの誕生によって落ち着き、満洲を自分の最後の「栖」（すみか）だと思ふようになった。

本篇は、満洲の風土に巻き込まれた日本人の生活様態と心理の変遷を描いている。作中に出てくる「三不管」、「小盗」など、日本内地では見ることのない満洲の風景が本篇の見どころの一つでもあるのだが、満洲の生活環境、及び、日本人のこの土地に根付けない生活態度は、作者の批判的対象となっている。とりわけ、「満洲生まれ」の日本人と、「満洲育ち」の日本人の、満洲に対する感情については、母国と居住国に対して抱えているコンプレックスとも通じるところがある。満洲生まれの日本人のこの土地へのアイデンティテ

⁵¹ 注19、539頁。

⁵² 北村謙次郎「つひの栖」、『文芸』第8巻第8号、1940年8月1日、20頁。

イの帰属に対しては、幼い時に満洲に渡ってきた忠一には及ばないところがある。彼の場合、「たえず日本と満洲の間に低迷し、心構へから言つても、いはば隙だらけといつてよかつた。単なる理窟だけなら、日本人であつて満洲国民であることに、何の矛盾も感じないで済んだ」⁵³ということである。いわば、日本に対しても満洲に対してアイデンティティが薄い。その上、「国家、民族」に対して強い反発も抵抗もなく、常に自分を余所者というふうに思い込んでいる。そのような忠一を救ったのが、妻の妊娠である。父親になることで、それまで落ち着かない心を抱いていた彼は、やっと自分の居場所を見つけた。それがタイトルの「つひの栖」の意である。そして、序章での「苦しみ」は、「満人との融合、風土への同化」⁵⁴という認識によって打ち破られたのである。

まとめ

「或る環境」は、北村謙次郎が作家としての最盛期に執筆されたものである。この連作は、北村の自分の少年時代を題材に、彼の最初の満洲体験が記録された作品として、彼が「満洲の作家」になった原点とも言える。その意味で「或る環境」は、北村謙次郎の代表作として第一に挙げられるべきものである。

主人公の忠一は、日本人として関東州で民族差別の教育を受けながら育てられたが、ふだん彼が接する「下層階級の中国人」からの善意も忘れられなかった。自分の存在を日本と満洲との間に引き裂かれた者として、終始、中国人と「本音」を交わすことができることを望んでいた。その望みを、北村（忠一）は小説を通して「文学への情熱、人間への愛と信頼」という認識に求めていた。しかし、その考えは満洲国では、なかなか通用しなかった。彼は「民族」とか「国家」などといった言葉の溢れる環境のもと、憂鬱の日々を送るしかなかった。一方、連作の最後となる「つひの栖」において、忠一は異民族との付き合いについて、「同等につきあはぬ限り、彼らはすぐ背を向けるのだ」⁵⁵という認識を抱くようになった。つまり、北村は、異民族を尊敬し、彼らと平等に付きあうことによって、「文学への情熱、人間への愛」を得ることができると確信した。このように、北村が文学を通して、異民族との共生を求めていたことは明らかである。

しかし、連作の結びとなる「つひの栖」において、北村が満洲の風土に溶け込む日本人の様子を如実に示し、異民族同士の相互理解を可能なものとして考えていたことは誤っている。なぜなら、同じ風土に生活し、同じく文学に対する情熱を持っていても、日本人が満洲を侵略したという根本的な問題に気付かない限り、北村が満洲で求めた文学の「夢」は、ついに実現するはずもなかったからである。そこまで触れていない北村には、文学者としての、一種の甘えがある。それと同時に、現実を直視できない弱さ、現実に対する妥

⁵³ 同上。

⁵⁴ 同上。

⁵⁵ 注 52。

協も窺える。北村の文学には、人間性または時勢を鋭く批判するものがなく、ほとんど自分の世界に留まっている一面がある。

ちなみに、北村が満洲と関わったこの時代、この地は多くの日本文学者を輩出した。吉野治夫のように満洲で生まれ育った者もいたし、また、北村や秋原勝二、坂井艶司などのように、1910年代以後、幼いころに満洲に渡ってきた文学者もいる。満洲建国後しばらくして大陸に渡ってきた日本文学者たちとは異なって、吉野や北村、秋原のように、満洲に愛情を込めて創作した作家たちは、それぞれ自分の育ってきた「環境」を持っていたのである。なかでも北村の場合、一時期は「満洲の阿片王」とも称された実業家・石本鎖太郎の所有地（松山台）で少年時代を過ごしたことの意味は大きい。その時の体験を主軸として構成された「或る環境」は、当時、満洲に生きた日本人の特異な例として、貴重な歴史的証言ともなっている。北村は、この連作小説を通して、日本人の満洲体験の何たるか、その原点を文学的に形象化して見せた。文学史的には、今日では完全に忘却された存在ではあるのだが、筆者は、この作品を北村の代表作と見なしたい。

戦後、北村は「或る環境」シリーズを再編成し、一冊の作品集を出そうとした（未公刊）。彼のプランによると、その目次構成は「天守」、「早春」、「青果」、「博物教室」、「塔影」、「垣の外」、「舞台」となっている。その末尾には「百四十枚、昭和十四年一十五年」と記されている。そのうちの「舞台」は1941年1月1日に発表されたものだが、執筆されたのは1940年の末ころと思われる。つまり、北村は「舞台」の脱稿日付をもってこの物語を封じ、「序章」と「つひの栖」のみならず、「餓鬼」、「色鳥」、「十六号の娘」をも収録しようとしなかった。そこから、戦後の北村においては、「或る環境」は、彼の少年時代の単なる記念碑として位置づけられていたと見ることができるだろう。

第5章 北村謙次郎の「春聯」

——「大陸日本人」への道

本章では、北村謙次郎の「春聯」について検討する。「春聯」は北村が満洲国で執筆した唯一の長篇小説である。この小説は、北村文学において初めて、満洲国と真正面に向きあうテーマに取り組んでいる点で特異である。従って、この長篇を通して、従来の研究ではほとんど触れられることのなかった、北村の満洲国における創作姿勢を窺い知ることができる。

本章は5節からなっている。第1節は「「春聯」の誕生」である。この部分では、「春聯」の粗筋と出版経緯を考察する。それらの考察を踏まえたうえで、小説内容の具体的分析に入る。第2節では、作中の物語の舞台の一つである寛城子を中心に、満洲に対する作者の親愛感に着目し、彼が日本人に満洲定着を説得しようとする動きを読み取る。同時に、北村文学における風土意識を比較的な視点で取り入れる。第3節では、「春聯」の中心となる「小野の回想談」について論じる。この部分では、①「白系ロシア人の生活実態」、②「蘇炳文事件」、③「ナターシャの登場」と3つのパーツに焦点を絞る。この3つのパーツによって、作者は満洲における白系ロシア人の堅実な生活態度をクローズアップし、日本人の満洲での生活実態を批判しながら、ナターシャというロシア人少女の実例を挙げて、満洲之日本人に「大陸日本人」になろうと説得しようとしている。第4節では、「振作兄弟」の造型を通して、北村の満洲国に対する認識が表明されている部分を扱い、作者自らの満洲に定着するという生活態度を示す。最後の第5節では、「春聯」をめぐる当時の評価の幾つかを紹介する。この小説が成功作なのか失敗作なのか、また、いわゆる「建国神話」文学に属すべきものであるかどうかなどといった問題を通して、日本文学史、または満洲文学史における本篇の位置づけを考えてみることにする。

第1節 「春聯」の誕生

1. 内容紹介

「春聯」は1940年代の満洲国を舞台に描かれた物語である。新京の北郊・寛城子に暮らす振作兄弟の先行きの見えない世界に、満洲国建国の「ヒーロー」小野浩太郎が現れ、彼の語る建国回想談によって新しい息吹が二人にもたらされるという筋書で、全9章から成っている。冒頭の第1章「秋深し」、第2章「知られざる風貌」と、第9章「霧氷」では「現在」の時点、すなわちこの小説が書かれた1941年当時の新京が舞台となっている。その間の6章分、第3章「白虹」から以下、「若い翼」、「ながれ」、「風蕭々」、「地下暦日」と第8章「大火西へ」までは、満洲国が作られた1932年当時の呼倫貝爾（ホロンバイル）、その中心地の海拉爾（ハイラル）を舞台とする「蘇炳文事件」を中心に展開されている。つま

り、一篇は、「現在」という時間枠に挟まれた形で、「過去」の建国初期の物語が回想されるという構造をとっている。

小説の冒頭である「秋深し」では、満洲の白楊が枯葉を散らすようになった季節のもと、銀作兄弟の日常が描かれる。兄銀作は3年前、妻を日本に置いたまま満洲にやってきて、今はM撮影所（「満映」のことであろう）に勤務しながら、のんびりと無為の日々をすごしている。彼は周りの中国人、白系ロシア人の生活ぶりを観察しながら、在満日本人の消極的な生活態度を冷眼視して不満を持っているが、自分の生活を変えようとする意欲はなく、なんでも「ゆつくりした」態度を取っている。一方、弟貞造は半年前、東京の役所仕事をやめ、満洲に職を求めてやってきたばかりだ。彼は満洲国に夢と情熱を抱いているが、一体どのような「夢」であるのか、自分にもはっきり分かっていないし、その「情熱」をどのような「行動」に変えたらいいのかも分かっていない。半年間、兄銀作に頼って暮らしていたが、兄ののんびりした調子についていけず、仕事探しにも苛立ちを覚えている。二人は、貞造の仕事口を巡って、周辺を冷眼視する兄と気が焦る弟という両端において意見が分かれている。そして、彼らは日本人の頻繁な引越し風景、中国人のたくましい暮らしぶり、ロシア人の不安定な生活ぶりなどを見聞きしながら、日々を送っている。

そんな折り、兄弟の隣家に小野浩太郎という男が引っ越してきた。小野は満洲国が成立したころからずっと建国運動に関わってきている。ロシア人の助手を使ったり、三河地方に出張したりしているこの男の謎めいた行動と風貌は、兄弟たちの興味を引きつけた。ある夜、兄弟は建国当初の小野の体験秘話を語ってもらうことになった。

1932年5月、小野浩太郎は「蘇炳文の反乱」を予防するため、国境警察隊の分遣隊長としてハイラルに派遣された。赴任直後、彼はすぐ密偵に面会して情報を収集したり、事件発生に備えての対策を立てたりして、敏腕を現わした。その後、分遣隊舎の貸借をめぐって、ユダヤ人ユンケルマンが登場する。彼は毛皮商売に従事して贅沢な暮らしを送る、物欲旺盛な人物である。日本の国境警察隊に隊舎を提供していることで中国護路軍から警告を受け、彼は隊舎移転問題を解決しようと小野に相談したが、きっぱり断られたあげく、彼の金銭を狙った蘇炳文の副官趙局長によって暗殺される。この事件は、蘇とは直接の関係はないが、事態はここから緊張してくる。

ユンケルマンの死後、彼のもとで生活していたロシア人少女ナターシャが家を出て、ハイラル河畔で小野に発見され、牧場経営者ピョートル宅に送られる。満洲国の建国工作が推進されていく中、ハイラルでは北満最初の飛行機が到来することになった。飛行場の設営によって、緊張が一層高まってくる。飛行場建設は蘇炳文軍の妨害を招いたが、どうにか無事に完成することができた。しかし、蘇の抗日的挑発も徐々に激しくなっていく。満洲国の民生部警務司洪科長の暗殺事件、日本外務省留学生が北満の列車で銃殺されるという事件などが、次々と起きる。それらの事件に対して、小野は蘇炳文の司令部を訪れたが、彼と面会できず、事件はうやむやのままに終わる。だが、小野の分遣隊と蘇炳文軍との衝突は真近に迫っていた。9月27日、満洲国の商業航空初めての北満訪問の日、ついに大き

な衝突が生じた。ハイラル在住の日本人 253 名は蘇炳文軍によって監禁され、飛行機を迎える小野たちも攻撃を受け、部下をだいぶ失った。小野は負傷して中沢警士と二人で脱出し、長い逃亡生活に入ることになる。

ハイラル河の孤島での潜伏、中国人漁夫との交渉、砂穴の一夜……小野と中沢警士は、かろうじて蘇炳文軍の追求をかわすことができた。死と向かい合った困苦のさなか、小野は満洲の「土」を掌に載せて、幸せそうに満洲国の「夢」を語り、「僕らは決して、無駄に死ぬわけぢやないんだよ」¹と中沢と誓いあう。転々とした不安な日々のある夜、二人は、夢遊症のナターシャがうたう歌に導かれて、ピョートル邸にたどり着き、そこに身を隠すことになった。ピョートル夫妻は、親日的な白系ロシア人で、苦心をしながら小野たちの世話を見る。小野は初めて異民族の白系ロシア人を信頼し、彼らの生活を観察するようになった。ピョートル夫妻の穏やかな夫妻関係、ナターシャと、その夫グレゴリーのそれぞれの個性、日本人の支配する満洲国への信頼と、日々の勤勉、すべてが小野の目に好ましく映った。彼は白系ロシア人の「簡素」な生活態度に心打たれ、それこそ満洲のこれからの生活文明だと賛美し、在満日本人も白系ロシア人のように満洲の風土に従って定住すべきだと結論づける。

蘇炳文事件後、小野はナターシャの要望を受け、彼ら夫妻を連れて新京に帰ることになったが、二人が都市生活に慣れないため、夫のグレゴリーの病死后、ナターシャ一人、彼女の子供を預かっているハイラルのピョートル牧場に戻すことにした。彼女を見送った小野は、白系ロシア人は北満で農業に従事するのが一番幸福だという信念を抱き、三河地方の白系ロシア人の移民事業に専念することになった。

このような小野の話聞いて、飯作兄弟は今さらのように、建国運動に関わった人達の労苦をしのび、大いに感銘を受けた。やがて、弟は小野の紹介で白系ロシア人の移民事業の仕事につき、辺境へと旅立って、建国運動の一端に加わることになったが、兄は寛城子で相変わらず「妻を満洲に迎えるかどうか」で悩み続ける。

要するに、この物語において、北村は、自分の生活する寛城子で観察した満洲国の「現在」を起点に、この国の「過去」をめぐる回想を通して、その「未来」像を描こうとしたのだった。

2. 出版の経緯

春聯とは、中国の旧正月に、新たな一年を迎えるため、家の正門の両側に貼る縁起のよい対句のことである。通常は赤い紙に黒字で書かれている。10 世紀ころ、中国宋朝初期の蜀王孟昶²によって書かれた「新年納余慶、嘉節号長春」という詩句まで遡れば、春聯は千年以上の歴史をもっている。その対句も、当初の魔よけから、祭礼を祝ったり、よりよい

¹ 北村謙次郎『春聯』、新潮社、1942年3月12日、135頁。

² 孟昶（もうちょう）、919-965、十国後蜀の最後の皇帝。

生活の到来を祈ったりするものにまで、意味が広がっている。

この「春聯」という言葉を小説のタイトルとした事情について、北村は新聞に小説を連載するに当たって、「春聯の名を小説の題に借りたのは別に他意ない。要するに僕は春らしいゆつたりした小説を書きたいと、いつも考へてゐるとほりのことを、春聯の名に託したまでである」³と述べているが、そこには、間近に迎えた「満洲建国十周年」(1942年3月)に対する祝意も幾らかは籠められていたと思われる。

小説「春聯」は、1941年1月21日から5月24日まで全95回にわたって『満洲日日新聞』夕刊の第1面に掲載された。同紙夕刊第1面に小説が連載されたのは、長谷川濬の翻訳した満洲在住の白系ロシア人作家バイコフの「虎」⁴が最初であり、次いで楳本捨三の「成吉思汗」⁵、「春聯」は第3番目となる。バイコフの「虎」は、のちに単行本として刊行された。日本でも「偉大なる王」と改題されて、出版されたが、両者とも読書界の好評を呼び、相当の売れ行きを見せた。この前例もあって、北村の「春聯」も、連載開始時より読者からの注目度が高かったかと思われる。連載1回分は約1200字。満洲の荒々しい自然と登場人物をスケッチした挿絵と合わせて、同紙一面を飾るにふさわしい作品だったといえよう。

『満洲日日新聞』は、作者の北村と挿絵担当の白崎海紀について、以下のような紹介記事を書いた。

北村謙次郎君は一人敢然文筆一途に進んでゐる人、その流麗な筆と落ち着いた作家態度は既に知らるゝ処、名作「鶴」、「或る環境」に次いで、「春聯」に於いて揺がぬ北村文学を打ちたてようと言ふ。挿絵の白崎海紀君は第二回国展⁶の民生部大臣賞を獲得、古典美の中に新感覚とロマン精神を打ち樹てようとする気鋭の青年画家、その繊細な筆と新鮮な構図とは北村文学を最もよく生かすもの、作品と離れて見ても新聞挿絵の新生面を開拓するものといへよう⁷。

北村について、次の3点が重要視された。第一、「文筆一途」という表現で北村が専業作家になったことを暗示して、彼の文学精神を賛美した。第二、「流麗な筆と落ち着いた作家態度」を北村文学の特徴に取り上げた。最後は、北村の「鶴」と「或る環境」を取り上げて、「春聯」を位置づけようとしている。「鶴」は北村が1938年に『大新京日報』(のちに

³ 「夕刊新小説 春聯」(『満洲日日新聞』1941年1月10日朝刊)。

⁴ 「虎」(H・バイコフ作・絵、長谷川濬訳)は、1940年6月25日から10月3日まで全85回にわたって『満洲日日新聞』夕刊第1面に連載。

⁵ 「成吉思汗」(楳本捨三作、今井一郎絵)は、1940年10月5日から1941年1月19日まで全85回にわたって『満洲日日新聞』夕刊第1面に連載。

⁶ 満洲国の官設美術展。1937年から1945年まで全8回にわたって催された。第2回国展は1938年新京で開催。展覧会の出品区分は、第1部に東洋画、第2部に西洋画、第3部に彫刻、第4部に法書という構成だった。

⁷ 注3。

『満洲新聞』と改題)に連載した小説で、大連で成長した日本人少女の物語である。写実的な環境描写とロマンチックな結末によって、読者の好評を博した。「或る環境」は北村が1939年から『満洲行政』などの雑誌に発表された短篇シリーズで、植民地における日本人少年の成長を興味深く描いて、多くの人に記憶された。両者とも北村文学の力作といえる。

また、挿絵画家白崎海紀については、受賞経歴、「古典美の中に新感覚とロマン精神を打ち樹てようとする」⁸ところにポイントが置かれた。この紹介から、「春聯」が流麗な筆と落ち着いた作家態度、及び繊細な筆と新鮮な構図に相応しいものだと予想をつけられる。白崎もまた同紙に「貧少な技を悲しみつゝ、そのくせ日本の古典にある絵巻物、物語扇面図絵、ファウストへのドラクロアの挿絵等をうつろな眼で憧れおのゝいて居ります。思ひを転じてみても北村謙次郎氏の魂の静座を考へるとき避け難い不安に襲はれます」⁹と寄稿し、北村文学への信頼を語りつつ、自身の仕事に対する覚悟と抱負を披瀝してみせた。

なお、小説の内容について、『満洲日日新聞』は次のように書いている。

「春聯」は旧正中国人家屋に飾られる吉祥の糺紙であるが、この小説に扱はれる問題は白系露人はどうなるかの問題である、満洲国建国当初の蘇炳文事件、美しいエミグラントの啞娘ソフィア¹⁰、うらぶれた寛城子部落の露人生活、そして建国の逞ましい槌の音に伴つて彼らが進む楽土の序章……今日世界に嘗て見ざる民族協和の楽土建設に参加する我々の等しく考ふべき露人問題がいかに提出され、如何に方向を与へられるか期して愛読を乞ふところである¹¹。(下線は筆者)

おそらく、この紹介文は、『満洲日日新聞』の編集担当者が作者北村と相談した上で書いたものであろうが、しかし、ここで「春聯」の主要テーマが白系ロシア人問題であると指摘されているのは興味深い。特に、「白系露人」に関する言葉が4回出ていて、「今日世界に嘗て見ざる民族協和の楽土建設に参加する我々の等しく考ふべき露人問題がいかに提出され、如何に方向を与へられるか」¹²と強調されている。この文において『満洲日日新聞』は、白系ロシア人問題がいかに提起され、いかに解決されるのかという問題意識を読者と共有しようとしていたと考えられる。

『満洲日日新聞』は1905年に大連で創刊された新聞である。「東亜大陸に於ける最大有

⁸ 注3。

⁹ 注3。

¹⁰ 新聞に掲載されている「春聯」での美しいエミグラントの「啞娘」の名前は「ソフィア」ではなくて、「ナターシャ」である。ロシア人の名前として、両方ともよくあるが、「ソフィア」はギリシア語から来た言葉で「智慧」の意味を持つ一方、「ナターシャ」はラテン語から来たもので、「天然的、親しみやすい、詩情」などの意味を持っている。小説でのロシア少女のイメージは、後者が相当近い。

¹¹ 注3。

¹² 注3。

力紙」¹³として、1938年以降、この新聞の本社は大連から奉天に進出し、その販売地域も全満並びに華北・華中方面まで伸びていった。このような大陸の代表的新聞から長篇連載を依頼されたことは、筆一本での作家生活を志す北村にとっては都合のいい話であったはずだ。金銭的な面においては言うまでもなく、多数の読者が想定されるということだけでも作家としての満足感を十分に与えられたに違いない。そのこと自体、満洲国支配の一端を担うメディアの装置に自身が組み込まれることをも意味した。北村が1937年、満洲国に渡った時点から、彼の数々の文学作品と一連の文学活動は、既に彼の自由を求める精神と、国策に対する抗い、そして妥協を語っていたのだが、今ここでは、その点については詳しく触れないことにする。

1942年3月12日、「春聯」は川端康成の斡旋で日本の新潮社から単行本として刊行された。その背景には、1941年4月、川端康成の初めての満洲旅行があった。当時、『満洲日日新聞』と満洲棋院が「全満素人囲碁選手権大会」を催した。呉清源をはじめ、川端康成、村松梢風などが『満洲日日新聞』によって、この催しに招待された。その後、川端は、20日間かけて満洲の日本文化人と座談会を行ったり、囲碁を観戦したりして、満洲各地を旅した¹⁴。その折り、川端が旧知の北村を寛城子に訪ね、彼の生活ぶりに興味を覚え、また、『満洲日日新聞』に連載中の「春聯」に注目するという事情があった。1942年という時点まで、日本国内で書かれた「満洲もの」は、旅行者などいわば第三者の視点からのものがほとんどで、在満日本人の手になる、満洲という土地に根づいた文学作品は、まだあまり紹介されていなかった¹⁵。

単行本『春聯』はB6版の、一見、清楚な感じの本である。装丁の水谷清は、ピンクの「チャイナドレス」を着た中国人の少女を表紙に描き、扉には、中国人婦人が子供を乗せた台車を引く様子を描いてみせた。しかし、北村のこの小説には、中国人女性などまったく登場しない。初出の『満洲日日新聞』に連載された時には、白楊が並ぶ街路とか、白系ロシア人の姿とかいった満洲情緒の溢れる白崎海紀の挿絵が添えられていたが、単行本では、小説の内容とは無関係の絵が使われているため、読者に相当の違和感をもたらす。水谷清が作品を読まないまま装丁をしたとも判断されるが、あるいは、版元の新潮社の、読者多数のエキゾチシズム（中国一般に対する通俗的イメージ）を当てにしているの企みだったのかもしれない。

作品内容の面では、初出（新聞）と単行本との間にそれほどの差異は見られない。新聞小説の特徴¹⁶と見なされるものは、単行本では（挿絵がなくなったこともあって）稀薄にな

¹³ 田中総一郎『満洲の新聞と通信』、満洲弘報協会、1940年10月1日、71頁。

¹⁴ 川端康成「自作年譜」、『川端康成全集第三十三巻』、新潮社、1982年5月20日、679頁。

¹⁵ 『春聯』に先行して紹介されたものとしては、浅見淵編『廟会』（竹村書房、1940年5月20日。『作文』同人9名の短篇集）、日向伸夫『第八号転轍器』（砂子屋書房、1941年5月5日）などがある。

¹⁶ 新聞小説の特徴としてよく使われる「時代と季節の借景」などといったものであるが、

っているが、語句の推敲¹⁷や改行の増減などの工夫もあって、文章全体は洗練され、読みやすくなっている。

ただし、初出にしても単行本にしても、「春聯」は静かに流れる川のように落ち着いた文体で書かれていて、その叙情的な基調といった北村の従来への傾向は変わっていない。逆に言うと、そのストーリー展開にはプロットの転換・起伏といった波乱に乏しく、読者一般の興味を、どれほど惹きとめることができたかは疑わしい。しかし、作者は「ゆつたりした」¹⁸構えを全篇につらぬき通し、そこに彼の「自信」と「わがまま」を見ることもできそう。

なお、「春聯」は、1942年5月2日から5月26日にかけて、「ハイラルの曙」というタイトルで東京宝塚劇場（東宝）で劇化・公演された。「満洲国建国十周年慶祝」と表紙に刷られた「第三回東宝国民劇公演」のパンフレットによると、脚本は水木久美雄によるもので、原作「春聯」の第1、2、9章を省く、4場となった。つまり、新京における副主人公の物語部分は取り除かれ、ハイラルを舞台にした「蘇炳文事件」だけがドラマ化された。演出は出島耕二。配役は小野浩太郎役に中田弘二（大映）、ナターシャ役に芝恵津子（東映）などである。同パンフレットには、同時に公演された日本民族舞踊「薩摩組曲」（全一場）と歌劇「蘭花扇」（20場）の紹介記事も出ている。特に「蘭花扇」（白井鐵造作・演出）は、満映スターの李香蘭が主役の孟姜女を演じたことで注目される。

この上演に対して、吉野治夫は「在満作家の意気を昂揚する意味で大いに慶賀したい。然し傑作だからと思はれたら大間違ひで、作者も迷惑だろう。それはその中にある事件が脚色し易くもあり、大陸への関心時代、大陸宣伝時代の波にかかったものと解してよろしい」¹⁹と、客観的な評価を下した。

戦後、「満洲文学」に対する再評価がしばしば試みられ、その動きは今日、ますます高まってきた。そうした中、関連作品のアンソロジーも何度か編まれてきた。例えば牛島春子の「祝といふ男」や日向伸夫「第八号転轍器」は、1964年に『昭和戦争文学全集』²⁰に、1996年に『〈外地〉の日本語文学選』²¹に収録され、前者はまた、2001年に復刻され

具体的には、小野俊太郎著『日経小説で読む戦後日本』（ちくま新書、2001年4月19日）の第1章を参照。

¹⁷ 例えば、単行本では初出の「細君」が「奥さん」に、「露西亞」が「ロシア」に書き直されたりするなど、読者に対する配慮もうかがえる。

¹⁸ 注3。

¹⁹ 吉野治夫「北村謙次郎作“春聯”読感」、『作文』終刊号、第55号、1943年12月31日、61頁。

²⁰ 昭和戦争文学全集編集委員会編『戦火満州に挙がる 昭和戦争文学全集 第1巻』、集英社、1964年11月30日。

²¹ 黒川創編『〈外地〉の日本語文学選 第二巻 満洲・内蒙古／樺太』、新宿書房、1996年2月29日。

た『日満露在満作家短篇選集』²²でも読むことができるようになった。最近、集英社から出た『コレクション 戦争と文学』の第16巻「満洲の光と影」には、竹内正一の「流離」、牛島春子の「福寿草」などが収録されている。それらに比べ、北村の場合、「春聯」が『昭和戦争文学全集』に収録されただけに留まる。しかも、そこでの「春聯」は、作品構成上、極めて重要な第1章と第2章をはじめ、第7、8章などの数章が削除されたり、要約されたりして、元の作品の数分の一の量に縮められているため、一篇の全体像が見えなくなってしまっている。その意味では、戦後の北村は不遇な扱いを受けていると言えるだろう。

上述したように、「春聯」は『満洲日日新聞』の要請に応じて創作され、発表されたが、その後、川端康成の紹介によって日本で出版され、さらに東宝で劇化された。この一連の華々しい動きは、満洲文学の作品としては異例のことであった。当時の北村は作家として極めて恵まれていた。しかし、その幸運は、日本の中国東北支配という時代環境に包まれたものでもあった。北村が、その時代の動きに半ば迎合しながら、この作品を書いたことは疑いようもない。

第2節 満洲への愛着——寛城子

寛城子は今の長春の北部にあり、清の時代には長春庁の所在地であった。小説時点での「寛城子」は、元は二道溝と称する村落であったが、東清鉄道の敷設に当たって駅として選ばれた土地であった。東清鉄道は1896年、露清密約によって敷設され、1903年に全線が開通、その周辺約4千平方キロメートルの管轄権及び治外法権がロシアの手中に帰した。寛城子には東清鉄道の南満支線の一駅が置かれ、鉄道建設に伴い、一帯にはロシアふうの市街が形成されていった。鉄道建設の関係者と治安維持の軍隊をはじめ、多くのロシア人が寛城子に移住してきて、その人口は一時、当地の中国人の人数に迫り、彼らはこの地域の主導者となっていた。学校、教会、商店、郵便局、喫茶店などが営まれ、寛城子の隅々までロシア的雰囲気満ちた町となったが、鉄道開通の翌年に勃発した日露戦争の結果、ロシアは長春以南の鉄道を失い、新たに開業した満鉄の長春駅に貨物を奪われ、寛城子駅は次第に衰退していき、周辺の町並みも寂れていった。

その後、ロシア革命の勃発、ソビエト連邦の成立、満洲国建国など一連の事件が続く中、中東鉄路（東清鉄道）はロシアにとって経済的にも軍事的にも重要性を失い、1935年3月には満洲国に売却されることとなった。満洲に住むロシア人たちもソ連に戻ったり、ヨーロッパないしは中国の関内に移住したりして、残されたのは、旧ロシア帝国に未練を残す旧貴族とそれを支持する旧軍人など、いわゆるエミгранトたちであった。そして、彼らの多くは安定した職業を持たないまま、貧しい暮らしを余儀なくされていた。一方、日本

²² 山田清三郎編『日満露在満作家短篇選集』、ゆまに書店、2001年9月25日。原本は春陽堂書店、1940年12月22日刊。

勢力の満洲侵入に伴い、日本人の満洲移住は著しくなった。1937年、満洲国「第一次五カ年計画」が策定され、首都新京も日ごと変わりつつあったが、急激に増加した日本人にとって「住宅難」が大きな問題となった。そのため、寒村となった寛城子が再び注目されることになり、一時の腰掛け場として多くの日本人が居住するようになった。とりわけ、1937年に満洲映画協会が設立されてからは、その臨時的な撮影施設が廃駅後の倉庫やホームに作られたので、映画関係者など、仕事で寛城子に出入りする人たちも増えてきて、寛城子も多少にぎやかさを取り戻すようになった。

寛城子は、作家北村の10年ほどに渡った満洲国の滞在中、最も馴染み深い場所であった。いわば、北村にとっての「満洲風土」の発源地である。そこには、横田文子、緑川貢、長谷川濬など文学仲間が多く住んでいて、川端康成など日本人作家が訪ねてくることもあったし、北村の勤務する満映の撮影所の所在地でもあった。寛城子はしばしば、彼をはじめ、在満日本人作家たちの視野に入り、文学作品の素材となった。例えば、1938年に満洲に渡ってきた作家横田文子は渡満早々、寛城子を舞台に小説「美しき日」²³を書いたし、長谷川濬も「寛城子」²⁴という表題の作品を発表している。彼らはそれぞれの角度で寛城子の側面を取り上げたが、北村謙次郎ほど、寛城子への愛着と、その地を背景とする世の流転とを巧みに表現したものはいない。例えば、「春聯」には、鼠を井戸端で処分する時の振作の心情を描写した一節がある。

五分もたゝぬうちに、鼠どもは死ぬだらう。そう思つたとき、振作に不思議な感情が動いた。彼はもう何年も、十年も二十年も、この長屋に住んでゐるやうな気がした。捕鼠器の中の鼠も、豆腐屋の言葉も、井戸端も、何もかも親しいものに思はれる²⁵。

無造作な描写ながら、ここには、土地と人間との一体感を通して、満洲という環境に溶け込んでいる作者の心情が巧みに表出されている。では、このような寛城子において、北村はどのように満洲国の「現在」を描いたのだろうか。

幾日か気づかずに見過ごしてゐた白楊の梢がいつか黄に染め変へられたと思ふ間もなく、けふはすでに冷たい北西の風に誘はれて、絶え間なくあとからあとからと枯葉を散らすやうになつた²⁶。

小説の冒頭、北村は、満洲特有の「白楊」が北西の風の中、枯葉を散らす様子を取り上げている。日本の風土とまったく異なった季節の移り変わりに、作中人物のしっとりした

²³ 横田文子「美しき日」、『満洲行政』第5巻第10号、1939年10月1日。

²⁴ 長谷川濬「寛城子」、『作文』第51輯、1941年9月20日。

²⁵ 注1、25-26頁。

²⁶ 注1、3頁。

寂しい心象を重ね合わせている。根気よく落葉を集めている中国人小孩（子供）、ベンチに談笑している白系ロシア人の子供……他民族との共存の中で、自民族の隣人の引越しは主人公銀作の深い郷愁と異国生活の寂しさを引き出し、その感傷が寛城子の天地を包んでいる。

その天地は、冴え返る大気の中に響くロシア寺院の鐘の音、朝の目覚めを呼び起こす石炭を掻く音、ちぎれた黒い煙などに満ちていて、日本人、ロシア人、中国人たちのそれぞれの営みで賑わっている。寒気に耐えながら出勤する銀作は、オフィスで、日本人の上役同士の軋轢を聞かされたり、会社の車で競馬に行く課長の話の聞いたりする。白系ロシア人は、ぼろ服をまとって床拭き、お茶酌み、ペチカ焚きなどに従事している。中国人も、野菜売りとか豆腐屋、新聞配りのような社会底辺に暮らしている人たちばかりである。それらが銀作の見る寛城子であり、満洲生活の総てであるが、しかし、作者の思索は、そこに留まってははいない。例えば、中国人同士の喧嘩の場面。路上でぶつかった新聞配達人と野菜売りの争いにおける二人の言葉と動作のやり取りを観察しながら、作者は小野の眼を通して、中国人の心理（「面子」）を巧みに捉えてみせる。また、捕鼠器の中で噛みあった2匹の鼠を見て、「ターデ、シンホワイラ」²⁷（「(他的心坏了) 彼らの心が腐っていた」——筆者訳）の一言を残した老翁についての挿話も、人間社会を映しながら満洲の風土をよく伝えている。

寛城子の中国人の落ち着いた生きかたに共感を持ちながら、反面、作者は白系ロシア人に対する疎遠感をいくらか意識しているところもある。天使のような白系ロシア人の子供が楽しそうに遊んでいる一方、職場には金銭至上主義のみすばらしいロシア人の大人がいる。両者のギャップはあまりにも大きく、作者は、「それならばあの薔薇色の頬した少年少女も、汚い中国人小孩に混つて落葉掻きをしなければならぬのかと考へると、銀作にもさすがにはつきりした返事は得られなかつた」²⁸と書いている。

そのような寛城子の社会相の描写について、当時、吉野治夫は「従来、訪満作家が視察の結果発表した“満洲の小説”は多くは開拓地を取り扱つたもので、そこに満洲の現地色を見ようとしてゐるが、実は満洲にとつて「開拓地」はむしろ特殊であつて一般ではない（中略）満洲を描いた作品は、むしろ現地の作家より先に日本内地作家によつて数篇作られたが、如上の憾があつたことは否めない。これに対して北村氏の『春聯』は、特殊の事件を取扱ひながら、やはり、どことなく満洲らしい色と香をにじませてゐる。文字どほり、どことなくといふ全体感で特に具体的に指適することは、困難だが、現実に永く満洲に居住したものの生活感が自ら情感的に浮かんでくるのは争はれない」²⁹と「春聯」の独自性を評価した。

中国人と白系ロシア人に対して、このように観察する一方、在満日本人に対しては、明

²⁷ 注1、25頁。

²⁸ 注1、5頁

²⁹ 注19。

らかに批判の視線を投げかけている。一例を挙げると、作者北村は、銀作兄弟の日常生活を通して、戸沢家の引越しのシーンを取り上げた。「机があり、筆筒があり、蒲団包み、漬物桶、その他、雑多な家具類や勝手道具の類が順序よく積み込まれて、それは何処の家の引越し風景とも変りないものであつた」³⁰と、細々した品まできちんと用意された荷物である。70年後の今日の日本人の引越し風景とも変わりがなさそうであるが、作中の白系ロシア人ピョートル夫妻だったら、それほどの荷物を作ろうとしてもなかなか揃えられなかっただろう。対照物を同時に並べていないので、多少理解しにくいだが、ここには作家の透徹した観察が潜んでいる。つまり、日本人は（ロシア人に比べ）自国の文化に執着しすぎ、満洲の風土に馴染むことが出来ないまま、結局、日本に戻ることになる、と述べているのである。類似の指摘は、作中、所々に現れている。例えば、子供の遊びについて、中国人の子供とロシア人の子供は、よく外で遊ぶが、日本人の子供は庭での「おままごと」に決まっている。更に冬に入ると、薄着のため室内でしか行動できなくなる。日常で接しているはずの満洲での生活の智慧は、日本文化の「高いレベル」によって、頑固に拒絶されているというのが、作者の思いである。相当鋭い批判なのだが、北村の筆下では、それが一種の感傷の中に流れてしまうので、読者には、こうした日本文化批判の鋭さがつい見逃されてしまうのではあるまいか。

小説の最後に、作者は、貞造の口を借りて、「(都会の住民にせよ開拓地のそれにせよ、自然に順応し得ず、機会があれば故郷へ引揚げることばかり考へたがる) あなた方の生活は空しく、無為なのではないかしら。何故なら、あなた方は土地を愛することを知らず、それによつて得られる喜びをもたないから」³¹と、満洲の日本人に呼びかけた。

この部分について、同じく満洲で文学活動に従事した日本人作家木崎龍は「北村謙次郎は、人物の型と性格とかを描いて、そこに作品の展開の機縁をみせるやうな作家ではない。フランス人の小説にクリマといふのががあるが、あのクリマといつた意味での雰囲気——それを浮出させてみせるのが、北村謙次郎の本領であるやうに私はおもふ」³²と評価した。クリマとは、フランス語の climat であり、風土・気候・雰囲気を意味する。要するに、北村は作品を構成する時に全体的な雰囲気を重要視していることを指摘したのである。そのゆえ、「この作品にいはゆる主人公といふものを見つけることも無駄である」³³と述べ、「それぞれの人物は、いたづらに自己を主張しようとはしないのである。これらの人物は、すべて寛城子のみすぼらしい露人長屋の一角に集約されてゐるのである(中略)そこに春聯の世界があるのである」³⁴と解説した。

寛城子を始め、満洲大陸への愛着は、北村謙次郎が「大陸日本人」になるきっかけとなった。しかし、それだけで、満洲の日本人に「大陸日本人」になろうと説得するには、足

³⁰ 注1、6頁。

³¹ 注1、287頁。

³² 仲賢礼「在満作家論 北村謙次郎の飛躍」、『満洲新聞』第6面、1942年5月7-9日。

³³ 同上。

³⁴ 同上。

りないではあるまいか。その足りない部分は、北村の満洲国の国策への同調と理解しても間違いないだろう。

第3節 満洲国の日本人に対する批判——小野の回想談

1. 満洲の白系ロシア人の生活実態

1930年代半ば以降、日本の「百万戸移民計画」が徐々に本格化し、満洲に移民してくる日本人の数が増加したが、それに伴い、満洲に適應できない彼らの実態も問題となった。寒冷地に慣れていない日本人移民に現地に適應した生活モデルを提示するため、日本・満洲国の両政府は、「満蒙開拓」政策を推進する研究所や調査機関を通して、中国東北部のさまざまな民族の農業経営や生活状況を調査するように動き出した。白系ロシア人の村もこの時、満洲国政府の視野に取り入れられるようになった³⁵。例えば、1941年の『ロマノフカ村の話』（山添三郎、満洲事情案内所）、『ロマノフカ村』（藤山一雄、財団法人満洲移住協会）、1942年の『北満のロシア人部落』（福田新生、多摩書房）、『白系露人の営農と生活』（暉峻義等、大阪屋号書店）なども、そうした調査報告の一端と見なしていいだろう。寒冷地に慣れていない日本人移民と比べて、満洲に渡った白系露人はほとんど現地に適應した生活を送っていた。この調査結果は、すでに日本人の関心を惹いていたばかりでなく、北村謙次郎にも創作の材料を提供したと考えられる。

小野の回想談と類似の素材を扱った作品が、北村が執筆する前に、すでに存在していた。それは庄司通惟³⁶の実録ふう読物「白系（海拉爾事件秘話）」³⁷である。この物語でも、蘇炳文事件が扱われている。「春聯」のピョートル夫妻を思わせるロシア人が、二人の日本軍人を助けるという物語だが、ピョートル夫妻についての描写はそう多くないし、ナターシャも登場しない。

北村が、この素材をどこから得たのか明らかではないが、庄司の一篇と比べ、小説としては、より膨らみをもったものとなっている。登場人物の造型化にすぐれているし、とりわけ小野によって見出された「満洲国の未来の文明像」については力をこめた描写がなされている。その文明像は、満洲国を信頼して小野を助けた白系ロシア人ピョートル夫妻を通して明らかにされていく。この「理想」的な白系ロシア人夫妻に辿りつくまでには、ま

³⁵ 坂本秀昭・伊賀上菜穂『旧「満洲」ロシア人村の人々』、東洋書店、2007年2月20日、2頁。

³⁶ 庄司通惟（鄭吉）は、本名の山名正二名義による著書『満洲義軍』（月刊満洲社東京出版部、1942年9月20日）もある。

³⁷ 『月刊満洲』第8巻10、11号。1935年10、11月号。また、同作品は、のちに庄司鄭吉『何とかスキーの娘』（月刊満洲社、1939年11月5日）に収録された。

ず、作者の同情を引き起こした寛城子の落ちぶれた白系ロシア人たちの姿がある。

彼らの生活は惨めさ。だけど、それなりに、どこか落ち着いて暮らしてゐるな。おれたちみたいに日本といふやうな立派な故国を持たないといへばそれまでだが、少なくとも冬は暖かく、夏は涼しく暮らせるやうに念入りに家を建てゝさ。大した金も持たないのに、何か生活を楽しんで毎日を送つてゐるらしいぢやないか³⁸。

飯作のこの感想は、同じ母国を離れた立場にありながら、異郷に流亡する白系ロシア人のほうが日本人より満洲の生活に慣れていて、楽しく生活できている、それは作者の「なぜなのか」という自身のこだわりを代弁している。ここで、作者は、白系ロシア人の満洲生活と対照しながら、在満日本人の生活スタイルを模索する意図を明らかにしているわけである。

「春聯」においては、この模索は飯作の自問自答の形式で展開された。その「問い」は寛城子に住む白系ロシア人たちに対する関心から生まれたものであった。

新京のあちこちのオフィスで見るやうに、こゝでも床拭き、お茶酌み、ペチカ焚きなどに、それぞれ白系露人の男女を使用してゐた。ぼろ服をまとひ、意地の悪さうな顔をした婆さんの手からお茶を貰ふのもあまり愉快ではなかつたが、ぼろスカートの尻を逆さに、濡雑巾を両手に押して床を這つてまはる掃除女の姿を見るのは、惨めといふ以上に不愉快だつた。彼らに与へられる仕事は、結局こんなことしかないのかと、半ばあきらめた気持ちで見遣つてゐると、給料が不足とかで急に姿を消したり、仲間と語らひ、中途半端なストライキめいたことを始めたりした。金銭以外に頼むところ少いため、さういふ方面にかけては敏感で悪賢いといふやうな話しも聞いた³⁹。

このような白系ロシア人たちは、観察者飯作にとって、ただ「白系露人は何処へ行くかといふ、折に触れて頭に上る例の問題が、ぼんやりした跡を残して流れたに過ぎなかつた」⁴⁰というのである。つまり、ここで作者は飯作の身を借りて、新京は白系ロシア人の居場所ではないとはっきり指摘したのだったが、では、彼らが一体どこに行くのかという点については、「漠然」としたままであった。

その「答え」は、寛城子にやってきた「指導者」の小野との出会いによって得ることができた。ハイラルで蘇炳文事件に遭遇した小野は白系ロシア人に助けられ、そこで彼らの生活を観察する機会を得た。それは、ピョートル・ブリホージコフ夫妻である。彼らは牧場を経営し、製粉工場や営業所も持っている農業経営者である。小説では、彼らは、寺田

³⁸ 注1、22頁。

³⁹ 注1、27-28頁。

⁴⁰ 注1、5頁。

警士の「われわれと極く親しい、いい男ですよ」⁴¹という話の中で初登場する。その「親しさ」を、のちに小野はおいて実感する。小野たちに避難所を作るために、ピョートル夫妻は、牧場の使用人たちを解雇し、ナターシャとグレゴリーたち 4 人だけで家業を支えながら、地下室を作ったり、情報を収集したりする、極めて辛抱強い人たちである。これらの人たちの生活は、小野の目には、「当地でも有数の牧場経営主であるが、家では、衣類、家具類、台所用品など日常使用する器具は、必要の最小限度に止まっている」と映っている。ここで、小説冒頭の日本人の引越し場面を思い出すと、鮮明な対照となる。つまり、作者は「物の少なさから来る生活の単純性は、ひいて生活に活力を与へ、創造性を付与する。その単純さが彼らの宗教と結びつき、更に大地と結びついて、てこでも動かないやうな安定感を人に与えるのであらう」⁴²という結論に至り、「満洲へ来たら満洲の気候風土に適した生活を送るのが合理的だらうに、日本人はどういふものか先住民族たちの優れた遺産を継承しようとしなさい」⁴³と日本人の生活習慣、母国文化への執着を批判した。さらに、ピョートル夫妻の持つ人間性が、北方の自然の中での原始性と単純性にあると賛美し、満洲に定住するには、白系ロシア人のもつ満洲の気候風土に適した「簡素」な文明に学ぶべきであり、それが満洲国の将来の文化になるべきだと考えた。

このような認識を踏まえ、蘇炳文事件後、小野は北満の白系ロシア人の移住問題などに取り組むことになるわけだが、指導者としての立場から彼が「民族互助」を提唱したことは、すなわち、作者北村謙次郎の、満洲国における「民族協和」思想への同調を意味すると見ていいであろう。ただし、満洲に住んでいたロシア人は、主にソビエト政府に不満を抱えた旧ロシア貴族や軍人、東清鉄道に関わる技師・駅員などであるが、彼らは大体ハルビンなどの大都市、または鉄道駅附近に住んでいる。ピョートルのような牧場経営者は極めて少なかったはずだから、白系ロシア人の生活像をいくくりにして、「適当な農村に復帰させ大地に足をつけた生活を営ませる方が幸福なのではないか」⁴⁴と提案したのはあまりにも理想的であるし、作家の作品創造を支える実地調査の不十分さも窺われる。

2. 「蘇炳文事件」

「蘇炳文事件」は「春聯」の背景として扱われた歴史的イベントである。この事件について、北村謙次郎は、「建国後間もないころ惹起された蘇炳文事件といふ、やゝ史実的な固い事件を中心に扱ふ手筈になってゐるけれども必ずしも表面から描かず軟らかな手法の中にどれだけぼんやりした雰囲気が出るかを楽しみながら書いていきたいといふのが実は僕の下心なのである」⁴⁵と述べた。北村の「軟らかな手法」でどれほど「ぼんやりした雰囲気が出る

⁴¹ 注 1、78 頁。

⁴² 注 1、255-256 頁。

⁴³ 注 1、254 頁。

⁴⁴ 注 1、266 頁。

⁴⁵ 注 3。

か」を検証するため、以下、この事件を読み直しておく必要がある。

「蘇炳文事件」は1932年9月27日から12月3日にかけてホロンバイル（呼倫貝爾）で発生した抗日戦争である。日本側では「ホロンバイル事件」と呼んでいるが、中国側では「海満（海拉爾・満洲里）抗戦」と記録されている。

事件のリーダー蘇炳文は1892年、遼寧省の生まれ。保定軍官学校の第1期生である。1917年に第1次世界大戦に参加したが、軍閥混戦の内戦に反対して、軍から身を引いた。しかし、1925年、郭松齢の誘いで奉天派にくみすることになり、張学良の部下となった。満洲事変後、ホロンバイル地域の最高軍政長官に就いた。1931年11月、黒龍江省の省長馬占山が江橋抗戦を呼びかけたが、多勢に無勢のため敗戦し、関東軍に投降した。その結果、黒龍江省に隷属するホロンバイルも日本軍に管轄されることになった。だが、蘇炳文は関東軍に協力する姿勢を示すことなく、軍事力を蓄積し抗日闘争に備えようとしたため、関東軍のホロンバイル進出の障碍となった。

ホロンバイルは満洲の北西の大草原で、ソ連とモンゴル人民共和国に隣接するため、その中心となるハイラルは、軍事的に重要視されていた。関東軍は一刻も早くこの地域を確保しようと図った。彼らは、まず、金銭や利権などで蘇炳文を誘惑したが、失敗した後、国境警察隊の入境を要請した。当時、蘇の抗日闘争準備はまだ整っていなかったため、彼は関東軍の要求を止むを得ず認めたが、抗戦の準備は一層急いで進められた。1932年9月、国際連盟が中国東北問題をめぐって、ジュネーブで会議を開催した。それに応じて、中国東北の侵略された実情、及び関東軍の非人道的行為を全世界に暴露するため、蘇をリーダーとする抗日活動が勃発した。

1932年9月23日、蘇炳文はハイラルで軍事会議を開き、「東北民衆救国軍」を結成した。9月27日、東北民衆救国軍は国境警察隊を含めハイラル在住の日本人253人を監禁した。10月1日、蘇炳文はハイラルで開催した万人軍民大会において、東北民衆救国軍の成立を宣言、命をかけて国土を守ることを誓い、ここに、日本軍への抗戦がいよいよ開始されることとなった。この戦争は前後60日間近く続いた。中国軍には11000人⁴⁶が参加し、日本側は20000人⁴⁷が出動した。12月3日、日本側の強大な軍事力に抵抗できず、蘇の軍隊はソ連に撤退した。

この事件について、当時、『満洲日報』は1932年9月29日より事件の報道⁴⁸を開始した

⁴⁶ 厲春峭『呼倫貝爾抗戦史話』、内蒙古文化出版社、1990年、8頁。

⁴⁷ 満洲国史編纂刊行会『満洲国史 総論』、満蒙同胞援護会、1970年6月30日、304頁。

⁴⁸ 1932年9月29日の『満洲日日新聞』第2面には「満洲里に反乱起り 在留邦人危し 海拉爾も危険」というタイトルで「北滿に暴動」の事情が報道されている。その後、日本軍の軍事行動、満洲里で拉致された日本人についての安全保護声明、蘇炳文の「兵変に無関係」といった記事が続報された。ほかには、雑誌『協和』では、高橋源一「風雲暗き呼倫貝爾——三百邦人の運命はどうなる」（『協和』、1932年12月1日、111頁）とか長谷川兼太郎「満洲里を憶ふ」（『協和』、1932年12月1日、112頁）などといった記事

が、その全体像を報告するものとしては、翌年12月に公刊された陸軍省調査班の『呼倫貝爾事件に就て 附呼倫貝爾の概観』がある。日本政府は、事件の原因を、「本件は蘇炳文及張殿九が、人事問題及満洲里関税収入の政府移管等に関し、省政府に対し不満を有するに端を発し、俸給不渡に依る部下の不平を名とし、愛国的反満反日を標榜して、事を起こせしものであるが、其真意は日本人監禁によりて軍費其他を強要せんとしたる軍閥的古思想、私欲思想の現れである」⁴⁹と結論した。現在、中国では、この事件は中国の抗日戦争の一部として記録されているが、日本側では満洲国建国初期の反乱として、比較的簡単に扱われているにすぎない。

北村の小説「春聯」においても、この事件については、真正面から描かれていない。つまり、作者は、事件の要因や意義などについて具体的に触れようとしなかった。事件はいわば、この物語の背景として描かれているにすぎない。例えば、事件における日中軍の数回の衝突について、その詳しい描写は「春聯」には1カ所も出てこない。北村の筆致は、戦争の具体的な場面を避け、厳しい状況に陥った小野個人の描写だけに留まっている。それこそがまさに北村の言う「必ずしも表面から描かず軟らかな手法の中にどれだけぼんやりした雰囲気が出るかを楽しみながら書いていきたい」⁵⁰であったのだろう。満洲国の建国精神の在りようを描いたこの小説において、北村は小野の建国ヒーローたる雄姿を真正面から描かず、彼の逃亡生活を通して、建国当時の日本人の他民族との協和への認識を心理的に展開することを選んだ。それは、「春聯」において北村が抱いた「建国精神」とは、建国当初の苦労話ではなく、避難中の小野を通して見た、他民族への認識、及び日本人と他民族との協和への思いだったと理解される。

「春聯」が東宝で上演された際、及び戦後の文学全集に再録された際、「蘇炳文事件」は素材主義という視点において、この小説の中で一番時勢にふさわしい部分と見なされたが、北村の本意から外れてしまった恐れは多分にある。

ところで、北村のこの物語の取扱い方について、長谷川濬は、「蘇炳文反乱実録の如きテーマはややもすれば、プロットの興味に引きずられ、通俗的な所謂大衆小説に陥り易いものであるが、北村氏は見事にその線を突破し、北村文学の面目を躍如たらしめてゐるのみ

を掲載し、ホロンパイルと満洲里の地理紹介に併せて事件を報道している。また、『満鉄社員健闘録』（満鉄社員会、1933年1月5日）には「逆徒蘇炳文の反乱」と題する記事が、『満鉄社員健闘録 第二篇』（満鉄社員会、1934年8月25日）には、芳賀千代太「蘇炳文討伐軍の大輸送」、松尾清次郎「雪の大興嶺を越えて」、小木良一「蘇炳文部隊の大進軍」など、事件関連の記録三篇が収められている。川島芳子著『動乱の蔭に』（時代社、1940年2月26日）も、1章を割いて事件に触れている。川島は旧知の蘇との和平交渉を企図したが、これは実現に到らなかった。

⁴⁹『呼倫貝爾事件に就て 附呼倫貝爾の概観』、陸軍省調査班、1932年12月。

⁵⁰ 注3。

ならず、在来の型を脱して生氣潑刺たる青年の筆致さへみせてゐる」⁵¹と評価し、『三田文学』は「絶へず政治といふ厄介な物と関聯を持たせながら、決してそれをぞろつべいには扱つてゐないこと。満洲国建国当時の蘇炳文の叛乱に材を取りながら、所謂きはものの臭味がないのは時間が経つた故もあらうが作者の作家精神に据る処が何より大きいと思はれる」⁵²と高く評価した。また、吉野治夫は「ただそれを背景にした国境に於ける民族と民族との交錯は実感を以て浮かんでくる」⁵³と解釈した。とりわけ、木崎龍は北村がこの事件を正面から取り上げていないことについて、「その小説としての成功は、まことに心にくいほどである」⁵⁴と書いている。

3. ナターシャの登場

少女ナターシャは、「春聯」の物語が成立するには、不可欠な存在である。親知らずの「正体不明」の人物として描かれる彼女は、ユダヤ人ユンケルマン邸の「下女」より惨めな扱いを受けていたが、ユンケルマンの死後、邸を出て、「全裸に近い姿で」ハイラル河畔をさまようところを小野に発見され、ピョートル邸に預けられた。その後、ピョートル邸の下僕グレゴリーと結婚して子供を生んだが、小野と共に新京に来て、そこでの都市生活に適応できず、夫の没後、再びハイラルのピョートル牧場に帰ることになるのである。

この少女は、小説の構造上、二つの機能を担っている。一つ目は、白系ロシア人を作品舞台に引き出す装置としての役割である。彼女の家出をきっかけに、小野はピョートルと面識が出来、それが、その後の避難生活の伏線として働く。また、ハイラル河の河畔を彷徨していた小野たちは、夢遊症の彼女の歌によってピョートル邸に導かれ、逃亡生活を安全に送れるようになった。言わば、彼女の存在こそ、小野が白系ロシア人の生活を観察し、先述の「満洲国の文明図」を描くことを可能とした媒介となったわけである。

二つ目は、白系ロシア人が都市生活に合わないという例証である。小説に初登場するナターシャは、「うら若い青春の表情が、疲労の垢で汚れてゐる。大きな碧い両の瞳はどこか視点の定まらぬあやふやさを漂はせ、頼りなげな、虚ろな影を宿す。白つぼく潤いた唇がやゝ開かれ、美しい前歯を覗かせてゐるが、口を洩れるのは、何か物に怯えでもしたやうな、単純な母音の綴り合せばかりである。青い衣裳も襤褸に近いものだつた」⁵⁵という姿であつた。このような言語能力も覚つかない少女は、小野にピョートル邸に送られた後、きれいになって、しゃべることも出来るようになった。そして、結婚して子供まで産んだ。その上、ナターシャの「夢」（「もつと別なところ、暖かいところ、明るいところ行きたい」

⁵¹ 長谷川濬「『春聯』について」、『作文』第51輯、1941年9月20日、91頁。

⁵² 無署名「新刊巡礼 『春聯』北村謙次郎」、『三田文学』第17巻第5号、1942年5月1日、136頁。

⁵³ 同上。

⁵⁴ 注32。

⁵⁵ 注1、80頁。

56) は小野の助力によって実現したが、グレゴリーの病死の結果、白系ロシア人には「大地に足をつけた生活を営ませた方が幸福なのではないか」⁵⁷という結論を小野にもたらしことにもなる。この一連のプロット設定は、読者に多少不自然な感じを与えるかもしれないが、一人のロシア人女性を取り上げ、白系ロシア人が「都市生活に不適應だ」ということを立証しようとした作者の意図は明らかであろう。

また、この少女にまつわる「ロマンチズム」は、作者北村謙次郎の本来の創作スタイルとも符合する、小説の魂を示している部分である。それを最もよく窺わせるのが、少女の信仰心を表す部分である。

夜更けては人影もなく、河音も何か孤独を嘆くやうに物悲しげに聞える曠野を、たつた一人の娘が恐れげもなく唄をうたつて歩くといへば、それだけでも人の心を怯えさせるのに充分であらうに、まだ顔を見た者もないといふ不思議な言説さへつけ加へられて、これを一種の妖精のごときものとし、恐れ崇めようとするのは無理もないわけであつた⁵⁸。

ハイラル河畔をうたいながら彷徨うナターシャのイメージは、彼女の無意識的な信仰心が自然の大地と結ばれ、人間と大地の一体感を唱えている。その大陸的な抒情（ロマンチズム）は、まさに北村の提唱した「満洲ロマン」⁵⁹という創作理念の具現化であつたと見ていい。この点からいうと、「春聯」は在満日本文学作品の中でも、作者固有のロマン主義を満洲風土に移植した成功例の一つといえるのではあるまいか。その意味では、北村の「春聯」は日本文学の中国大陸進出の代表作とも見なすことができよう。

第4節 作中における「ジレンマ」—— 振作兄弟

北村の「春聯」を論じるに当たって、一つ避けて通れない部分がある。それは、作者の心理的な葛藤が託されている振作の在りようについてである。「春聯」における振作の設定は、この小説において大きく問題となるところであろう。川端康成の「この作品は色調が破れ矛盾が含まれてゐる」⁶⁰という言葉、岸山三平の「失敗作」⁶¹と決め付けた断定的な批判、また、吉野治夫の「満洲らしい色と香」⁶²といった評価、これらはすべて、この人物像

⁵⁶ 注1、251頁。

⁵⁷ 注1、266頁。

⁵⁸ 注1、149頁。

⁵⁹ 北村謙次郎「探求と観照」（『満洲浪漫』第5輯、東都書籍新京出張所、1940年5月2日）で提出した理念である。

⁶⁰ 川端康成「序」、北村謙次郎『春聯』、新潮社 1942年3月12日、2頁。

⁶¹ 岸山三平「三つの小説に就いて」、『満洲評論』第23巻第5号、1942年8月1日、29-31頁。

⁶² 吉野治夫「北村謙次郎『春聯』について」、『満洲評論』第22巻第17号、1945年5月2

に関わっている。その理由は、振作が作者自身の分身であることから来ている。M撮影所に勤め、寛城子でのんびり暮らしているこの兄の人物設定には、作者自身が重ねられている。北村も、寛城子の粗末な構えの住宅に何年間も住んでいて、近くにスタジオを持つ満映に勤めていたことがある。その不便で貧弱な住環境のもと、文筆にいそしむ北村の暮らしぶりには、川端康成も感心したようである。彼のその物静かな観察と深い思索の態度など、作中の振作とまったく同じではないかと思われる。それゆえ、この小説で設定された振作像は、作者の葛藤を感じさせる存在となる。

例えば、小説の冒頭、白系ロシア人に投げかける視線には、距離を置いた他者への微妙な関心が示されているが、振作自身、それに納得できないまま、まず自分からその関心を抹殺しようとしている。「それどころか、他民族に対して余計なおせっかいはやくものとしか思へなかつた」⁶³と、自らの心情を現すだけでなく、更に、「彼の心の中には漠然と、白系ロシア人は何処に行くかといふ、折に触れて頭に上る例の問題が、ぼんやりした跡を残して流れたに過ぎなかつた」⁶⁴という一種の困惑に到り、現実社会に対する距離感を読者に印象させる。この距離感は、弟の就職問題や、また自分が妻を満洲に迎えるかどうかといった問題など到るところに感じられる。

しかし、小野の回想談をめぐっての振作の態度は、多少とも読者に意外感を与える。それは特に、小野の語った「建国精神」を素直に受け取って建国運動に挺身することになった弟貞造と兄との対照に見られ、兄弟の対話の中で展開されている。例えば、「建国精神」に共鳴する弟に対し、同じ物語を聞いたのに、振作はナターシャの存在を重視して「ロマンチック」にしか受け取ろうとしない。また、弟から「兄さんは、どうする」⁶⁵と問われた時に、「当分はこの生活を続けるよりほかないだろうなあ」⁶⁶と答える。そういう振作自身は、満洲国に対する「夢」から、いくらか距離を置いているかのように読みとれる。にも関わらず、振作は、満洲国の現実を批判したり、冷やかに見たりしているわけではない。では、「このままの生活」とは何かというと、寛城子に住む底辺の人々との接触、例えば、白系ロシア人の希望のない将来を憂えたり、貧しいけれど活力に満ちた中国人商人の姿を観察したりするといった日々のことなのである。しかし、観察の後は、どうするかということは、作者は明言していない。一方に弟の「夢」があり、もう一方に、その「夢」から距離を置こうとする兄があるという設定なのである。この設定の意義を、北村自身、まだ明白に把握できていないようにも思われる。

言い換えれば、作者は「建国小説」を書こうとしても、完全にそこに没入することが出来なかった。作者の「文人」としての自立心を保つため、「政治」に対しては、或る程度の不同調を示しているようにも見える。作中に「民族協和」思想への共感といったものは多

日。

⁶³ 注1、5頁。

⁶⁴ 注1、5頁。

⁶⁵ 注1、270頁。

⁶⁶ 注1、270頁。

少読み取れるものの、各民族の諸相に対する理解に至っては、ただ一方的に白系ロシア人への関心を通して、在満日本人の生活スタイルを検討するといった程度に留まり、白系ロシア人そのものについても、その生活実態に迫ることはできず、そこに作品世界の限界も明らかである。北村の求めようとする「建国運動」の実質とは、政治的实践というより、満洲に対する「観察」に留まるものだったのではあるまいか。振作に与えられた役割とは、在満日本人への批判と同時に、傍観者としての作者の迷いの姿であったとも言えそうだ。

第5節 「春聯」に対する評価

新聞連載中、「春聯」は、一度だけ横田文子の「文芸時評」で言及されたことがある。また、連載後は、長谷川濬が同人誌『作文』に批評を書いたが、それは、新聞小説「春聯」の唯一の作品評となった。1942年3月、「春聯」が単行本として新潮社によって刊行されてのちは、多方面から注目を浴びるようになった。それに伴い、書評も増えた。しかし、それも長くは続かず、戦後、同書は忘れられ、せいぜい、単なる研究資料紹介の対象にとどまっていた。このことを受け、ここでは時系列に従って、それらの論評を概要してみる。

横田による「文芸時評」の見出しは、「期待される“春聯” 満洲文学最近の収穫」⁶⁷である。その中で、横田は満洲文学の独自性を強調した後、当時、日本内地で知られた満洲文学の代表作「祝といふ男」（牛島春子）と「アルカリ地帯」（塙政盈）を例に挙げ、「それぞれに満洲的な独自性をもつてゐるが、作者の技術はともかくとして、そこから材料の「面白さ」をひきぬいてみると、後に何が残つたか、これだけなのか、という空虚感である」⁶⁸と述べ、文学作品における質の問題を明らかにした。彼女は作家としての立場から、「活字の字面から読みとる物語や、その言葉のみではない。その行と行との空間にただよつてゐる芸術の色である。つまり、その行間からいつとなくこちらの胸をうち、また浸して来る、あの情感——結局は「書かねばならなかつた」「書かずにゐられなかつた」作者の精神にふりたいのである」⁶⁹と述べた。そういう横田は、北村文学に対して、「満洲文学は暁の星を見たばかりだが、その中で北村謙次郎氏の旺盛な仕事ぶりは、量的意味ばかりでなく、実質的な意味から云つて、その星の輝きを一層深くさせてゐる。長篇「春聯」の完成が期待される」⁷⁰と語った。これは、満洲の日本語文学が素材主義を中心とする傾向に対する批判であると同時に、その時点にすでに50回以上連載した「春聯」が材料の面白さの外に、行間に溢れている芸術性を認めたことがゆえんであろう。

同年9月、長谷川濬は「「春聯」について」⁷¹を発表した。それは、この小説に関する初

⁶⁷ 横田文子「文芸時評 期待される“春聯” 満洲文学最近の収穫」、『満洲日日新聞』、1941年4月3日第8面。

⁶⁸ 同上。

⁶⁹ 同上。

⁷⁰ 同上。

⁷¹ 長谷川濬「「春聯」について」、『作文』第51輯、1941年9月20日、89頁。

めての正式な作品評であった。この中で長谷川は、北村文学全般を見渡してから、「彼ほど季節と住み場と周囲に対して敏感な作家はない」⁷²と述べ、北村が寛城子についての描写を肯定した。「春聯」の中で、長谷川は、「満洲国の自然や人間に彼が深い愛情を持つてゐる事。(中略)「春聯」の一篇によつて北村氏は彼のみによつて作るべき満洲文学の一分野を切り拓いた。生々しい事実、報告文めいた覚書的テーマをカヴァーする浪漫的意図とたくまじさが混然一体となつていぶし銀のやうに磨かれた作品を創造したのである」⁷³と正面から北村の「春聯」を評価した。興味深いのは、長谷川の感想文の中で、川端康成が「春聯」を「傑作」と断言した事に関して、「「春聯」の持つ茫漠たる北満の寂寥、そこにうごめく人間群の切実なる生き方、しかも新しい国を生み出す民族の陣痛に苦しんだ人々の歴史的負担の重量。漂々たる北風に砂飛び、銃声こだまする荒野の描写の中に北村氏の動哭が川端氏の心眼に美はしいパノラマとして映つた事は想像出来る」⁷⁴と解釈し、川端の評価を認めた。

一方、川端の評価は、1941年に「春聯」を目にした時からすでに満洲で言われたものようであるが、正式に世に発表されたのは、川端の執筆による単行本の「序」に掲載された時であろう。その長くない「序」において、川端は北村の「春聯」を「建国十周年の満洲文学のおそらく最高の収穫。(中略)」⁷⁵だと高く評価した。そのうえ、「この作品は北村君のために「春聯」であり、あるひは満洲国の芸文のためにも「春聯」であらう。(中略)今戦ひつつある大きい土地からも幾多の「春聯」がやがて生まれねばならぬのだが、私達の文化の強い友もまた恐ろしい敵も満洲国と漢民族とのほかにはないと思へば、この作品の尊さはさらに加はるわけだ」⁷⁶と述べ、川端自身の戦争協力の姿勢もあらわに示した。「春聯」は満洲国、又は日本政府に対してどれほどの政治的な意味があるかを、北村謙次郎が自覚していないわけではないが、しかし、彼には、戦争に協力するというよりも、むしろ自分のためという個人の要素が大きかったと考えられる。しかし、残念ながら、その作品は川端によって政治的な意味合いを濃厚に植え付けられたため、「建国小説」の類に置かれ、これが本作の戦後における冷遇にもつながっていると思われる。

作品において、川端は作品と作家の一体化という視点から、北村の人柄と小説の構成を合わせて解説している。「一見この作品は色調が破れ矛盾が含まれてゐるが、それを一つにととのへてゐるのは作者の心であつて、つまりこれを書く作者もこの作品と共に一篇の小説であるかのやうに感じられる。(中略)主題は強く、筋はおもしろく、しかもこの種の作品としては類珍らしく心理的であるけれども、その上に尚私をとらへるのは、それらのすべてが作者みづからを離れずに書かれてゐるといふことである」⁷⁷と評価した。小説と作家

⁷² 同上、89頁。

⁷³ 同上、91頁。

⁷⁴ 同上、92頁。

⁷⁵ 注60、1頁。

⁷⁶ 注60、1-2頁。

⁷⁷ 注60、2-3頁。

の人格の一体性については、長谷川も言及したが、川端の主張は長谷川と比べると、主に作家の人格に偏っていた。要するに、作品より、川端は北村謙次郎という人に対してより高い好感度を持っていたと考えられる。

川端の「序」に続き、川端の評価が信頼できないとする書評が現れたことは非常に興味深い。それは1942年5月の『三田文学 春期創作特輯』に掲載された「新刊巡礼」である。無署名のものであるが、その執筆者は、恐らく『三田文学』の編集者ではないかと推測される。同文は、「川端康成は読んで感動したとなるとやたらに褒めたくなるらしい」⁷⁸と指摘して、北條民雄の例を取り上げ、川端の評価は不誠実な時もあるが、「春聯」に関して行った評価は間違っていないとしている。また、「評者は一読、先づその底抜のロマンティズムに驚歎した…作者の高いはゞたきにまでなつてゐる浪漫精神である。あゝ、やつてゐるなどわかる位簡単な構成で押し通しながら、唯一の女性ナターシャをどんどん売込んで行く手腕。絶へず政治といふ厄介な物と関連を持たせながら、決してそれをぞろつぺいには扱つてゐないこと。満洲国建国当時の蘇炳文の叛乱に材を取りながら、所謂きはものの臭味がないのは時間が経つた故もあらうが作者の作家精神に据る処が何より大きいと思われる」⁷⁹と、北村の浪漫精神及び彼の作家精神を高く評価した。そして、結論としては、「この種の文学がこれからどんどん作られねばならない。日本の作家は勇敢であらねばならない」⁸⁰と記した。

また、『三田文学』の書評が東京で発表された一週間後、木崎龍は仲賢礼の筆名で『満洲新聞』に「在満作家論 北村謙次郎の飛躍」を発表した。3回の連載で、北村の「春聯」を論評した。木崎は「春聯」が北村謙次郎の「或る環境」からの飛躍だと述べ、「春聯」はたしかに満洲の生んだ小説のもつともすぐれたものである⁸¹と評価した。そのうえ、彼は、「小説のコツを知るといふことはたしかに小説家たるの資格として小説道の鍛錬につながる問題である（中略）満洲にあつて特にいまの時代に、小説のコツなどといふことはしりぞけられ、趣味論くらゐにかたづけられる傾きはたしかにある」⁸²として、北村文学の正統性を評価した。それは、『三田文学』で評価された北村の作家精神とも一致している。

さらに、ほぼ同じ時期、大連の『満洲評論』において「北村謙次郎作『春聯』について」が発表された。執筆者は、北村の満洲新聞社時代の同僚、吉野治夫である。早い時期に満洲文壇にデビューした吉野は、北村文学の好き理解者であった。この書評で、吉野は「北村氏の作風は概して情緒的傾向の濃い方であり、氏としては珍しくもかなり広い領域を擱んだ此の作も、その傾向を脱してゐない。所謂社会小説的な社会機構の分析、国家建設の歴史的展開、といふやうな要素はなく、一時期の断片を捉へて、数人の人物の心理的現実の中から、ほのぼのと当時を偲ばせるといふ方法がとられてゐる。従つて、現れてくる事

⁷⁸ 注 52。

⁷⁹ 注 52。

⁸⁰ 注 52。

⁸¹ 注 32。

⁸² 注 32。

実に無理がなく、動きも、事件其物の有する冒険性以外はきわめて平板で、漂渺としたものである⁸³と北村の文学スタイルを伝え、「北村氏の『春聯』は、特殊の事件を取扱ひながら、やはり、どこことなく満洲らしい色と香をにちませてゐる。文字どほり、どこなくといふ全体感で特に具体的に指摘することは、困難だが、現実に永く満洲に居住したものの生活感が自ら情感的に浮かんでくるのは争はれない⁸⁴と、「春聯」に溢れた満洲らしさを評価して、『春聯』は満洲での日系文学史に於ける一つ足跡としていろいろ意味が深い⁸⁵と同小説を日本文壇に位置づけた。吉野は北村の満洲時代の親友であり、その評価は他人より客観的であった。

1942年6月1日には、『日本学芸新聞』に国本直樹の書評が掲載された。国本は北村謙次郎を詩人だと勘違いしているが、「この作品には時代に生きる幾つかの異なつた性格が、矛盾は矛盾なりに、闘争は闘争なりに、溢れるばかりの迫力をもつて描き出されてゐるのである⁸⁶と過度的に評価した。一方、「この中には身をもつて体験したもののみが持つ、悦びや哀しみや憎しみやいたはりの想ひが、少しでも曇らされることなくありのままの姿で現れてゐるのだ⁸⁷という見解は完成でありながら北村文学の特徴を掴んだと考えられる。

『日本学芸新聞』は1935年から1943年まで刊行されたものであり、日本文化人の戦争に協力する姿勢を示したものとして、記憶に留めておく必要があるだろう。

これまで概観してきたものは好意的だが、中にはそうでないものもある。岸山三平の「三つの小説に就いて」⁸⁸である。岸山は、「北村謙次郎の『春聯』は昨年度満洲日々紙上に連載されたのであるが、それをどういふ企画からか小説出版では最も売らん哉主義的色彩の濃厚な新潮社が出版したのは興味あることだ⁸⁹と、この小説の新聞連載と出版事情を鋭く指摘しながら、「それだけ日本のジャーナリズムが満洲文学の価値を認めだしたのだともとれて満洲文学の将来にとって洵同慶に堪へない⁹⁰と、「春聯」の満洲の日本語文学における位置どりを明らかにした。

一方、小説自体に対しては、「この長篇は全くの失敗作である。(中略)何故かといふと長篇の構成が雄大な山脈か海洋のやうに一つの調子で統一されてゐないで、二つの色調が重なり合ひ、そのことは水と油のやうに混ざりきらずに浮き離れてゐるからである⁹¹という感想を述べた上、「一つの作品の中で二つ以上のテーマを追求するといふことは決して不可能ではないが、異なるテーマを構成して一つのものにするには作者の心情や持味や主

⁸³ 注62。

⁸⁴ 注62。

⁸⁵ 注62。

⁸⁶ 国本直樹「北村謙次郎著長篇小説『春聯』、『日本学芸新聞』第132号、1942年6月1日、第8面。

⁸⁷ 同上。

⁸⁸ 注61。

⁸⁹ 注61。

⁹⁰ 注61。

⁹¹ 注61。

観が純粋に一つのものに統一されていなければならない。(中略) かうした冒険を試みることも若い満洲文学の逞しい成長のためには避けてはならぬことであらうし、北村氏を強く責めてこの作品をこき下すことよりも、北村氏を励まして新しい創作の道を歩かせることの方がより大切である」⁹²とこの小説を正面から批判しながら北村の文学に勉める姿勢を評価した。

また、1942年10月1日、上野市三郎も『満洲新聞』において、『春聯』の書評を発表している。この中で彼は、先ず「寛城子の生活を叙した部分はその高度の芸術性からまさに傑作といふべきであるが、惜しむらくは蘇炳文の叛乱を扱った部分が反対に通俗的であるところから、そこに色調の乱れが生じた構成の分裂を余儀なくされてあるといふのであつた」⁹³と、自分の友人の評価を紹介したうえで、「友人の絶讃した寛城子の部分はこの作品には全く不要なのである。(中略) 蘇炳文の叛乱、飛行場における多くの警官の非業の最期、それから生死の境を彷徨する小野浩太郎と中沢警士の言語に絶する苦しみの連続、その二人を救ふために尽す白系露人ピョートル夫妻の献身的行為と下僕のグレゴリーと不具のナターシャのこと以上の経緯を描くだけで充分ではないか。私はそれだけで「春聯」は満洲文学最高の傑作だつた。」⁹⁴と素材主義を中心とする素朴な意見を主張した。

1945年、吉野治夫は『作文』第55号に、再び『春聯』についての書評を書いた。その中で彼は、上述の北村文学に対する評価のほか、北村文学における「春聯」の異色性を強調した。また小説の構成を批判すると同時に、北村の文章の平明さを認め、「彼の文章力の余裕綽々たるを示してゐる。(中略) どことなく、満洲現地らしい匂を嗅がせてゐるのは流石。ただ傑作と称すべきものとは思はれない」⁹⁵と正直に自分の気持ちを述べている。

戦後、「春聯」は殆ど一般に読まれることがなく、文学史的にも問題とされなかった。1991年刊の『朱夏』⁹⁶で、石坂幹将は、「春聯」を「他民族との間に芽生えつつあった人間的触れ合いをテーマとする「愛」の物語」⁹⁷だと読みとり、特にナターシャの存在そのものを「民族間に横たわる「愛」の絆の所在であるか」⁹⁸と強調した。この一点だけでは、戦後の読者の評価を代表させることはできないが、戦時中の書評が触れていなかった「民族間」の問題が、ここで取り上げられたことは、「春聯」に対する現代的な読み方と理解してもよいで

⁹² 同上。

⁹³ 上野市三郎「「春聯」在満作家の創作集に就て」、『満洲新聞』1942年10月1日、第4面。

⁹⁴ 同上。

⁹⁵ 吉野治夫「北村謙次郎作“春聯”読感」、『作文』第55号、1943年12月31日、61頁。

⁹⁶ 「朱夏」、1999-2007年まで田中益三、橋本雄一などを中心に発刊された文学・文化研究誌である。全22号にて停刊。中には植民地文学、特に満洲の文化状況に触れた内容が多いため、満洲の研究者に読まれている。

⁹⁷ 石坂幹将「他民族との触れ合い」、『朱夏』第7巻第12号、1991年11月25日。

⁹⁸ 同上。

あろう。『満洲日日新聞』における「春聯」掲載前の予告記事⁹⁹では、白系ロシア人問題について強調されていたが、戦前の書評の中で、殆ど言及されることがなかった。『満洲日日新聞』の予告に沿った解釈が現れてきたのは、消えてしまった満洲国に対して、あまりにも遅きに失いすぎた感は否めないが。

2007年、不二出版から刊行された『《満洲国》文化細目』において、西原和海が北村の著書解説を担当している。『春聯』について、西原は、「この作品の基調となっているのは、「満洲国」の未来に対する信頼感といったものだろうが、著者の分身と見なしうる兄・銀作の生き方は、また別種の印象を読者にもたらず。弟と違って彼は、「雲水の境涯」を理想とするような男なのである。彼の視線はいつも、例えば、小野に雇われていたロシア人女性の薄幸な運命や、うらぶれた寛城子に生きる底辺の人たちから離れることがない。本篇を単なる「建国文学」と分け隔てている一線もそこにあると言えよう」¹⁰⁰と述べている。

「春聯」が単純に「建国文学」に類されないという西原の評価は、満洲国の文学を一概に黙殺、あるいは否定しようとする傾向の中で、「春聯」を救ったものと見られる。とりわけ登場人物・銀作に対する見解は、満洲国に対する北村の創作姿勢を敏感に感受したものと見えよう。

まとめ

「春聯」は北村謙次郎の満洲時代の唯一の長篇小説である。この小説は、北村が満洲への愛着を語り、日本人に満洲に定着しようと説得する物語として、国策小説という色彩がついている。

しかし、小説の内容においては、作者自身の満洲国に対する認識が必ずしも国策と一致していないため、物語としては部分的な成功と失敗とが交錯し、全体としての構成的な破綻は、一目瞭然である。そのため、諸家の評価は大きく分かれている。しかし、荒々しい大自然、妖精のようなロシア少女、素朴なロシア人農民、性根のすわった中国人、性格の異なる日本人など、それら総てが、北村の思い描く「満洲国」にとって不可欠の存在であった。彼にとっては、広い満洲の大地では、その点々とした、文化も価値観も異なった民族と風景が、「満洲国」だったのである。その意味で、北村の描いた「満洲国」のイメージは、成功していると言っても過言ではないだろう。

一方、建国運動のヒーロー像の創造において、作者自身、積極的に建国イデオロギーと一体化できていないことから、逆に、そこに北村思想の本音の部分垣間見ることできる。また、白系ロシア人のように満洲の風土に合わせて合理的に生活すべきだとする北村の主張は、日本文化に執着する在満日本人に対する批判ともなっている。それは、満洲国

⁹⁹ 注3。

¹⁰⁰ 西原和海「北村謙次郎・『春聯』、『《満洲国》文化細目』、不二出版、2005年6月20日、223頁。

をよりよくしていくための、彼の「観察」に基づく一つの結論だったとも言えよう。北村は、ある距離を置いて満洲国に向かい、文学者としての批評の眼をもって創作に取り組んでいたと言っているのではないだろうか。こうした問題は、今後の北村謙次郎研究における最重要な課題となってくるに違いない。

「春聯」は、満洲の日本人作家の長篇小説としては、初めて日本内地に進出したものである。そのことからだけでも、この作品は、満洲の日本語文学史において、一席を占めるべきものであろう。

第6章 他者への関心

第5章までは、おおむね時系列に沿って、北村謙次郎の文学作品を取り上げて論評してきた。本章では、北村が1942年から1945年までに発表した作品を中心に、共通するテーマのもと、北村の文学世界をもう一度読み込むことにする。それによって、満洲国末期（日本敗戦前夜）の北村の文学活動を明らかにしていきたい。

本章は3節からなる。第1節は「北村謙次郎文学における日本人女性」というテーマで、彼の作品の中の女性像に注目する。ここでは、北村の渡満以前に描かれた女性イメージと対照しながら、満洲国での創作にポイントを置いて、彼の女性認識を検討していく。第2節では、白系ロシア人をテーマとした北村の「苦杯」を中心に、満洲国に住む白系ロシア人の生活実態と、彼らに対する北村の関心の有り様を検討してみる。第3節では、1941年3月に満洲国弘報処から発表された「芸文指導要綱」以降の満洲文壇の状況を背景に、北村の文学活動を見ていく。「文化統制」という現実を前に、北村は「開拓民」に関心を注ぐようになった。そこで彼は、満洲国政府の要請にそぐわない立場を露呈する。開拓民の労働者としての人間像、そして、彼らと大自然との融合の様子を、北村は語り継ぐのである。

このように本章では、「女性」、「白系ロシア人」、「開拓民」などといった、北村にとっての、いわば「他者」に対する関心を、ここでまとめて検証し、彼の文学の特性を明らかにしておきたいと考える。そこから窺われる、大自然に融合した人間に対する愛情というものは、北村文学の成熟の表れでもあるが、それはまた、彼の創作の根源と言えるものでもあった。

第1節 北村謙次郎文学における日本人女性

——満洲国に渡ることを境に

北村謙次郎の小説には、多くの女性が登場している。その様々な女性像については、「かかる女性の取扱方に北村氏に一流のフェミニスト、女性愛好家らしい気分が浸み出している。北村氏の女性描写に就いて、彼の文学作品を個々に分析して観察すると、興味あるテーマが引き出されるのである。作家論を試みる場合、その作家の女性描写は軽視できないと思ふ」¹と、同じく満洲で文学活動に従事していた作家、長谷川濬が語ったことがある。

では、北村はどのような女性を描いたのであろうか。また、満洲国に渡ることによって、その女性像はいかなる変容を遂げたのであろうか。本節は北村の作品の中で、日本人女性を主人公として描かれた作品に焦点を当てて検討していきたい。

1. 満洲国に渡る前の女性イメージ

¹ 長谷川濬「「春聯」について」、『作文』第51輯、1941年9月20日、91頁。

北村が満洲国に渡る前の創作のうち、その女性描写で注目されるものとしては、「ノスタルヂア鈔」、「すなむすめ」、「胭脂（ニコティン）」、「茱萸」、「奴婢」などがある。これらの作品については、前章までの中ですでに触れてきているのだが、ここでは、その女性のイメージに着目して論じてみる。

「ノスタルヂア鈔」は、1930年9月の『文芸プランニング』創刊号に発表された。永遠に止まらない時計の発明に取り組みながら、一方で小説も書いている「私」が、海の向こうで暮らしている日本人女性読者 X から手紙を受け取ったところから物語は動き出す。「私」のこの女性に対する思いが徐々に募っていく。

この小説に登場する女性は名前を持たず、単なる記号の「X」で表記されている。その上、Xは真正面から描かれることがなく、ただ、手紙や新聞記事、会話などを通して現れてくるに過ぎない。

その手紙からは、長年にわたってドイツ領植民地で生活しているため、母語を忘れかけた彼女の悲しみが伝わってくる。そして、新聞には、「彼女はドイツ人と結婚して幸せな生活を送つたり、下人の日本人男性と浮気して離婚したり、子供を失つたりした不幸の女である」と紹介されている。そのような彼女に同情した「私」は、「今日から私はXを恋人にしよう」²と考え、そこから二人の幻想的な恋物語が展開されていく。

この小説で北村は、日本人としてのアイデンティティを失った女性を通して、自らのノスタルジ的な感傷を訴えた。東京にいながら大連を思う北村は、常に海の向こうに郷愁を感じていた。つまり、「ノスタルヂア鈔」でのXは北村の郷愁の代弁者である。彼女は「私」の幻想の中に生まれた、謎めいた存在として描かれている。そして、このようなXは、作中、「可憐」、「繊細」、「結婚生活うまくなく」、「子供を失つた」、「不幸」、「外国と関わつた」というふうに「私」の視点からのみ具象化され、北村文学における女性像の原点となっている。

ファンタジーふうな「ノスタルヂア鈔」の後に続くのは、「すなむすめ」である。この小説は1931年3月に『文芸プランニング』第4号に発表され、海岸地方に旅宿した一青年の奇怪な体験をテーマとしたものである。彼の見るところ聞くと、いずれも現実と幻想の重なりとして現れ、物語の二重構成を示している。そして、登場する女性も現実の少女と幻想の女とに分かれている。

現実の少女は、19歳の素直そうな少女であるが、「庭さきなどで不図出会ふことがあつても、妙に顔を背向けるやうにして、無論何の挨拶をすることもない」³といった変わったところがある。一方、幻想の女は、「八重子とは似てもつかぬ別の娘で、濃げしやうの、あだな髪かたちの、ぞつとするほど凄艶なうつくしさのある娘であつた」⁴という女性である。ここで北村が描いている女性は、純粹かつ妖艶という二面性をもって現れているが、この

² 同上。

³ 北村謙次郎「すなむすめ」、『文芸プランニング』第5号、1931年3月1日、7頁。

⁴ 同上、11-12頁。

一篇にも幻想的要素が濃く満ちている。

「胭脂（ニコチン）」は、1931年7月の『文芸プランニング』の終刊号に発表された。パイプを求めた挿絵画家が街中で知り合ったモダンガールと同棲した物語である。このモダンガールはニコチンに暗喩され、「私」が離れたくても離れられない存在となる。

この少女は初登場の場面で、「ボンネの蔭に俯向きがちに伏せられた色の抜けるほど白い顔に夕顔の花のやうなはかないなよやかな美」⁵の持ち主として描かれている。「ボンネ（bonnet）」とは、いわゆるボンネットのこと、ヨーロッパの18世紀から19世紀にかけての帽子の一つである。昭和初期のモダンガールに特徴的であった。

この少女は、幼いころに両親と死別して、横浜の外国人宣教師の家に育てられたという、不幸な境遇にある。彼女に同情して同棲することになった「私」なのだったが、間もなく彼女に「いくら云つて聞かせても洗面所で靴下を洗ふことを止めないし、麵麩を焼かせれば黒焦にしてみまふし（中略）朝から私の愛撫を求めてやまなかつたり一旦おしやべりになるとまるで鸚鵡のやうにつまらないことをしやべくりちらして独りで興がつたり無神経といふよりはむしろ白痴に近いのだから」⁶と、次第に本来の性格を現してくる。そして、二人の生活は、ある日少女の体からニコチンの香りがすることで破綻を迎える。「私」は例のパイプが折れるのを見て、少女が姿を消していったことを予感する。このように、この小説において、北村は初めて女性の性格について描写している。世間知らずの白痴のような美少女であるが、その「不幸」と「外国と関わる」という点で、「ノスタルジア鈔」のXと一脈通じるところがある。

1931年9月18日、満洲事変が勃発した。自分のかつて生活した土地で戦争が起きたという事は、北村にとって、とりわけ大きなショックだったことだろう。これまでの生活上の倦怠感も吹き飛ばされ、代わって、社会と時代に対する不安が拡大した。それは北村の表現活動にも徐々に影響をもたらした。これまで創作に見られたロマンチックな要素が少なくなり、リアリズムへの傾きが顕著になってきたのである。次に取り上げる「茱萸」と「奴婢」は、北村が事変の数年後に執筆した小説である。

「茱萸」は、1935年10月に『日本浪漫派』に発表された。創作の素材を求めて、ある地方を訪ねた「私」は、地元の少女に恋心を覚える。この女性は園子といった。雑貨屋で偶然に「私」の視野に入ったが、「この辺の百姓の娘とも見えない素直さうな顔立ちの娘」⁷であった。「私」は園子への愛情に駆られ、現実か幻想かも分からないまま、ただ「白い前歯の間に、唾で濡れた茱萸の実が赤く光つてゐる」⁸彼女の様子を見つめる。白い歯と赤い茱萸は、園子の唾によって光っている。色と光の官能的に調和する情景は、園子の口に着眼した「私」を通して表現され、青年が女性に求める何ものかを暗示している。つまり、本

⁵ 北村謙次郎「胭脂（ニコチン）」、『文芸プランニング』第7号、1931年7月1日、13頁。

⁶ 注3、12頁。

⁷ 北村謙次郎「茱萸」、『日本浪漫派』第1巻第7号、1935年10月1日、44頁。

⁸ 同上、53頁。

篇に描かれた女性は、穏やかできれいであり、性格も素直なところに特徴がある。その二人の付き合いは「私」の幻想の中に留まっているが、実際に園子が茱萸を食べる時の感じが幻想中の彼女と同じであるため、かえってこの女性に神秘感をもたらしている。ここで北村は、現実と幻想が一体化しているという新たな女性イメージを示してみせたのである。

1936年9月、北村は、「三重吉のこと」⁹の中で自ら創作したい女性像を語った。「わたしの描きたいのも（中略）奥様に叱られる割烹着姿の女中や、亭主別れをする憂愁夫人や、何やかやそういつた可憐な女どもの世界である。（中略）わたしは押しの強い女は御免であつて、自分の美貌を知らないでゐるやうな少し馬鹿げた女」¹⁰を描きたいと述べた。それは、それまで書いてきた女性のイメージのまとめであるとともに、その後の女性イメージについての予告でもある。

1937年1月、北村はその予告を実現した。それは『日本浪漫派』に掲載された「奴婢」である。この30代の付添い婦の娘時代の回想談には、「奥様に叱られる割烹着姿の女中」も「亭主別れをする憂愁夫人」も登場している。とりわけ、女中の方は、「人を恐れるやうに肩を丸め、両手をエプロンの下に結び合わせ、皺の寄つた裾を蹴りながら小走りに用足しに出る娘」¹¹のイメージである。彼女は13歳で母を失った。東京の兄の手引きで女中となり、奥様に叱られる日々を送っている。そんな中、彼女は他の女中から刺激を受けて、女中としての意識が目覚めるようになった。一方、奉公先以外は、姉にお金を取られたり、兄から自殺に誘われたりして、いよいよ世間の辛さを覚えるようになった。

ここに描かれたのは、田舎から出て来た素直な少女であり、大都市に入って「奴婢」に成長してきた人物である。リアリスティックな描写法と、対象から一定の距離を置いた観察眼とは、満洲に渡った後の北村の作風に繋がっていると思われる。「少女」から「女」に変貌するという変化は、北村の中での女性像の成長と言えるだろうか。

この時期の北村の女性描写には、リアリズムの要素が多く取り入れられている。このような、ロマンチズムとリアリズムの混交のような文章は、北村の文学観の変遷を反映している。とりわけ、「奴婢」における女性描写は、田舎娘から「奴婢」になった主人公のプロセスを語り、彼女の心理的な動きを追求していこうとする北村の姿勢を窺わせる。

ここには、渡満以前の北村文学における女性イメージが、幻想的なものから次第に現実的なものへ移行し、客観的な描写から心理的な動きまで考慮されるようになっていった道筋が示されている。それは北村の文章表現の成熟を物語る一方、彼の女性認識の変遷過程を明らかにしている。つまり、満洲国に渡る前の北村文学における女性は、ほとんど「純粹」で「不幸」、外国と関わっていることが特徴となっている。そういった女性イメージは、彼が満洲国に移住することによって確かな変質を見ることとなる。

⁹ 北村謙次郎「三重吉のこと」、『日本浪漫派』第2巻第9号、1936年9月1日。

¹⁰ 同上、87頁。

¹¹ 北村謙次郎「奴婢」、『日本浪漫派』第3巻第3号、1937年1月1日、86頁。

2. 満洲国に渡った後の女性イメージ

1937年、北村は満洲国に渡った。そこで彼は満洲の日本人女性を主人公に、「鶴」、「砧」、「東北」などを創作した。

「鶴」は、彼が満洲国に渡った翌年の1938年に執筆した小説である。ファンタジーふうな物語で全21回にわたって『大新京日報』（のち『満洲新聞』と改題）に連載した。半年後、この小説は『満洲浪漫』の創刊号に再録され、渡満後の北村に高い評価をもたらした。

この小説では、植民地都市に育った日本人少女愛子の半生が描かれている。物語では、愛子の心理的な成長ぶりがポイントとなっていて、彼女のアイデンティティを辿っていく過程が本篇の読みどころとなっている。作者は、それまで描いてきた美少女タイプとは異なり、愛子の容貌については「ずっと昔より生きいきした、頬の色艶も美しい娘になりまざつて行つた」¹²と一言だけですませている。その一方で、少女の心理的な変化については相当量の筆をついやした。北村はまず「意識の滓」という言葉を借りて、人間が生まれるまでの記憶について説いている。愛子の「意識の滓」とは、「広い野原があつて、そこには一筋の川が流れ、対岸には森があり静かな太陽がそれらの上に輝いてゐる。その風景は明らかに自分の眼で眺め、そのとき足もとに咲いてゐた一輪の白い花の記憶さへあるのに、更にそれは豌豆の花で、莖に触れてゐた自分の指にとつぜん豆の蔓が巻きついた」¹³というものである。それは野原に羽を休めている一羽の鶴の周辺の景色に対する観察である。そのような記憶を背負っている愛子は童女のころ、自分が鶴の卵から生まれたと毎日のように聞かされてきた。しかし、その詳細を母に問いただすと、彼女はひどく叱られた。その時の彼女は、「単純に、そんなことを云つてはならぬのだと自ら諦めたといふこともあつたが、もう一つは、世の中には案外自分と同じやうに、不思議な過去を持つ子供たちが多いのではないかといふやうな安心もあつた」¹⁴と述べている。8歳の時、彼女は来客の頭に留まった蛾を黙って見ていたため、再び母に叱られた。その時から、彼女は自分が一人ぼっちだという境遇に気付いた。父が破産して病死した時、彼女は17歳であった。父を失った悲しみと生活の異変を冷静に受け取り、その態度がまた母を怒らせ、愛子が芸者の娘であると暴露するに至らしめた。それを聞いた愛子は気落ちするものの、潜在的な意識においては、自分が鶴の卵から誕生したという伝説を確信するようになった。そして彼女は再び、自分の出身について検証を試みる。今度は、父の昔の下男だった轟という男を見つけ問いただすが、轟は愛子に距離を置いて、ただ「若い男に気を許しなさんな」¹⁵とアドバイスしただけだった。それを聞かなかつた愛子は、結局、若い男に抱かれて、鶴に変身して消えていくのである。

¹² 北村謙次郎「鶴」、『満洲浪漫』創刊号、1938年10月27日、92頁。

¹³ 同上、83頁。

¹⁴ 同上、88頁。

¹⁵ 同上、99頁。

植民地都市の生活環境についてのリアリズム的な描写と、少女に纏わるロマンチックな伝説が、この小説を成り立たせている。この一篇において北村の文学が、渡満以前のロマンチックな創作から、リアリズムを中心とする表現へと、質的な転換期を迎えたことを窺い知るのである。

また、愛子の描写としては、彼女の冷静な性格の形成と心理的な動きを重視しているところから、北村がその女性認識において、表面から内部に目を向けることを重視し始めたということを探することもできるだろう。

次に、1940年に『満洲新聞』に連載された「砧」を見てみよう。この小説は、北村の作品の中で、再録回数が最も多いものと思われる。1940年12月、『日満露在満作家短篇選集』に再録されたほか、1941年2月、『三田文学』にも再掲された。また1944年3月、『満洲国各民族創作選集』第2巻にも収録された。

「砧」は、英子という日本人女性の満洲国での生活ぶりを描いたものである。新京市内のカフェの仕事を辞め、大牟田という男性と別れた英子は、寛城子に住んでいるダンサーのフデ子のところに引っ越してきた。6畳ほどの部屋で二人の生活が始まる。まず、英子の引越し祝いの買い物をすませた二人は、寛城子の生活環境を観察することにした。そこで二人の満洲に対する認識の開きが徐々に明らかになっていく。フデ子は最初から満洲を離れたいと思っているが、それに対して英子は、これまでの安易な生活態度を止めて、裁縫という手仕事で生計を立てようとしている。そのような彼女は、男と付き合っているフデ子や、たまに訪れてくる大牟田との葛藤を抱えながら、寛城子での日々を送っていく。その後、上海に行く予定だったフデ子は牡丹江に向かい、大牟田も他の女と結婚し、寛城子に取り残された英子は、周りの環境に順応しつつ、今の生活がまだまだ続くだろうと漠然と予感する。

主人公の英子は、つまらない男との付き合いで生じた倦怠感から脱出し、寛城子で新しい生活を立てようと奮起している。それは大牟田の来訪の時、彼女の「あんたと腐つたやうな生活してた時分に較べれば、随分気持ちりが朗かだわ」¹⁶という言葉からも分かる。裁縫の仕事は、一日中体を動かさずに努めなければならないが、そんな重労働でも英子にはやりがいがあった。英子という女は、過去も男も捨てて、新しい仕事に取り組んでいこうとする強い意志の持ち主であった。このような自我の強いタイプの女性が登場するのは、北村の作品の中では、これが初めてのことである。

一方、彼女と対照的な存在はフデ子である。ダンサーの彼女は、登場そうそう、「上海に行く」と言う。その彼女は勤め先のダンスホールへは行かず、内地に家族を置いてきた日本人男性と遊び暮らし、彼から上海に行く旅費を得ようとしていた。しかし、それももうまくいかず、結局、彼女は新しく知り合った男性の後について、牡丹江のカフェに働きに行くことになる。

本篇でフデ子は、満洲に根を下ろさない日本人女性の典型として、北村に採り上げられ

¹⁶ 北村謙次郎「砧」、『満洲国各民族創作選集 第二巻』、1944年3月30日、創元社、60頁。

ている。その彼女には、作者の批判的な視線が注がれており、英子のしっかりとした生き方とは対照的であった。フデ子は、「このワンピース、こゝで仕立てたのよ。あんたも一着作つたらいゝわ」¹⁷と英子に勧める。それに対して英子は「私は似合わないから駄目、せめて支那服ならどうかと思うけれど」¹⁸と答えており、ここには彼女自身、満洲に暮らしている自覚を持っているという意味合いが含まれている。それは、満洲で生活するなら満洲の人になるべきだとする、北村の長篇小説「春聯」における考え方と一致している。また、フデ子は、裁縫仕事に苦勞する英子向かって、「満洲なんかで暮らすより、どうしてあんな内地へ帰らないの」¹⁹と質問する。その質問に答えなかった英子は、のちに「井戸端で洗濯する少女の、細い手に、杵を小さくしたやうな砧を握り、しきりに布を打ち叩く姿」²⁰を見ながら、「不思議に清冽な情感が、ふと人恋ひしさの思ひを動かした。それは必しも、別れた男への愛着といふやうなものではなかつた。空と、地と、人と——知る限りの男への、仄かな郷愁といったものであつた」²¹とされている。このシーンに描かれたのは、砧の音を聞く英子の、満洲という土地に対する愛着である。つまり、小説のタイトル「砧」とは、満洲という土地を象徴する存在だったのである。

北村は、この小説では、安易な生き方を避け、自力で満洲に根を下ろそうとする日本人女性を描いた。この女性には友人フデ子が新京を去った後も、入院した隣人を見舞ったり、近所の娘たちに裁縫を教えたりしながら、満洲で充実した一人暮らしができるように努力している。

この一篇をもって、北村は一人の日本人女性を通して、満洲の日本人が大陸に定住しようとする姿を明らかにした。それは、北村が雑誌『満洲浪漫』で提唱した理念に通じるものでもあつたし、彼の長篇小説「春聯」のテーマとも繋がっている。自らの文学理念と女性とを、満洲の風土描写のもとに統一してみせたのは、北村の文章の到達点を証すだけでなく、「砧」の英子のイメージ造形も、北村文学における女性描写のピークをなす完成度を保っている。

1942年1月、北村は『芸文』に「東北」という中篇小説を発表した。大連と青島で長く暮らしたとも子という女性が、母と一緒に実家のある東北に帰る話である。松島への船の中で、とも子は自分の身の上を回顧する。

父亡いあと、家貧しく、弟妹を成長させるまで嫁がずに過ごして来た。花を生け、花の色香に精魂をゆだねて、三十二のとも子の頬はつゞましく端麗であつたけれども、すでに娘らしい艶やかさに代わつて、愁ひと哀れの影のみ深い²²。

¹⁷ 同上、44頁。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 同上、56頁。

²⁰ 同上、58頁。

²¹ 北村謙次郎「砧」、『満洲国各民族創作選集 第二巻』、1944年3月30日、創元社、58頁。

²² 北村謙次郎「東北」、『芸文』、1942年1月1日、180頁。

その彼女の今回の東北行きには、一つの目的があった。それは昔の恋人竹雄との再会である。竹雄は彼女が父を失ったところに世話になった叔父の息子である。まだ若いころの二人の恋は、竹雄の両親の反対でかなわなかったが、十年経っても結婚しない息子を心配して、竹雄の両親は再び未婚のとも子に視線を向けた。そのような願いを背負って、とも子は竹雄の家を訪れた。かなわない恋に導かれて、それぞれ異なる生活を送った二人は、この10年ぶりの再会で縁を結ぶことができるだろうかということが一篇の読みどころとなる。

ここで描かれたのは、長年にわたって植民地生活を送った日本人女性である。彼女は家族のために30歳を過ぎても結婚しなかったが、いま再び家族のために、結婚の可能性を求めて日本に戻ってきた。しかし、生け花の師である彼女は、10年間にわたって東北の地方都市で牧場を営んでいる竹雄とは、すでにかげ離れている立場に置かれていた。小説の最後では、「何といふことなく、とも子はふとさつきの堀端の風景を思ひ出し、ふたゝび均窯の盛花を思ひ描いた。しかし、それは少しも、この牛臭い板小屋にふさはしいものに思へなかつた」²³と、若い男女の恋心が歳月に流された虚しさを浮かび上がらせている。

北村の女性イメージは、初期作品に見られる自己意識を持たない美少女から、徐々に大人の女へと変貌している。そして、その変貌は絶えず家庭、社会といった環境に左右されているように見える。例えば、「鶴」の愛子は、周りに言い伝えられた誕生の物語に導かれ、結局鶴に変身して消えていった。「春聯」のナターシャは生活環境によって、言語能力が回復して自分の夢までかなえることができた。反対に「東北」のとも子は、家庭に縛られて結婚できないという運命をたどった。それは、北村の短篇小説シリーズ「或る環境」の中で貫いたテーマ——環境が人に与えた影響とは何かという問題意識とも繋がってくる。

また、これらの作品を探ってみると、北村の女性イメージの形成は、満洲事変を境に、ロマンチズムとリアリズムの二つの手法において濃淡の差が顕著となってくる。ロマンチックで幻想的な描写は、北村文学の初期の特徴といえる。一方、満洲国に渡った後の北村の創作は、リアリズム的な描写を基本とする物語性を示している。その変遷から見ると、北村文学は満洲事変によって創作の方向に変化が生じたことが明白である。

表現技法においては、初期の「ノスタルジア鈔」の幻想的な描写から、やがてはリアリズム的な描写方法も取り入れられ、人物像がいつそう具象化されるようになる。そして、満洲に渡ってからは、彼の満洲認識の深まりに伴い、大陸に生活の根を下ろそうと努める女性像が形をあらわにしてくる。そのイメージは、「春聯」のナターシャになるとなおさら強くなる。物語の前半部分では、ナターシャは幻想的に描かれているが、そのことにかえて、満洲の大地に帰すという、彼女のアンデンティティ形成過程がリアルに描かれる結果となった。それ以降、北村の女性イメージは、リアリズム本位の描写となり、地道に実生活と向きあう英子の登場となるわけである。それは、身をもって満洲の大地を感じ、そ

²³ 同上、194頁。

ここに根を下ろそうとする北村の「満洲ロマン」概念²⁴の主張と全く一致していると思われる。

第2節 北村謙次郎文学における白系ロシア人イメージ

——「苦杯」を中心に——

北村謙次郎は多くの小説を書き残したが、その中で中国人によって翻訳されたものは三点しかない。それらは、自伝「半生之記」²⁵、評論「由『平沙』談到『作家訪日』」²⁶、短篇小説「苦杯」²⁷である。とりわけ「苦杯」は、日本語で発表されると同時に、「酒頌」²⁸というタイトルで翻訳され、中国語雑誌『芸文志』に掲載された。つまり、原作とその翻訳とが同時に活字になったのである。言い換えれば、「苦杯」は発表される前の段階で、すでに中国人作家や編集者に評価されていたのである。では、「苦杯」はどのような小説なのか、なぜ中国人作家に認められることになったのか、その点をこれから検討していく。

1. 北村文学における白系ロシア人

北村が白系ロシア人を自らの創作に取り入れるようになったのは、彼らの生活環境に対する好奇心に由来すると考えられる。1912年、家族とともに大連に渡って以来、北村の生活環境は絶えずロシア的雰囲気から離れなかった。例えば、彼が最初に転校した小学校は、日本橋小学校である。その校舎は、大連のロシア市政時代の政庁街の近くにあったため、幼いころの彼はロシアふうの建物を見ながら成長したのだった。そして、中学時代、北村は友人と一緒にハルビンに旅行した。その時、彼は初めて新京郊外のロシア人町・寛城子のことを知り、興味を抱いたものの、スケジュールの都合で足を運ぶことができなかった。しかし、その後のハルビン滞在は、北村にロシア人を観察する機会を与えた。そのことについては、彼の随筆「独身宿舎」²⁹に記されている。淡い好奇心に溢れた、洗練された一篇である。

1923年、北村は大連を出て東京に向かった。そこで北村の関心は完全に東京のモダニズム文化に移り、白系ロシア人については何も書いていない。そして1937年、北村は満洲国の新京に渡った。翌年、寛城子に住むようになった。そこで白系ロシア人が再び彼の視野に入るようになったのである。

1938年、北村は『満洲行政』に「群盲」という中篇小説を発表した。現在、連載4回分

²⁴ 本論第3章を参照されたい。

²⁵ 北村謙次郎「半生之記」、『芸文志』第3輯、共鳴訳、1940年6月15日。

²⁶ 北村謙次郎「由『平沙』談到『作家訪日』」、『華文大阪毎日』5-50、駱駝生訳、1940年11月15日。

²⁷ 北村謙次郎「苦杯」、『満洲公論』第3巻第2号、1944年2月1日。

²⁸ 北村謙次郎「酒頌」、『芸文志』第1巻第4号、爵青訳、1944年2月1日。

²⁹ 北村謙次郎「独身宿舎」、『文芸プランニング』第7号、1931年7月1日。

のうち後半の 2 回分しか読むことができないため、小説の全体像は判明しない。しかし、この 2 回分から、作品の主人公は、白系ロシア人科学者の娘と結ばれた中国人男性の程という人物であることが分かる。程は映画製作の仕事をしていて、「悟空西へ行く」という映画の製作中に失明してしまった。敏感な彼は、両親の言いなりに振る舞う妻に従っていかなければ、今後の人生に不自由を来すと悟り、絶望の淵に立たされる。そのような時、妻のお腹にいる胎児が「人体実験」の対象になると告げられ、そのことに苦しむ。そして、「悟空西へ行く」の試写会が行われた日に、彼は一人で死の道を選んだ。その事実直面し、大きなショックを受けた妻は意識不明のまま出産し、彼女が目覚めた時には、その赤ん坊はもう実験台に送られていた。小説の最後に、生まれて 20 日後の赤ん坊が、実験によって 20 歳にまで成長している様子が描かれ、父親と同じように「寂寥」を覚える悲哀の人になったことが付け加えられている³⁰。この小説は、自殺した程の心理的な動き（寂寥感）を描いているが、作家自らの考えを主人公に押しつけた印象が深い。一方、北村は白系ロシア人の「黒いバラの展覧会」や「人体実験の発明」といったところに着目して、白系ロシア人の生活様相を前面に出している。つまり、この一篇において、北村は外部からの観察を通して、ロシア人の生活様相を描いたものの、作中の登場人物の心理の面までには迫っていけなかった。

1940 年に発表された「十六号の娘」³¹は、自分の少年時代を材料に創作した短篇小説シリーズ「或る環境」の中の一編である。これは、先に述べた「独身宿舎」と同じ素材を扱っているが、内容的にはより充実しているように思われる。北村の 17 歳の時のハルビン旅行中の見聞であるが、白系ロシア人の生活の様子を現地の日本人と対照しながら、植民地育ちの少年の眼で描き出し、興味深い小説となっている。

1941 年、北村は長篇小説「春聯」を『満洲日日新聞』に連載し始めた。その小説の舞台は北村が当時、居住していた寛城子である。そこは昔の東清鉄道の附属地として、街の様子や人々の生活ぶりなど、全てがロシア文化に染められていた。そのような環境で暮らしている北村は、この長篇に、新京の白系ロシア人の生活像を写し出した。そこには、ロシア人の子供の天使のような存在がある一方、惨めな金銭主義者のロシア人の大人の姿も現れる。そして、この小説の中で最も重要な役割を果たすのは、ナターシャという名の若いロシア人女性である。満洲の大地に深く結びついた存在として描かれてはいるが、彼女の行動からは、あくまでも幻想めいたイメージを覚える。この小説では、観察の対象となった白系ロシア人が様々な様子で描写されているが、なかでもナターシャの存在は、理想化されてしまい、通常のロシア人に対する描写というより、むしろ北村によって作られたイメージといった方が適切だろう。作中、白系ロシア人の満洲に定着する生活ぶりを讃え、在満日本人の落ち着きのない生活態度を批判しているが、ロシア人に対しては客観的な観

³⁰ 本篇前半の 2 回分を読むことができないので、その「人体実験」がどういうものであったのか、論者にはよく理解できない。

³¹ 北村謙次郎「十六号の娘」、『新天地』第 20 巻第 7 号、1940 年 7 月 1 日。

察も心理的な描写もあり、物語としての一貫性も整っているため、それまでに書かれた「群盲」や「十六号の娘」と比べると、完成度においてかなり優れている。もし1944年の「苦杯」がなければ、「春聯」は北村の書いた「白系ロシア人もの」の中で最も優れたものとなっていたかもしれない。

2. 「苦杯」

2.1 「苦杯」の内容

「苦杯」は、「北鉄譲渡」を経験した、老いたる白系ロシア人の追憶を中心とした物語である。舞台は満洲東部のポグラニーチナヤ（綏芬河）である。主人公カズロフスキーは若いころ、北満鉄道（東清鉄道）の開通に伴い、満洲に移住してきた人物である。彼は北鉄（北満鉄道）の長官の知遇を得て葡萄酒を醸造するようになったが、30年間の努力の末、ようやく純正な葡萄酒を作ることができるようになった。

そして1935年、老境に入るカズロフスキーは複雑な心境で北鉄譲渡の日を迎えた。それを境に、彼の生活は一変した。北鉄譲渡によって帰国せざるを得ないロシア人が多く、カズロフスキーの友人イワンもその中に加わっている。イワンは、カズロフスキーの葡萄酒を販売する窓口であり、彼の葡萄酒の味をよく知っている鑑賞家でもあった。そのような親友を失ったカズロフスキーはますます寂しくなった。やがて、戦争が拡大し、ワインも統制されるようになり、カズロフスキーの葡萄酒も闇商売でないと販売できなくなる。

しかし、カズロフスキーは闇商売を「酒の神様への冒瀆」だと考えているため、自身は闇商売に手を出すことがなかった。そのような彼は、葡萄酒の販売のことを心配しながら、自分の北鉄時代の思い出に浸りきりの日々を送っている。

そんなある日、7、8年前に別れたイワンがカズロフスキー宅を訪れる。再会の喜びは何よりだが、イワンはすでに酒に身体を冒され、カズロフスキーの葡萄酒の味を鑑賞できなくなっていた。悲しみの中、二人はイワンの「飲みさへすりや、そして酔ひさへすりやーそれが当世向きなんだよ」³²という呟きとともに飲み続ける。

2.2 「苦杯」の背景

「苦杯」の背景は「北鉄譲渡」という歴史的な事件である。ここでは、『大阪毎日新聞』1935年3月12日の新聞記事を借りて、「北満鉄道」の由来を紹介してみる。

北満鉄道の歴史は古い、その昔東清鉄道といった当時から東支、北満と二度も名を改め、その間露国は帝政からソヴィエトに、満洲は清国から民国に、さらに満洲国に

³² 注27、143頁。

と幾変遷した、今北鉄の歴史を見るに一八九六年すなはち日清戦争直後李鴻章、ロバノフ密約(露支攻守同盟)の第四条によって露国はシベリア鉄道延長線の支那領土敷設権を獲得し、一九〇二年には満洲里-ポグラニーチナヤ間、ハルビン-大連-旅順間その他支線を加えて延長約二五七〇キロに列車を通じなほ森林、鉱山、附属地その他沿線にあらゆる利権を附随せしめて満洲経営の野望を着着実現したが、日露戦争の結果露国の勢力は北満に退却し、長春(今の新京)以南の線はわが南満洲鉄道となつた³³。

『満洲国史』には北鉄の建設について詳しく記されているが、その内容は特に興味深く、「北満鉄道の沿革は、すなわちロシア帝政時代以来の東方侵略の根幹を意味するものである。(中略)この鉄道の敷設によって、満洲の死命を制するに至った」³⁴と書かれている。つまり、北満鉄道は、日本の満洲支配にとっても極めて重要な存在であった。

とりわけ、ロシア革命の後、北鉄の利権を獲得しようとする日本の動きに対して、ソ連は共産党幹部を北満に派遣したりして、両者の衝突が激化した。1933年、それに耐えられなくなったソ連は北鉄の譲渡を提議した。それから1年10カ月かかった交渉の後、日ソ両国は調印するに至る。

交渉の成立によってソ連は満洲から徹退することになるが、日本にとって、「北鉄接收の政治的意義として最も重大なことは、ソ連邦が多年にわたり北鉄を基点として遂行してきた、いわゆる対満赤化工作により、北満の治安並びに経済建設が障害されていた癌を一応取り除くことができたことである」³⁵。

2.3 「苦杯」の登場人物

小説「苦杯」には、正面から登場する人物は、カズロフスキーとイワンの二人しかいない。すでに述べたように、カズロフスキーは本篇の主人公で、30年にわたって葡萄酒を醸造する自営業者である。北満鉄道ができたころすでに満洲に移住してきていた彼の、北鉄譲渡の日を迎えた時の心情は以下のようなものであった。

北鉄譲渡の記念行事を見守るカズロフスキーの胸中には、新しい夜明けのよろこびとともに一種言ひやうのない悲傷の思ひが渦巻いて、われながら矛盾し複雑した感情をもてあます気持であつた³⁶。

³³ 「北鉄譲渡仮調印 東亜の禍根除かる 交渉開始以来一年十ヶ月目」、『大阪毎日新聞』1935年3月12日。

³⁴ 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 総論』、満蒙同胞援護会、1970年6月30日、449頁。

³⁵ 同上、458頁。

³⁶ 注27、136頁。

ここに述べられているカズロフスキーの「よろこび」とは、故郷を失ったエミグランドの満洲国に対する期待であるように読み取れる。ロシアと日本の狭間に立たされたカズロフスキーにとって、北鉄譲渡とは、それまでの「エミグランド」としての身分から離され、満洲国国民のマークを突き付けられた大きな事件であった。それにより、母国を失っていた彼が新たに満洲国に対する帰属意識を持ち、その記念行事を期待している様子がこの部分から窺いとれる。その心理的な動きは、北鉄接收時の関東軍の方針と同調している。

宣伝の趣旨は、買収交渉の成立を以て日満蘇間に於ける協調精神の発露に帰著せしめ、互ひに「心地能く」鉄道を接受すべきことを高唱し、交渉成立とともに直に平和を招来するが如き観念を抑圧す。又徒に日満側の勝利なる如く宣伝し、為に日満人就中白系露人に勝利気分を醸成し、蘇連人を不安敵愾の情を誘発せしむるが如きは厳に之を戒む³⁷。

カズロフスキーの、満洲国に対する「夜明け」というような期待は、上記引用に見られる、まさに関東軍が否定する「勝利気分」そのものであったのだろう。作中、北村は、北満鉄道接收の政策面については語る事がなく、ただ、接收後の満洲国の経済情勢を「東洋の戦火が全世界に広まって商売は上つたりになる、税金は上がる、統制は強化されるといふだんどりになつてくると、昔風な商売しか知らぬ爺さんなどはさつそく悲鳴をあげ、どうにもならぬ絶望の淵へ引摺りこまれるやうな暗澹とした気分になりこんでしまつた」³⁸と記すに留まっている。

それは言うまでもなく、カズロフスキーの「言ひやうのない悲傷の思ひ」の理由の一つである。30年かかってやっと出来た葡萄酒は時代の動きによって売れなくなった。つまり、せっかく醸造した葡萄酒を飲んでくれる人がいなくなったのである。それは葡萄酒醸造家にとっては何より寂しいことであろう。

実は、商売を維持していくには、統制品になった葡萄酒を闇取引で流通させればよい。しかし、その手を知っているカズロフスキーは、「闇で売つて利を収めるといふやうな方法は、酒の神様への大へんな冒瀆であるとしか考へられなかつた。酒はあくまで実力だ——爺さんは真剣にさう考へ込んでゐる。べてんだとかいかさまだとかは、金輪際立入ることを許さぬ神聖な境地に住めばこそ初めて芳醇な酒も得られれば、また安心して客に酒を勧めることも出来る。でないなら、酒造りや酒の売手ぐらい恐ろしい商売は世の中にないだらう。でなくても、酒は人を酔はせ、ともすると大きな罪禍の基になることが少なくないのだ。これを救ふのはあくまで真正直で真剣な酒造者の良心と、客に喜んで貰ふことを唯

³⁷ 「北満鉄道接收要綱」、『八田嘉明関係文書』、R9-0401（（国立国会図書館憲政資料室）。麻田雅文『中東鉄道経営史』（名古屋大学出版会、2012年5月）79頁より再引用。

³⁸ 注27、140頁。

一の願ひとする販売人の謙讓でまつたうな心掛け以外にあるものではない³⁹という持論を持っている。彼はほかの葡萄酒製造家が闇商売でやり取りしたと聞いた時に、「他人に儲けを占められるといふ焦躁より先に、酒造業者の良心の無さを憤り嘆く心が切だつた」⁴⁰と述べている。

ここには、カズロフスキーが抱く酒に対する愛着心が描かれている。まず、彼は闇商売が「酒の神様への冒瀆」だと考え、酒の神聖さを強調した。さらに「酒は実力だ」と主張して、酒に対する尊敬心を持たなければ、芳醇な酒を得ることも、また売ることもできないとする持論を展開している。それを逆に解釈すると、酒は人を酔わせるものだから、罪禍の基になる可能性が高い。それゆえ、それらの人を罪禍から救い出すには、醸造業者の良心しかないという強い意志を示していることになる。このように、作者はカズロフスキーの酒に対する信念を描くことによって、初めて、良心的な葡萄酒醸造家という彼の人間像を描きあげた。

一方、小説では、カズロフスキーという、時代の中でしっかり生きる人物をコントラストの対象に立て、イワンの姿を如実に描いている。ここで興味深いのは、小説でのカズロフスキーは殆ど客室の椅子に腰掛けており、沈思に沈思を重ねるイメージが濃厚であるという点である。それは読者に、時間がゆったりと流れていくという「静態」的な歳月感を与える。一方、イワンの小説での初登場は、カズロフスキーとの口喧嘩の場面からである。彼はカズロフスキーが葡萄酒しか知らないと言い、自分には思想があると主張した。いわばイワンは、「静態」のカズロフスキーと対照をなす「動態」の人物だろう。

このイワンは、小説では完全に時代に翻弄された存在である。彼は「根からの赤系ではなく、いざ生活上の必要から表向きだけ赤くなつた赤大根組と称せられる一派であつたが、いざとなると鉄道をやめて新しい職を探すほどの勇氣も出なかつたらしく、多くの仲間と一緒に思いきつて本国へ引上げて行つた」⁴¹という人物である。赤系ではないのに「生活上の必要から表向きだけ赤くなつた」⁴²という一言は、時勢に媚びるイワンの姿勢を示している。

実際には、1935年3月に満洲国に売却された北満鉄道の元社員に対して、接收を指揮した関東軍は、以下のような方針を貫いた⁴³。

1. 蘇連側従業員は全部之を罷免し、買収協定の定る所に従ひ国外に退去せしむ。
2. 満洲国側従業員は現状の儘とし人心の動揺を来さしめざるを主義とす。
3. 前二号に依る不足人員は日人、満人及嚴選せる白系露人（一号罷免者中、蘇国籍を離脱

³⁹ 同上、140頁。

⁴⁰ 同上、140頁。

⁴¹ 同上、136頁。

⁴² 同上、136頁。

⁴³ 『八田嘉明関係文書』、R9-0401、(国立国会図書館憲政資料室)。麻田雅文『中東鉄道経営史』(名古屋大学出版会、2012年5月)131頁より再引用。

せる者を含む)より之を補充す。日本人は本鉄道の国防的重要性に鑑み、全従事員の二割を補充するを目処とす。

4. 日満人の補充は主として国鉄及満鉄の人員を以てす。
5. 路警(警察官)は現在の国鉄路警と一律に処理し、厳選せる白系露人をも採用す。

この方針の第3条に従うならば、イワンはソ連国籍を離脱すれば、そのまま北満鉄道に残ることができたはずである。または北鉄を辞めて、満洲で新しい職を探すこともできたはずである。しかし、彼は、そのどちらの道も選ばなかった。イワンは生活に対する臆病者であったことが分かる。そのような彼は、ソ連に引揚げる仲間たちと一緒にいることによって安心を得るという道を選んだ。商売が出来なくなったとしても、酒に対する信仰を曲げることのないカズロフスキーと全く正反対の人物である。

カズロフスキーはイワンの境遇を心配して、ポグラニーチナヤに配布された『ナ・グラニツツエ』という週刊誌から彼の消息を推測した。この週刊誌には、ソ連に引揚げた元北鉄社員の消息と、彼らからポグラニーチナヤに住む近親者へ宛てた手紙の類まで掲載されている。それによると、引揚げ者らは途中で所持品を全部没収されたため発狂する者や自殺する者、行方不明になったりする者があった。また、ソ連で暮らすことになった人たちも物資不足のため、生活の苦しさに追い込まれた。

そのような背景から、イワンがいかに厳しい境遇に立たされていたかを推測することができる。北村はイワンの引揚げ体験について真正面から描いていないものの、側面的な資料を十分に提供している。つまり、イワン自身が語らないことについては、他の人の言葉や行動を借りて伝えることによって、読者の想像力を一層刺激する効果をもたらしている。と同時に、北鉄譲渡という事件が白系ロシア人にもたらした精神的な変貌も生き生きと表現することができた。

7、8年の放浪生活の後、イワンはカズロフスキーの家に辿り着く。その時の彼は「鬚ぼうぼうの、よれよれの服をまとった」⁴⁴姿であり、カズロフスキーも一見、それが誰だか分らなかった。そのイワンはカズロフスキーの「おまへ、いつたい今まで、どこにどうして暮してたんだ」⁴⁵という問いに対して、「話すよ。話しきれないくらゐ、いろいろなことがあつたんだ。だが、俺には何ももうなくなつてしまつた。話だつて、もう失くしちやつたのだ」⁴⁶と呟く。そして、かつてカズロフスキーの葡萄酒を陶然として飲んだ時の面影もなく、下卑た笑い声で「飲みさへすりや、そして酔ひさへすりや——それが当世向きなんだよ」⁴⁷としか言うことができなかつた。このように、北村は北鉄譲渡という時勢に潰された人間像を描き出しているのである。

⁴⁴ 注27、142頁。

⁴⁵ 同上、142頁。

⁴⁶ 同上、142頁。

⁴⁷ 同上、143頁。

北村が白系ロシア人に抱く親愛感が、この小説においては作品の隅々にまでゆきわたっている。例えば、作者は主人公カズロフスキーのことを「カズロフスキー爺さん」、「ミハイル爺さん」、「爺さん」などと呼んだり、彼が倉庫のワインを飲みつくすのにかかる時間を計算したりする場面など、彼については細部に至るまで筆を尽し、この老人の魅力が前面に出るように工夫している。

3. 「苦杯」の社会的影響

3.1 北村の執筆動機

すでに述べたように、「苦杯」は1944年2月に発表された。では、北村謙次郎はここで、なぜ1935年の北鉄譲渡を取り上げることにしたのだろうか。それは当時の満洲国の文学状況を離れては理解できない。

1944年の満洲国は、すでに2年前に始まった太平洋戦争に参戦し、日本の総力戦に巻き込まれていた。文芸上から見ると、1941年3月、満洲国弘報処によって発表された「文芸指導要綱」には、「国の産業経済の発展に比べ芸文活動の立遅れを指摘し、政府が積極的に乗り出してこれを指導育成せんとするもので、満洲芸文家をして安んじてその道に専念させ、芸文国策に協力せしめる意図をもって各専門家協会の設立を奨励した」⁴⁸と述べられ、作家たちの文筆活動を国策と固く結びつけていた。文芸・文化統制はすでにスタートしていた。北村のみならず、満洲の多くの作家たちは鉱工増産現場、開拓団、勤労奉公隊または関東軍部隊などの現地視察に派遣され、報告文学を書かざるをえなくなっていた。とりわけ1944年ごろ、満洲国の文芸統制はすでに頂点に到り、満洲の作家としては、政府の指導に従わなければ、創作ができなくなっていた。

このような状況は、カズロフスキーの葡萄酒の醸造業に類似している。限られた環境の中、葡萄酒の製造が難しくなった。そして、すでに出来たものに対して、闇商売でなければ売ることができない。それは、酒に信仰を捧げるカズロフスキーにとって何よりの苦痛である。これと同様の苦痛を、北村も感じていたと思われる。すなわち、北村はカズロフスキーの場合に似て、自由に創作ができなくなり、自作の価値をよく知っている友人たちを失う境遇にあった。その口から出せない悲鳴が、カズロフスキーという人物を通して巧みに描き出されている。創作意欲があっても小説を書くことができない。その苦しさは直ちに満洲国の中国人作家たちにも共鳴を及ぼした。

3.2 中国人作家の共感

満洲国の中国人作家は、古丁、爵青、小松、疑遅などをはじめ多くのものたちが、1932

⁴⁸ 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年1月30日、1140頁。

年の満洲事変以降、祖国を失い、自分の意見を自由に発表できなくなる苦しみにあえいでいた。それにも関わらず、満洲国の日本人の文学活動に対抗するため、彼らは苦痛を呑んで創作しつつあった。そのため、彼らの作品は暗いイメージに覆われている。北村はかつて自分が主宰した雑誌『満洲浪漫』において「さきごろ僕らは満人作家の小説集を読み、一概に暗いといつて批評した。明るい民族の声として当然である。しかし、僕らが一旦は死ななければならぬことを云つた。かうして満人作家の作品の暗さは、そのまま僕らにまでのしかかつて来るのである。われわれはその暗さを容認しなければならない」⁴⁹と、彼らの「暗さ」を正当に評価することがあった。そして、北村自身は「死」を通して、満洲の地での新生を得ると提唱した。しかし、それは、1941年にはまだ意気が高かった北村にとっての、あくまでも理想に過ぎなかった。とりわけ「文芸指導要綱」が発表されて以降、北村の執筆量は前年度より大幅に減少し、小説らしいものをほとんど書かなくなった。つまり、「苦杯」は、北村が1941年3月から1944年にわたって創作の自由を完全に失ってしまうまでの間の、日々の憂鬱の積み重なるの結果なのである。そして、その3年間の苦しみが、ようやく中国人作家に認められるようになったのだった。

実際、満洲国の日本人たちの作品が現地の人によって自発的に翻訳された事例は、そう多くない。満洲国を代表する中国語文芸雑誌『芸文志』⁵⁰を見ると、小説は北村の「苦杯」や長谷川濤の「大同大街」、竹内正一の「馬家溝」などが挙げられるくらいである。その意味では「苦杯」は、満洲の日本語文学の歴史の中に特筆されるべき一篇であろう。

それまでは対象に距離を置いた観察者の目で創作してきた北村は、この一篇をもって、従来の創作方法を突破し、執筆者という存在をうまく小説の中に溶け込ませ、社会から落ちぶれた白系ロシア人の心理を生き生きと表現することができた。同じく白系ロシア人を描く竹内正一の創作と比べ、北村の「苦杯」は登場人物が少なく、筋立てもシンプルである。また、竹内の広い視野のもとに展開される白系ロシア人の群像に比べ、北村の方は、一人の人物の心理動態に焦点を当てているため、登場人物の人間性に対する観察と、それに対する深い洞察がその文学の大きな特質となっている。

1944年に書かれたロシア人の引揚げの場面は、翌年の1945年に繰り返された。ただし今回の主役は、満洲から引揚げる日本人たちであった。北村はいかなる思いで、この小説を書いたのだろう。「引揚げ」という事態が、自分たちの身に降りかかってこようとは、予想だにできなかったに違いない。戦後の日本人の満洲からの引揚げという、人類史上における最大規模の人口移動について、北村は沈黙を守った。ただ、戦後の長篇随筆『北辺慕情記』には、「満洲芸文は独り絵画図書などとどまらず、国家壊滅と同時に平家没落の如く土崩瓦壊した。それでよかつたのである」⁵¹と書いている。「それでよかつたのである」と、そ

⁴⁹ 北村謙次郎「探求と観照」、『満洲浪漫』第5輯、1940年11月15日、73頁。

⁵⁰ 『芸文志』、満洲国の新京で発行された、古丁、爵青、小松など満洲の中国人作家を中心とする文芸雑誌である。

⁵¹ 北村謙次郎『北辺慕情記』、大学書房、1960年9月1日、248頁。

の一言こそが、彼としては精いっぱい、良心的な慨嘆だったのだろう。

1950年、北村は、戦争末期に新京で活動していた日本人男性と白系ロシア人の女性との間に生まれた少女を主人公に、彼女の日本引揚げ後の生活を描いた長篇小説『ソルベージの歌』⁵²を書いた。また、彼の次男から、「おやじが酔っぱらった時に、ロシア語を呟いたことがある」という証言も得ている。しかし、北村が戦後、一体どこまでの関心を白系ロシア人に抱いていたのかについては、この一篇の長篇小説から十分に推察することができない。

第3節 開拓民に関する創作

1942年から1945年に日本が敗戦するまで、北村謙次郎の文学活動はもっぱら開拓問題に関わっている。それは、戦争末期の満洲国の情勢に従わざるをえなかったからであるが、他方、北村自身、開拓民（満洲移住農民）や開拓団に個人的な関心を抱いていたからでもあった。本節では北村のそれらの作品を中心に、北村文学の戦争末期の様態を明らかにしていきたい。

1. 開拓地に取材したもの

開拓民をテーマとした創作は、一般に、総じて「開拓文学」と見なされがちである。しかし、いわゆる「開拓文学」とは、「国策文学」の旗を振る日本国内の作家たちによって唱導されたものである。ここでの日本国内の作家たちとは、大陸開拓文芸懇話会⁵³に集った福田清人、島木健作、湯浅克衛などといった作家たちである。彼らの代表作としては『大陸開拓と文学』（福田、1942年）、『満洲紀行』（島木、1940年）、『先駆移民』（湯浅、1939年）などがある。

それらの文学作品は、概して、満洲国の文学者たちには認められなかった。彼らの多くは「開拓文学」に対して冷淡であり、批判的だった。日本からの短期旅行者として、あちこちの開拓団を駆け足で取材するだけの内地作家に何が書けるかという思いが強かったからである。例外的に、島木健作の『満洲紀行』だけが、著者の真摯な執筆姿勢に応じて好意的に迎えられたに過ぎない。

一方、満洲では時局の要請に応じて、文学者の間にも、開拓問題に取り込もうとする機運が高まってきた。1944年、『作文』同人の青木実は、「文芸時評」の中で以下のように述べている。

⁵² 北村謙次郎『ソルベージの歌』、偕成社、1950年2月。

⁵³ 大陸文芸懇話会、1939年3月結成。目的は「大陸開拓に関心を有する文学者が会合して関係当局と緊密なる連絡提携の下に、国家的事業達成の一助に参与し、文章報告の実を挙げることにある」。会員は近藤春雄、福田清人、荒木巍、田村泰次郎、春山行夫、湯浅克衛、伊藤整などがいる。

今日まで日本の作家が開拓地に取材したものも、これを大別すれば、第一は開拓地建設の労苦及びその生立ちを歴史的に記録的に書いたもの、第二は文学者が開拓地を歩いて自己の眼にふれ、耳にし、感じたものを紀行ふうにしたもの、第三には、建設途上に横はる問題に取材したもの、第四は、開拓問題が日本の大きな国策であるところから、これを小説に取り入れて作品の魅力を極立てようとした通俗小説、第五は、開拓地宣伝、或ひは移住奨励小説⁵⁴。(下線は筆者)

ここで青木が「開拓文学」という言葉を使わず、あえて「開拓地に取材したもの」というような言い回しをしている点に注目したい。それは、大陸開拓文藝懇話会の作家たちの「開拓文学」に対する拒絶反応だと見てよいのではあるまいか。とりわけ興味深いのは、文中の「も」(引用文中の二重傍線部)である。青木の文書は、明らかに満洲の作家を中心に論じているのだが、含みとして、日本の作家に対する不満も込められている。この青木の時評によれば、当時、「開拓地に取材した」文学作品が、すでにある程度の蓄積を持っていたこと、それも、在満文学者の仕事に負うところが少なくないことが明らかである。

では、満洲の開拓地に関する在満作家の創作活動は、何時ごろ始まったのだろうか。北村謙次郎の作品歴を見てみると、開拓民に関わる創作は、ほとんど「芸文指導要綱」が発表された後に執筆されたものである。すでに触れたように、「芸文指導要綱」とは、1941年3月、弘報処処長であった武藤富男⁵⁵によって発表された満洲国文芸統制政策の指針である。それによって、これまで活発に活動していた「満洲文話会」の本部が解体され、満洲国の文芸活動を一変させた。

1941年7月26日、満洲国政府は、「国の産業経済の発展に比べ芸文活動の立遅れを指摘し、政府が積極的に乗り出してこれを指導育成せんとするもので、満洲芸文家をして安んじてその道に専念させ、芸文国策に協力せしめる意図をもって各専門家協会の設立を慫慂した」⁵⁶といった方策のもと、満洲文芸家協会を設立した。

その経緯は、文芸家協会委員長の山田清三郎の一文を借りると、「文話会時代の自主的民間芸文組織は、その翼賛的報国的精神を継承しこれが一層の強化を期しつつ、政府の指導下に置かれ、加重する重大時局への即応体制を確立するにいたつたのであつた」⁵⁷。つまり、文話会が満洲文芸家協会に従属することによって、その実体が骨抜きにされ、単なる翼賛団体になってしまったことを、山田は肯定的に評価しているのである。満洲文芸家協会と満洲文話会の関係は、満洲国の文化政策を検討するには極めて重要であるが、ここで深

⁵⁴ 青木実、「今日について(文芸時評)」、『芸文』、1944年1月1日、38頁。

⁵⁵ 武藤富男(1904-98)、東京帝国大学法学部卒業、1939-1943年、満洲国国務院弘報処長に任ずる。

⁵⁶ 注48。

⁵⁷ 山田清三郎「決戦時局に即応する芸文推進の方向」、『芸文』第1巻第1号、1944年1月1日、12頁。

く触れる余地はない。北村個人に即していえば、それまで彼が積極的に参加した文話会が、満洲文芸家協会に変わった。そして、その流れに乗って、彼は山田清三郎や青木実、古丁、爵青、竹内正一らとともに、満洲文芸家協会の委員になったのだ。

2. 北村謙次郎の創作

北村が開拓団（満洲移民）問題をテーマに執筆するようになったのは、満洲文芸家協会に従属されたためである。この時期、北村の創作は殆ど見られなくなり、数篇の文芸評論のほかは、主として開拓団についての報告、あるいは開拓団を訪ねる途中の紀行文などが散見されるに留まっている。

1941年の11月、北村は『女性満洲』に「日本の力強さ」という随筆を発表した。その文章は、彼が3年前に書いた作品を思い起こしながら、現在の気持ちを改めて開陳したものである。3年前の彼は、自分の故郷を日本全土だとした上で、車窓から見た農村で働く農夫たちの姿を、まるで自分の父祖であるかのように愛おしく感じていた。そして、「日本はいま未曾有の時局に遭遇し、僕ら現下に行を享けるものに、殊に大陸に生活を営む青年に課せられた信念の把持、決意の表明に並々ならぬものあるを感ずる」⁵⁸と述べ、時局下の日本を鼓舞し、今が正念場であるとの見解を示した。一方、3年後の彼は、相変わらず非常時の姿を続けている日本のことを、「何といふ美しい持続が見られることか」⁵⁹と感嘆する一方、東京市民の物資配給制度への不満に触れ、ひるがえって、日本農民の素朴で健康な力強さを讃美した。この文章では、日本農民に対する賛美が北村の文章の中で初めて登場する。その後、彼は満洲の開拓団について多くの文章を書き残した。その意味では、「日本の力強さ」という一篇は、彼が満洲の芸文政策に順応し、「開拓地に取材したもの」を創作すると宣言した作品といえるだろう。

1942年8月、北村は「綏中佐渡開拓団私記」という文章を『満洲新聞』に発表した。綏中佐渡開拓団とは、日本政府が渤海の水産業を開発するために、日本内地の漁村を入植させた開拓団⁶⁰である。この連載4回分の随筆の中で、彼は遼東湾に面する綏中佐渡開拓団の性格、生活状態、団員の人間像及び開拓団に絡まる問題を紹介した。それは、内容から見ると、明らかに先の青木実の時評の中の第一、「開拓地建設の労苦及びその生立ちを歴史的に記録的に書いたもの」⁶¹に属するものとなる。

1942年9月、北村は日向伸夫とともに「開拓勤労奉仕隊視察」⁶²に派遣された。その時、北村は1941年の年末に怪我した脚が完治しないまま、新京から出発して、ハルピン、ジャラントン、興安牧場、齊齊哈爾（チチハル）、薩爾図（サルト）特設農場などを回った。その

⁵⁸ 北村謙次郎「日本の力強さ」、『女性満洲』第40巻第10号、1941年11月10日、20頁。

⁵⁹ 同上、22頁。

⁶⁰ 『満洲開拓史』、満洲開拓史刊行会、1966年4月17日、337頁。

⁶¹ 注56。

⁶² 『満洲芸文通信』第1巻第9号、満洲芸文連盟、1942年10月15日、40頁。

体験は、1943年2月、『芸文』に発表された「北辺羈旅小品」に記録されている。それは北村の初めての満洲北部の旅行の報告となる。

興安牧場では、北村は菊池寛が預けている1頭の馬に出会った。ここで彼は「日本の一文学者の手に飼はれた一匹の牝馬が、遠い興安山麓に運ばれて余生を送り、今は可愛い仔馬さへ生んでゐる。僕にはそのやうな馬の運命が興深く思はれたのであつたが、丁氏（牧場長）に云はせれば、さうした事実が流布される場合、牧場の方針が歪められて映ることを恐れるといふのであつた。国家の意思を遂行する関係として設置された以上、このきびしさ以上のきびしさは当然のことであつたらう」⁶³という感想を記した。流布されたくないと言われていることを意図的に書き残す北村の筆つきには、どこかいたずらめいた雰囲気も漂う。

齊齊哈爾天主堂について、北村はスイス人宣教師の日常生活を取り上げた。その宣教師は毎日、日本語の勉強、信者たちへの簡易ラテン語の教授、朝の礼拝、病を得て地方から送還される同僚の看取り、懺悔諮問、授洗といった日課に追われて、満洲北部の寂しさも気候の荒々しさも、殆ど身にしみて感じられなくなったと語っている。

薩爾図（サルト）特設農場では、交通手段のトラックに乗った経験が北村に深い印象を残した。そこはアルカリ地帯のため、土地改良が非常に困難な地であり、そこに来ている勤労奉仕隊は主に四国と九州の農学校の学生たちであった。その学生たちと付き合っていた2日間は、日々の疲労を洗うさわやかな気持であつたと、北村はこの随筆で述べている。その気軽な文体から見て、これは青木実の言う第二、「文学者が開拓地を歩いて自己の眼にふれ、耳にし、感じたものを紀行風に書いたもの」⁶⁴に類すべきだろう。

1943年以降、日満両政府は、緊急食糧増産を図るため、農地の飛躍的造成をはじめ、補充入植、転業開拓民の入植促進などを次々と実行していった⁶⁵。それに応じ、1943年12月、新京では「決戦芸文家大会、全国芸文家会議」が開かれた。そして、「戦時増産体制に即応し、文芸家も鉱工増産、開拓、勤労隊あるいは軍警部隊の現地視察を行い、報道隊活動をいつそう積極的ならしめる方針を決定した」⁶⁶。

具体的な活動例として、1943年5月の『満洲芸文通信』⁶⁷には、「関東軍報道隊報告文学集の編纂」、「興農文学叢書の編纂」、「米英撃滅朗読詩集の編纂」の三つが挙げられている。そこでは題材や取材対象のみならず、執筆者も指名されている。このように、満洲の文化人の活動は完全な戦時統制のもとにあった。北村の開拓団を回るという活動もその一環に組み込まれていたのである。

1943年6月、北村は、「牧場にて」を『建国十周年 慶祝詞華集』（満洲文芸家協会編）に発表した。この随筆は手紙の形式をとり、木山捷平に声をかけた形で展開されている。

⁶³ 北村謙次郎「北辺羈旅小品」、『芸文』第2巻第2号、1943年2月1日、150頁。

⁶⁴ 注56。

⁶⁵ 注48、841頁。

⁶⁶ 同上、1140頁。

⁶⁷ 『満洲芸文通信』、満洲芸文連盟、1943年5月15日、86-87頁。

その前半は、一ヶ月間中国大旅行を行った木山に対して、北村自身がなにも手助けやもてなしができなかったことへの不甲斐なさや詫びる気持ちを綴っている。後半は、興安牧場への旅についての感想である。

僕らが旅をする気持ちの底に、いつも、何らかの意味の人の姿がある。美しくあり、あるひは興味ある人の姿に接しられぬ場合、僕らは何のためにその土地を訪れたかといふことに、時として疑ひをもつことさえある⁶⁸。

北村は、この旅を他から強いられた仕事としてではなく、自発的なものとしてすんなりと受け止めていたようである。手紙からは、北村の木山に対する親愛感が並々ではないことが読み取れる一方、彼の興安牧場に対する親しみの思いも窺える。その穏やかな筆致からは、北村文学一般におけるのんびりした心持ちと、時局に嘯み合わない態度が、依然として変わっていない印象を覚える。

1944年2月、北村は『拓友』に「龍山開拓団にて」を発表した。龍山開拓団は静岡県出身者の集まりで、1941年8月に入植した。団員の半分は製茶業、紡織関係からの転業者で、いわゆる転業開拓民である。この文章で北村は、矢崎という人を例にとって「あのころ問屋を続けていたら、さぞかし闇取引とか何とかで前科の汚名も着なければならぬところだつたでせう。いゝ時に転業してゐたと、嬉しく思つてゐるわけです」⁶⁹と当事者の話を引きながら、「一時は苦しい時があつたに違ひないけれども、いま彼らには何の悔いもなく、明るい希望に満たされた日々を送つてゐる」⁷⁰と述べている。そして最後に、彼らの悩みは、「在満日系の開拓地に対する無知と「開拓民か」といふやうな侮蔑の眼で見られることだ」⁷¹と、彼らの代弁者になって書きとどめた。

同じ誌面には、大町一枝の「鎮守の森」も載っている。同じく龍山開拓団についての報告では、時系列に開拓団の様子を紹介しながら、現地の人との交流を語っている。北村の人情味溢れた記事とはまた別の、この開拓団の生真面目の一面を描いてみせた。

1944年4月1日、北村は『鉱工満洲』に「北の旅」という随筆を発表した。その紀行文において、彼は旅行に関する認識の変化を語っている。関東州の大連で育てられた彼にとって、それまでの旅行といえは、もっぱら大連の海岸、旅順、熱河など満洲の南部に限られていた。そして、それらの共通点として「観光意識」というものが見受けられることが挙げられる。それに対して、満洲北部への旅行は1942年秋から始まった。その初めての北の旅で、彼は興安牧場、扎蘭屯、薩爾図特設農場、安達などを回った。とりわけ薩爾図という土地はアルカリ地帯になっているため、その土地改良に多大の労力が必要とされる。

⁶⁸ 北村謙次郎「牧場にて」、『建国十周年 慶祝詞華集』、満洲文芸家協会編、1943年6月20日、160頁。

⁶⁹ 北村謙次郎「龍山開拓団にて」、『拓友』2月号、満鉄殖産局、17頁。

⁷⁰ 同上、17頁。

⁷¹ 同上、18頁。

北村はそこで日本各地の農業学校から勤労奉仕に來た学生たちに出会い、その彼らの努力ぶりに感心した。その土地を通して彼は、日本内地または満洲南部の旅とは違った魅力を知り、ますます北の旅に興味が湧くようになった。そして、1943年3月、北村は横道河子、牡丹江、綏芬河に出向いた。特に綏芬河では、その付近の森林地帯の大自然の美しさと、この国境の町に漂っている北鉄時代の雰囲気の魅力を感じた。特にソ連領内を肉眼で見た体験は強い印象を残した。数多くの小さな旅の積み重ねを通して、北村は、満洲の北部の魅力は、大自然と産業文化の面のみならず、そこで生活している人の生命感というものであるとするに到る。「満洲に住んでみて、吾々日本人が昔から持ち続けてゐる豊かな生命感を、今までにない強烈さで刺激してくれる場所としては、北をおいて他にないといふことを強調したいだけなのであります」⁷²と述べている。そこから、北村の数カ所の開拓団への訪問が意味するものも明らかになってくる。それは土地に溶け込んだ人間の生命感というべきものであった。

1944年6月、北村は『拓友』に短篇小説「北の人達」を発表した。この小説は、黎作という青年が満洲北部の開拓団を訪ねた時の所見に基づき、「北の魅力」を発見していく物語である。友人の紹介で、開拓団の関係者である大井と石本を訪ねた黎作は、二人の気のおけない態度から彼らの人格的魅力を感じ、黎作の開拓団への旅が始まることになった。チチハルから拉哈までは列車、そこから軽便鉄道とトラック、渡船を利用するという過酷なコースであったが、「脱線承知」の鉄道や、待っていないと遭遇することのできない船のことなどが小説に面白みを加えている。そして、旅の果てに辿り着いたのが十個集団という開拓団である。十個集団とは日本の各地から來た人たちからなる10個の開拓団であり、各団が一度に甘南県の北部に入植し、ダム工事と土地改良に従事することになったという。そこで、黎作は石本たちの仕事ぶりを見て感心した。

また、この小説において、作者の北村は、満洲北部の大自然の内に表れる人間性、その生命感を讃美している。その人間性とは、「差別観など抜きに、こみいつた反射心理などいっさい知らぬ気に、剥き出しと見える生地のみをさらけ出してしかも何らの破綻をも示さない人格」⁷³である。ここから北村の、北満の開拓民の人間性に対する認識が明らかとなる。

1944年7月、北村は短篇小説「雪山」を『満洲公論』に発表した。横道河子営林署の管轄である「二十二キロ作業所」を訪ねた体験に基づくこの作品は、満洲北部の厳しい冬の季節、木材伐採と搬出に従事する人々の生活を紹介したものである。「二十二キロ作業所」とは、横道河子駅から22キロ離れた作業所のことである。職員たちの宿舎、中国人雑貨店、来客用の集会所などがあるが、そこまでたどりつくには1日かかる。そこで2カ月暮らそうとする槇という名の主人公は、まず薪がないという現状にぶつかり、馬と馬糧が山の人にとっていかに大切に気付かされる。機会を待って、彼は獣医らと一緒に20キロ離れた

⁷² 北村謙次郎「北の旅」、『鉦工満洲』第5巻第4号、1944年4月1日。

⁷³ 同上。

営林署直営の現場に同行して、馬の診察を見学した。現場での馬の状況を見回った後、彼らは木材伐採の現場に行った。そこでは、木材の新鮮さと、大自然の静けさに感心する。槇は、出発する前に友人が口にした「山は戦場のやう」⁷⁴という言葉を思い出し、「それは決して血生ぐさいといった感じのものとしてではない。むしろあの雪山の輝かしさをもつて、そして限りない清浄さをもつて、つまり勝利を約束するあの静けさをもつて」⁷⁵と解釈したのだった。

以降、北村は開拓地に関する創作がなくなり、1944年ごろから1945年8月までは、鶴立に滞在し、開拓史の執筆に専念していた。1944年2月、『芸文』に「鶴立だより」という随筆を発表していて、その一文を書くに至った経緯と、現地での仕事ぶりを伝えた。「開拓文庫」のための図書購入という仕事に従事していることと、周りの開拓民の状況を報告している。同年4月の『芸文』には、「鶴立だより」のほか、「北村拓造」のペンネームで「鶴立県景観」を寄せた。「鶴立だより」の方では、鶴立県の十年間に渡る入植開拓団の歴史を語りながら、その10周年記念式典を祝う気持ちを伝え、新京を離れ、その地で長く生活したいという意欲も記している。「鶴立県景観」は鶴立県の地理的な状況と四季を紹介するとともに、入植民の開拓地開発の状況を述べている。

このように、日本の総力戦に巻き込まれたこの時期の北村は、全ての精力を開拓団に関する報告文学の作成に費やすことを余儀なくされた。1942年から1945年まで、彼が残した作品は、ほとんど開拓団についてのものである。それは題材的にも形式的にも作家としての想像力を発揮するものではないため、北村がせっかく磨いてきた創作の腕を振るえたとは言いがたい。戦後、北村は辛うじて日本に引揚げてきて、外国文学の児童向け翻案によって生計を立てることになった。満洲国に対しての思いは、長篇随筆『北辺慕情記』に纏められ、これが彼の文学生涯の一つの結末となった。その意味では、1942年から1945年までの満洲国の文化政策は、北村の文学に大きな衝撃をもたらし、彼の文学生涯に決定的な挫折を来したと言えるのではあるまいか。

一方、満洲の北部の開拓団などを回ることによって、彼は満洲の大自然と、そこに生きる人間の美しさを発見した。それは北村が、じかに自身の肌で満洲の土地を感じ取り、そこに生活の根を下ろすという彼の「大口マン」理念の現実的な一面だろうか。

まとめ

本章は、北村文学における「他者」について検討した。ここで取り上げた「女性」、「日系ロシア人」と「開拓民」などといった人たちは、いずれも社会的・政治的には弱者層に属する。

「女性」という他者をめぐってのテーマは、北村が自らの自我意識を検討し、表現し、

⁷⁴ 北村謙次郎「雪山」、『満洲公論』第3巻第7号、1944年7月1日、132頁。

⁷⁵ 同上、143頁。

また、自己の文学の道を探るための契機となったものである。作品に即して説明すれば、北村文学最初期の女性イメージは、彼の「ノスタルヂア鈔」に描かれた「郷愁」から来るものであった。その正体知らずの存在は、のちに北村の文学作品（「胭脂（ニコティン）」など）によって徐々に具象化されてきた。とりわけ、満洲事変以後、北村の創作はロマンチズムからリアリズムに転移し、満洲国に渡った後、北村の描く女性たちは明らかに彼の「大陸ロマン」の理念の実践を演じた。しかし、それらの女性たちは、概して観念的な存在であり、作者の理念と幻想を代弁するに留まっている。そこから見ると、北村は女性に対する意識が希薄で、そのため女性の個性をはっきりと書けなかったのではないかと推測される。つまり、作家としては、「女性キャラクター」の創造に失敗した。それゆえ、北村の文学世界には、今一つ魅力が乏しいのではあるまいか。

一方、白系ロシア人を主人公に描いた小説「苦杯」は、北村の異民族に対する関心を示すものだった。カズロフスキー老人の葡萄酒に対する執念と時勢に応じる姿は、まさに北村自身の、また、当時の文化人一般の芸術創造の姿勢に通じるところがある。そのため、この作品は、満洲の中国人作家たちからも共感を得た。北村は白系ロシア人たちの、国を失ったという喪失感に深い同情を寄せた。「苦杯」において北村は、従来の創作方法を突破し、作者という存在を巧みに作中に溶け込ませ、社会から落ちぶれた白系ロシア人の心理を生き生きと表現することができた。

開拓民に対する関心は、満洲の文芸政策に応じ、北村の創作の視野に入ってきたことを、本章で明らかにした。しかし、北村は戦争翼賛の文章を書きながらも、他方では、満洲の厳しい自然環境の中で、大自然と戦う日本人開拓民の人間像と辛抱強さを強調している。

このように、北村は「他者」というテーマによって自らの文学世界を充実させていった。その関心の焦点となる「女性」、「白系ロシア人」や、「開拓民」に対する描写からは、北村のヒューマニズム思想を窺うこともできよう。他方、作品に躍動する、環境（大自然を含む）と融合した人間像は、北村の思想の在りどころを示しながら、彼の文学創作の成熟をも呈示している。

終章

1. 北村謙次郎という人

北村謙次郎は、1904年7月に東京で生まれ、1982年6月に東京で亡くなった。その一生は明治末期から、大正時代を経て、昭和末期にまで渡る。彼は2度の世界大戦を体験しただけではなく、敗戦後の日本の様子も見ていた。すなわち、近代日本の歴史を生身で生きてきた作家だといえる。

米沢藩士族を先祖に持ち、明治の教育を受けた父と、藩士の妻であった祖母に育てられた北村謙次郎は、士族という出自を大切にしてきたと考えられる。その最も顕著な例証となるのは、現在も北村家に保存されている、上杉鷹山から拝領した袴である。

北村謙次郎の父・亨吉は先祖代々の医業を継ぐため、薬師の資格を取ったが、医師として働いたことはなかった。彼は善隣書院で中国語を学び、清からの留学生に日本語を教えたり、日露戦争前後、東京の通信管理局の判任官を務めたりした。1909年ごろ、亨吉は大連に転勤したが、その後まもなく大連逓信局の仕事を辞め、阿片専売事業家であり、満蒙独立運動の支援者でもあった石本鎖太郎のもとで働くようになった。亨吉のそのような波乱の人生は、間違いなく謙次郎に影響をもたらした。

1912年、8歳の北村謙次郎は大連の小学校に転入した。石本鎖太郎を中心とする特殊な生活環境は、彼の孤独感を育てると同時に、中国の下層労働者と接触する機会を与えた。それは、幼い北村に中国人に対する親近感を抱かせ、引いては、他民族との共生感を覚えさせるようになった。それもまた、北村の満洲国での文学活動につながっていると考えられる。

北村謙次郎には、9歳上の異母兄・徳太郎がいる。徳太郎は成績が優秀で、謙次郎が10歳の時、東京帝国大学に進学した。いくら追っても追いつくことができない存在は、謙次郎の成長に大きな影を落とすと考えられる。文筆業という道を選んだのは、一つには、その影から抜け出したいという思いからであったのかもしれない。

北村の多くの創作では、人間と環境との関係が重要なテーマとなっている。とりわけ初期作品にあつては、家庭内の人間関係をめぐっての無力感があらわに表現されている。それは、家庭という環境に縛られることに対する抵抗と理解して間違いないだろう。その意味では、成人後、彼が満洲国に渡ったことは、家族からの束縛、または兄の影からの脱出を図ったことだった。それによって北村は、ようやく一人前になったという心理的な開放感を味わうことができたに違いない。

渡満後の北村は、この土地の多くの日本文化人と付き合いながら、たえず他民族との交流も求めている。その点について、本論では深く論じきっていないが、北村の戦後の著述『北辺慕情記』に記録された満洲国文化の多様な相貌と、それらと何らかの形で関わってきた彼の軌跡とが、何よりの証左となるであろう。

一方、北村の生涯に付いて離れなかったのは、極端なほどの飲酒癖であった。「もし酒をそんなに飲まなければ、もっといい作品をいっぱい書けるのではないか」と、人に言われることもあったそうだ。しかし、彼にとって酒を断つことは、創作の筆を断つことと同然だったのではあるまいか。人に伝え得ない夢幻の世界を、北村は酒を通して見ていたのかもしれない。

生活上の北村謙次郎は、文学に専念したため、家族との交流も多くなく、子供に理解されないところもあった。文筆業を一生の職業としたことは、北村自身のわがままだともいえるが、家族の支えも大きかったことを無視するわけにはいかない。

北村謙次郎は、温厚で、孤独な人であった。人を思う気持ちは深かったが、人に傷つけられるのを恐れて、ほとんど激しい感情を表面に出さなかった。

2. 北村謙次郎の文学

北村謙次郎は社会的・政治的な意識に乏しく、その作品にも社会問題が欠落している。また、人間に対しても一定の距離を置いているため、激しい感情を作中に持ち込むことがなかった。北村の創作を、一言で尽くせば、香りの高い茶のようなものである。腹を膨らませてくれる娯楽本位の「大衆文学」とは異なり、その小説世界は、枯淡な味わいに満ちた上質な茶に通じるところがある。言い換えれば、北村の作品は、一読、心を揺さぶられるということはないかもしれないが、時間をかけて吟味すればするほど、その高雅な香りを味わうことができるのである。このような作家は、日本の文壇・読書界で注目、評価されるのは難しい。作家としてのスタート地点においては、モダニズム文学を志し、実験的な作品を試みた北村だったのだが、その本質的なところでは、古風の作家だったと言えはすまいか。

北村は、文学というものを、自らの人生を記録するものとしている。その記録は1920年代後半から始まった。國学院大学に在学中の文芸雑誌『すなつぼ』で、北村は俳句、詩歌、小説など多岐に亘るジャンルに挑んだが、結局、自分には小説しか進む道がないと気づき、ついに戦後まで詩歌と俳句を発表することはなかった。

その後の個人誌『文芸プランニング』において、北村は文学の存在真義は詩歌にこそあると主張し、同誌に宮沢賢治、黄瀛、木山捷平など、のちに文学史に名を残す詩人たちの作品を多く掲載した。彼自身も、『文芸プランニング』をもって日本文壇にデビューすることになった。その処女作である「ノスタルヂア鈔」は、時間への郷愁を基調に語られる、モダニズム的な要素に満ちたファンタジー（幻想物語）である。以降、自然主義に対する反撥と、モダニズム文学に対する積極的な受け入れが、彼の初期文学の主な特徴となる。

しかし、『文芸プランニング』の刊行は満洲事変の勃発によって中断された。北村の、それまで作品の中で訴えていた生活に対する倦怠感は、「世の中は思うようにいかぬ」という時代的な不安に変わっていく。と同時に、その創作発表の舞台も『作品』、『小説文学』、

『文学クオタリイ』、『草上』などに変わる。生活上の不安感は彼に文学創作の行き詰まりをもたらしたため、1934年3月、北村は大連に遁走してしまう。

北村の大連滞在は1935年7月まで続いた。1年3カ月のその期間、彼は創作の材料探しに大連の町を彷徨したり、『満洲日報社』の『満日年鑑』の編集に携わったり、『満洲日報』の新聞記者になったりしたが、文学活動がうまくいかないまま、憂鬱な日々を過ごすことが多かった。一方、東京では北村の友人である太宰治らが『青い花』を創刊した。北村は「われを失ふ」という随筆を寄稿したが、1934年末、手元に届いた小冊子の貧しさにショックを受け、東京に戻り友人に協力したいと考えるに到った。

1935年7月下旬、満洲日報社の人事異動に不満を覚えた北村は同社を辞し、東京に帰った。その時、太宰治たちの『青い花』の同人はすでに『日本浪漫派』に合流していた。北村も『日本浪漫派』に参加し、同人たちの集りにも脚を運ぶようになった。そこで彼は太宰たちとは思想的にかけ離れていることに気付き、自分だけ取り残されたかのような気持となった。

『日本浪漫派』同人会のための経費は、伊東月草が編纂する『俳諧新辞典』に協力することで捻出することができた。北村は月草に感謝の気持ちを込め、彼が主宰する俳誌『草上』に多くの随筆を寄稿した。そのためか、北村の作品もいくらか俳句めいた風味に染められてきたと長谷川濬に言われた。

その頃の北村の創作には、『日本浪漫派』に発表された「旅情の歌」、「贅沢な囚人」、「茱萸」、「終日」、「奴脾」、「蝶蝶」などがある。「旅情の歌」は自らの死を通して一青年の植民地生活を描いた幻想物語、「贅沢な囚人」は大連の殺人事件を題材に創作した心理的描写を中心とする小説……このような多様な作品は、北村の作風がモダニズム主義からリアリズム主義へと変貌していく過程を物語っている。

先年の大連滞在は、北村をして日本文壇での居場所を失わせる結果を招いた。そこで彼は、またもや満洲に行くことを決意するのである。

1937年、満洲映画協会が設立され、社員の募集に応じたことを機に、北村謙次郎は満洲国に渡った。ほどなく彼は、寛城子という新京郊外に落ち着くことができた。そして、雑誌『満洲浪漫』を創刊することによって、彼の満洲国での文学活動が本格化する。この雑誌を通して、北村はできるだけ広範囲に執筆者を求めることで、満洲文学の多様性を演出することに成功した。それにより、北村は自らの文学理念である「満洲ロマン」の提示を試みた。北村は、かつての自分の日本文化に対する認識を押し殺し、いま新たに自分の身体で満洲の風土を感じ、満洲を愛することを主張・実践しようとした。そして、それを前提として文学活動に従事し、そこで生まれた作品を媒介に満洲の中国人作家と交流することも可能だと信じた。

このように、北村謙次郎は『満洲浪漫』を通して「大陸ロマン」を主張し、『日本浪漫派』に反発しながら、大陸日本人の生き方を提示しようとした。それは同誌に寄稿した他の満洲文化人の多くが主張した「建国ロマン」とは、大きく異にするものであった。そこ

に、北村と、ほかの在満日本人作家たちとの間の、満洲国に対する姿勢の違いを窺うことができるだろう。

1940年11月中旬、『満洲浪漫』は第6輯を以て終幕を閉じた。同誌が創刊されてから僅かな2年2か月の寿命でしかなかったが、北村をはじめとする日本人作家と少数の中国人作家は互いに力を合わせ、満洲文芸界にひとときわ輝く文芸雑誌を送り出した。その後まもなく、満洲国弘報処から「芸文指導要綱」が発表され、満洲国の文化統制が露骨に始まるわけである。その意味では、北村が情熱をもって育てた『満洲浪漫』は、その時勢によって挫折したとも言えるだろう。

さて、北村謙次郎の文学活動は、1941年3月に「芸文指導要綱」が公布されるまでは極めて活発であった。そのことは、『満洲浪漫』の編集、同誌への執筆のみならず、『満洲新聞』や『満洲行政』などへの寄稿も多かったことから窺える。なかでも、1938年から1941年まで各誌に書き続けた短篇連作「或る環境」と、1941年1月から『満洲日日新聞』に連載した長篇小説「春聯」という作品が、北村文学を検討するに当たって特に重要なものと考えられる。

「或る環境」シリーズは12篇からなる連作で、北村の大連での少年時代を題材に採っている。この連作は、冒頭と結びの作品が主人公の「現在」の視点から書かれていて、つまり、その2篇を外枠として、その間に「過去」の物語10篇が挟まれるという形式で構成されている。その冒頭の作品においては、中国文学者との交流に熱心に願う中年作家・忠一が、それも思うように運ばず、満洲国の政治的・文化的環境に苦しむ姿が描かれているが、連作の最後になると、忠一はすでにその苦痛を忘れ、我が子の誕生を近くに迎える今、この満洲を「つひの栖」にしたいと考えるまでに変化している。それは、他民族との相互理解が図られると期待する北村自身そのものの表現であった。しかし、同じ風土で生活しても、同じ文学に対する情熱を持っていても、日本人が満洲を中国人から奪ったという事実と直面しない限り、北村が満洲で求めた文学の「夢」は、ついに実現を見なかったに違いない。そこまで触れていない北村には、文学者としての甘いところがあるといえるし、現実を直視できない彼の弱さも覗いている。彼は現実を甘く見ているし、現実と妥協もしている。従って、北村謙次郎の文学は、人間性または時代状況を鋭く批判するものがなく、狭く自己の世界にとどまっているものと見なさざるをえない。

「或る環境」の後、北村の在満時代の唯一の長篇小説「春聯」が『満洲日日新聞』に連載された。この小説は、その後川端康成の斡旋により新潮社から単行本として刊行され、東宝（東京宝塚劇場）まで上演されたものとなった。この意味では、「春聯」は満洲の日本人作家の、日本内地文壇への初めての進出と見なされることになった。

構成面では、この小説は「現在」という時点から「過去」の事件を回想するという、作者得意のスタイルを踏んでいるが、これを内容の面から換言すれば、それは、満洲国の現在に立って、建国当初の苦勞を味わう物語なのである。そのため、この作品に対しては、読者の評価が大きく分かれている。「部分的には成功しているが、全体の構成には破綻が見

られる」とは、一番よく言われる批評である。しかし、荒々しい大自然、妖精のようなロシア人少女、素朴なロシア人農民、根性のすわった中国人、彼らとは異質の日本人など、それらのすべてが、北村の描く「満洲国」にとっては不可欠の存在であった。彼においては、広い満洲の大地に点々とする、文化も価値観も異なった民族と風景の在りようこそが、「満洲国」の実態そのものだったのである。その意味で、北村の描いた「満洲国」のイメージは、すぐれて成功を見ていると言ってよいのである。

一方、建国運動のヒーロー像の創造において、作者自身、積極的に満洲国イデオロギーと一体化できていないことから、逆に、そこに北村思想の本音の部分垣間見ることできる。また、白系ロシア人のように満洲の風土に合わせて合理的に生活すべきだとする彼の主張は、日本文化に執着する在満日本人に対する批判ともなっている。それは、満洲国をよりよくしていくための、彼の「観察」に基づく一つの結論だったとも言えよう。一定の距離を置いて満洲国に向かいつつ、北村謙次郎は、文学者としての批評の眼をもって創作に取り組んでいたと言えはいいのだろうか。

1941年3月に芸文指導要綱が公布されて以来、満洲国の文芸活動は次第に息苦しくなってくる。北村も創作意欲が衰えたのか、小説の発表は少なくなってきた。メディアに対する統制によって、作品掲載の舞台も限られてきた。もっぱら随筆と評論を書いたり、作品集（『月牙』、『旅心』、『帰心』など）をまとめたりすることで憂さを晴らすしかない。そのような時、彼の視野に入ってきたのが、満洲の女性や白系ロシア人、日本人開拓民（農業移民）のことであった。女性イメージの造形は、北村の文学世界に欠くことのできない要素であり、そこから創作上の新たな模索が仄かに窺えてくる。他方、白系ロシア人は、北村が終始関心を向けていた存在であり、満洲での長年にわたる観察によって、彼はようやく白系ロシア人を、その外面的な行動から心理的な葛藤に到るまで、十全に表現することができるようになった。そこには、彼の白系ロシア人に対する深い親近感と同情が流れている。その関心は戦後まで長く続くこととなる。さらに、開拓民に対する関心は、1942年後半から芽生えたものである。開拓団問題は満洲国の芸文政策に背くテーマではなかったし、北村が語る満洲の大自然、及び、そこで生活している開拓民の人間性への讃美は注目されるどころである。

戦後、北村は、白系ロシア人への関心を失わなかったようだ。1950年、白系ロシア人少女を主人公に『ソルページの歌』という長篇小説を執筆している。その出版をきっかけに、彼は偕成社から世界名作の児童文学の翻案という仕事を依頼され、その種の本を20冊以上も書いている。その印税を暮らしの支えとして、彼は再び文学活動を開始した。その一つが「文話会」の結成である。かつて満洲国で活躍した多くの文学関係者が彼の元に集まった。その機関誌『文話』に、彼は満洲時代についての回想録を連載し、それは1960年9月、『北辺慕情記』という書名で刊行された。その後も彼は種々の雑誌に小説や随筆などを書き続けたが、まとまった仕事としては小説『長崎の茂吉』、『あららぎ物語』の上梓がある。

また、論者の調査によって、北村の戦後の執筆になる、満洲をテーマとした作品が未発

表のまま多数残されていることも明らかとなった。そこから、満洲が北村の生涯を通して、ついに忘れがたい大きな存在であったことが分かる。北村の満洲体験がいかなるものであったのか、将来とも大きな検討課題となるに違いない。

3. 北村謙次郎の生涯とその文学

このように、たびたびの戦争に巻き込まれた北村の一生だったが、彼の満洲に対する思いは、彼の文学と密接に繋がって一貫していた。彼自身は時代の動きに強く逆らうことができず、結局、時代に流されるままの一生であった。その彼の自己存在証明として多量の文学作品は残されたものの、真正面から時代に抗おうとする作品はほとんど見当たらない。それは北村の生得の性格による面もあってのことかと思われるが、時代と向き合わないところに彼の文学の最大の弱点があったと、あえて論者は指摘しておきたい。なぜならば、彼の文学創作の舞台となった満洲国は、傀儡の国であったからである。その不実な土壌に咲いた花はいくら美しく、ついには実が結ぶことができないからである。

しかし、北村は終始「満洲」という存在から逃げることができず、満洲国の壊滅に伴って生まれた喪失感は、彼の後半生に大きな傷痕を残した。その喪失感を埋めるため、彼はあえてのびのびと満洲テーマの物語を書き続けたのかもしれない。

北村謙次郎は、時代に流されながら、自分の信じる道——文学の道を貫いた人である。彼は、時代と真正面から抗おうとしなかったが、創作を通して彼なりに抵抗の姿勢も示したし、時代に妥協した顔も残された。そこで、時代に流されながら、それを抵抗しようとする一人の人間の姿が表れた。北村謙次郎は自己存在の証明として創作活動を行っていたと主張している。それはまさか、彼の存在を証明するために、その文学作品はこの世に残されている。その意味では、北村は自分の望んだことは、彼の没後32年の後、この論文で検証された。

4. 今後の課題

未だ書かれざる「満洲文学史」といったものを想定してみることにしよう。その中で、北村謙次郎という存在は、かなり大きな位置を占めているはずである。彼の主宰した雑誌『満洲浪漫』についても同様のことが言えよう。

しかし、今ある幾多の「日本近代文学史」の中から、彼の名を見つけ出すことは極めて難しい。そのことに論者は一抹の「寂しさ」を感じるのである。北村その人に代わって言えば、ある種の「悔しさ」を覚えさせるのである。そして、「もし彼が1937年に満洲国に渡っていなければどうであったろうか」という虚しい想定さえしたくなってくるのである。

もし仮に北村が渡満せず、日本国内にとどまっていたならば、彼は必ずや日本文壇のど

ここに相応の位置を占めていたのではあるまいか。そのことは、例えば、『日本浪漫派』に発表された彼の小説数篇を読んでみても明らかである。その文学的实力は、同誌の他の同人たちに比べても決して遜色がない。これを逆に言うと、北村謙次郎という作家に力点を置いて、彼の作品の読み直しをすることによって、同誌に対する従来の評価もかなり変わってくるのではあるまいかということである。また、満洲で発表されたまま、今日では「幻の作品」となっている連作短篇小説「或る環境」の完成度を、ここで想起してみてもいい。

そのような「寂しさ」を抱きつつ、以下、本論で論じつくせなかった点、書き足りなかった点、触れることを避けてしまった点など、その幾つかをアトランダムに挙げておくことにしたい。それらの点は、今後、論者自身が背負わなければならない研究課題であるし、この分野の研究者に向けての問題提起となるものである。

- 1) 北村謙次郎の大連における少年時代について、その生活環境について、さらに詳しく具体的に見ておく必要がある。一般の植民地生まれ、植民地育ちに比べ、彼の場合、極めて特異な体験をしているからである。その体験を精査することによって、これまで書かれてこなかった植民地社会の実態も、新たな視角から明るみに出されてくると考える。
- 2) 1934年に北村が渡満した際の自筆日記の内容についても、さらなる検証が必要である。この1年半ほどの大連滞在時、彼は安西冬衛（『垂』の詩人）、吉野治夫（『作文』同人）、大谷健夫（大連図書館員）、大庭武年（探偵小説作家）、金丸精哉（『満洲グラフ』編集長）、富田充（『満洲短歌』同人）をはじめ、数多くの文学者・文化人たちとの交流を深めている。日記の記述を通して、当時の彼らの動向と、この地の文化状況を窺い知ることができるからである。植民地に生きる日本人市民の生活実態も、この日記に活写されている。
- 3) 『満洲浪漫』の主要同人の個別的研究と、その人脈についての考察も本論では十分に展開できていない。そのため、同誌の生活や文学史的役割に関して、多少とも具体性に欠ける恨みを残した。北村と親しかった吉野治夫や長谷川濬、逸見猶吉、檀一雄などに関しては、その必要を特に感じる。人脈面でいえば、これまでは『日本浪漫派』のそればかりが語られがちであったが、例えば、同誌における弘報処人脈の浸透も軽視できない。その弘報処の干渉によって、結局、満洲国の文学活動は息の根を絶たれるからだ。弘報処によって組織された満洲文芸家協会や満洲芸文連盟を、また、弘報処の処長・武藤富男を彼はどのように見ていたのだろうか。
- 4) 「満洲文話会」運動における北村の位置づけ。彼は終生、文話会に執着を持ち続けていた。彼は「文話会精神」というものを大切にしていたのだろう。敗戦後の長春

でも文話会を再生しようとしていたし、戦後の東京においても文話会を組織している。彼は文話会に対して、どのような思いを抱いていたのだろうか。

- 5) 北村文学におけるアイデンティティの問題についても、さらなる検証が求められよう。土地の問題としては、彼は生地（東京）と、移住地（満洲）との間に引き裂かれた存在だった。本論では、彼と東京との関わりを「郷愁」の問題として述べているが、まだ言葉足らずの思いを禁じ得ない。文学の問題としては、彼を育てた東京文壇と、彼が新境地を求めた満洲文壇との間に引き裂かれた作家だった。在満文学者の多くが、満洲と日本文壇と、そのどちらをも意志的に断ち切ったところで活動しているとき、見ようによっては、北村の立場は二股的でもあり、宙吊り状態でもあった。例えば、北村よりも少し若く、彼よりも少し遅れて満洲に育った作家の秋原勝二（『作文』同人）は、「故郷喪失」という文学概念を創出し、誕生地の日本に「郷愁」など持ちえない世代という立場から執筆活動を開始している。北村と秋原を比較的に研究していくことから得られる成果は小さくないはずだ。

満洲における北村謙次郎の文学活動

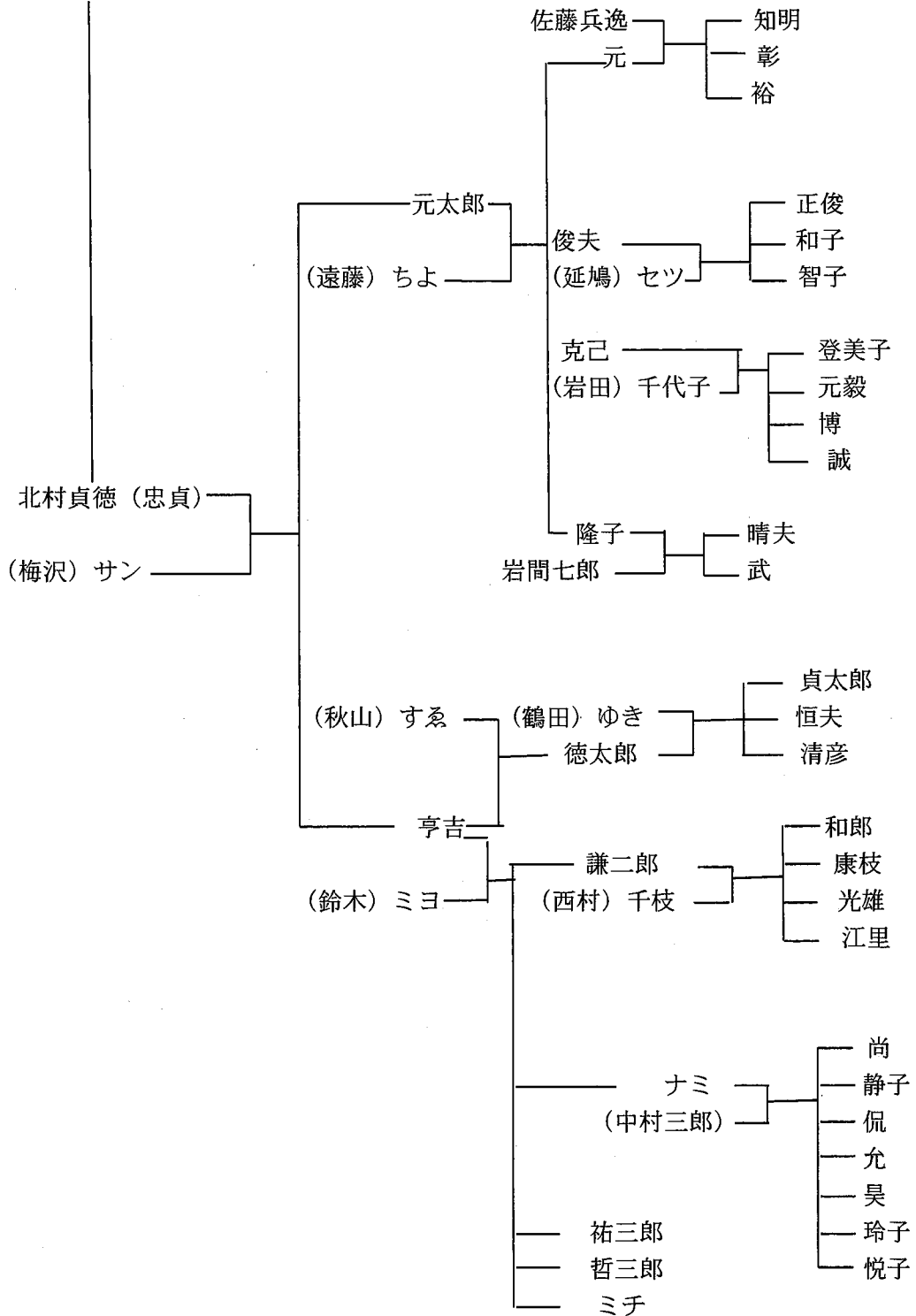
付録

1. 北村家略系図
2. 北村謙次郎年譜
3. 北村謙次郎著作目録
4. 資料紹介
 - (1) 『文芸プランニング』総目次
 - (2) 『満洲浪漫』総目次
 - (3) 『文話』総目次
5. 参考文献

〈注〉上記の 4 のうち、(1) と (3) は論者によって初めて編まれたものである。(2) は、既存のものを参照しつつ、より正確なものを期した。(3) については、以前、『植民地文化研究』11号(2012年7月)に発表したものを改訂した。

北村家略系図

1. 北村茂助 (弥八郎)
2. 茂助 (弥四郎)
3. 茂助通知 (五左衛門)
4. 茂助通陽 (伊太夫)
5. 清右衛門道寛 (五左衛門)
6. 浅五郎貞利
7. 篤太郎忠貞



北村謙次郎年譜

- 1904年（明治37年） 0歳
7月5日、北村家の次男として東京麹町区土手3番町36番地に生まれる。本名、謙二郎。父・北村享吉、母・ミヨ。長男は異母兄の徳太郎（1895年1月3日生まれ。長じては造園家として著名）。
- 北村家は代々米沢藩の士族であったが、祖父の代に上京した。父・享吉は次男なので平民に下り、通信省（東京通信局）の官吏を務めた。母・ミヨは旧甲州街道の駒木野宿（現・八王子市内）の旅籠「ふじや新兵衛」の次女である。
- 1906年（明治39年） 2歳
7月13日、妹・ナミが東京麹町区土手3番町36番地に生まれる。
- 1909年（明治42年） 5歳
父・享吉はこの年、大連の通信管理局に転勤したかと思われる。
- 1910年（明治43年） 6歳
4月、東京市番町尋常小学校附属幼稚園に入園する。
- 1911年（明治44年） 7歳
4月、東京市番町尋常小学校第1学年に入学。
- 1912年（明治45年・大正元年） 8歳
3月25日、東京市麹町区長の仁杵英から「学業ノ優等 品行ノ端正ナルヲ賞ス」を授かる。
- 7月、母、妹、祖母と共に、天草丸で神戸から関東州の大連に渡る。
9月、大連小学校（大連市東公園町にある）に転入（同校は1915年、大連第二尋常小学校と改称）。第二学年の副級長に任命される。
- 1913年（大正2年） 9歳
3月24日、大連第二尋常高等小学校第二学年の修業証書を授与される。
3月24日、大連第二尋常高等小学校の校長井上房吉から「本学年間操行及学業共ニ優等ナルヲ以テ此褒状ヲ附与ス」という「褒状」を授かる。
3月24日、大連第二尋常高等小学校の校長井上房吉から「本学年間特ニ精勤ナルヲ以テ此褒状ヲ附與ス」という「褒状」を授与される。

5月29日、弟・祐三郎が1歳で夭折。

1914年（大正3年） 10歳

3月25日、大連第二尋常高等小学校第三学年修業。

3月25日、大連第二尋常高等小学校の校長倉嶋丑太郎から「本学年ノ成績佳良ナルヲ依リ此ノ褒状ヲ授與ス」という「褒状」を授与される。

1915年（大正4年） 11歳

3月25日、大連第二尋常高等小学校第四学年修業。

3月25日、大連第二尋常高等小学校の校長倉嶋丑太郎から「平素ノ努力著シキニ依リ此褒状ヲ授與ス」という「褒状」を授かる。

8月14日、弟・哲三郎が1歳で夭折。

1916年（大正5年） 12歳

1月27日、満鉄剣道部から「右幼年組七級二進ム」という「証」を授かる。

3月25日、大連第二尋常小学校第五学年修業。

7月29日、大連第二尋常小学校から「第四級水泳証書ヲ授与ス」という「証」を授かる。

妹・ミチ子が関東州・大連にて出生。

1917年（大正6年） 13歳

1月27日、満鉄剣道部から「幼年組右五級二進ム」という「証」を授かる。

3月22日、大連第二尋常小学校を卒業。

4月1日、大連高等小学校に入学。

1918年（大正7年） 14歳

3月23日、大連高等小学校第一学年修業。

4月、1年生として大連中学校に入学。

1920年（大正9年） 16歳

10月6日、大連中学校学友会長服部精四郎から「右図画科特別作品成績優秀ナリ依テ之ヲ賞ス」という「褒状」を授与される。

1921年（大正10年） 17歳

同級生の大庭武年、大町一枝、金丸精哉らと文芸同人雑誌『アンジェラス』を出したのはこの年のことだと推測される。

8月、夏休みを利用して同級生・于清倫とハルピンを訪れ、従兄の案内で東支鉄道クラブ

の音楽会を楽しむなどした。

1922年（大正11年） 18歳

10月6日、大連中学校学友会長服部精四郎から「右国漢科団別競技成績優秀ナリ依テ之ヲ賞ス」という「褒状」を授与される。

1923年（大正12年） 19歳

3月、大連中学校を卒業（同校は同年12月に「大連第一中学校」と改称）

4月、上京して、青山学院英文科高等科に入学。

8月17日、伯父・元太郎が60歳で死去。

9月1日、蒲田の徳太郎の借家で関東大震災に遭遇。

1924年（大正13年） 20歳

2月26日、祖母・サン、大連で死去。享年81歳。

1925年（大正14年） 21歳

5月17日、妹・ミチ子、大連で病死。享年9歳。この年、両親と妹・ナミは大連から東京に帰る。

1926年（昭和元年） 22歳

この年、青山学院英文科高等科を中退したと思われる。

4月、國學院大學国文学科予科に入学したと思われる。

1927年（昭和2年） 23歳

8月、國學院大學の文芸同人雑誌『すなつぼ』の同人となる。筆名「北村舞人」などを用いて、同誌に作品を発表する。

1928年（昭和3年） 24歳

3月、國學院大學国文学科予科を中退。

1929年（昭和4年） 25歳

伊東月草と知りあう。

1930年（昭和5年） 26歳

5月、林芙美子『放浪記』出版祝賀会に出席。その帰途、井伏鱒二、赤松月船、神戸雄一、林芙美子と共に二次会に参加する。場所は新宿駅構内の食堂。

9月、文芸個人誌『文芸プランニング』を創刊する。

1931年（昭和6年） 27歳

4月2日、『文芸プランニング』小会を開く。

4月19日、『文芸プランニング』同人会を催す。同誌を隔月発行にすることに決定。

6月、岩波幸之進と共に木山捷平の自費出版詩集『メクラとチンバ』の出版記念会に出席。場所は新宿の「白十字」で、宇野浩二ほか36名出席。

1932年（昭和7年） 28歳

井伏鱒二の紹介で『作品』、『小説文学』、『文学クオタリイ』などに寄稿しながら、文学活動に従事する。

1933年（昭和8年） 29歳

2月、井伏鱒二宅で太宰治と知りあう。

12月10日、古谷綱武宅で「二十日会」の同人会に出席。今官一、中村地平、伊馬鶴平、久保隆一郎などが出席。

1934年（昭和9年） 30歳

3月31日、大連に着く。聖徳大街の叔母の家に寄宿。当時の住所は、聖徳大街1丁目76である。

7月11-12日、満洲日報社の試験を協和会館で受ける（不合格であった）。

8月24日、満洲日報社に臨時嘱託として入社、『満日年鑑』の編集に携わる。この頃、大連図書館で開かれる文学集會に顔を出す。

12月、『満日年鑑』の編集が完了。その後は『満洲日報』の文芸記者としてラジオ欄を担当、やがて家庭欄の取材を担当することになった。

1935年（昭和10年） 31歳

1月4日、金丸精哉を訪問。大町一枝や石本鑽太郎とも会う。

2月3日、吉野治夫と酒を飲む。

3月4日、金丸精哉の内地行きを見送る。

3月17日、岡山の木山捷平からの便りで、雑誌『日本浪漫派』同人に加入するよう勧められ、承諾の返事を書く。

7月7日、奉天駅で、ヨーロッパ視察に向かう途中の兄・徳太郎に会う。

7月、満洲日報社が満洲日日新聞社に改組されたのを機に、同社を辞し、東京に戻る。

7月20日頃、『俳諧新辞典』の編集（項目執筆など）に着手。

1936年（昭和11年） 32歳

5月29日、新宿で『日本浪漫派』の会合に出席。

6月3日、伊東月草を訪ね、「俳句新聞」のプランについて相談をする。

7月11日、上野の「精養軒」で催された太宰治『晩年』出版記念会に出席した。太宰治、井伏鱒二、今官一、佐藤春夫、太宰治、山岸外史、中村地平など同席。

9月27日、『日本浪漫派』の会合に出席。

10月20-23日、房総を一周する。岩井町高峰鉱泉の「いかづち」旅館に泊まる。

11月10日、『日本浪漫派』の会合に出席。

11月12日、木山捷平を訪ねる。

1937年（昭和12年）

33歳

初夏、満洲国に渡り、新京在住の親戚・佐藤家の世話になる。

8月、大同大街に面した大興ビルの地下室にある青葉グリルで満洲文話会に参加した。

8月下旬、関東軍将校の面接を受けて、満映（満洲映画協会）に入社。

9月、文話会の例会に出席。この頃、満映の製作方針についての記事を新聞に寄稿し、上司にとがめられる。

10月頃、崇智路に引越し、満映の佐々木勝造、北海道の画家山川等と隣人になる。

1938（昭和13年）

34歳

春、新発路の栄ビルに転居。このアパートには、満映社員の松本光庸、佐々木勝造、荒牧芳郎なども住んでいた。

6月下旬、渡満してきた横田文子と初対面する。佐々木勝造も誘って、ダイヤ街の酒場「祇園」で彼女のための歓迎会を開く。

8月、新京市外の寛城子一匡街に移転。

8月、東京に出張。新京に帰ると、満映の所属先が配給部から製作部に変更されていた。

10月27日、『満洲浪漫』を創刊。当夜、林房雄、小林秀雄の来満に合わせ、南広場に近い厚徳福飯店にて、二人の歓迎会を兼ねた『満洲浪漫』出版祝賀会を催す。

1939年（昭和14年）

35歳

3月13日、東京で西村千代と結婚、伊東月草を披露宴に招待。

6月1日、『芸文志』の創刊披露会に参加する。

8月、満日文化協会が催した「驢皮影児」展を児玉公園の国防会館講堂で鑑賞する。

9月23日、「国都飯店」で開かれた大内隆雄の訳著『原野』の出版記念会に参加する。

冬、文話会の要請に応じ、錦県と熱河に旅行する。

1940年（昭和15年）

36歳

4月6日、長男・和郎が新京特別市蓬萊町1-15番地で出生。

夏、満鉄観光課の招聘で来満した浅見淵を寛城子の自宅に迎える。

8月、小説「つひの栖」を『文芸』に発表。この作品は第12回芥川賞候補となった。

8月、小林秀雄などと共に来満中の菊池寛を、新京ヤマトホテルに訪ねる。

12月、筒井俊一と共にハルビン馬家溝に住むバイコフを訪問。

この年、満映を退社。満洲日日新聞社の嘱託記者になる。以後、満洲唯一の専業作家として執筆生活に専念することになる。

1941年（昭和16年）

37歳

1月、長篇小説「春聯」を全95回にわたって『満洲日日新聞』に連載し始める。

2月、逸見猶吉、檀一雄、長谷川濬を自宅に迎える。

4月、来満した川端康成を、厚德福飯店に招待する。

5月、作品集『僻土残歌』（満洲浪漫叢書）を編む。

5月21日、妻の出産のため、日本に帰る。新京発の列車で大連に向かい、23日に鴨緑丸に乗船、神戸から列車で上京し、東京市世田谷区世田谷町4の412の仮寓に滞在する。

5月（?）、満鉄の招待で来満した中谷孝雄を寛城子の自宅に迎える。

6月末（7月初め?）一匡街の家から、同じく寛城子の三輔街21-2の中村アパートに引っ越す。

7月初め、『満洲日日新聞』の筒井俊一記者からの電話で、「春聯」が東京で出版されることになったと知らされる。

7月17日、満洲文芸家協会が設立され、その会員となる。

10月3日、長女・康枝が新京特別市寛城子三輔街21-2で出生。

12月、右脚を骨折。

1942年（昭和17年）

38歳

1月、骨折の治療のため東京に行く。

3月、長篇小説『春聯』（新潮社）出版。

4月18日、国務院講堂で開催された「芸文各協会役員全国大会」に参加する。

4月、劇化された「春聯」が東京宝塚劇場（東宝）で公演される（5月まで）。この頃、稽古舞台に立ちあい中、満日東京支社の加藤猛太郎の紹介で近東綺十郎に初めて会う。

6月、日本文学報国会に参加する。

6月頃、新宿の「聚楽」で歓送会が開かれ、井伏鱒二、亀井勝一郎、太宰治、木山捷平、小田嶽夫など10人ぐらいが集まってくれる。

6月中旬、新京に帰る。

9月、北満を旅する（新京→ハルビン→ジャラントン→チチハル→ザサルト→安達→ハルビン→新京）。ハルビンでは、詩人・岩本修蔵の案内でロシア文学者・上脇進の勤務先を訪ねる。

1943年（昭和18年） 39歳

4月、評論・随筆集『月牙』（吐風書房）出版。

5月、短篇小説集『帰心』（国民画報社）出版。

6月、輯安古墳を訪れる。

8月、三江省鶴立県を訪ねる。

11月10日、父・享吉が亡くなる。享年、76歳。葬儀のため東京に帰る。このとき、木山捷平に会ったかと思われる。

12月15日、次男・光雄が新京特別市寛城子三輔街21-2で出生。

1944年（昭和19年） 40歳

5月、林野総局による造林弘報隊に参加。

12月、共著の絵本『五彩満洲』（満洲富山房）が出る。

1945年（昭和20年） 41歳

年初、木山捷平、榎本捨三、逸見猶吉、菊池康雄と同人誌『飛天』発刊を計画する（これは実現しなかった）。

2月（?）、取材のため三江省鶴立に長期滞在する。

3月、随筆集『旅信』（近沢書房）出版。

4月、鶴立の中華飯店で、甘利栄治、田村夫婦、浜中書店の娘など7、8人と共に『旅信』の出版祝賀会を開く。

7月、三江省鶴立県公署の企画室で「鶴立県開拓十年史」の原稿を書き、東京の毎日新聞社に送る。

7月末 鶴立より新京に戻る。

8月、奉天飛行場を見学。

8月15日 寛城子で白系ロシア人と共に日本敗戦のラジオ放送を聞く。

その後、寛城子から新京市内の親戚・佐藤家に引っ越す。腰掛茶屋や本屋を営むなどしたのち、『東北導報』という国民党政府軍宣伝部が経営する邦字新聞社に勤め、図書収集の仕事に従う。

1946年（昭和21年） 42歳

5月16日、母・ミヨが東京で逝去。

5月18日、逸見猶吉が肺炎で亡くなる。長谷川濬、木山捷平、関合正明などと共に葬式に出る。

8月1日、有志とともに「長春日僑文話会」を結成、最初の会合を東北導報閲覧室にて開く。

- 8月、文話会の望月百合子、八木橋雄次郎、阿南隆、石河潔などと共に、留用者子弟を対象とした児童文庫を開設し、児童向け図書の近刊を計画する。
- 1947年（昭和22年） 43歳
秋、家族と共に壺蘆島、佐世保を経て東京に引揚げる。
- 1948年（昭和23年） 44歳
6月、北海道の根釧地方を訪ねる。弥栄村開拓団の引揚げ後の消息を知るための旅だった。
- 1950年（昭和25年） 46歳
2月、少女小説『ソルベージの歌』（偕成社）発行。その後、1956年までの6年間にわたって、日本と外国の名作や古典を児童向けにリライトした図書を偕成社より多数刊行する。
12月26日、木山捷平を訪問。松坂屋で酒2合飲んで帰る。
- 1951年（昭和26年） 47歳
この年、北海道に単身赴任し、道庁の開拓課に勤める。移民事業に携わったが、約1年後、体調を崩し、辞職して東京に帰る。
12月8日、長女・康枝が杉田春道と結婚。
- 1952年（昭和27年） 48歳
4月20日、次女・江里が出生。
8月10日、新宿の「樽平」で開かれた「木山捷平を激励する会」（河盛好蔵、浅見淵、井伏鱒二が発起人）に出席する。他には亀井勝一郎、外村繁、小田嶽夫、小沼丹、巖谷大四、村上菊一郎、吉岡達夫なども参会。
- 1956年（昭和31年） 52歳
第2次『青い花』の同人になる。
- 1957年（昭和32年） 53歳
7月、第4次『青い花』の同人になる。
9月、満洲からの引揚げ文化人に呼びかけ「文話会」を結成、機関誌『文話』を創刊する。
- 1960年（昭和35年） 56歳
5月、『文話』は第25号をもって終刊。
9月、回想録『北辺慕情記』（大学書房）出版。

- 1964年（昭和39年） 60歳
5月8日、兄・徳太郎が70歳で死去。
- 1966年（昭和41年） 62歳
11月、長篇小説『あららぎ物語』（冬樹社）出版。同書の出版記念会（日付け不明）には横田文子、山岸外史、檀一雄などが出席。
- 1968年（昭和43年） 64歳
5月22日、長男・和郎が斉藤美恵子と結婚。
- 1969年（昭和44年） 65歳
10月16日、次男・光雄が長谷川弥生と結婚。
- 1971年（昭和46年） 67歳
10月19日、国立の喫茶店「紅屋」で催された「伊藤左喜雄を思う座談会」に出席（伊藤は元『日本浪漫派』同人）。出席者は他に、緑川貢、平林英子、若林つやの3人。北村が司会役を務める。
- 1972年（昭和47年） 68歳
4月、長篇小説『長崎の茂吉』（皆美社）出版。
- 1976年（昭和51年） 72歳
1月10日、青山斎場での檀一雄の葬式に出席。中谷孝雄が葬儀委員長を務め、尾崎一雄、保田與重郎、坪井與らも参加した。
- 1980年（昭和55年） 76歳
7月24日、妻・千枝が胃癌で死去、享年71歳。
- 1982年（昭和57年） 78歳
6月30日午前0時56分、東京都田無病院にて食道癌で死去。戒名は白相院喜多謙道居士。同日、長男北村和郎より届出。同年7月5日に東京都保谷市長から送付除籍。墓は聖地公園墓所（埼玉県秩父市山田990番地）にある。

北村謙次郎著作目録

I 新聞・雑誌に発表したもの

1927. 8. 1. 「秋風」(小説・『すなつぼ』・第2号)
1927. 8. 1. 「夜」(詩・『すなつぼ』・第2号)
1927. 9. 20. 「国学院風景」(短歌・『すなつぼ』・第3号)
1927. 9. 20. 「国学院風景」(詩・『すなつぼ』・第3号)
1927. 9. 20. 「旅先で」(詩・『すなつぼ』・第3号)
1927. 9. 20. 「夜ふかく」(詩・『すなつぼ』・第3号)
1927. 10. 20. 「自殺」(小説・『すなつぼ』・第4号)
1927. 10. 20. 「坂」(小説・『すなつぼ』・第4号)
1927. 10. 20. 「枯葉色の煙草」(小説・『すなつぼ』・第4号)
1927. 11. 20. 「初冬風色」(小説・『すなつぼ』・第5号)
1928. 1. 20. 「朝の客」(小説・『すなつぼ』・第6号)
1928. 1. 20. 「寒夜」(詩・『すなつぼ』・第6号)
1928. 1. 20. 「朝の客」(小説・『すなつぼ』・第6号)
1928. 1. 20. 「編集雑記」(随筆・『すなつぼ』・第6号)
1928. 2. 20. 「天象」(短歌・『すなつぼ』・第7号)
1928. 2. 20. 「散歩道」(詩・『すなつぼ』・第7号)
1928. 4. 20. 「描きかけた絵」(小説・『すなつぼ』・第8号)
1930. 2. 17. 「『大庭武年論』の其の一節」(評論・『満洲日報』・朝刊4版)
1930. 9. 1. 「ノスタルチア鈔」(小説・『文芸プランニング』・第1号(9月創刊号))
1930. 9. 1. 「龍膽寺雄」(評論・『文芸プランニング』・第1号(9月創刊号))
1930. 9. 1. 「後記」(随筆・『文芸プランニング』・第1号(9月創刊号))
1930. 10. 1. 「癒えゆく人」(小説・『文芸プランニング』・第2号(10月号)・未見)
1930. 10. 1. 「思想の芸術性」(評論・『文芸プランニング』・第2号(10月号)・未見)
1930. 11. 1. 「貸借」(小説・『文芸プランニング』・第3号(11月号))
1930. 11. 1. 「編輯後記」(随筆・『文芸プランニング』・第3号(11月号))
1931. 1. 1. 「抵抗する作家」(評論・『文芸プランニング』・第4号(1月号))
1931. 1. 1. 「五月の日記」(小説・『文芸プランニング』・第4号(1月号))
1931. 1. 1. 「白いペエジ」(小説・『文芸プランニング』・第4号(1月号))
1931. 1. 1. 「ブライト・マアク」(随筆・『文芸プランニング』・第4号(1月号))
1931. 3. 1. 「すなむすめ」(小説・『文芸プランニング』・第5号(3月号))
1931. 3. 1. 「恢復期の文学」(評論・『文芸プランニング』・第5号(3月号))
1931. 3. 1. 「後記」(随筆・『文芸プランニング』・第5号(3月号))
1931. 3. 5. 「花粉の日 赤松月船の近業(上)」(評論・『満洲日報』・朝刊第3面)

1931. 3. 6. 「花粉の日 赤松月船の近業（下）」（評論・『満洲日報』・朝刊第3面）
1931. 5. 1. 「あとかたのない想像」（小説・『文芸プランング』・第6号（5月号））
1931. 5. 1. 「後記」（随筆・『文芸プランング』・第6号（5月号））
1931. 7. 1. 「胭脂（ニコチン）」（小説・『文芸プランング』・第7号（7月号））
1931. 7. 1. 「独身宿舎」（随筆・『文芸プランング』・第7号（7月号））
1931. 7. 1. 「後記」（随筆・『文芸プランング』・第7号（7月号））
1931. 8. 1. 「眠られぬ夜々」（小説・『作品』・2-8（16号））
1932. 2. 1. 「回想梵太郎山一景」（小説・『作品』・3-2（22号））
1932. 2. 10. 「或日の明暗」（小説・『文学クオタリイ』・第1輯）
1932. 6. 1. 「町役場の花吉爺さん」（小説・『作品』3-6（26号））
1932. 7. 1. 「紫陽花色の嬰兒」（小説・『小説文学』・第4号（7月号））
1932. 8. 1. 「一家族（コムポジション 2）」（小説・『作品』・3-8（28号））
1932. 9. 1. 「俗つれづれ」（小説・『小説文学』・第6号（9月号））
1932. 9. 1. 「喪服の少女」（小説・『作品』・3-9（29号））
1932. 10. 1. 「片足上げて」（随筆・『作品』・3-10（30号））
1932. 11. 1. 「俗つれづれ」（小説・『小説文学』・第7号（11月号））
1932. 12. 25. 「青葉を揺る風」（小説・『小説・エッセイ』・朝日書房）
1933. 3. 1. 「唄・赤つ腹・銭湯-大島波浮港にて-」（随筆・『草上』・6-3）
1933. 7. 1. 「大島風俗集」（随筆・『作品』・4-7（39号））
1933. 7. 1. 「小品帖」（随筆・『草上』・6-7）
1933. 8. 1. 「小品帖」（随筆・『草上』・6-8）
1933. 9. 1. 「菊の宿の客たち」（小説・『草上』・6-9）
1933. 11. 1. 「手の傷の記憶」（小説・『草上』・6-11）
1933. 12. 1. 「人事往来」（随筆・『草上』・6-12）
1934. 1. 1. 「爽かな夫」（小説・『草上』・7-1）
1934. 2. 1. 「登音」（小説・『草上』・7-2）
1934. 4. 1. 「続小さな職業婦人」（小説・『草上』・7-4）
1934. 5. 1. 「惜春日記」（随筆・『草上』・7-5）
1934. 5. 1. 「春服期!!」（随筆・『満蒙』・5月号（169号））
1934. 5. 1. 「支那語序説」（随筆・『協和』・121号）
1934. 7. 1. 「初夏行」（随筆・『草上』・7-7）
1934. 7. 1. 「初夏行」（随筆・『満蒙』・7月号（171号））
1934. 8. 1. 「「通信」ノート」（随筆・『草上』・7-8）
1934. 9. 1. 「記者入用」（随筆・『草上』・7-9）
1934. 10. 1. 「新秋抄」（随筆・『草上』・7-10）
1934. 11. 1. 「鶉」（随筆・『草上』・7-11）
1934. 12. 1. 「われ失ふ」（随筆・『青い花』・創刊号）
1935. 2. 1. 「訪問」（小説・『新天地』・15-2）

1935. 2. 1. 「屍室にて」 (小説・『草上』・8-2)
1935. 6. 1. 「旅情之歌」 (小説・『日本浪漫派』・1-4 (6月号))
1935. 6. 1. 「初夏青々居記」 (小説・『草上』・8-6)
1935. 7. 1. 「夜の花束」 (小説・『新天地』・15-7)
1935. 8. 1. 「盛夏フラグマン」 (随筆・『日本浪漫派』・1-6 (8月号))
1935. 8. 1. 「贅沢な囚人」 (小説・『日本浪漫派』・1-6 (8月号))
1935. 9. 1. 「野いちごさん」 (小説・『草上』・8-9)
1938. 5. 1. 「野いちごさん」 (『満洲映画』(日文版)・2-5 (5月号))
1935. 10. 1. 「茱萸」 (小説・『日本浪漫派』・1-7 (10月号))
1935. 11. 1. 「終日」 (小説・『日本浪漫派』・1-8 (11月号))
1936. 4. 1. 「蝶」 (随筆・『日本浪漫派』・2-4 (4月号))
1936. 5. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-5)
1936. 7. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-7)
1936. 8. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-8)
1936. 9. 1. 「三重吉のこと」 (随筆・『日本浪漫派』・2-7 (9月号))
1936. 9. 1. 「桐の木横町」 (随筆・『日本浪漫派』・2-7 (9月号))
1936. 9. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-9)
1936. 10. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-10)
1936. 11. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-11)
1936. 12. 1. 「室内劇場」 (随筆・『草上』・9-12)
1937. 1. 1. 「奴婢」 (小説・『日本浪漫派』・3-1 (1月号))
1937. 4. 1. 「蝶蝶」 (小説・『日本浪漫派』・3-3 (4月号))
1937. 5. 1. 「愁情小記」 (小説・『日本浪漫派』・3-4 (5月号))
1937. 9. 1. 「花葩」 (小説・『新天地』・17-9)
1938. 1. 1. 「映画的人生」 (評論・『満洲映画』(日文版)・2-1)
1938. 4. 1. 「土地の彫像」 (小説・『観光東亜』・5-4 (4月号))
1938. 4. 1. 「批評について」 (評論・『満鮮』(日文版)・12-127 (4月号))
1938. 4. 30. 「鶴」 (新聞小説連載・『大新京日報』・全21回)
1938. 10. 27. 「鶴」 (小説・『満洲浪漫』第1輯・P83-111)
1942. 3. 25. 「鶴」 (小説・『満洲短篇小説集』・満洲有斐閣)
1938. 6. 1. 「小品集」 (小説・『新天地』・18-6)
1938. 8. 1. 「ファースト・シーン」 (随筆・『満洲映画』(日文版)・2-7 (8月号))
1938. 8. 15. 「漁書余談」 (随筆・『新京図書館月報』・第25号)
1938. 9. 22. 「鑑賞録①」 (評論・『満洲日日新聞』・夕刊第4面)
1938. 9. 24. 「鑑賞録④」 (評論・『満洲日日新聞』・夕刊第4面)
1938. 9. 27. 「鑑賞録⑤」 (評論・『満洲日日新聞』・夕刊第4面)
1938. 9. 29. 「鑑賞録⑥」 (評論・『満洲日日新聞』・夕刊第4面)
1938. 10. 1. 「群盲」 (小説・『満洲行政』・5-10 (10月号))

1938. 10. 27. 「跋」（抜文（連署）・『満洲浪漫』第1輯）
1938. 11. 1. 「群盲」（小説・『満洲行政』・5-11（11月号））
1938. 11. 1. 「迷宮」（小説・『新天地』・18-11）
1938. 11. 17. 「初霜物語（一）」（小説・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 1. 1. 「満洲の女」（随筆・『新天地』・19-1（1月号））
1939. 1. 13. 「青い雪（上）」（小説・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 1. 14. 「青い雪（下）」（小説・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 1. 27. 「小説の個性——竹内正一著「氷花」など」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 1. 28. 「個性の探求——批評材料の貧困」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 2. 1. 「小説の逞しさ——今村栄治の作品」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 2. 1. 「天守」（小説・『満洲行政』・6-2（2月号））
1939. 2. 2. 「試練と反省——横田文子と三宅豊子の作品」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 2. 3. 「無表情の文学——在満作家への抗議」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 3. 10. 「時評的詩と真実」（評論・『満洲浪漫』・第2輯）
1939. 3. 20. 「氷花の饗」（書評・『作文』・第36号）
1939. 3. 31. 「季節の旅情」（小説・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 5. 1. 「餓鬼」（小説・『満洲行政』・6-5（5月号））
1939. 5. 8. 「満洲文化と夢 文学者と夢（上）」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1939. 5. 9. 「満洲文化と夢 文学者と夢（下）」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1939. 6. 1. 「愛は輝く」（小説・『警友』（日文版）・3-1（21号））
1939. 6. 1. 「鼎座」（小説・『新天地』・19-6）
1939. 6. 15. 「『満洲浪漫』について」（随筆・『新京図書館月報』・第35号）
1939. 7. 23. 「或る環境」（小説・『満洲浪漫』・第3輯）
1939. 7. 23. 「後書」（評論・『満洲浪漫』・第3輯）
1939. 8. 1. 「色紙」（随筆・『満洲グラフ』・7-8（61号））
1939. 8. 1. 「文芸時評」（評論・『満洲行政』・6-8（8月号））
1939. 8. 29. 「山と雲と 満洲文化映画を観る」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1939. 9. 7. 「陰霽集（一）」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 9. 8. 「陰霽集（二）」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面・未見）
1939. 9. 9. 「陰霽集（三）」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1939. 10. 1. 「早春」（小説・『満洲行政』・6-10（10月号））
1939. 11. 1. 「驢皮影兒」（随筆・『満蒙』・20年11月号）
1939. 11. 10. 「生地」（小説・『満洲文芸年鑑Ⅲ』）
1939. 12. 15. 「或る環境（続篇）」（小説・『満洲浪漫』・第4輯）
1939. 12. 15. 「時評」（文芸時評・『満洲浪漫』・第4輯）
1939. 12. 15. 「後書」（編輯後記・『満洲浪漫』・第4輯）
1939. 12. 15. 「満洲文学界の展望」（評論・『協和』・255号）
1939. 12. 17. 「満洲文学回顧（一）」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）

1939. 12. 18. 「満洲文学回顧（二）」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1939. 12. 19. 「満洲文学回顧（三）」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 1. 1. 「青果と色鳥——或る環境——」（小説・『満蒙』・1月号（237号））
1940. 1. 1. 「創作と詩を語る座談会」（座談会・『満洲行政』・7-1）
1940. 1. 15. 「熱河讚」（随筆・『満洲文話会通信』・第29号）
1940. 2. 1. 「熱河旅信」（随筆・『新天地』・20-2）
1940. 2. 1. 「満洲文学通信-新京文芸」（評論・『文学界』・7-11）
1940. 2. 3. 「熱河風物帖（上）」（随筆・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 2. 4. 「熱河風物帖（中）」（随筆・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 2. 5. 「熱河風物帖（下）」（随筆・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 3. 1. 「新京・寛城子にて」（随筆・『草上』・13-3）
1940. 3. 29. 「放蕩精神の辯「理想としての満洲ロマン」」（評論・『満洲新聞』・朝刊6面）
1940. 3. 30. 「新たな価値創造「大陸同化の三箇条」」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 4. 1. 「錦熱点描」（随筆・『満洲グラフ』・8-4（69号））
1940. 4. 1. 「大陸生活の合理化は先づ何から為すべきか（諸家ハガキ回答）」（アンケート・『物資と配給』・2-4（4月号））
1940. 4. 1. 「博物教室」（小説・『満洲行政』・7-4（4月号））
1940. 5. 2. 「探求と観照」（評論・『満洲浪漫』・第5輯）
1940. 5. 26. 「文化山脈 野次馬根性」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 6. 1. 「塔影」（小説・『満洲行政』・7-6（6月号））
1940. 6. 1. 「満洲文学近事」（評論・『文学界』・7-6（6月号））
1940. 6. 15. 「半生之記」（随筆・『芸文志』・第3輯・共鳴訳）
1940. 6. 17. 「「廟会」によせて思ふ——在満作家短篇集」（評論・『満洲新聞』・朝刊8面）
1940. 7. 1. 「十六号の娘」（小説・『新天地』・7月号）
1940. 7. 1. 「或る作家の手記」（随筆・『満蒙』・243号）
1940. 7. 5. 「スイートピーのやうな女」（小説・『満洲よもやま』）
1940. 7. 5. 「電話を掛ける女」（小説・『満洲よもやま』）
1940. 7. 15. 「雑談 「廟会」その他」（評論・『新京図書館月報』・第43号）
1940. 7. 18. 「砧」（新聞連載小説・『満洲新聞』・夕刊1面・～7. 30まで・全11回）
1940. 12. 22. 「砧」（小説・『日満露在満作家短篇選集』）
1941. 2. 1. 「砧」（小説・『三田文学』・16-2（2月号））
1944. 3. 30. 「砧」（小説・『満洲国各民族創作選集 第二巻』）
1940. 7. 26. 「康德七年前半期回顧1～2」（評論・『満洲日日新聞』～7. 27・全2回）
1940. 8. 1. 「つひの栖」（小説・『文芸』8-8（8月号））
1940. 8. 24. 「八月創作合評——満洲1～6」（評論・『満洲日日新聞』～8. 25、27～30・全6回）
1940. 9. 1. 「垣の外」（小説・『満洲行政』・7-9（9月号））
1940. 11. 1. 「満洲文学通信 新京文芸」（評論・『文学界』・7-11（11月号））
1940. 11. 15. 「由『平沙』談到『作家訪日』」（評論・『華文大阪毎日』・5-1（50号）・駱駝生訳）

1940. 11. 15. 「跋にかへて」 (随筆・『満洲浪漫』・第6輯)
1941. 1. 1. 「文章について」 (評論・『満洲国語』日語版・第9号)
1941. 1. 1. 「満洲文化への展望」 (アンケート・『満洲行政』・8-1 (1月号))
1941. 1. 1. 「舞台」 (小説・『満洲行政』・8-1 (1月号))
1941. 1. 1. 「満洲文芸界小記」 (評論・『三田文学』・16-1 (1月号))
1941. 1. 1. 「対談 バイコフ・北村謙次郎」 (対談・『満洲日日新聞』夕刊1面)
1941. 1. 21. 「春聯」 (新聞連載小説・『満洲日日新聞』・夕刊1面・全95回)
1941. 2. 1. 「黒白の街(新京)」 (随筆・『満蒙』・250号(2月号))
1941. 2. 1. 「短い旅の記」 (随筆・『観光東亜』・8-2(2月号))
1941. 2. 2. 「詩人の光栄と宿命」 (評論・『満洲日日新聞』~2.5、全3回)
1941. 4. 10. 「寛城子にて」 (随筆・『大陸の相貌』)
1941. 4. 13. 「座談会・川端康成氏を囲んで」 (座談会・『満洲日日新聞』~4.18、全4回)
1941. 6. 1. 「初夏をおもふ—トロイツツアなど」 (随筆・『満洲グラフ』・9-6(第83号))
1941. 11. 10. 「日本の力強さ」 (随筆・『月刊満洲』・14-10(11月号))
1941. 12. 1. 「航海日記」 (随筆・『満蒙』・260号(12月号))
1942. 1. 1. 「東北」 (小説・『芸文』・1-1(1月号))
1942. 1. 1. 「妹」 (小説・『女性満洲』・1-1(1月号))
1942. 1. 1. 「菊の宿」 (署名:北村謙二郎) (小説・『女性満洲』・1-1(1月号))
1942. 1. 1. 「旅窓」 (小説・『満洲観光聯盟報』・6-1(新年号))
1942. 3. 1. 「帰心」 (小説・『芸文』・11-1)
1942. 3. 25. 「作者の言葉」 (随筆・『満洲短篇小説集』・満洲有斐閣)
1942. 5. 20. 「無題」 (書信・『蘭花香る国』(吐風書房)・206頁)
1942. 6. 1. 「異郷の鬼——作家の立場——」 (評論・『芸文』・10-6)
1942. 6. 30. 「選者のことば」 (序文・『満洲国各民族創作選集 第一巻』・創元社)
1942. 7. 1. 「『往復書簡』寛城子にて—房総の友へ」 (随筆・『芸文』・10-7)
1942. 8. 1. 「絵の少女」 (小説・『女性満洲』・1-8(8月号))
1942. 8. 23. 「綏中佐渡開拓団私記(一)海の御民」 (随筆・『満洲新聞』)
1942. 8. 24. 「綏中佐渡開拓団私記(二)求める人間像」 (随筆・『満洲新聞』)
1942. 8. 25. 「綏中佐渡開拓団私記(三)渤海の水平線」 (随筆・『満洲新聞』)
1942. 8. 26. 「綏中佐渡開拓団私記(四)開拓地の課題」 (随筆・『満洲新聞』)
1942. 9. 22. 「芸文十年の回想 文学 満洲文学十年の譜(一)」 (評論・『満洲新聞』)
1942. 9. 23. 「芸文十年の回想 文学 満洲文学十年の譜(二)」 (評論・『満洲新聞』)
1942. 9. 24. 「芸文十年の回想 文学 満洲文学十年の譜(三)」 (評論・『満洲新聞』)
1942. 10. 1. 「南満旅情抄」 (随筆・『芸文』・1-11(10月号))
1942. 10. 15. 「報告書」 (報告・『満洲芸文通信』・1-9(10月号))
1942. 12. 1. 「この信條で私の座右銘」 (アンケート・『女性満洲』・1-12(12月号))
1942. 12. 14. 「書架新彩」 (随筆・『満洲新聞』・第4面)
1943. 2. 1. 「北辺北邊羈旅小品」 (随筆・『芸文』・2-2(2月号))

1943. 3. 15. 「木崎龍の評論断片」 (評論・『満洲芸文通信』・2-3 (3月号))
1943. 6. 20. 「牧場にて」 (随筆・『建国十周年 慶祝詞華集』・芸文社)
1943. 7. 15. 「天長節」 (掌篇小説・『北窓』・5-3)
1943. 8. 1. 「小林秀雄氏を囲む」 (座談会・『芸文』・2-8 (8月号))
1943. 8. 15. 「横澤宏氏のこと」 (随筆・『満洲芸文通信』・2-6 (7月号))
1943. 8. 21. 「夏の帯嶺」 (随筆・『満洲新聞』・第4面)
1943. 8. 22. 「パルプ工場見学」 (随筆・『満洲新聞』・第4面)
1943. 8. 30. 「小説は面白いか」 (評論・『書光』・第4号)
1943. 10. 25. 「大陸と悠久感 北村書簡」 (随筆・『満洲文化記』・国民画報社)
1944. 2. 1. 「酒頌」 (小説・『芸文志』・1-4・爵青訳)
1944. 2. 1. 「苦杯」 (小説・『満洲公論』・3-2 (2月号))
1944. 2. 1. 「鶴立だより」 (随筆・『芸文』-満洲文芸春秋社・2月号)
1944. 2. 10. 「龍山開拓団にて」 (小説・『拓友』・2月号)
1944. 4. 1. 「満洲文学のありかた一旅中文学通信一」 (評論・『文芸』・12-4)
1944. 4. 1. 「北の旅」 (紀行・『鉱工満洲』・5-4 (4月号))
1944. 6. 10. 「北の人達」 (小説・『拓友』・6月号)
1944. 7. 1. 「山小屋通信」 (随筆・『芸文』・1-6 (7月号))
1944. 7. 1. 「鶴立県にて」 (随筆・『鉱工満洲』5-7)
1944. 7. 1. 「雪山」 (小説・『満洲公論』・3-7 (7月号))
1944. 10. 1. 「北満の美を訪ねて」 (随筆・『文学報国』・37号)
1944. 12. 10. 「搬不倒と虎と姑娘」 (童話・『五彩満洲』・満洲富山房)
1944. 12. 10. 「廟会」 (童謡・『五彩満洲』・満洲富山房・山丁、訥夫共訳)
1944. 12. 10. 「白い船」 (童謡・『五彩満洲』・満洲富山房)
1944. 12. 10. 「白船」 (童謡・『五彩満洲』・満洲富山房・山丁、訥夫共訳)
1944. 12. 10. 「つみき」 (童謡・『五彩満洲』・満洲富山房)
1944. 12. 10. 「木頭塊兒」 (童謡・『五彩満洲』・満洲富山房・山丁、訥夫共訳)
1945. 2. 1. 「鶴立だより」 (随筆・『芸文』・2-2 (2月号))
1945. 2. 20. 「冬の日 (三)」 (随筆・『満洲新聞協会報』・第20号)
1944. 3. 10. 「冬の日 (四)」 (随筆・『満洲新聞協会報』・第21号)
1945. 4. 1. 「鶴立だより」 (随筆・『芸文』・2-4 (4月号))
1945. 4. 1. 「鶴立県景観」 (随筆・『芸文』・2-4 (4月号))
1946. 8. 16. 「終戦後」 (随筆・『東北導報 (長春版)』・第2面)
1948. 3. 1. 「東北の作家を懐ふ」 (随筆・『日本未来派』・第9号)
1948. 7. 30. 「北の彼」 (随筆・『歷程』・第5号)
1948. 1. 10. 「長春情息」 (随筆・『満蒙引揚文化人』・第5号)
1948. 8. 10. 「その後の満洲開拓団 新墾地で」 (ルポルタージュ・『満蒙引揚文化人』・第9号)
1949. 9. 1. 「文壇遺跡巡礼 (1) 一徳田秋声の家」 (随筆・『文芸往来』・3-8 (9月号))
1950. 2. 1. 「冬来たれども」 (小説・『少女世界』・2月号・署名:喜多謙)

1950. 3. 10. 「この物語について」 (序言・『ああ無情』・偕成社)
1950. 7. 10. 「この物語について」 (序言・『アンクル・トム物語』・偕成社)
1953. 12. 25. 「わたくしの小学校」 (随筆・『白梅』という小学校校紙)
1954. 11. 20. 「この物語について」 (序言・『ジャングル・ブック』・偕成社)
1956. 9. 5. 「満洲芸文春秋」 (随筆・『文話』・第7号)
1956. 10. 5. 「創立大会始末記」 (随筆・『文話』・第8号)
1956. 11. 1. 「名作絵物語「四色の魚(一)」」 (翻案・『中学時代二年生』・1-1)
1956. 11. 1. 「日本古典物語 東海道中膝栗毛」 (翻案・『中学時代三年生』・8-9)
1956. 12. 1. 「名作絵物語「四色の魚(二)」」 (翻案・『中学時代二年生』・1-2)
1957. 1. 1. 「日本名作 忠度の最期——平家物語より——」 (翻案・『中学時代一年生』・1-3)
1957. 1. 5. 「文話会雑信」 (随筆・『文話』・第10号)
1957. 2. 1. 「青春の特権」 (随筆・『時事教養』・第179号)
1957. 2. 5. 「文話会雑信」 (随筆・『文話』・第11号)
1957. 4. 30. 「メクラとチンパの会」 (随筆・『耳学問』月報)
1957. 5. 5. 「満洲芸文春秋(補遺)」 (随筆・『文話』第13号)
1957. 7. 25. 「文話会雑信」 (随筆・『文話』・第14号)
1957. 10. 15. 「文話会雑信」 (随筆・『文話』・第15号)
1957. 12. 15. 「文話会雑信」 (随筆・『文話』・第16号)
1957. 12. 15. 「後記」 (随筆・『文話』・第16号)
1958. 3. 20. 「忘れ得ぬ片腕」 (雑談・『文話』・第17号)
1958. 3. 20. 「文話会雑信」 (随筆・『文話』・第17号)
1959. 1. 15. 「文話会雑報」 (随筆・『文話』・第18号)
1959. 1. 15. 「近東(懸橋)君のこと」 (随筆・『文話』・第18号)
1959. 2. 15. 「文話会雑報」 (随筆・『文話』・第19号)
1959. 2. 15. 「富田充「雲逝きぬ」」 (書評・『文話』・第19号)
1959. 2. 15. 「悼童女陶子」 (短歌・『文話』・第19号)
1959. 3. 15. 「三月」 (短歌・『文話』・第20号)
1959. 3. 15. 「大陸文話(満洲国の青春と崩壊)」 (随筆・『文話』・第20号)
1959. 3. 15. 「文話会雑報」 (随筆・『文話』・第20号)
1959. 6. 5. 「大陸文話(満洲国の青春と崩壊)」 (随筆・『文話』・第21号)
1959. 6. 5. 「惜春帖」 (短歌・『文話』・第21号)
1959. 6. 5. 「文話会報」 (随筆・『文話』・第21号)
1959. 8. 5. 「大陸文話(満洲国の青春と崩壊)」 (随筆・『文話』・第22号)
1959. 8. 5. 「思い遥かなり——北条秀一今昔談」 (座談会・『文話』第22号)
1959. 8. 5. 「梅雨抄」 (短歌・『文話』・第22号)
1959. 8. 5. 「文話会報」 (随筆・『文話』・第22号)
1960. 1. 15. 「大陸文話(満洲国の青春と崩壊)」 (随筆・『文話』・24号)
1960. 1. 15. 「白き光」 (短歌・『文話』・24号)

1960. 1. 15. 「文話会報」 (随筆、『文話』・24号)
1960. 5. 15. 「会報」 (随筆、『文話』・25号)
1960. 5. 15. 「北辺慕情記(「大陸文話」改題)」 (随筆、『文話』・25号)
1961. 5. 5. 「太宰君の喧嘩」 (随筆・『あまカラ』・117号)
1961. 6. 1. 「旅のこぼれ話」 (随筆・『それから』・1-6(6月号))
1961. 7. 1. 「大連を憶う」 (随筆・『それから』・1-7(7、8月合併号))
1961. 7. 1. 「新刊紹介(杉村勇作著 乾隆皇帝)」 (書評・『それから』・1-7(7、8月合併号))
1961. 8. 1. 「井の頭公園での太宰治」 (随筆・『風報』・86号(8月号))
1967. 5. 19. 「井の頭公園での太宰治」 (随筆・『マールイ No1 櫻桃の記』)
1998. 6. 19. 「井の頭公園での太宰治」 (随筆・『太宰に出会った日』)
1961. 8. 1. 「島木赤彦 遺跡を訪ねて」 (随筆・『短歌』・8月号)
1961. 11. 1. 「湯ヶ原での太宰治」 (随筆・『風報』・90号(12月号))
1962. 6. 1. 「斉藤茂吉——遺跡を訪ねて」 (随筆・『短歌』・9-6)
1962. 7. 5. 「牛飼い左千夫」 (随筆・『あまカラ』・131号)
1963. 2. 5. 「或る日の菜单」 (随筆・『あまカラ』・138号)
1963. 4. 1. 「独居の歌」 (短歌・『無為』・5-4(4月号))
1963. 5. 1. 「棄猫(親仔猫)」 (短歌・『人生道場』・135号(5月号))
1963. 7. 1. 「老生賦」 (短歌・『人生道場』・5-7(7月号))
1963. 8. 1. 「湯ヶ島にて」 (短歌・『無為』・5-8(8月号))
1963. 8. 30. 「きれぎれの思い出」 (随筆・『人吉文化』・第36、37合併号)
1963. 11. 1. 「旅にありて」 (短歌・『人生道場』・140号(10、11月合併号))
1963. 12. 1. 「ただいま化粧中」 (小説・『宴』・2-8)
1964. 1. 1. 「冬夜休上」 (短歌・『人生道場』・142号(1月号))
1964. 11. 1. 「孤立」 (小説・『宴』・3-6)
1964. 12. 1. 「酒仙奥田技佐」 (随筆・『随筆サンケイ』・11-12)
1965. 3. 1. 「菊脛」 (俳句・『蕪青』・4号)
1965. 2. 5. 「荒天のおにぎり」 (随筆・『あまカラ』・162号)
1965. 3. 1. 「菊脛」 (俳句・『蕪青』・第4号)
1965. 5. 10. 「文芸復興三〇集によせる」 (アンケート・『文芸復興』・第30集)
1965. 7. 1. 「伊東月草をおもう」 (随筆・『太白』・1-1)
1965. 11. 10. 「百艸」 (俳句・『蕪青』・第8号)
1966. 8. 1. 「遅桜」 (小説・『政界往来』8月号)
1967. 9. 1. 「地震と文人——九月一日の関東大震災——」 (随筆・『東京タイムズ』・第5面)
1967. 11. 15. 「二人の詩人 宮沢賢治と黄瀛」 (『文芸たかだ』・第52号)
1968. 3. 20. 「春の日抄 或ひは喜寿賀」 (短歌・『文芸たかだ』・第54号)
1968. 4. 10. 「満洲旅中の斎藤茂吉」 (小説・『ポリタイア』・1-2)
1968. 7. 15. 「鴨と花の子たち——あららぎ物語」 (小説・『ポリタイア』・1-3)
1968. 9. 25. 「戦後忘れ文」 (随筆・『文芸たかだ』・第57号)

1969. 3. 1. 「私の浮世風呂」 (随筆・『随筆サンケイ』・第16巻)
1969. 3. 25. 「雪の日抄」 (俳句・『文芸たかだ』・第60号)
1969. 9. 1. 「川端さんと伊豆」 (随筆・『温泉』・37-9 (415号))
1969. 10. 30. 「さまざまな思い」 (随筆・『文芸たかだ』・第64号)
1970. 9. 1. 「犬のかたみ」 (随筆・『月刊ペン』・3-9)
1970. 9. 15. 「或る出会い——八木沼丈夫と尾崎士朗——」 (随筆・『文芸たかだ』・第69号)
1970. 10. 1. 「満州事変勃発四十年目の秘録 大杉殺し甘粕大尉の秘密」 (随筆・『新評』・17-12)
1971. 1. 15. 「詩人の終焉—逸見猶吉」 (随筆・『ポリタイア』・4-2)
1971. 12. 「消えぬ空」 (随筆・『満洲慕情 補巻』)
1971. 7. 25. 「青い花の頃 中村地平のことなど」 (随筆・『文芸たかだ』・第74号)
1971. 12. 15. 「日本浪漫派の頃」 (随筆・『日本浪漫派とはなにか』(復刻版『日本浪漫派』別冊)、雄松堂書店)
1971. 12. 15. 「座談会 伊藤佐喜雄追悼」 (座談会・『日本浪漫派とはなにか』)
1972. 12. 1. 「日本人と中国人の仲—王永江、金子雪斎、松崎鶴雄—」 (随筆・『浪漫』・12月号)
1972. 12. 10. 「日本人と中国人の仲 親日の于冲漢と善隣の宮島大八」 (随筆・『歴史研究』・143号)
1973. 3. 1. 「日本人と中国人の仲 (2) 異骨相な男 岡田猛馬」 (随筆・『浪漫』・3月号)
1973. 4. 1. 「川端さんの定宿、手紙など」 (随筆・『文芸』・12-4 (4月号))
1973. 8. 1. 「日本人と中国人の仲 憂いの人八木沼丈夫」 (随筆・『浪漫』・8月号)
1978. 2. 1. 「南海の野菊」 (小説・『ちくま』・106号)
1980. 6. 25. 「途上の友の面影」 (随筆・『文芸復興』・67集)
1981. 3. 10. 「途上の友の面影(続)」 (随筆・『文芸復興』・68集)
1981. 8. 10. 「途上の友の面影(続)」 (随筆・『文芸復興』・69集)
1981. 12. 25. 「この一年 この一」 (随筆・『文芸復興』・70集)
1982. 5. 20. 「この一年 この二」 (随筆・『文芸復興』・71集)
1982. 10. 15. 「続 この一年 絶筆」 (随筆・『文芸復興』・72集)
2013. 5. 10. 「浪漫の頃 サモワール」 (『索通信』・15号)
2013. 10. 31. 「浪漫の頃 北斗星の下」 (『索通信』・16号)
2014. 5. 10. 「浪漫の頃 海の彼方」 (『索通信』・17号)

II 単行本

1942. 3. 12. 『春聯』 (長編小説・新潮社(東京))
1943. 4. 30. 『月牙』 (評論集・吐風書房(奉天))
1943. 5. 25. 『帰心』 (短編集・国民画報社(新京))
1945. 3. 30. 『旅信』 (随筆集・近沢書房(新京))
1950. 2. 28. 『ソルページの歌』 (長篇小説・偕成社(東京))
1960. 9. 1. 『北辺慕情記』 (回想録・大学書房(東京))
1966. 11. 15. 『あららぎ物語』 (長篇小説・冬樹社(東京))
1972. 4. 7. 『長崎の茂吉』 (長篇小説・皆美社(東京))

Ⅲ 編著書

1940. 11. 15. 『満洲浪漫（第六輯）』（興亜文化出版社（新京））
1941. 5. 5. 『僻土残歌』（興亜文化出版社（新京））
1942. 6. 30. 『満洲国各民族創作選集（1）』（創元社（東京））
1944. 4. 30. 『満洲国各民族創作選集（2）』（創元社（東京））

Ⅳ 未発表作品

- 世捨酒（句集+随筆集）
異骨相な男（長篇小説）
松花江氾濫（中篇小説）
在満時代の檀一雄（中篇小説）

Ⅴ 初出不明

短篇

「仙台での太宰治」/「国木田独歩の初恋」/「石漁り」/「途上の小駅」/「愚連隊往生記」/「国際喧嘩を取りなすご詔勅」/「シュリーマン」/「農村の画家ミレー」/「音楽の魔術師ショパン」/「キュリー夫人」/「木山捷平も若かったこと」/「太宰治の周辺=桜桃忌に寄せて」/「佐藤春夫私鈔」/「二人の浅草の作家」/「伊福部隆彦の詩集『暁闇』を評す」/「革命見物」/「弱虫キッド」/「前田夕暮「生きることかなしと思ふ」」/「川端さんの意外さ」/「川端さん一拝話」/「花散れど緑萌ゆ」/「戦後の風」/「作家の表情」/「藤村の家と高田保」/「保谷だより」/「へちま棚」/「酒詩」/「西風に寄す」/「馬の目」

以下は「文人今昔」シリーズ掲載分である。

- ①「井草の草分け一書齋の壁に挿絵一枚 井伏鱒二①」
- ②「豊富な樹木の知識一かよう“酒場”も仕事部屋に 井伏鱒二②」
- ③「淡々と日常を楽しむ 甘党を返上して酔漢に 坪田譲治①」
- ④「錬金術師の面影 お伽話の老爺のなかに 坪井譲治②」
- ⑤「“メクラとチンバの会”出版記念会にテクシャンぶり 木下捷平①」
- ⑥「“満州の孤児”帰る 疎開中の井伏と珍問答 木山捷平①」
- ⑦「詩壇に旋風「ウルトラマリン」 不吉な予言どおり満州で客死 逸見猶吉①」
- ⑧「檀一雄の恋の橋渡し だが相手間違えてオジャン 逸見猶吉①」
- ⑨「異風「青い花」お家芸“健康”と“軒昂” 山岸外史」
- ⑩「太宰と“青春彷徨” 相互に信じあい、認めあう 檀一雄」
- ⑪「清雅至醇の人柄 俊才生む 「草上」の十余年 伊東月草」

V 参考：偕成社版「世界名作文庫」リスト

注：★印のものは「喜多謙」名義、その他は「北村謙次郎」名義で発行されている。

1950年代刊行「世界名作文庫」

『アンクルトム物語』★/『黒馬物語』★/『竹取物語・落窪物語』/『ドン・キホーテ』/『大尉の娘』★
/『少女ネルの死』★/『義経記』/『アラビヤナイト』/『平家物語』/『白い牙』★/『秘密の花園』★
/『大地』★/『インドの放浪児』★/『ああ無情』★/『ジャングル・ブック』★/『大洪水』★/『妖
怪伝』★/『太閤記』/『保元平治物語』/『鎧なき騎士』★

1960年代刊行「少年少女 世界の名作」

『平家物語』/『大地』★/『太閤記』/『アラビヤナイト』/『白い牙』★/『ああ無情』★/『少女ネル
の死』★/『大尉の娘』★/『竹取物語・落窪物語』/『アンクル・トム物語』★/『義経記』/『保元物語』
/『秘密の花園』★/『妖怪伝』★/『鎧なき騎士』★/『ドン・キホーテ』/『黒馬物語』★/『ジャングル・
ブック』★/『インドの放浪児』★/『大洪水』★

1980年代刊行「少年少女世界の名作〈改訂新版〉」

『少女ネルの死』★/『黒馬物語』★/『アンクル・トム物語』★/『白い牙』★/『大地』★/『ああ無情』
★/『ドン・キホーテ』/『平家物語』

『文芸プランニング』総目次

凡例

- 一、同誌の号数表記は一定していない。本目次では、各号の表紙（第1面）に見られる表記を採用し、その下のカッコ内に、奥付の通巻号数を記した。
- 二、執筆者名のうち「K」、「K生」、「謙」、「KENJIROU」とあるのは、いずれも北村謙次郎の筆名である。
- 三、本目次の作成に当たっては、北村光雄氏（北村謙次郎令息）、国際日本文化研究センター図書館所蔵の原本を使用した。

判 型 A5判

編集者 第1号～第7号／北村謙次郎

発行者 第1号、第4号～第7号／北村謙次郎、第3号井上雄介

発行所 第1号、第3号／東京市赤坂区青山南町4-20 泰文社
第4号／東京府下世田ヶ谷上町4-2 文芸プランニング社 泰文社
第5号～第7号／東京府下世田ヶ谷上町4-2 文芸プランニング社

印刷所 第1号／京華社
第3号／大黒活版所
第4号／鈴木信英堂
第5号～第7号／高正堂

定 価 第1号、第3号～第4号／20銭、第5号～第7号／10銭

紙 面 第1号／全42頁、第3号～第4号／全40頁
第5号／全24頁、第6号／全32頁、第7号／全30頁

9月創刊号(第1号) 1930年9月1日発行

ノスタルヂア鈔(小説)	北村謙次郎	1-15
杜少陵艶書(小説)	小木公六良	16-23
心象スケッチ(詩)	黄瀛	24-27
旅の断片(随筆)	赤松月船	28-30
龍胆寺雄(評論)	北村謙次郎	31-41
後記	K	42

10月号(第2号) 1930年10月発行 ※第3号の広告による、現物未見。

妻(小説)	坪井峻一
秋(小説)	赤松月船
北太平洋詩篇(詩)	石川善助
癒えゆく人(小説)	北村謙次郎
心象スケッチ(詩)	黄瀛
思想の芸術性(評論)	北村謙次郎

11月号(第3号) 1930年11月1日発行

扉	栗木幸次郎	1
序曲(テイ・エス・エリオット)(詩)	安藤一郎訳	2-5
ほのかな詩(詩)	木山捷平	6-8
蜀黍団子の秋(小説)	坪井峻一	9-19
空明と傷痕(詩)	宮沢賢治	20-24
貸借(小説)	北村謙次郎	25-39
編集後記	K生	40

1月号(第4号) 1931年1月1日発行

抵抗する作家(評論)	北村謙次郎	2-3
装身具(詩)	岡崎清一郎	4-6
昆虫譜(詩)	長田恒雄	7-8
秋夕小景(詩)	黄瀛	9-12
猫きち(随筆)	野溝七生	13-19
5月の日記(小説)	北村謙次郎	20-23
河(小説)	坪井峻一	24-38
ブライト・マアク(随筆)	謙	39-40

3月号(第5号) 1931年3月1日発行

挿話風に…… (小説)	坪井峻一	2-6
すなむすめ (小説)	北村謙次郎	7-12
生活余暇 (詩)	黄瀛	13-14
パイプの休憩 (随筆)	黄瀛	15-17
井伏鱒二と猿蓑 (評論)	赤松月船	18-20
回復期の文学 (評論)	北村謙次郎	21-23
後記	KENJIROU	24

5月号 (第6号) 1932年5月1日発行

淀先生の送別 (小説)	坪井峻一	2-6
あとかたのない想像 (小説)	北村謙次郎	7-21
孤影 (詩)	倉橋弥一	22-23
街の日記 (小品)	長田恒雄	24-26
中央公論四月号 (批評)	赤松月船	27-29
ヘルマン・ケステンのこと (紹介)	笹澤美明	30-31
後記	謙	32

7月号 (第7号) 1932年7月15日発行

調戲はれた心臓 (小説)	白川正美	2-3
ざんげ (小説)	坪井峻一	4-11
烟脂 (ニコチン) (小説)	北村謙次郎	12-20
かげろふ (詩)	増田晃	21-22
夢の仕事或ひは眠り (フラグメント)	竹中郁	23-24
季節の鬱憤 (小品)	坪井峻一	25-26
独身宿舎 (小品)	北村謙次郎	27-29
後記	謙	30

『満洲浪漫』総目次

凡例

本目次の作成に当たっては、『満洲浪漫』復刻版（ゆまに書房、2002年）と、神奈川県近代文学館所蔵の原本を使用した。

判 型 菊判（218mm×152mm）

編集者 第1輯、第3輯～第6輯／北村謙次郎、第2輯／長谷川濬

発行者 第1輯～第4輯／佐藤好郎、第5輯／鈴木晋、第6輯／石見栄吉

発行所 第1輯～第4輯／新京特別市大同大街康德会館内 満洲文祥堂

第5輯／新京特別市興安大路402 東都書籍新京出張所

第6輯／新京慈光胡同401 興亜文化出版社

印刷所 第1輯～第5輯／新京特別市大同大街301 満洲文祥堂印刷部

第6輯／奉天市鉄西区裕工街1段41号 凸版印刷株式会社満洲支社

定 価 第1輯／1円20銭、第2輯／80銭、第3輯／1円、

第4輯／80銭、第5輯／1円50銭、第6輯／1円60銭

紙 面 第1輯／全274頁、第2輯／全176頁、第3号／全259頁、第4号／全212頁

第5輯／全175頁、第6輯／全250頁

第1輯 (創刊号) 1938年10月28日発行

姉妹のこと (小説)	吉野治夫	5-25
伝説 (小説)	長谷川濬	26-38
一つの記録 (小説)	下島甚三	39-56
浙江旅社 (小説)	福家富士夫	57-67
同行者 (小説)	今村栄治	68-82
鶴 (小説)	北村謙次郎	83-111
白日の書 (小説)	横田文子	112-198
アリョーシャ (小説)	田兵 (大内隆雄訳)	199-203
霧宿 (詩)	矢原礼三郎	204-205
なめくぢの歌 (詩)	坂井艶司	206-207
長城論 (詩)	長谷川四郎	208-209
雑草 (随筆)	町原幸二	210-217
六月の雪 (随筆)	坪井興	218-222
●満洲文化について		
祝詞	竹内正一	223
満洲文化についての断想	大内隆雄	223-224
満洲文化について	三好弘光	224-225
満洲文化の指導建設者・日本人	古川哲次郎	225-226
満洲の文芸に就いて (私見)	古長敏明	226-227
さゝやかな抗弁——満洲文化のために——	赤川幸一	227-229
満洲ロマンへの待望	近東綺十郎	229-231
世界観の学問的体系樹立	西村眞一郎	231-232
文学の問題について	富田寿	232-233
偶感の格闘	望月孝丸	233-235
地層の話	磯部秀見	235-237
文芸協会設立促進	藤川研一	237-238
たゞ一つ	秋原勝二	238-239
窓をひらけ (評論)	木崎龍	240-251
農村を描け (評論)	牛島春子	252-255
映画演技論 (評論)	アイリス・バリイ (松本光庸訳)	256-263
満洲演劇の建設 (評論)	藤川研一	264-272
跋	北村謙次郎	273-274

第2輯 1939年3月10日発行

白眠堂徑徂 (小説)	竹内正一	5-19
------------	------	------

家鴨に乗つた王 (小説)	長谷川濬 20-34
浮雲 (小説)	青木藜吉 35-52
狂人の日記 (小説)	長谷川四郎 53-67
隣三人 (小説)	袁犀 (大内隆雄訳) 68-82
満洲の胎動 (小説)	工清定 83-105
魚骨寺 (小説)	用章 (大内隆雄訳) 106-129
天壇にて (詩)	藤原定 130-131
地平の門 (詩)	坂井艶司 132-133
汗山 (詩)	逸見猶吉 135-135
映画的とは (随筆)	吉野治夫 136-138
映画雑記 (随筆)	冬木洋二 139-140
新京断片 (随筆)	荒牧芳郎 141-144
佳木斯絵日記 (絵と文)	今井一郎 145-146
文学の表情 (評論)	木崎龍 147-154
満洲映画畫に就いて (評論)	森信 155-163

●同人語

ただ書くのみ	長谷川濬 164
金魚	岡田寿三 164-168
時評的「詩と真実」	北村謙次郎 168-170
私の旗	大内隆雄 170-171
偶言私語	木崎龍 171-173
同人語	坪井與 173
生活について	飯田秀世 173-174
言葉を借りて	逸見猶吉 174-175
同人に加へられて	荒牧芳郎 175
編集後記	長谷川濬 176

第3輯

1939年7月23日発行

大同大街 (小説)	長谷川濬 7-25
マーシユカ (小説)	H・A・バイコフ (大谷定九郎訳) 26-31
晝夜 (小説)	古丁 (大内隆雄訳) 32-38
石田君の幼な友達 (小説)	岡田寿之 39-49
お談義部落 (小説)	北尾陽三 50-96
或る環境 (小説)	北村謙次郎 97-125
日記帖の翻訳 (小説)	比士川久雄 126-145
春の復活 (小説)	李夢周 (大内隆雄訳) 146-169

地理二篇 (詩)	逸見猶吉 170-173
天使変形 (詩)	坂井艶司 174-175
黄昏の訪問 (詩)	矢原礼三郎 176-177
唄 (詩)	長谷川四郎 178-179
シヨパンに (詩)	藤原定 180-181
叔父とランプの絵 (随筆)	町原幸二 182-184
言葉の衣裳 (随筆)	中村能行 185-186
国語と映画 (随筆)	坪井與 187-190
夏日断想 (随筆)	緑川貢 191-192
牛 (絵と文)	池辺青李 193-195
●特輯 文化機関当事者に訊く	
大連図書館の特殊性	青木実 197-198
シナリオに就ての覚書抜粋	根岸寛一 199
満鉄弘報の文化的意義	金丸精哉 200-201
文士招聘は芸術の冒瀆か	磯部秀見 202-207
文話会について	吉野治夫 208
東亜の音楽	大塚淳 209-210
案内書	奥村義信 211
今後の民衆図書館	山崎末次郎 212-214
善き玩具	藤山一雄 215-216
ラジオの表情	金沢覚太郎 217-219
春より夏へ (俳句)	金尾梅の門 220-221
武蔵野の初夏 (俳句)	伊東月草 222-223
竹内正一論——“氷花”を中心として (評論)	西村眞一郎 224-234
映画の作家精神 (評論)	松本光庸 235-244
島村抱月論 覚え書の序章 (評論)	木崎龍 245-255
●同人語	256
文芸批評と人間主義——満洲文学についての一考察——	長谷川濬 256-258
後書	北村謙次郎 258-259
第4輯 満洲浪漫特輯 満洲作家選集 1939年12月15日発行	
秋 (小説)	吉野治夫 5-29
烏爾順河 (小説)	長谷川濬 30-37
梨花落つ (小説)	疑遲 (大内隆雄訳) 38-46
虚脱 (小説)	北尾陽三 47-87
或る環境 (小説)	北村謙次郎 88-106

土の種子 (小説)	大瀧重直 107-126
緑の歌 (小説)	晶莖ふみ 127-145
窓 (小説)	石軍 (大内隆雄訳) 146-164
炷一支 (小説)	木崎龍 165-169
北辺 (小説)	青木実 170-192
時評 (評論)	北村謙次郎 193-207
●四季語	
わが瞳人語	大内隆雄 208-209
ふるさと雑感	長谷川濬 209-210
即事	木崎龍 210-211
後書	北村謙次郎 211-212

第5輯

建国文学私論——僕のイマジネーション—— (評論)	長谷川濬 1-8
満洲詩論 (評論)	三好弘光 9-39
満洲文学の基本概念 (評論)	西村眞一郎 40-54
満洲文学の特質 (評論)	大内隆雄 55-60
探求と鑑賞 (評論)	北村謙次郎 61-76
満洲文学の方向 (評論)	吉野治夫 77-81
批評に就て (評論)	村岡勇 82-86
満日文学交流雑談 (評論)	王則 87-93
臨床的満洲文学論 (評論)	薊一郎 94-101
満洲文学私観 (評論)	日向伸夫 102-107
自然描写に餓える (評論)	丘益太郎 108-115
古丁に就て (評論)	辛嘉 116-111
夷馳とその作品 (評論)	小松 112-128
満人作家論・序説 (評論)	木崎龍 129-139
「作文」四十輯まで (評論)	宮井一郎 140-154
満洲ジャアナリズムの一面 (評論)	新井練三 155-165
御用画家に就ての断片 (評論)	池辺青李 166-170
満洲音楽序説 (評論)	陳其芬 (大内隆雄訳) 171-175
表紙	橘文策

第6輯 1940年11月15日刊行

悪党 (小説)	筒井俊一 1-54
月地抄 (詩)	檀一雄 55-58

春颯 (小説)	北尾陽三 59-154
回帰線 (小説)	夷馳 (森谷祐三) 155-182
蜜柑に寄せる (詩)	高森文夫 183-186
松花の流れは輝いてゐる (戯曲)	大内隆雄 187-248
跋にかへて	北村謙次郎 249-250

『文話』総目次

凡例

- 一、同誌の号数表記は一定していない。巻・号数を用いたり、通巻号数を用いたり、その両方を併記したりしている。本目次では、各号の表紙（第1面）に見られる表記を採用し、その下のカッコ内に、前身誌『文話会通信』以来の通巻号数を記した。
- 二、執筆者名のうち「喜多謙」、「伽羅」、「喜」、「白相居」、「K生」、「K」とあるのは、いずれも北村謙次郎の筆名である。その他、無署名の文章も北村の執筆と推測される。
- 三、カッコ内に*を付した個所は、編者による注記である。
- 四、本目次の作成に当たっては、北村光雄氏（北村謙次郎令息）、西原和海氏所蔵の原本を借覧した。

判 型 A5判

発行人 喜多謙

発行所 通巻第7号～第13号／東京都千代田区有楽町1-2 満蒙同胞援護会内 文話会

第14号／東京都台東区浅草象潟町1-2 国民新聞社内 文話会

第15号～第17号／東京都板橋区板橋5丁目1053 新彩社内 文話会

第18号～第25号／東京都北多摩郡下保谷1581 喜多謙

定 価 第7号は10円、第8号から20円

紙 面 第7号～第14号は全4頁（第10号のみ全5頁）

第15号～第25号は全8頁

9月創刊号(第7号) 1956年9月5日発行

満洲芸文春秋(「文話会の思い出」改題)	伽羅	1-2
パイプの休憩(承前)	ホワン・イン(*黄瀛)	2
会友消息		2
浮世風呂(第5回)	式亭三馬原作、北村謙次郎訳	3
想ひ出すまま	藤川公成(元・研一)	4
編集後記		4

10月大会特集号(第8号) 1956年10月5日発行

創立大会始末記	K 生記	1-2
列席者芳名		2
会費		2
会友消息	神尾弼春、伊藤佐喜雄、藤原定、北小路功光、宮川靖(*ほか九名)	3
思い出すまま(承前)	藤川公成	4

※11月号(第9号)は未見。

第2巻第1号(新年号)(第10号) 1957年1月5日発行

会員・客員名簿		1-2、5
*第3頁は欠、未見。		
東京文話会のこと	近東綺十郎	4-5
文話会雑信	喜多謙	5
会費受領報告		5

第2巻第2号(2月号)(第11号) 1957年2月5日発行

墓地とホテル	浅見淵	1-2
会員名簿		2
東京文話会のこと	近東綺十郎	3-4
会費受領報告		4
年賀状拾遺	藤川公成、大森志郎、白崎海紀、山田健二、古長敏明、野田棟	4
文話会雑信	K	4

第2巻第3号(3月号)(第12号) 1957年3月5日発行

漢口の女優	小田嶽夫	1-?
*以下、欠。		

第2巻第4号(5月号)(第13号)	1957年5月5日発行	
若き日の逸見猶吉		菊池康雄 1-2
会員通信	山口慎一、大野沢緑郎、三宅豊子	2
会費領収		2
満洲芸文春秋(補遺)		伽羅 3-4
雑信		喜多謙 4
猶吉忌案内(文話会5月例会)		文話会事務局 4

第2巻第5号(7月号)(第14号)	1957年7月25日発行	
表紙(*絵・甲斐巳八郎/カット・赤羽末吉)		1
目次		2
新中国から帰つて		杉村丁 3
若き日の逸見猶吉(承前)		菊池康雄 4
パパイヤのこと		中谷孝雄 5-6
文話会雑信		6
会員通信 甲斐巳八郎、上野凌弘、森繁久弥、坂井艶司、三井実雄、三好今朝吉		7
会費領収		7

第2巻第六号(10月号)(第15号)	1957年十月十五日発行	
表紙(*絵・甲斐巳八郎/カット・赤羽末吉)		1
目次		2
最近の中国文学(恋愛小説登場)		山口慎一 3-4
文話会雑信		喜 4
会費領収		4
若き日の逸見猶吉(承前)		菊池康雄 5-6
神仙洞に住んだころ		北尾陽三 6-8
会員通信	牛島春子、金丸精哉、吉野万里子、三好今朝吉	7

第2巻第7号(12月号)(第16号)	1957年12月15日発行	
表紙(*絵/甲斐巳八郎)		1
黒竜江河口にて		長谷川濬 2-3
負ケラレマセンの辯		森繁久弥 3
会費領収		3
若き日の逸見猶吉(承前)		菊池康雄 4
文話会雑信		喜 4

会員・客員住所録	5-7
後記	7
会員通信	山口慎一、守谷良平、境野一之、奥山禎三、小田嶽夫 7

第3巻第1号(3月号)(第17号) 1958年3月20日発行

表紙(*絵/甲斐巳八郎)	1
忘れ得ぬ片腕(*談話; 筆記者・北村謙次郎)	根岸寛一 2-3
会費領収	3
ひとつときの思い出(*談話)	星玲子 4-5
会員通信	高橋源一、山口慎一、甲斐巳八郎、大野沢緑郎、奥一、金沢覚太郎 6、5
文話会雑信	7
正誤	7

新年名簿号(1月号)(第18号) 1959年1月15日発行

表紙(*絵/甲斐巳八郎)	1
中国の一劇作家の自伝(*夏衍)	山口慎一 2-3
文話会雑報	喜 3
近東(懸橋)君のこと	喜多謙 3-4
会員・客員住所録	5-7
会員動静	近藤清治、長谷川濬、金丸精哉 7

2月号(第19号) 1959年2月15日発行

表紙(*絵/甲斐巳八郎)	1
魯迅故居	小田嶽夫 2-3
文話会雑報	喜 3、7
大陸交友抄	岩本修蔵 4、3
住所録(追補と訂正)	4
会費受領報告	4
富田充「雲逝きぬ」(*書評)	喜多謙 5
会員動静	菊池康雄、緑川貢、宮川靖 6
悼童女陶子(*短歌)	白相居 6-7
多摩(*『「郷土北多摩」より転載』)	7

3月号(第20号) 1959年3月15日発行

表紙(*絵/甲斐巳八郎)	1
大陸文話(満洲国の青春と崩壊)	喜多謙 2-4

会費領収		4
吉野治夫氏を偲ぶ	宇野木敏	53
月 (*短歌)	白相居	5
会員動静	赤羽末吉、寄本麟二、近藤清治、宇野木敏	6
文話会雑報	喜	6
多摩 (*『郷土北多摩』より転載)		7

6月号 (第21号) 1959年6月5日発行

表紙 (*絵/近藤清治)		1
大陸文話 (満洲国の青春と崩壊)	喜多謙	2-4
惜春帖 (*短歌)	白相居	4
猶吉忌座談筆記から	和田日出吉・藤原定	5
会員動静 富田充、長谷川濬、島田幸二、牛島春子、三好弘光、近藤清治、赤羽末吉		6
文話会報	喜	6
多摩 (*『郷土北多摩』より転載)		7

8月号 (第22号) 1959年8月5日発行

表紙 (*絵/赤羽末吉)		1
大陸文話 (満洲国の青春と崩壊)	喜多謙	2-3
思い遥かなり——北条秀一今昔談 (*座談会)	北条秀一、大森志郎、喜多謙	4-6
梅雨抄 (*短歌)	白相居	5
文話会報		6
会員動静	大森志郎、高木恭造、赤羽末吉、古長敏明、藤原鶏介	7

※第23号は未見。

新年名簿号 (第24号) 1960年1月15日発行

表紙 (*装丁/甲斐巳八郎)		1
大陸文話 (満洲国の青春と崩壊)	喜多謙	2-4
白き光 (*短歌)	白相居	4
文話会報	喜	4
会員・客員住所録		5-7

吉野治夫君を悼む (5月号) (第25号) 1960年5月15日発行

表紙 (*絵/甲斐巳八郎)		1
吉野治夫を憶う	竹内正一	2-3

故吉野君についての通信より	吉野万里子、宮川靖、大谷健夫	3
会報	喜	3
北辺慕情記（「大陸文話」改題）	喜多謙	4-7
前号訂正		7

参考文献

I 著書（刊行年順）

- 『通信省職員録』、杉原活版所、1894年7月7日
『満洲十年史』、伊藤武一郎、満洲十年史刊行会、1916年2月5日
『流行病学ヨリ観タル猩紅熱』、黒井忠一、森脇襄治、金沢医科大学十全会雑誌32(12)、
1927年12月1日
『軍艦茉莉』、安西冬衛、厚生閣書店、1929年4月18日
『満蒙日本人紳士録』、満洲日報社、1929年5月25日
『大連市』、高橋勇八、大陸出版協会、1930年12月1日
『満洲国年鑑』、佐藤四郎、満洲書院、1932年12月13日
『呼倫貝爾事件に就て 附呼倫貝爾の概観』、陸軍省調査班、1932年12月
『小説・エッセイ』、神戸雄一、朝日書房、1932年12月25日
『満鉄社員健闘録』、満鉄社員会、1933年1月5日
『満洲国協和会之概要』、満洲国協和会、1933年6月
『満鉄社員健闘録 第二篇』、満鉄社員会、1934年8月25日
『大連市史』、大連市役所、1936年9月25日
『関東局施政三十年史』、関東局、1936年10月1日
『東亜先覚志士記伝』、黒龍会出版部、1936年10月26日
『少年満洲実話集』、合志光、月刊満洲社、1937年8月15日
『石本権四郎』、石本鑽太郎、1937年11月11日
『康德五年版 満洲国現勢』、満洲国通信社、1938年7月1日
『満洲文芸年鑑 昭和14年版』、満蒙評論社、1938年12月25日
『満洲年鑑 昭和13年版』、満洲日日新聞社支店、1938年11月20日
『何とかスキーの娘』、庄司鄭吉、月刊満洲社、1939年11月5日
『満洲文芸年鑑 昭和15年版』、満洲文話会、1939年11月10日
『満洲年鑑 昭和14年版』、満洲日日新聞社支店、1939年11月25日
『俳諧新辞典』、伊東月草、高木蒼梧、太陽堂書店、1939年12月10日
『動乱の蔭に』、川島芳子、時代社、1940年2月26日
『廟会』、浅見淵編、竹村書房、1940年5月20日
『康德八年版 満洲国現勢』、満洲国通信社、1940年7月18日
『満洲の新聞と通信』、田中総一郎、満洲弘報協会、1940年10月1日
『満洲年鑑 昭和16年版』、満洲日日新聞社大連支店、1940年12月5日
『日満露在満作家短篇選集』、山田清三郎編、春陽堂書店、1940年12月22日
『東京八景』、太宰治、実業之日本社、1941年5月3日

- 『第八号転轍器』、日向伸夫、砂子屋書房、1941年5月5日
- 『満洲年鑑 昭和17年版』、大連日日新聞社、1941年12月20日
- 『満洲義軍』、山名正二、月刊満洲社東京出版部、1942年9月20日
- 『満洲国各民族創作選集 第一巻』、創元社、1942年6月30日
- 『明暗』、北尾陽三、興亜文化出版社、1942年9月3日
- 『或る時代』、大内隆雄、興亜文化出版社、1942年9月25日
- 『流沙香綺譚』、烏羽亮吉、興亜文化出版社、1942年9月25日
- 『大陸開拓と文学』、福田清人、満洲移住協会、1942年10月20日
- 『哈爾濱入城』、竹内正一、赤塚書房、1942年11月10日
- 『建国十周年 慶祝詞華集』、満洲文芸家協会編、1943年6月20日
- 『満洲国各民族創作選集 第二巻』、創元社、1944年3月30日
- 『満洲文化記』、浅見淵、国民画報社、1943年10月25日
- 『満洲文学二十年』、大内隆雄、国民画報社、1944年10月5日
- 『おひさまにここにこ』(千代田区立番町幼稚園創立六十五周年記念誌)、1955年3月15日
- 『転向記・嵐の時代』、山田清三郎、理論社、1957年9月
- 『転向記・氷雪の時代』、山田清三郎、理論社、1958年2月
- 『北辺慕情記』、北村謙次郎、大学書房、1960年9月1日
- 『昭和戦争文学全集 第1巻 戦火満洲に挙がる』、昭和戦争文学全集編集委員会編、集英社、1964年11月30日
- 『増補 日本浪漫派批判序説』、橋川文三、未来社、1964年4月15日
- 『満洲開拓史』、満洲開拓史刊行会、1966年4月17日
- 『対満蒙政策史の一面』、栗原健、原書房、1966年6月
- 『上杉鷹山』、横山昭男、吉川弘文館、1968年12月25日
- 『満洲国史 総論』、満洲国史編纂刊行会、満蒙同胞援護会、1970年6月30日
- 『われらが心のふるさと 大連一中』、大連一中校友会、1970年10月18日
- 『満洲国史 各論』、満洲国史編纂刊行会、満蒙同胞援護会、1971年1月30日
- 『郵政百年史』、逓信協会、1971年3月1日
- 『旧植民地文学の研究』、尾崎秀樹、勁草書房、1971年6月30日
- 『日本浪漫派とはなにか』(復刻版『日本浪漫派』別冊)、雄松堂書店、1971年12月15日
- 『青春放浪』、檀一雄、筑摩書房、1976年5月30日
- 『檀一雄全集』、檀一雄、新潮社、1978年1月25日
- 『川端康成全集 第三十三巻』、川端康成、新潮社、1982年5月20日
- 『満洲教育史』、嶋田道弥、青史社、1982年8月25日
- 『太宰治の青春像 人と文学』、久保喬、六興出版、1983年5月25日
- 『日本浪漫派・その周辺』、栗原克丸、高文研、1985年3月25日

- 『新潮日本文学アルバム 36 檀一雄』、野原一夫、1986年4月25日
- 『校本 宮沢賢治全集 第6巻』、筑摩書房、1988年2月1日
- 『上杉家御年譜 第二十四巻』、米沢温故会、1988年12月1日
- 『呼倫貝爾抗戦史話』、厲春峭、内蒙古文化出版社、1990年
- 『異郷の昭和文学』、川村湊、岩波書店、1990年10月19日
- 『日本侵占旅大四十年史』、顧明義、張徳良等編、遼寧人民出版社、1991年8月
- 『書物の運命』、尾崎秀樹、出版ニュース社、1991年10月16日
- 『太宰治の青春像』、久保喬、朝日書林、1993年6月19日
- 『横田文子 人と作品』、東栄蔵編著、信濃毎日新聞社、1993年8月1日
- 『黄瀛 その詩と数奇な生涯』、佐藤竜一、日本地域社会研究所、1994年6月
- 『彼等の昭和』、川崎賢子、白水社、1994年12月20日
- 『「満洲国」の研究』、山本有造編、緑蔭書房、1995年4月20日
- 『日本人の植民地経験』、柳沢遊、青木書店、1995年5月25日
- 『北村徳太郎先生御紹介のしおり』、社団法人日本公園緑地協会・北村徳太郎生誕百年記念米沢記念式典実行委員会 1995年
- 『菊池寛全集 第二十巻』、菊池寛、文藝春秋、1995年3月15日
- 『〈外地〉の日本語文学選 第二巻 満洲・内蒙古／樺太』、黒川創編、新宿書房、1996年2月29日
- 『現代詩誌総覧②——革命意識の系譜』、現代詩誌総覧編集委員会、日外アソシエーツ株式会社、1997年2月20日
- 『大連ダンスホールの夜』、松原一枝、中央公論社、1998年5月18日
- 『日本浪漫派の時代』、保田與重郎、日本図書センター、1999年4月
- 『鏢鏑下的繆斯——東北淪陷区文学史綱』、孫中田・黄万華ほか、吉林大学出版社、1999年11月
- 『満洲における日本人経営新聞の歴史』、李相哲、凱風社、2000年5月10日
- 『日経小説で読む戦後日本』、小野俊太郎、ちくま新書、2001年4月19日
- 『海外引揚関係史料集成（国外篇）第28巻、満洲篇4「満洲省別概況」』、ゆまに書房、2002年6月30日
- 『『満洲浪漫』研究』（復刻版『満洲浪漫』別巻）、呂元明・鈴木貞美・劉建輝、ゆまに書房、2003年1月24日
- 『赤松月船の世界』、定金恒次、日本文教出版、2004年2月
- 『キメラ 満洲国の肖像』、山室信一、中央公論新社、2004年7月
- 『「帝国」日本の学知 第5巻 東アジアの文学・言語空間』、山口昭男、岩波書店、2006年6月27日
- 『《満洲国》文化細目』、植民地文化学会編、不二出版、2005年6月20日
- 『日満文化協会の歴史——草創期を中心に』、岡村敬二、京都ノートルダム女子大学、

2006年10月24日

『旧「満洲」ロシア人村の人々』、坂本秀昭・伊賀上菜穂、東洋書店、2007年2月20日

『〈外地〉日本語文学論』、神谷忠孝・木村一信編、世界思想社、2007年3月20日

『満洲・重い鎖 牛島春子の昭和史』、多田茂治、弦書房、2009年7月15日

『戦時統制とジャーナリズム』、吉田則昭、昭和堂、2010年6月10日

『詩人黄瀛』、王敏編、重慶出版社、2010年6日

『「満洲文学論」断章』、葉山英之、株式会社三交社、2011年2月1日

『満洲浪漫——長谷川濬が見た夢』、大島幹雄、藤原書店、2012年9月30日

『中東鉄道経営史 ロシアと「満洲」1896 - 1935』、麻田雅文、名古屋大学出版会、2012年11月15日

『続 文学にみる「満洲国」の位相』、岡田英樹、研文出版、2013年8月5日

II 新聞・雑誌

『満蒙引揚文化人』／『草上』／『芸文志』／『満洲新聞』／『満洲日報』／『満洲日日新聞』／『東北導報』／『新京図書館月報』／『満洲短歌』／『作文』／『芸文』／『協和』／『月刊満洲』／『アジア遊学』／『満洲評論』／『三田文学』／『日本学芸新聞』／『植民地文化研究』／『満蒙』／『満洲芸文通信』／『現地報告』／『文学界』

桜が咲き始めた頃、博士号の学位を取れた。5年間の努力は、これで一段落ついた。その達成感は、この今も心の中に躍動している。

北村謙次郎との出会いは、総研大の入学試験を準備していた時だった。何をテーマにしたほうがいいかと悩んでいたところ、東北師範大学の恩師・劉春英先生の紹介で、呂元明先生にお会いすることができた。呂先生は「満洲国」研究の専門家で、とりわけ文学史に造詣の深い方である。呂先生からは、「これからの「満洲文学」研究では、北村謙次郎という作家が極めて重要な位置を占めてくる。自分も研究する積りだったが、あなたが研究するのなら、私はここで諦めよう」という話をいただいた。「満洲」について殆ど何も知らない私は、しばし茫然としたのだった。しかし一方、自分の故郷（中国東北）の過去を知りたい、知るべきであるという気持ちも衝動的に湧いてきたのだった。私は有難く呂先生の提案をお受けすることにしたのである。

それから5年の歳月を経て、曲がりなりにも博士論文を完成することができた。しかし、今、読み返してみると、至らない点ばかりが目立ち、達成感とは裏腹に、独り赤面し、笑い、泣き出したくなるような自分でもある。

一人の人物を研究するには、あらゆる文献を探り、その時代背景を知悉する必要がある。その上に、彼の立場に立ち、その波乱の時代を通して、彼が何を求め、何を基準に、どのように生きていたのか、などについて、一つ一つ具体的に追究していかなければならない。私の場合、この5年、まさに北村謙次郎一辺倒の毎日だった。彼の生涯を、自分も一通り生きてきた感じすら覚える。

しかし、博士論文が完成した時点では、北村という人物の全貌を、いまだ完全に描き出すことができなかった。論文を提出してまもなく、北村の「詩人」としての活躍ぶりを窺うに足る新資料を発掘することができ、そのことを痛感した（「付記」参照）。興奮すると同時に悔しかった。その複雑な気持ちは、今後、また繰り返すことになるのではあるまいか。

研究に当たっては、指導教官の劉建輝先生に、まず感謝の意を表したい。出来の悪い教え子を相手に、とても寛大に優しく接してくださった。研究を持続していくうえの生活面での問題などでも、蔭から多大の配慮と援助とを賜っている。

また、来日直後、「満洲文学」研究の分野で第一人者の西原和海さんに会うことができたのは、実に幸運だった。氏からは、論文執筆の始めから終わりまで、手取り足取り、叱られたり褒められたり、怒らせたり慰められたりと、多様のお力添えを頂戴している。その西原さんによって、北村の令息、北村光雄さんを紹介していただき、同氏からは膨大な資料を惜しげもなく提供していただいた。心から感謝したい。その過程で文芸雑誌『作文』主宰者の秋原勝二さんや、詩人の坂井信夫さん（坂井艶司・横田文子夫妻の令息）とも親しく接していただくことができ、間接的ながら、自分の研究に自信と勇気を得ることができた。

ここでは、いちいちお名前を出さないが、国際日本文化研究センターの諸先生、先輩たち、図書館司書、事務方の皆さんからも、さまざまな形で助力を頂戴することができた。皆さんに厚くお礼を申し述べたい。

この論文は、いずれ1冊の本として上梓し、その成果を世に問いたいと考えている。そのた

めには相当の改稿や補稿が必要だと自覚している。今回は、取りあえず現状のまま世に送り出すわけだが、たまたま本論を目にさせていただく方がいらっしゃれば、どうか忌憚ないご批判、ご叱声、ご感想をお寄せいただきたい。お待ちしております。

(2015年4月19日)

〈付記〉

本論の第2章第1節(3)において、私は、北村謙次郎が同人雑誌『すなつぼ』に発表した詩8篇(1927年)を指して、「これらは北村の文学歴において、ただ一度の詩作体験だった」と述べている。しかし、ごく最近、この「ただ一度の」という言い方が誤りだったことに気づいた。博士論文提出後も私の資料探索は続いていて、その過程で、北村がその後(1930年ごろ)も盛んに詩作を続けていることが判明したからである。それらの一部は『満洲日報』に掲載されている。同時期に創刊された北村の個人誌『文芸プランニング』には、多くの詩人が寄稿しているが、なぜか彼は同誌には小説しか発表していない。そのあたりの事情についても、今後の検証課題としていきたい。

